

子と母の 関係を問う



21 号

子にとって母とは何か。

- 親離れ子離れ考 伊藤雅子
- 母子密着を生む閉塞状況 谷内真理子
- 精神医学からみた子と母 山中康裕
- 動物の親子 増井光子
- 手記・私にとって母とは
- 調査・企業144社にみる女子社員の待遇
- 資料・国際児童年に関する国連決議
・国内行動計画重点目標

子と母の関係を問う

あ　こ　ら　21　号



十歳の子が七歳の子を墜落死させた衝撃的な事件は、子にかかわる“母”を改めてクローズアップした。マスコミは、個としての母をきびしく糾弾したが、社会の持つ“母”の機能への言及は少なかった。閉ざされた家庭の中での子育て、それにかかりきる女の生き方生かされ方を問い直すことなしには、問題の根源は洗われることはあるまい。

十九号、『女にとって子どもとは』を出した時点から、それを逆に見返した『子にとって母とは』を考え続けてきた。己れの中に宿る母（あるいは父）への愛憎が、自己形成史の最も大きな部分を占めるにもかかわらず、ひとたび成人した母（そして父）は、なんと、“親”の視点でのみ子を見ることがか。

姿勢を低め、“子”の視座に立って“母”を見るとき、“自分”が浮かんで来はしまいか。それはまた、“女”がつくられてきた歴史を物語るものともならないか。

国際児童年が、かけ足で終わろうとするいま、“子”と、“母”と、そして両者の“関係”を、改めて考えたい。（千）

特集 子と母の関係を問う

親離れ子離れ考

伊藤 雅子……………6

母子密着を生む閉塞状況

谷内真理子……………14

精神医学からみた子どもにとっての母

山中 康裕……………26

動物の親子

増井 光子……………34

〈インタビュー構成〉おかあさんのことどうおもう？

72

手記●私にとって母とは

42

山口昌子 いもむしころう 三高邦子 長縄幸子

漆田和代 高橋ますみ 長谷川知子 君名地知子

美森成生 斎藤千代

現場から

ひきさかれた関係のなかで……………石川 公子……………85

ルポ●夏の子ども楽園村……………宗久智恵子 佐藤 純子……………90

調査●日本の企業144社にみる女子社員の待遇

..... BOC調査部 122

演	講
これから女性解放運動.....	主婦のあり方を問う.....
水田 珠枝..... 94	松井やより..... 106

△グループ紹介▽ 子どもとつくる生活文化研究会 158

私たちの男女雇用平等法をつくる会 160

鉄連の七人とともに性による仕事差別・賃金差別と闘う会 162

あこら読書室 164

あこらのあこら 176

新聞切り抜き帖 180

資料	資
1 児童憲章..... 238	6 国内行動計画前期重点目標の進捗状況..... 246
2 国際児童年について..... 239	5 ユニセフについて..... 246
3 国際児童年に関する国連決議..... 242	4 児童権利宣言..... 243

親離れ子離れ考

伊藤雅子

昨今、親子関係、とりわけ母子関係のあり方やその現代的なひずみについての言挙ことあげがたいそうにぎやかである。なかでも母子の密着ぶりがそしられるのは一種の流行のようになっていいる。そして、これでもか、これでもかと言わんばかりの勢いでショッキングな例があげつらわれ、いまやその関心の行方はいっそうセンセーショナルにあおられ、猟奇的に走りかねない風潮さえある。

たしかに、今日、母子関係のうえにさまざまなひずみが生じ、その事態はますます深刻化していると、私も思う。また、その事実を直視することを避けてはならないとも思う。しかし、その場合、それらの事実をどのような視点からとらえるかが大きな岐れ道となることは言うまでもないだろう。

母子関係の問題の臨床例がクローズアップされるたびに、いま、私たちは、ことがらの意外性、衝撃性にばかり目を奪われていないだろうか。そのように仕向けられてはいしないだろうか。そして、そういうくり返しのなかで、私たちは、かんとんにその刺激に慣れ、もつとどぎついことが起きないと驚かないほどに加速度的に感性を麻痺させられていつているのではないだろうか。人の目をひくことに力を入れすぎた情報の波にゆすられ、「事件」に対する不感の累積のなかで、私たちの、問題の本質に反応する力、根を見ぬく力が衰えさせられていくのは、とてもおそろしいと思う。

また、なにか「事件」があると、異常な母親がいる、母親の心がけや育て方のせいだと「欠陥」のある

母親の問題として括られ、個々の母親が指弾される。「悪いのは母親だ」と魔女狩りよろしく女を血祭りにあげたがる傾向がいよいよ強まってきたのは、危惧のみか憤りがふきあがる思いだ。どうしていまの問題状況が母親ひとりの咎であり得るのか、そんなことは誰の目にも明らかでないに、子どもとともに第一の被害者でもあるはずの母親がいけにえの羊として屠られ、こういう、子どもを育てる力の全体的な衰退やひずみ現象を生み出している元凶はまたしてもあまいにかくされてしまうのか。

よく言われるように、いま、多くの母親たちは程度の差こそあれ、自分ひとりで子どもの成長と幸福をまかなわねばならないような立場や心理状態に置かれている。実生活のうえでもかなり孤立的だ。否も応もなくそういう境遇に置かれている人たちが「子どもは母親次第だ」とおどされ、「事件」ばかり矢つぎ早に聞かされている。良心的な人ほどベニツク状態に陥ってしまうのがふつうではないか。あるいは、自分も「事件」の女を断罪する側にまわって「あんな人とはちがう」と安心立命の手がかりにし、「事件」の根と地続きのところにいるのかもしれない自分の足もとをみつめそこなうのではないか。

いま私たちにとって大事なものは、社会問題化しているそれらの現象の根をしっかりと見据えることであると同時に、自分たちが暮らしのなかでなにげなくしていることや、日々の瑣末なことがらに目を凝らして大切なこととあぶない芽を見分け、子どもと自分の人間らしい成長のためには、どんな暮らしのあり方が大事かの筋道を通す、そういう力をおとな同士が生活のなかで互いの身に養うことだと思う。こういう親はだめ、ああいう親はだめというようなチェックリストなどは、作った側にしてみれば主観的には親切のつもり、啓蒙のつもりかはしらないが、ただでさえ孤立した状況のなかで総合的な判断力を欠きやすく、断片的な知識に頼ることになりがちな多くの母親たちをいたずらにふりまわすことにならないだろうか。そういうリストは「よい母」や「正しい母子関係」の条件や基準や形態などというものがもとともと決まっているような錯覚を与えはしないか。その枠組みに照らして自分は○か×かとはかるような、そういう簡便な子どもへの向かい方は、ハブニングばかり、臨機応変の対応ばかり、つねに自分で見分ける力、自分で考える力を求められる育児においては、むしろ最も避けたい姿勢ではないかと思う。第一、子どもとの関係は、自分と子どもとで互いに育て続けていくものであって、形でおぼえるものでもないだろう。そ

うでなくてもこのごろは、なんでもパターン化し、何のためにという確かめをぬきに一種のファッションにしてしまう傾向が強い。

* * *

親離れとか子離れとかのことが、しきりに流行語のように使われだしたのもその一つではないだろうか。母子密着の弊害が言われる反動からにわかにくちずさまれるようになった感がある。それは「くつついちゃいけない」と言われて急に「はなれなくちゃ」とあせっているみたいで、その語感からも、まるで「肉離れ」を連想しそうな、なんだかこっけいな印象すら抱かせられることがある。

それだけではない。巷間、この親離れ子離れということが謳われるときの意味あいや聞きとられ方の中には、子どもを育てるということ、子どもとの関係のとらえ方に関してたいへんな錯覚や固定化があるように気になることが少なくない。

その一つは、密着してはいけないということがどう受けとられたのか、子どもと親密なつながりを持つことそのものの否定になっているようなふしがあることだ。

たとえば、このあいだもある会で、ひとりの母親が「私は子どもを生きがいには思っていない」と得意気に言い放っているのを聞いた。その人は「私は子離れしています」としきりに言いたてていた。とっさに私は、その人がどうしてそんなことを力をこめて言うのか解せなかったのだが、もしかすると、「子どもしか生きがいがなく、子どもに依存しないでは生きられないようなことでは困る」という意見を聞きかじり、「子どもを生きがいにはいけない、それは愚かな女のすること」とでも早のみこみして「自分は子どもを生きがいにはしない」と決め、決心したからには「自分はもう子どもを生きがいにはしていない」「子離れできている」と思いこんでしまったのだろうか。

「生きがい」ということばはふくらみの大きいことばだからいろいろな使われ方がされていると思う。けれども、親にとって子どもが生きがいであるのはごく自然の情だ。よほどの場合でない限り、子どもの存在、子どもの成長が親の生きる価値やはりあいや励みになっているのは誰しものことではないか。子ども

を生きがいにしないようにするなんて、ひどく不自然だし、そんなことをして子どもとの関係や自分の生き方の質がよくなるわけのものではあるまい。女としての価値があるものとも思えない。アンケートなどで「まだまだ子どもが生きがいの主婦が多い」などと集計されると、それがいけないことであるような、オクレテいることのような錯覚を持ってしまうのかもしれないが、そんな馬鹿なことはない。

ただ、「子どもだけが生きがい」というのと「子どもが生きがい」であるのとはあきらかにちがう。「子どもだけが生きがい」という暮らしは、相手が人格を持った人間であるだけに主観的にはどうあろうとも結果として相手を圧迫したり、支配することにつながりやすい。まして経済的にも社会的にも自前の基盤を持たず、子の母であるところにのみ日常の居場所や存在理由を得ているような主婦の境遇にあっては、残念ながら生きがいは生きがいにとどまらず、生活そのもの、もっと言えば生活保障そのものになりがちだ。育児がときとして老後のための投資の様相を呈してしまう。自分では偽りのない至純の愛情のつもりが、いつのまにか子どもの人格や人生にのしかかり、操作し、その成長を呑みこむほどの魔性をはらんでしまう。それでは人間と人間の関係としては破綻か、退廃かと言うほかはないだろう。もともとは、そういう事態を警告する意味から「子離れを」ということが言われ出したのだから、どこですれてしまったのか、「子どもを生きがいにしない」などと子どもとの人間関係のうえに自分の生きる喜びや価値を見出すこと自体を愚かしいことのように見なしてつまさき立つような、おかしな子離れが横行しはじめている。

* * *

また、そういう風潮は、子どものことを粗末に扱ってかえりみない態度を正当化するような方向にも勢いを与えている。おとなの都合や気分のままに子どもを連れまわしたり放置したり、小荷物をあずけるように無難作に子どもをあずける。そういう親の扱いに慣れっこになって、子どもなりの一種の防衛・抑制から抵抗を外にあらわさなくなっているような子を指して「ウチの子は親離れができているから平気です」とむしる得々としている場合がある。これは、もともと親と子どものあいだに信頼関係が成り立っていないからであって、少なくとも、なにかが「できている」などと表現するような成長のあらわれとは思

えない。乱暴な親離れというわけではない。また、親離れができなくては大めという知識を得て、「ウチもさせなくちゃ」とまるでバスに乗りおくれまいとするように親ばかりあせって、せきたて、子どもを不安に追いやる例も少なくないそうだ。

親から離れることができるということが大切だというのは、なにも親がいなことに慣れて鈍感になることを奨励しているのではないだろう。親と離れている間中、変わらぬ信頼を親に対して持つことができ、自分に対しても変わらぬ安定感を持つて、ひとりで、あるいはそこにいる人たちと活発な生活ができるような、そういう力が養われてはじめて親離れが意味を持つことは言うまでもない。それは、人とかかわりのなかで自立する力、つまり人間として生きていくうえで欠くことのできない基本の力を養うことになるのだから。だから、親と子が信頼を結んだうえでの、あるいはその信頼の質をもっと深めていくうえでの親離れが大切なのだ。親のエゴイズムや鈍感によってなんの心くばりもなくただひきはなされるだけでは、親への不安、不信を固めていくだけで、子どもにとっては遺棄されたにも等しい体験に終わるだろう。いくらことばだけ、形だけ「親離れが大事」と覚えたり、実行したりしても、私たちがその内容の峻別を怠ったり、意味をとりちがえてはたいへんな誤りをおかすことになってしまう。それでは、子どもにまつわりついて子ども自身の人生や成長を私物視する「密着」と、形がちがうだけでその本質においてはなんら変わりがないと言われても仕方がないだろう。

*

*

*

子離れ親離れということが言われるときに、もう一つ、ある種の思いちがいがあるのではないかと思われられるのは、親と子はある時を境に急に離れるもの、離すものだとしていらしいことについてだ。

よくある例で言えば、もう子どもの手が離れたから母親が働きに出てもいい、外に出て大丈夫というような判断の仕方がある。子どもがある年齢に達したから自動的に親離れができる、子離れをしなくてはと見る人が多い。しかし、これは、あまりにも機械的に過ぎはしないか。たとえば、もう小学生なのだからするはずができるはず、もう淋しがらない年ごろとおとなは思うかもしれない。たしかに赤ん坊ではな

いのだから、一人で置いても泣きっぱなしとか飢えているなどということはないだろうが、その過ごし方の質という点ではどうだろうか。これまで母親というものはいつも家にいて、いつでも自分の世話をしてくれるものとして小学生になった子どもと、幼いときから家族はおとなも子どももみんなそれぞれに自身自身の生活を持っていて、そのうえでいっしょにたすけ合って暮らしていく間柄なのだという目で母親を見て育ってきた小学生とは、るすばんの受けとめ方一つとってもずいぶんちがうのではないか。極端な言い方をすれば、不当に一人置き去りにされてただ我慢して母親の帰りを待っているのと、一方、自分で自分を律する積極的な時間として、また、家族の一員としての相互協力のために責任を持ってその時間を過ごそうとするのでは、そのるすばんの内容・質はまったくちがう。親と子のあいだで、そういう生活の姿勢と力量を育て合ってきたのはじめて、るすばんならるすばんを質のいいものにする事ができるのだと思う。親離れとか子離れの内容の確かめをぬぎにして機械的自動的なものとしてそれをとらえては、子どもの自立を支え、親と子の人間関係をより豊かなものにするためという本来の方向とは逆行してしまう。ある年齢になればできるという考え方がいかに機械的であるかの端的な例は、多くの夫たちを見ればすぐわかるはずだ。妻の帰宅がおそいというだけでふくれたり、ごはんの仕度一つできない成人男性の姿は、年をくつていれば大丈夫というものではないことの生き証人みたいなものだ。育てなければ育たない力なのだ。相手を従属させず、自分ももたれかからず、互いに自らを主張しながらより豊かな親子関係を編んでともに生きていく力というのは、幼いころから、生まれたときから、そういう暮らしのなかで育てられてきてはじめて身につくものだと思う。親も子も互いにそういう関係を育て合ってきたのはじめてできるものだと思う。

そして、そういう力を育て合ひ、そういう関係を紡いできた親子であれば、あるとき急に、ことさらに親離れ子離れと騒ぎたてる必要もないということになるだろうか。

* * *

さて、このように考えてくると、いま、私たち女が「もっと子離れをしなくては」とか「親離れをさせ

るように」などと言われる、そこにこそ大きな問題がひそんでいると言わないではいられない。それは、一言で言ってしまうなら、母と子が密着するよりほかはないような問題状況はそのままにしておいて「密着してはいけない」とお説教し、「密着している母子はだめだ」となじり、ことを女ひとりの心がけの問題、個々の母親の問題に帰していることだ。

育児を女の役割と規定し、母ひとり、家庭だけで、わが子だけを育てるように、育児だけをするように仕向けられているいまの母親たち。子どもが幼いあいだは子どもにつききって二十四時間を母として過ごすことを余儀なくされ、それが子どもにとって一番であり、女の幸せであると断定されている。そして、自分自身の仕事やたのしみは、育児や家事をまっとうし、そのうえでもしゆとりがあったら夫の許容範囲の内側でのみ行なうもの——これが、いまなお女たちを家の中に囲いこもうとしている支配通念だ。保育施設の貧しさや職場の労働条件の女にとつての厳しさも、そのような通念が作用しているからにはかない。女自身もその通念に色濃く染められて我とわが身を縛っている。地域でのつながりも乏しく、核家庭で育児の手代りもない。母と子が拘束しあつて暮らすはかはないようなこれらの外的内的状況が、子どもに密着するように、密着するように、と女を追いこんでいるのだ。子ども思ひの母親であればあるほど自分の全身をかけて子どもに向かつてしまうのは、ごく自然のなりゆきだ。そして、そういう暮らしの果てに、子どもをぬきにしては自分の生活が成り立たないような女になつてしまつたとしても不思議ではない。そんなふうに女を追いやつておいて、ふいに「子どもから離れる」と言われる。子どもがこうなつたのは母親の密着のせいだと言われる。それならば、当初から密着しないですむような手だてをこそつくすべきではないのか。女の社会的な生活を支える条件を整えてしかるべきではないのか。誰もがそう思うだろう。だのに、そんな単純な道理が通らないのは、なぜか。不思議といへばこれほど不思議なことないが、育児を女の役割、家庭のつとめと決めつけ、個々の母親の責任として家庭のなかに押しこめておくほうが都合のいい勢力が力づくでこの世を支配し、そうした構造のうえにオトコ社会の「発展」が成り立つてきたのだと謎が解かれれば、そのからくりがまざまざと目の前に浮かびあがる。なんと口惜しいことか。くり返し言おう。母子密着のこの事態は、なにも母親の心がけの悪さに起因してのことではない。それ

を母親ひとりのせいにするのは謀略というものだ。

しかし、母親の生き方と子どもの成長が不可分のものであることは誰も否認しない。育児が老後のための投資になってしまいうような、愛情で生活の保障を購^{あな}わされるような女の生き方そのものは、やはり変えていかななくてはならない。子どものゆたかな成長を望むのなら、女自身が自前の人生を獲得しなくてはなるまい。その道のりを歩んでこそはじめて真に子どもと結び合うことができるのだと思う。

それにしても、親離れ子離れなどと言うのなら、それは、子どもの誕生のときではなかったのだろうか。あのとき、私たちは互いに身を分けた。そして、あのときから、私たちは、互いの絆をどのような高みで結び直すことができるか、その星をみつめて求め合う旅に出たようなものではないのか。ときにすれちがい、ときに見失い、ときにそむきあう、長い旅。それでいていつのまにかまた牽き合う旅路だ。それが親と子のしがらみではないのか。

いま、私たちにとっての課題は、ただ子どもと離れようしたり、親と離れたりすることなのではなく、親と子のしがらみを絆に結び直していくことなのではないのだろうか。

(国立市公民館勤務)

女・エロス 13

★850円

特集 家族解体にむけて

- I ● 個と家族 共感共鳴家族 草村葉子 私の未来図
郡山吉江 「家族」を探る 小堀恵美子 他
II ● 対 崩壊家族 丸山友岐子 三里塚の土に育くま
れて 石井紀子 解放へ 岩崎美穂 他
III ● 権力と家族 闘いの極限を励ましの武器へ 菊池
さよ子 在日朝鮮人家庭の女たち 金英順 他
IV ● 共同体 迷惑をかけあいながら生きよう 森総子
全日制共同保育の模索 滝恵子 他
連載 ● 女の文化(2) 河野信子 他
★A5判 850円

社会評論社

東京都文京区本郷2-5-10

母子密着を生む閉塞状況

谷内真理子

子どもの身心症が報告され始めて二十年。自殺、登校拒否、家庭内暴力と、このところエスカレートするばかりの子どもの問題が、社会に大きな影を落としている。親と子の関係が問い直されるなかで、一際大きく母の責任が取り沙汰され、「母原病」という流行語まで登場した。従来から、母子一体観の強い我が国において、子どもの問題は自立を目指す女性にとっては常に「泣き所」であり、母にその原因を収斂させる世間の大合唱の前に、自立を目指す母親は動揺せざるを得ない。

子どもを駄目にする過保護や母子密着の温床である「密室化」した家庭を指摘するのはたやすい。「若い母親の母性欠落」「翔んでる母の育児下手」とあげつらうことも簡単だ。

しかし、それだけでは、母は混乱するばかりで、真の解決にはならないと、私は思う。

なぜ、母子が度を越した密着をするようになるのか、それが孤立して「密室化」する過程はどうなのか、ということに光をあてて、その解決への糸口を探らなければと思うのだ。

以下、幾つかの事例をも紹介しながら、展開していくことにする。

一、子をスポイルする母たち

私が、この稿を書くこうとしていた矢先、朝日新聞紙上に「密室の母子」という連載が、母子相姦という

ジョッキングな実話を皮切りに開始された。世の親たちを震撼させるに足るそのレポートは、かなりの反響を呼んだようであった。登校拒否や家庭内暴力の引き金の役を果たす母たち、息子の離婚の陰にピツタリと付き添う母の影、存在そのものが子どものセンソクを悪化させる原因となる母の姿、等々、相談所や病院の現場から数多く紹介されていた。子を思うあまりに子をはがんにがらめにしてしまふ母親たちのことを読むのはつらいことである。そして責任の矢表に立たされる母親と同性の私としては、母だけの責任ではないと叫びたくもなる。しかし哀しいかな現実はやはり、「この母さえもう少し別の態度をとっていれば……」と思われるケースに、あまりに多く出会うのである。

事件として表面化したものや、相談所や病院の門を叩くまでには至らなくても、いわばその予備軍は、私の身の回りにも満ち満ちている。私事ながら、私は家にいて原稿を書くことが多く、子どもを持つ身ゆえ、近所との付き合いも欠かせない。いきおい多くの母子とかわることになるが、日々これ取材、といった趣さもある。

子どもの友だちを母親が選ぶ。子ども同士のけんかにそれぞれの母が割って入る。ひがな一日子どもに付きまとって離れぬ母。幼児に美しい装いをさせ、汚さぬように小言ばかり言って追いかけてまわしている母。家の中がいつも整然と片づいていないと気がすまぬ母親は、子どもの手の届く所には一切おもちゃを置かない。遊ぶたびに、母親に許可を得て取り出すのも片づけるのも母親にやってもらうしかない子どもの例。やっと手に入れたマイホームが汚れないように、三十分置きに我が子の手を洗う母。カーペットに物をこぼされないように、三歳過ぎた娘に哺乳瓶でジュースを与える母もいる。この子が母親と連れだって我が家へ一度来たことがある。テーブルの上に菓子鉢を出すと、この子が突然、「オーッ」と大声をたてる。すると母親が、「ハイ、ハイ」と言って煎餅を一つ取り上げ、それを一口大に割って子どもの口に運んでやるのに驚かされたことがある。「床に粉が落ちると申しわけないから」と言うが、子どもの様子からして、自宅でも同様であらう。

ともかく、あまりのことに、暗澹たる気持ちになることもしばしばである。

かと言って、この子たちが大切に扱われていないかと言うと、そうではない。育児熱心、教育熱心な母

親たちなのだが、子をスポイルして気づかぬだけなのだ。こうした母のもとで育つ子が皆、問題児となる
とは言い切れまいが、子にとって最悪の環境であることは間違いない。

二、母子密着が形成されるまで

現代は、子どもが一人で外へ行けない社会になってしまった。庭や空地、路地の喪失。高層住宅においては、幼な子が一人でエレベーターを操ることはまず禁じられるし、共同の遊び場があると云っても、到底目の届く距離ではない。精神異常者が徘徊していないとも限らない。道路は車で危険だし、歩道とていつ自転車にぶつけられるかハラハラしながらでないといふわけがなくなってしまった。

幼稚園も保育園も、大概は子どもだけの通園は認めていない。どんなに近くの家の子であろうと、母親が送り届けて保母に手渡さなければいけないことになっている。

ある小学校が父兄に配ったプリントには、道草をくわないこと、昼間でも母に行き先を告げてからでなければ、道路の一人歩きはしないこと、と書かれている。

今の子は、夕方忙しい母に代わってお使いに、八百屋や豆腐屋に走ることは、まずなくなってしまった。最近では、町のあちこちに小さいとは言え、公園が幾つもできつつある。団地や分譲マンションにも、遊び場は必ず作られる。こうした遊び場をのぞいて見ると、五歳以下の子どもの数と母親の数がほぼ同数いることに気がつく。

「やっぱり見ていないと危いから」とほとんどの母親が答える。「よその人に迷惑をかけると悪いから」「人にばかり子守りをさせるわけにはいかない」と口を揃える。

こうしたなかに、自分の子どもを一人で遊びに行かせるには、大変な勇気がある。自分の子育ての方針が、いつの間にか、「人様に迷惑をかける」ことに問題がすり替わってしまうのだから。

埼玉県の県北部で、五年前に、社宅の遊び場で三歳になる女の子が失明する事件が起こった。スベリ台から滑り下りて来たとなんに、前にいた子につかえて、転倒したところが運わるく棒切れにぶつかってしまったわけなのだが、ちょうどその時にその場にいあわせなかった母親に非難が集中した。それから時が経

ち、その一家は転勤して移って行つたけれど、その母親のことは、いまだに「子を失明させた奥さん」と、その社宅では呼んでいる。その人は、今、二人目の子を得て育児の真っ只中であるが、片時も子どもから目を離さない。二歳の子どもがいくら外に出たがっても、一日一回、買物の行きがけに一緒に小学校の校庭の片隅で遊ばせるだけという生活をしている。

核家族で、子どもは一人の場合、母親の目が一人の子に絶え間なく注がれ続ける。父親が帰宅する頃には、子どもはもう寝ている。母も子も、これでは神経が張りつめて疲れてしまおうと言うものだ。

三、貝のふたを閉めてしまふ母親

郊外の集合住宅では、俗に言われるほど近隣関係は冷たくはない。隣の人の顔さえ知らないというのは、よほど都心にある、子のない共働き世帯ばかりのマンションか、單身者向けのそれにおいてはあるかも知れないが、普通は、良くも悪くもかなり交際や噂話は盛んであるものだ。むしろほかではあまり見かけなくなった井戸端会議が、子ども遊び場周辺に集まる主婦たちによって形成される場合が多い。この場で、母親たちは育児の知恵を交わし合い、育児の先輩からさまざまな知識を授かっている。内気な人でも、同じ年頃の子を持つ母親とは、子を通じて口をきくきっかけは必ずできるものだ。

よく、地方から来た人は友だちもできずに一人で閉じこもって悩む、と識者の指摘にはあるが、地方出身の人は、むしろ積極的に友だち作りをする傾向が強い。

しかし、こうした集団から、時折、ポツリポツリと姿を消していく母子がいる。そして二度とその仲間に入ることはない。まるで巻き貝がその蓋を閉めるように、ビタリと戸を閉ざして、我が身と我が子を守るのである。

そうした母子を追ってみよう。

◎千葉県の公団住宅に住む主婦A子さん（二十九）は、二歳半になる一人息子とともに時々、公団敷地内の唯一の砂場へ遊びに来ていた。息子はおとなしい子で、いつも黙々と砂いじりをしていてといったふうであったが、その日は、砂場の真中に突っ立ったまま、じっとして、裸足の足元をしきりに気にしてい

る様子であった。と、何を思ったのか、前へ進もうとしたらしい。突然、重過ぎる頭に重心を失って、一歩も足が出ぬまま、ドーンと前に倒れてしまった。その子の動きの少なさに日頃から気をもんでいたこともあって、その場にいわせれた主婦たちが、「もっと外へ出て、毎日運動させたら。男の子なのにおとなし過ぎるじゃない」と、忠告した。これがいけなかった。その日以来、A子さん母子はふつとりと外へ出なくなってしまった。「私には私の教育方針がある。運動神経は鈍くても、ほかに取り柄がたくさんあるうちの子のことを、他人がとやかく言うことはない」と、Aさんは泣いて悔やしがる。息子がどうしても砂遊びをしたがるときは、早朝とか夕方、人のいない頃を見計らって出て来る。「子どもは個性的に育てるべきで、男の子でもやさしい子もいる。外で遊ぶことよりも、家のなかで本を読むのが好きな子なんです、うちの子は。ああいう主婦たちの、常識的な意見を聞くのはうんざりです」

◎横浜市の分譲マンションに住むB子さん(三十一)。夫と子どもの三人暮らしをする主婦だ。一歳を過ぎた娘が、股関節脱臼が全治した後も、まだ歩かぬことをとても気にしている。以前は同じ年頃の子を持つ母親の幾人かと時折話をすることもあったが、「子どもの自慢ばかりで。話題の貧しい人たちとの付き合いはうんざり」と言って、今では全く付き合わない。Bさんの家には、ほぼ一日置きに実家のお母さんが現れる。「近所の主婦と世間話などするよりも、親子で喋っているほうが健全だから」とBさんは言う。

ところが、子どもの様子がどことなくおかしい。歩行の遅れはともかく、泣きわめくばかりで、意思表示が無い。言葉らしきものを発するのはおろか、親の言うこともまったく理解しないようである。人が近づいてあやしても、笑ったことがないし、目線も合わない。見るに見かねたある人が、遠慮がちに、保健所の一歳半検診を勧めてみたところ、運動機能の遅れについては心配しているものの、その他の成長に関してはまったく言っていないほど無頓着なB子さん、「どうせわかり切っている遅れを指摘されるだけだから」と、取り合わない。かかりつけの病院もない。以前、子どもの股関節脱臼を見落とした小児科医をはじめ、近所の医者は皆「ヤブだ」ということで、定期検査や育児相談にも一年前からまったく行かない。保健所行きを勧めた主婦のことを、Bさんは「人の子の遅れを無遠慮に指摘する、おせっかいな人」としか受け取っていない。娘の足の遅れを気にする余り閉鎖的になり、もっと深刻な遅れに気づくチャンス

をも、自ら封じてしまった。

実家のお母さんによれば、「B子も、二歳過ぎるまで、まったく一言も喋らなかったんですよ。そのB子さんが、小学校では良い成績を修め、一流と言われる女子大に入った。だから心配はない、と言うのが……。

お母さんにとっては初孫。B子さんも夫も一人っ子、近所を除けば身辺に幼い子を全然知らない環境である。育児書も、こうした場合無力だ。母親が育児ノイローゼにならぬように配慮して、個人差を強調して書いてある箇所のみが、拡大解釈されてしまう。

B子さんは、同じ年結婚にかかわらず、東大出の夫には非常に従順である。朝夕の散歩を欠かすな、と夫に命じられれば、一日も欠かさず子の外気浴を励行するし、汗疹の出た子はいやだ、と夫が言えば、必死で汗拭きをする。夫は、決して「関白」ではなく、家事を手伝う優しさもあるし、子どものオムツも替えたりもするけれど、「オレが会社に行って留守の間は、お前の責任だ」という自分の言葉に、妻がどれほど緊張しているかを知らない。

完全な保護者たらんとするB子さんは、娘がちょっとしたけがをしても、夫に隠そうとするし、実家のお母さんが作った離乳食も自分が作ったと、夫に偽る。夫と連れ立っての散歩中、同じ年頃の子どもが元気に遊んでいるのを見かけた夫が、「あの子、幾つ」と尋ねても、「うちの子より、ずっと大きいわよ」と答える。

◎東京・世田谷区に住むC子さん（二十八）。初めての赤ん坊の育児に目下大わらわである。去年買ったばかりの建て売り住宅に、親子三人で住んでいる。近くに住む子育てにかけては三年ほど先輩の主婦と近所づきあいを始めたが、最近ではほとんど話をしないという。

「うちの子が食欲をなくして私が困っていたとき、あれこれ相談に乗ってくれたのですが、離乳食のメニューを見て、『あら、まだ味噌汁を飲ませないの』って言うんです。だってうちは味噌汁は嫌いだからと言うと、『何にも実はなくてもいいんだから、味噌汁ぐらい赤ちゃんに作ってあげたら』って叱られてしまつて、そんなことまで干渉されるのはかなわないから、もうなるべく付き合いたくないんです」とC

子さんは言う。

たかがそれぐらいのことと思うが、本人にとってはそうでもないらしい。「私は本当は主婦とは付き合いたくなくなつたんです。こんなことで神経つかうのはたまりません」と言うが、C子さんとて、何をするわけではない。れっきとした専業主婦である。

四、「密室化」を招く心因

a 社会人としてトレーニングされぬ母親

以上三つの例でもわがるとおり、実に些細なことで母親たちは、扉を閉ざして内へ閉じこもってしまう。本人たちにしてみれば、他人にはわからぬような経験であつたのかもしれないが、人間関係の複雑さからしてみれば、やはりこれしきは些細なことと言わねばならない。アドバイスはアドバイスとして冷静に受け止め、学ぶべきところは学び、取るに足らない忠告ならば、微笑んで黙殺するだけの度量がこの母親たちにありさえすれば、貝のように殻に身を隠し、子どもを幽閉してしまうこともないのではなからうか。従来、若い母の育児下手の原因として、「母性の未成熟」が指摘されて来た。しかし、ここで私が感じるのは「母性の未成熟」より「社会人としてのトレーニング不足による精神的未成熟」である。

もちろん、すべての母親がそうだということではない。ここに挙げた例ですべてが推論できるとは思われないが、私が見る母親たちは、自分が子をスポイルしていることに気づく視野には欠けるが、母性愛は皆溢れるほど持ち合わせている。我が家に閉じこもり、その溢れんばかりの母性愛を我が子に注ぐ。友のいない子の淋しさも何もかも、その愛であがなえるという思い込み、思い上がりをしてしまう。

ともかく、戦後の民主主義教育を受けて育つたはずの母親たちが、自分に対する他人の指摘に対しては、アレルギー性かと疑うほどに敏感に拒絶反応を示す。相手の言うことが理解できぬわけではないが、私は私、他人の指図は一切受けぬ、という態度である。

思えば、この世代、とくに女性にあつては母親より高い学歴を有し、家庭において常に母に一目置かれ、自分のほうが母親にあれこれ教えることのほうが多かった。伝授すべきものを失つた母親の世代は、嫁に

いった娘に対しても手伝うことはあつても、教えることはほとんどしない。夫も、妻に対して無力か、またはさして成熟を期待しないほうが一般的である。大家族のなかに飛び込むわけでもない今の結婚生活は、そのなかで幼児だけを相手に一日を過ごす主婦にとって切磋琢磨の場ではない。

職場や地域で、多くの人とかわかることによっておのずと養われる、他者の批判に向き合う力が、残念ながら見られない。

b 母子一体観からくる子の私物化

自分が他人に批判されることを極度に嫌う母親は、我が子の欠点を他人に指摘されることにも耐えられない。我が子への批判は、すなわち自分自身への批判にはかならず、と受け取る感性は、母子一体観に根ざす。

子がいかに優れた人間になろうと、それがすべて親の薫陶のたまものでないのと同じように、子の欠点のすべてが親の責任ではない。何人もの子を産んで育ててみれば、親の育て方など、大して子に影響を与えることができないと、悟るのであるが、いかせん子どもの数は減るばかりだ。

家のなかでは、子に甘い母親が、人前に出るとたんに口やかましく、小言を言い始めたり、我が子が恥をかく前に先回りして、挨拶や行動を横から小突くようにして教えている母の姿を見かけることが、よくあるではないか。他人の批判から我が子を隠し、閉じこめることによって、子の私物化が進み、母のエゴイズムが子を支配する。

このことは対世間のみならず、夫に対しても同じだ。夫に、自分の子育てを批判されないように、母子一体観の強い母親は、子の失敗や欠点を隠そうとする。B子さんの例はかなり極端だが、子どもが迷子になったこと、けがをしたことなどを、夫に内緒にしておく母親は珍しくない。盗癖のある子が補導された場合、「夫には内密にしておいてください」と係官に懇願する母が後を絶たないという。

責任を母親にのみ押し付けて、荒れる父親も事実多いことは問題ではあるが、やはり、子の恥は私の恥、と感じる母親の感覚を見直さなければならぬと思うのである。

c 非主婦意識という名の自己閉塞

密室化を招くもう一つの理由に、こうした母親たちに、「非主婦意識」があるとは言えまいか。

A子さんの「ああいう主婦たちの常識的意見など」という言葉や、B子さんの「近所の主婦と無駄話するくらいなら、母と……」、C子さんの「主婦とは付き合いたくなかったです」という言葉を思い出して欲しい。彼女らには、井戸端会議で煩わしさを感じる以前から、主婦に対する軽蔑があり、自分をそのなかに含めて考えることに強い抵抗があるらしい。主婦のイメージは、自分には決して当てはまらないという自信を持っている。「賢い妻、賢い母」になるつもりで結婚はしても、「主婦」になった気は毛頭ないようだ。これは、この三人に限ったことではない。実に多くの主婦から、「主婦っていやね」という言葉を聞かされる。もっとも、こうした意識が、建設的に前向きに作用して、何かを得る原動力になり、向上心を招来するケースはたくさんある。そうなら良いが、これが悪くすると、他への軽蔑だけに終わってしまい、結果として孤立への道を辿ることになる。

「非主婦意識」を持っていながら、それが「脱専業主婦」とならぬところに、彼女らの矛盾がある。

d 母親絶対論に呪縛されている母たち

「非主婦意識」を持ちながらも、なぜ、賢い妻、賢い母だけに留まるかと言えば、「幼児期の子どもは、母親の手で育てなければ」という考えに縛られているからである。

「0歳から3歳まではとくに、母親のスキンシップが大切で、それが十分満たされないと、子は精神にひずみを来たし、後遺症が残る」と専門家に言われれば、誰だって、他人に子を託して外へ出ることをとまどう。悲しいかな、現在の日本では、この説が大勢を占めている。保育園の貧しさも手伝って、保育園の欠点が喧伝されることは多くても、その長所が認められることはまだまだ少ない。

そうでなくとも、保育所への偏見は根強い。特殊な子が入る施設、生活に困窮した人が子を預ける所といった認識しか持たぬ人が何と多いことか。

「子どもの履歴に傷が付く」と言った母親がいた。私が娘を保育園へ入園させたとき、「生活に困って

るわけでもないのに、どうして入れたの」とあまりに多くの人からきかれて、実際、閉口したものだ。ともかく、子どもにとって、母が身近にいてやることが何よりも大切なのだ、という信仰を持つ母親は、動きがとれない。

脱主婦願望を胸底に抱きながら、諦めざるを得ない母としては、自分の思いを犠牲にした分だけ多く、子どもにのめり込んで行くことは必然なのである。

五、呪縛からの解放

「密室」化に拍車をかけるものに、社会的な背景も存在することは先に触れた。「密室」化も含めて、すべての責任は、母よりも構造的なもののそのものにあると言ってしまうと誘惑を覚えるが、私はそれは言わない。そう言い切るほうが、女性側の喝采を受けるかもしれないが、それでは母親にすべての責任を帰する論理と同じ誤りを犯してしまうばかりか、問題の所在を不明確なまま放置してしまうことになる。母親が考え直すべき点があれば、謙虚に受けとめるべきだと私は思うから。

「密室」に至る原因として、aからdまで母親側の問題を探ってみたわけだが、確かに「密室」へと傾斜していく母親の姿勢には、問い直されるべきものが多かった。しかしながら、だから子どもの異常の原因がすべて母にあるとはいえない。

極度の閉鎖状態、つまり、「密室」は、その内部に必ず、内部崩壊を招く。異常、自殺を生む可能性を秘めた空間は、あらゆる共同体が密室化を強めたとき、その内部に生じる。家庭とて、その例外ではない。そのなかでは、子どものみならず、大人も蝕まれることにかけては同様なのである。

母を批判するより、密室化を憂い、母親たちが呪縛を断ち切って、社会人として強く生きようとすると、後ろめたさや不安にすくんでしまわないですむような社会をつくることのほうが緊急課題なのではあるまいか。

六、『母原病』への反論

愛知医科大学の久徳教授らは、子どもの病気に母の影が色濃く反映している症例を、名付けて「母原病」と

呼んでいるのだそうだ。

例の朝日新聞の「密室の母子」に紹介されたこともあって、一躍多くのマスコミの取り上げるところとなり、ひところは、テレビのどのチャンネルをまわしても、この言葉がもてはやされ、久徳氏自らも、「母原病」自己診断のチェックポイントなどを解説されるため多忙を極めていたようだ。

それにしても、実に巧みなネーミングではないか。母が原因の病氣、病原因は母であるというわけだ。久徳重成氏の著書『母原病』（教育研究社刊）によると、子どもの病氣の四〇％は伝染病などが原因の病氣で、残り六〇％の全部が、母原病であると言う。

ゼンソク、胃・十二指腸潰瘍などの病氣にも、心因性のものが多いことは昔から疑われており、最近では、心療内科の発達によって科学的に証明されるに至っているが、小児のそのすべてが、母が原因で発病するとは言いい切れないのではあるまいか。先天的体質、食生活環境に因がある場合もあると聞き及ぶ。もし仮に、全部が心因性であるとしても、「母原病」ならぬ「自原病」はないのであろうか。

また、病氣ではなく、子は誰にでも、幼いとき、多かれ少なかれ、マザー・コンプレックスの時期があるのではないだろうか。それを克服して行く過程こそ、成長であり、その過程に、スムーズな自立への移行が行なわれないからといっても、即、「母原病」とは言い切れぬと考えるのだが。

子どもの精神に負担をかけるものは、母親のみではない。大人が察する以上に子どもの心は複雑であり、子は子で、悩むに足る「社会」を立派に持っているものだと私は思う。

母にすべての責任を押しつけるのは、実に簡単だ。何と言っても、子と向き合うのは母なのだから。そして、自分の育て方に問題はないかときかれれば、どんな母親だって胸を張って切り返すわけにはいかない。母原病の自己診断のための、「チェック事項」というものが列挙されている。

1、子どもはあまり好きではない。それほどかわいとは思わない。

2、子どもは少ないほうがよい。子どもがいることがそんなに幸せとは思えない。

3、育児について不安が多い。

4、育児に手がかからないようにしたい。だから、おとなしい子がよい。便利な育児がいいと思っている。

5、育児より外で働くほうが楽しい。

6、しょっちゅうガミガミいい、カッとなって叱ることが多い。

7、子どもをほめたり、おだてたりすることがあまりない。

8、「子どものことだから、まあいいじゃないか」とつい過保護、溺愛にしがちである。

9、0〜3歳のころ、子どもを親から離して他人に預けてもあまり気にならない。

10、子どもを生き生き楽しい気持ちにしてやるのが少ない。

11、たくましい子に育つとは思えない。

つまり思い当ることが幾つかあれば、あなたの子は母原病、今正常でも決して油断はできないという。

ペラボウな話ではないか。これにまったく思い当たることがないという母親がいたらお目にかかりたい。久徳氏は、三歳児までの育児は、絶対母か家族に育てられるべきだと主張して止まないが、その論拠として「インドで狼に育てられた少女が狼のようにしか歩けず、腐肉が大好きな子どもに育ったことでもわかるように」と例を引き、保育園を「不特定の第三者が育てると大きな問題が残ります」と認めない。確かに、今の保育園には多くの改善すべき問題は残っているが、狼と保育園の保母が一緒にされては、保母の立つ瀬がないと言うものである。

だから、母は子を母性愛で豊かに包み、育児の知識においては祖母に仰ぎ、子の社会性を育てるためには、近所付き合いをもっとするべきだ、と氏は説くが、それがうまくできない例は、私が先に紹介したとおり、数多く危険を孕んで存在する。

「母原病」といって母親を不安に駆り立てることは、母の自立を阻み、子に対する責任感をさらに強めさせ、結果として、ますます過保護の傾向へと母を追いつめるのではないだろうか。

安易な、集団保育否定は、「密室」からの脱出口を塞いでしまう役割しか果たさないのである。

遅かれ早かれ、多くの女性が子を持った後も働き続けるようになるのは、時代の趨勢である。こうした保育所などの環境整備を遅らせるのに一役買い、働き続ける母親にいつまでも劣悪な育児環境を強いるだけなのではあるまいか。

(ルポライター)

精神医学からみた子どもにとっての母

山 中 康 裕

一、はじめに

精神医学からの発言が、今日ほどに耳目をそばだてるようになった時代はかつてないと思う。これは精神医学内部の力の発展によるというよりは、時代そのものが精神医学的な様相を呈するようになったことの方がより大きく与っているだろう。女性とか母性とかの問題も、むしろ、これまで幾多のすばらしい女性たちの努力によって、その当然の権利が拡大され、その評価もたかめられたことは認めるが、これが主體的な位置をとりはじめたのも、やはり時代の趨勢が多分に影響しているような気がする。さて、精神医学からの発言がどれほど普遍性をもつものとなりうるかは、筆者には定かでないが、少なくとも日常の臨床的営為のなかで、精神医学的な問題をかかえて子どもの病院の門を敲く人々と出会っていると、はたして現代という時代はこれでよいのだろうかとの疑問なしに過ごすことは許されそうにない、とは言えそうである。殊に、私どものところに連れられてくる子どもたちを見ていると、その感が強い。以下に述べるのは、一精神科医の管見にすぎぬと言えはそれまでだが、世の女性の注意と再考を喚起するのにやさかの意味はあるだろうと思う。

二、早期幼児自閉症

早期幼児自閉症という疾患がある。これは外面的、症状論的には、生まれてまもなくから母親にすら人

間的な関心を示さず、その呼びかけにも応ずることなく、よって言葉がなかなか発達しない。普通の乳幼児が興味を示しそうな玩具類には一切興味を示さず、むしろ大人が日常使っている機械・道具類に親しむことが多く、テレビイを見ても、内容のほうには一向に関心を払わず、もっぱらCMのみに好んで興味を示す。日常語がまったく話せぬのに、しばしばCMの文句のみ頻回に口にすることがある。そして他児とまったく遊ぼうとせず、独り孤立しており、黙々と単調な繰り返し動作や、ときとして寡動無為、ときとして多動不穏の状態像を示す……などといった症状を呈する現代病である。わが児童精神医学界ではこの十年、この疾患の原因が取りざたされ、現在では大脳の言語認知障害を中心とする器質障害説が有力となっている。ところが筆者は、世界でも少数派の意見をもち、深く母親との基本的信頼関係に根ざす問題を内包している、との考えを捨てていない。ただし、誤解してもらっては困るが、だからといって短絡的に、原因は母親であり、責められるべきは母親だ、と言うのではまったくくない。むしろ私は、母親も犠牲者の一人なのであり、こうした子どもを持つことによって二重に苦しむ存在なのだ、との認識から出発していることを、まず述べておかねばならないだろう。

自閉症児の母親たちは、会ってみると、まことに魅力的な女性が多い。美しい人もいれば、さっぱりした性格の人、仕事をきばきとやれる人、ロマンチックな人……等々の印象がすぐ脳裏に浮かぶ。ただし、これらの印象は成人同士の場面において、という限定詞がつくのである。驚くべきことに、同じ彼女らが子どもに対してはともぎこちなく、ぎくしゃくして不安定であることが多い。子どものある部分が、まったく見えないか、そのことに気がついていない部分があるとさえ言えそうである。子どもとの間に、たえず不安や葛藤が生ずるため、それらを最小にするべくふるまおうとするので、いきおい、子どもとの間にどうしようもない距離ができる。むしろ、これらは子どもとの状態に由来した、結果としてのものも含まれているだろう。とにかく、自閉症の子どもは、母親といるとき、普通の子どもがそうであるようには、安心してゆったりとくつろいだ、という印象がない。落ちつかなくて、いつどこに見失うかわからぬ、不安定な状態であるか、あるいは、不安が強いいため、べったりと母親にくっついて離れようとしないうという状態、という両極のどちらかを示すことが多く、中間がほとんどないのである。

三、自閉症児の母親

さて、これまでこうした自閉症児の母親たちに出会ってきて、彼女らは、おおむね次に示す三つのタイプに分けられるような印象をもっている。ここでもやはり断わっておかねばならぬが、これらの分類も親側の治療標的をどこにおくべきかとの実践的な意味において有効な議論であって、その他のためではない。

1、母体験欠如型

このタイプの母親は、彼女自身がその幼少期に母親を失っていたか、あるいは母は存在しても「母体験」を欠如ないしは非常に稀薄にしか持てなかったもので、彼女らは子どもを持っても、子どもに対して母として接する仕方を本質的には知らず、どうしていいか困惑しているか、あるいはこの事態にまったく気づいていない。

ある母親は次のごとく自らの過去を語った。「私の母はやさしい……だが気の強い人です。へんなどころに依怙地で、私はこの人のようににはなりたくないと思っていました。ただ私を生んだだけで、育ててくれなかった。私の家は家庭円満からほど遠く、いつも離婚の話が出ていた。もの心ついてから、いつもそれを見てきた。いつも夫婦げんかが絶えなかった。そして父母は、一年の半分以上を別の土地へ出かけ、私と兄とは親戚に預けられた。しかし妹だけ母と一緒にいた。冬には皆帰ってきて一緒にあったが、私は、だから私だけまま母の子かしらとも思った。いつも他人の心の内を見てしまう。この子も私によく似ていると思う。それにいつも、おまえは一番できが悪い。みつともないし、太っているといわれ、コンプレックスの塊で、自信がまるでなかった。いつも人に自分のことを言われているみたいに滅入っていた」と。

また、別の母親は、彼女の一歳半のとき実母を亡くし、四歳のとき、継母が入ったがしっくりいかず、言いたいことも絶対いわず、ほとんど甘えを知らずに育った人だったが、彼女は「私、子ども好きなんだけど、かわいいんだけど、身体でかわいがってやること下手なんです。どうしていいかわからないんです。だから、いらいらしてしまつて……すると主人は、おまえが悪いんだ……と。でも、自分がかわいがつてもらったことないもんで……」と語っているのである。

2、母性拒否型

このタイプの母親は、何らかの事情で彼女自身が強迫的なしは両価的な心性が強く、本心では子どもを持ったことに拒否的な感情を抱いていながら、表面上ではそれが露呈することを極度に防衛している母親である。こうした母親のなかには、これが社会的方面への代償的形態をとって、いわゆる「有能な女性」として、社会的場面で活躍するものもある。

ある母親は「私には私の生き方があるのです。子どもが生まれたことで、それが目茶滅茶になってしまいました」と述べ、またある母親は「私は自分が女であることを認めることができません。女はこの世のなかでは正当に生きる権利を与えられていないからです。子どもが生まれてしまったことはショックでした。だって、子どもの世話をすることは、当然母親の役目をするこことなり、それは私の拒否している女性の役割を認めねばならなくなってしまうからです」と述べた。またある母親は「私は子どもの頃、父親にひどく嫌われました。どういうわけかいつも私だけが別に扱われ、いつもみじめな思いをしました。気がついてみると、私は父親に憎まれたことと同じことをこの子にしていたのです。この子が生まれたときから、何故かこの子が好きになれず、つい、手をかけず放っておくことがあったのです」と自らの内的秘密に気づくなかで、子どもとの心的距離をとり戻すものもあった。

3、理性的自己愛的美人型

このタイプの母親は、理性的合理的の心性を持った美人で、子どもを持つても、子どものことより自分のほうに関心があり、まだ真の「母親」になり得ていない母親である。美人であることが大きな要素となっており、すなわち、美人であるために、成熟した女性性を獲得する以前に男性からのプロポーズを受けることが多く、そのため本人は自分が女性的に成熟したものと思ひ込み、自己愛的にその状態に固着するため、真の女性性の発達が停止し、必然的に「母性」の発展を見ない。そして内的にはむしろ「フェミニズム」(女性のなかの男性原理) 優位で、男性的理性的思考型をとりやすい。

ある母親は、「私、お乳は出たんです。だけど身体のかたちが変わるのがいやで、胸には一切触れさせませんでした。それがいけなかったとも思うんです。でも、気がついて乳房をふくませたら咬みつかれて、

それが痛くて、やっぱりやめてしまいました」と述べている。

ほかにも種々なタイプがあるのが、私の見出したのは今のところこの三つである。これら三者に共通して言えることが二つある。それらは△母性の未成立▽と、△アニムス優位▽である。これらはちょうど、前者が自閉症児の根本事態であるところの△自己の未成立▽と対応し、後者が、自分が女性であることを無意識的に拒否しており、〃子育て〃は義務的で、子どもの側に立った細かい配慮に欠けることと対応する。このことは自閉症の成因に大きな要素をもたらしている可能性が強い。

もっとも、ここでは母親のみをとりあげたが、問題は母親のみにあるのではなく、こうしたタイプをとらせている、あるいはこういう女性を配偶者を選ぶ男性、すなわち自閉症児にとっての父親のほうも、おそらく母親と同程度の問題を内包しているのに違いない。

四、登校拒否児とその母親

学童期にみられるもので、最も母親を悩ませる事態の一つに、成績もごく普通で、五体も満足、外見적으로는何一つ不自由がないはずなのに、当初頭痛がしたり腹痛がしたりして一日二日学校を休み、それを契機にするすると長期に学校に登校できなくなってしまうといったものがある。一般に登校拒否症あるいは学校恐怖症などとよばれるものである。その症状は、先にも述べたように当初、頭痛、嘔気、嘔吐、熱発などの一見身体的色彩をもって発症するが、むろん医者をつねても「異常なし」といわれるか、せいぜい「自律神経失調症」という診断名を付けられるにすぎず、解決をもたらしえない。学校を休みはじめると、朝起きができず、これを無理におこそうとすると母親をなぐる蹴るのトラブルが必ずおこる。そのうち、深く家のなかに閉じこもって誰とも会わなくなり、ずるずると日数だけが経ってしまう、というのが一般的のようである。

さて、こうした状態を示す患児の母親は、一般に情緒的に不安定で、心配性であり、緊張しやすく、ものごとをきちんきちんと片付けねば気がすまぬ強迫的 성격や、完全主義傾向を持つものが多い。母子関係は過保護に傾く場合が多く、子どもと一体化していたり、子どもを自分の所有物のように感じている者が

あり、子どもだけが自分の生き甲斐で、自分が達成できなかったことをひたすら子どもに肩がわりさせてしまっていたり、過剰に期待しすぎていたり、ということがおこりやすい。してみると、子どもの登校拒否という事態は、単に学校にいくいかに問題ではないことがわかる。学業が困難だとか、先生が怖いだとか、給食がいやだとか、友だちにいじめられるとかいった直接のきっかけも、誘因となることはあれ原因ではないことがわかる。問題はむしろこうした状況が起こってくる家庭内の人間関係や、両親の問題であることが知られよう。といって筆者は、単に個人や家庭だけにこの原因を帰趨させてしまうつもりはない。少しずつ実力主義が抬頭しつつあるとは言え、学歴偏重、教育への過剰期待といった教育爆発への一般的風潮はもとより、物質中心主義、レジャー主義、マイホーム主義、見せかけの繁栄、核家族と老若の断絶、過密過疎、政治の腐敗、宗教性の喪失、生き甲斐喪失等々といった社会背景や時代の歪みにも責任の一端は明らかに認められるからである。しかし本稿では、それらのことにはこれ以上触れない。

五、時代の警鐘

さて、前三節であげた現在児童精神医学領域で問題となっている二つの疾患以外にも、我々は幾多の諸問題をかかえている。しかし、殊更この二つを掲げたのにはそれなりの意図がある。紹介の仕方が不十分なので、はっきりとその意図が見えぬ向きのあるやもしれぬが、私の意図は子どもの病態から母親の問題を再考すること、これである。むろん何度も但し書きをつけるように、母親の問題はこれすなわち父親の問題なのであり、切り離して論じられないのはいまさら言うまでもないだろう。

自閉症児においては、子どもは十分に母親の庇護を与えられず、基本的安全感を自らのものとする事ができなかったため、世界への素朴な信頼を持つことができず、よって対人的交流に壁をつくって自らに閉じこもってしまったため、自己の基盤からして未成立である可能性があり、登校拒否児においては、子どもは過剰な手によって自らの自然な成長の芽をつまれ、両親間、親子間の葛藤に心的エネルギーを奪われて、肝心の自分の心の成長が中途半端になり、自らの責任において社会に立ち向かうだけの自我が未熟であるために、ひとたび社会場面から退いてもっぱら内的成長に向かうために登校しない可能性がある、

と私は考えている。

これは、一言にして、前者においては、母親は子どもにとつての必要にして十分な保護の支えとなつておらず、子どもの存立の基盤を奪つており、後者においては、過剰保護の故に、子どもの自立の基盤を奪つてゐる、とも言えようか。このことから、現代の母親は、この両極の間を大きく揺れ動いており、まだその定かなる位置を確保してゐない、と考えることができるだろう。そして、老婆心ながらやはり一言付言しておかねばならぬことは、前にも述べたように、自閉症児の母親も、登校拒否児の母親も、彼女たち個人が責められるべきではないことである。むしろ、私の考えでは、精神障害を示す子どもというのは、ちょうどリチャード・アダムズ書くところの『ウォーターシップダウンの兎たち』中のファイバーのごとく、ひとよりいくらか先に時代の凶兆を敏感に感知する能力を備えるものであり、これらの子どもは一般のひとびとより一步先に自ら悩む形で警鐘を鳴らしているのであつて、そうであれば、その両親ことに母親は、キリストにとつてのマリアの位置と、やがては仏陀に帰依するけれどもかつての鬼子母神ハリーティーの位置を揺れ動く存在に等しいと言えるだろう。

六、母性否定論批判

昨今、「母性否定論」が散見される。女性はやや母である前にまず一個の人間である、との認識には、むしろ反駁しない。そのとおりだからである。しかし、女性が母親であるとき、彼女は人間であつて、同時に母親でもあることを忘れてはならない。母親とは、子どもにとつて、ことに乳幼児にとつて、その存在がなければ自己の存立が成立しえない絶対的な存在なのであり、子どもの側から言えば、子どもも、子どもである前に人間なのである。ここにおいて、母親のマザリングがなければ、子どもの人間性は危機に頻するのである。むしろ、ここで、何も母親その人でなくとも、母親代理がいればよい、とする向きもある。夫でもよし、保母でも、祖母でもよし、とにかく現代の家族を保つためには、多方面の協力と援助がある。ひとり女性だけが、母親だけが育児労働にあたるべきとするのは、旧來の陋習である、との意見である。もちろん、それらの援助はあつて当然であり、また、なくてはならぬものである。しかも、確か

に、子どもにとつての母親としては失格と言わざるをえないような母親よりは、よりマザリングの可能な他者のほうがよいこともありうるだろう。しかし、臨床的経験からいって、三歳までは、実の母親による一貫した養育をうけることがやりのぞましい。よって、産時休暇は産後六か月ではあきらかに不足であり、産後三年が必要であると言える。しかし、翻って女性の側に視点をもどせば、三年のブランクは、こゝに生き馬の目を抜くがごとき職にたざわる者にとつて、またそうでなくとも一年が昔日の十年に等しいかそれ以上の変化をみせる現代にあつては、仕事をつなげることはおろかその存在の場を保持することすら困難であり暴論に等しい、との誇りはまぬかれないであろう。しかし、読者諸姉はドイツのミヒャエル・エンデの書いた『モモ』をお読みであらうか。今や人類は先を争つて前へ前へと進もうとしているが、一体これは何のためなのであらう。分秒を競つて人類の破滅へと突き進んでいるのでなければよいが……。それはともかく、世間全体が「ゆとり」を失つてしまつてゐるのは確かである。育児はおちついた心と忍耐を要する大切な仕事である。そもそも、育児を労働とする見方からして私にはいささか抵抗がある。確かに、次なる生産手段を再生産する意において、その種の定義を与える場合も、また、まぎれもなく、莫大な時間とエネルギーとを注ぎ込む必要があるという面から見ても、他の労働に比較して優るとも決して劣らぬ重大労働であるとは言える。しかし、子育ては、昔日のごとき国家のためのものでもなく、また、全く個人の近視眼的な欲得のためでもなく、人類にとつての重大な課題なのだ。昨今、自分の子さえよければ、との狭量から、他人の子への配慮をまったく怠る親が激増しているが、子どもは誰の子であるかを問はず大切にする風潮を、国際児童年であらうとなかろうと、樹立する必要がある。

話がいささかどころか大幅に拡散してしまつたが、マザリングは字義どおり母親によつて包み込み、満たされ、完成されるべきものである。しかしてこの際、母親は精神的に安定していなければならぬ。その安定のためには、精神的な自立が必要である。そのためには、女性一人一人が自らの生き甲斐を手中にしているでなければならず、それは子どもを含む他者を犠牲にしてのものであつてはならない。これらなることを可能にする状況を作つていくこそが、今日の女性にとって最も重大な課題であると言わねばならない。

(南山大学助教授 医博)

動物の親子

増井光子

動物の親子と一口にいても、その種類は多く生活様式もさまざまだから、一概にこうといい切ること
は難しい。動物たちの子育ては彼らの暮らし方に密接に結びついているから、ここでは幾つかのタイプを
あげてお話をすすめて行きたい。

一、子どものタイプ

動物の子どもたちをみると、あるものは産まれたときから親のミニチュアで、足腰もしっかりし感
覚器官も発達して、十分生活能力を備えたものから、目も耳もなくあるのはただ口ばかり、まるで胎児の
ように未熟なものまで千差万別である。それを区分けすると大むね次のようになる。

◎ 未熟で胎児のようなうちに産み出され、育子嚢内で長らく保護されて育つもの。

カンガルーなどの有袋類

◎ 未熟な状態で産み出されるが、子は巣穴のなかなどで保護される。

リスやネズミなどの齧歯類、多くの肉食獣

◎ 子は未熟だが親につかまることができ、長らく親の保護をうけるもの。

サル類

◎子は成熟して産まれ、親とともに行動できるものもある。

有蹄類、ノウサギ、ビーバー、モルモット、海獣類など

子の状態に応じて親の子に対する庇護の程度も差を生ずることは当然である。

二、授乳のタイプ

子の世話といえ、授乳、体の手入れ、外敵からの保護などがあげられよう。このうち子の成長に最も深くかかわり合いを持つのは、授乳だろう。授乳しない親がいれば、それだけで子はたちまちに死亡する。そのため子のほうにも出産するや、すぐに乳を探すという動作がみられるが、この授乳にもいくつかのタイプがある。

◎子はしっかりと親の乳首にくっついていて、飲みたいときにいつでも飲めるもの。

カンガールなどの有袋類。カンガールでは体長わずか一センチほどの未熟な子が、自力で育子嚢まで這い上がり、袋内の一つの乳頭に吸いつく。吸いついた子の口は、乳頭とびつたりとくっついて一つの組織のようになり、無理にひっぱると出血するぐらいである。

◎子がいつも親の体にしがみついているのはともに行動し、飲みたいときに乳が飲めるもの。

サル類、ウシ、ムフロン、イノシシなど

◎子は巣穴のなかに入れておかれ、授乳はもっぱら親の都合によるもの。

肉食獣、リス、ネズミなど

◎子は発達して産まれるが、産まれてすぐは茂みに隠され、もっぱら授乳時に親が訪れるもの。

レイヨウ、カモシカ、キリン、シカなどの有蹄類、ノウサギなど

◎子は冷たい水にぬれ、岩上にあるいは氷上に置き去りにされて、時々親が戻ってくるもの。

オットセイ、アザラシ類

などである。

この授乳様式は乳成分とも関連がある。いつでも自由に乳が与えられるものは、乳成分は一般にうすい。しかし、授乳が親の都合によってなされ、しかも戻るのに時間のかかるものは、乳成分は濃い。子の体が冷えやすい環境にあるものはさらにその傾向が強い。

一般に有袋類、サル類、ウシ類の乳成分は市乳に近いものとみて良く、巣穴に子を保護する肉食獣では蛋白、脂肪ともに八一〇%あり、その授乳回数是一日に三―四回、茂みに子を隠して朝、夕に親が戻るシカやレイヨウでは、脂肪分は二〇%近くあり、授乳回数は一日三回程度、海獣類ともなれば、一週間に一度ぐらいしか親は戻ってこないが、乳成分は脂肪分三〇―五〇%、生クリームのようにドロドロの乳である。これを一度に腹一杯吸ってあとはひたすら親の帰りを待つ。腹持ちの良いミルクである。

こうした各種の動物たちの哺乳・授乳様式を知っておくと、動物園で人工哺育をするときに大いに参考になる。ある種の動物の乳成分が不明でも、育児方式からおおよその成分が推定される。

三、親子の結びつき

誰しも子どもはかわいいと思う。別に他人の子であっても、親に捨てられた子があれば、育ててやりたいと思う。子どもの体つきは親とはプロポーションが異なつて、全体として丸っこい。その丸さや体のアンバランスがかわいさのもとを作り出す。

しかし、これは、全体的にいえることだ。もっと個々の親と子の結びつきはどうなっているのだろう。子にとって親を認知するかしないかは死活問題である。はじめ子は誰にでも乳をねだりにゆく。しかし親のほうは他人の子には容易に乳を与えないし、もしそれが外敵ならば、ただちに子は殺される。

動物たちのしぐさを見てみると、どうやら臭い、鳴き声などによっていることが多いようだ。動物たちはそれぞれが個々の体臭をもっている。種には種としての体臭がある。いわゆるウマ臭とか、ゴリラ臭、いとかいうものである。そのなかに、個体で少しづつ臭いが違うのだ。上野動物園のゴリラのブルブルと、

タイコでは違う体臭なのである。

動物たちはおしなべて、人間より嗅覚にすぐれているから、この体臭の差は大きな決めてになる。それから鳴き声。この鳴き声も一頭一頭異なるから、これも手掛かりとなる。

四、認知にはどれくらい時間がかかるか

産まれたばかりの子がどれくらいで親を認知するのかは一口には言えない。その時間は種類によって差がある。たとえば有名なカモのヒナの親鳥を認知する時間は、孵化後十三〜十六時間ぐらいしてと実験でわかっているが、数多い動物種のすべてにわたり、その時間が調べられているわけではない。親についてすぐに行動しなければならぬ種類では、その時間は短いことは想像がつく。ムフロンの子は、生後一日もすれば、親かそうでないものかの区別はついて、すばらしい早さでにげる。しかし、カモシカの子は、半月乃至一か月ぐらいいかかるようだ。

この結びつきは、子が苦勞して親につき従えば従うほど強化される。薬に乳が飲めるより、苦勞して飲めたほうが印象が深いようだ。草食獣の子が産まれ、ようやく立ち上がり、さて乳を飲もうとすると、サッと親が動いてしまうことがある。子はよろめき、またヨチヨチと親のあとを追う。こんなことが何度も繰り返される。

よそ目には、何とも薄情な親のようにみえるが、これがかえって子のためには良い。子は親を追うことで、弱い足はどんどん強くなってゆく。足元もしっかりしてくる。そして、十分臭いを嗅ぐ時間もあり、親の印象をしっかりと刻みこむ。

今年の五月、私はたまたまニホンカモシカの子が、山の斜面を懸命になって親について歩くのをみた。子はツル草に足をとられ、何度か転んだが、それでも必死になっただけで、きつと数日をへずしてこの子はずつと丈夫になり、イヌに追われても親ともどもにげられるのだらうと思われた。

このカモシカの親子をみると、親は余り子に気づかっているようにないようだ。子の歩みに合わせて歩調を

おとすということは、いっさいしなかった。親はいつもと変わらぬ自分のペースで歩き、子のほうが懸命に遅れまいとしていた。

一体に親とともに行動する有蹄類は、子のほうが親に歩調を合わせている。そのせいか子の足は、体のわりに長くて歩幅は大きい。子は確かに弱いものであり疲れ易いものだ。しかし、子にはこれから成長するという、伸び盛りの力がある。何かしたい、ジッとしてられない。そういったエネルギーの消費が、親と歩調を合わせて歩むという苦勞で吐き出されるのではなからうか。

親が休息するとき、子はたちまちに眠りこむ。子は疲れているのだが、その疲れは熟睡ですぐ癒されるようだ。一眠りした子はたちまち元氣をとり戻し、また駆け回る。もしこのあふれるエネルギーを発散させることがなかったら、どうなるのだろうか。子のペースに合わせて親が行動していたって、決して外敵からにげ自活してゆく力は、子にはつかないと思う。

五、危険に際して親はどこまで子を守るか

外界には多く危険がある。外敵に捕食されるほかに、転落、中毒死などの事故もある。子は何を食べるか、どこへ避難するかといったことをすべて親のやり方をみて覚えてゆく。中には冒険をやってみる子もなきにしもあらずだが、冒険は死につながることも多い。

一体に動物たちは保守的である。食生活一つをとってみても群れの習慣というものが感じられる。たとえば、ニホンザル。普通野生のニホンザルは菓子類は食べない。菓子は彼らのメニューに入っていないのだ。しかし、餌づけされ、菓子の味を知ると、次第に彼らは好むようになる。

こうした新しいものへの挑戦は、親よりも子のほうが多い。それが都合良いものなら、新しい風習が次第に群れに定着する。

外敵の来襲にあつては、親は果敢にそれに立ち向かう。もし肉食獣がレイヨウ類を襲うとき、大型のもので一対一なら、よく子を守り切ることがある。しかし肉食獣が複数の場合、子を守ることは難しい。親

は自分を犠牲にしてまで子を守ろうとはしない。自分の生命が危ういとき、子を見放してしまふ。

たとえばカンガル。カンガルは育子嚢に子を入れて、六か月間ぐらい育てるが、子の成長につれて袋は当然重くなる。カンガルが大きな袋をかかえて敵に追われると、たちまち袋のなかの子を放り出してにげる。あとで親が捨てた子をひろいに戻る確証はない。人間流に考えれば、何とも薄情だが、そうするのはいかにも人間的解釈だ。

それは、野生では親のない子は育たないし、親が生き残ればまた子を産むことができ、子孫を残すにはそのほうが有利だからだ。

六、育児の失敗

動物たちの行動は、生前にプログラミングされたものが多いので、育児行動も失敗はないように思われる。人間の母親が育児に失敗すると、動物にも劣るなどといわれたりするときがあるが、動物たちもいつも成功するとは限らない。産み捨て、育児途中からの放棄、食害などはよくみられる現象である。

行動がプログラミングされてはいても、それを正しく開発するためには、それ相当の学習が必要となる。未経験、学習不足は育児の失敗につながりやすい。特に群れ生活するものを、群れから隔離して単独で育てた場合、この種の失敗は多い。

初産の場合は、たとえ群れ生活していても、個体の未経験、あるいは若すぎて身体が十分成熟していないための失敗が多い。育児に失敗すると、人はすぐに飼育されたもののひずみというが、野生のものも結構失敗している。

ただ、野生動物のデータが少ないために、どの程度の例が失敗するのかわからない点が多いが、ゼニガタアザラシの研究者、新妻昭夫氏のデータによれば、初産のアザラシの八％が育児に失敗した。

一方、人工で育てられ、動物本来の社会生活を営めなかったものでも、十分体が成熟してから出産すれば、初産でも育児可能かということに対しては、ただ今資料収集中である。乏しい資料からの知見では、

失敗率は大幅に減少するようである。

その他、親の老齢、疾病なども当然育児の失敗につながる。

親の成熟度と育児との関係は、面白いと思う。動物も身体の成熟の前に、性成熟がおこる。このときに受胎するものもあるが、しないものも多い。何度かの交尾の経験を経て、出産へと移行し、初めから成功するものもいるが、一度失敗しても、二度目からはほとんどのものが成功する。それは群れ生活をした経験の有無に関係ない。

一度出産を経験するということが、その親をすっかり落ち着かせ、育児行動を正しく開発させてゆくようだ。また、十分成熟した個体が初体験にしても育児が立派にできるなら、何がそうさせるのだろう。動物には動物なりの人生経験の豊富さが必要なかもしれない。育児を正しく行ない、子孫繁栄を目的とするなら、幼な妻は不向きである。

七、オスの育児に対する役割

動物たちの親子の結びつきは、ほとんどが母と子の関係である。育児にオスが関与する例は少ない。オスが協力するタイプをみると、おおよそ次のようなことがわかる。

◎ 一夫一婦、あるいは家族群型の生活をする動向は、育児期間中オス親も協力する。

オオカミ、キツネ、などのイヌ科動物。マーモセット、ヨザルなどの小型サル類

◎ 群れ全体が一腹の強いメスの子を育てる。

リカオン

などである。

一方、オスが子にとって外敵となるものもある。クマ、ブチハイエナなどがそうで、猛々しいオスと別れて、メスと子の群れを作り生活しているものも数多い。多くの有蹄類などがそうである。

また、幼時のうちはもっぱら母親が育児にあたるが、子が成長するにつれ遊び相手となり、または多少

の子守りなどするものに、チンパンジーや多くのサル類などがあげられよう。

家族群で暮らし、狩りをする動物にオスの協力があることは興味深い。中一大型の獲物を狩るオオカミやリオカンなどでは、育児中のメス一頭の力では、生活できないと思われる。

同じ群れ生活をし、大型の獲物狩りをするライオンは、オスは育児に関与しない。単独では狩りをしにくいメスたちは、メス同士協力して狩りを行ない、同じ群内の子どもは協同して育てられる。これなど一種の保育所形式を想わせるものだ。

オスはほとんどの動物で育児中はむしろのけもの的ですらあるが、やがて子どもが成長し、親から離れてゆく段階で必要となってくる。メスの子は母親のほうに留まることが多いが、オスの子はほとんど家を出る。そしてオスの社会に入ってゆく。まだ人生経験に乏しいオスの子たちは、同年齢の仲間が集い、あるいは先輩オスにつき従って、一緒に暮らしつつ、一人前のオスに成長してゆく。

もし先輩オスが存在しなかったら、動物の発育も心身ともに成熟したときを完成と目指すなら、若いオスだけでは体だけは大きくなってもオスとしては何かに欠けるオスができるに違いない。

以上、簡単に動物の親子について述べてみたが、この問題は深くかつ幅広い。幾ら調べても、さまざまなケースが生じて、なかなか割り切れない。しかし、それがまた限らない興味をひき起こす。私とて現在明快に親子はこうなのだとい切れず、いつもモヤモヤしたものを抱いている。しかし、日常の絶えまない観察と考察が少しでも、その不思議なヴェールをはがしてくれることを祈りつつ、巡回を繁くしている。

(東京都恩賜上野動物園勤務)

十八歳の悩み

山口 昌子

私が一番やかかいに思う存在、それが「母」であります。なぜなら、私は母が好きです。母は私を信用していますから。つまり、その信用のわくのなかでぬくぬくしていたいということ、母が娘に持っている信用をこわして、心配させたり悲しませたくない、ということなのです。親離れできない子どもと、子離れできない親といえ、いえるでしょう。

私は昔から、友人などに「うちのお父さんは好きじゃないけど、お母さんは友だちみたいになんでも話しができて好きだよ。いいお母さんだよ」と言っていました。でも、私が十八歳になって、そろそろ一人歩きをはじめようと思ったとき、母は悩みの種と化しました。つまり、私は一日に起こるほとんどもを母に話すということが習慣になってしまっていたのです。そして気がついてみると、私のことはすべて母が知っており、私個人というものは存在しないのです。母イコール私になっていたのです。私の家はたいへん古いので、プライベートなスペースと

いうものありません。私はだんだん、母の存在を息苦しく思うようになりました。私の母は、自分のことよりも子どものことを、という主義でしたので、私たち兄妹が幼少のころは、ずいぶん自分を犠牲にしただろうと思います。母自身には犠牲になったという気持ちはなかったでしょう。でも、それだからといって、そこにつけ込んではいけないと思えてしまうのです。もう一人歩きしたいと私の心が言うとき、母のなかの私が、母を見ずてはいけないと言うのです。

もし母がもっと自分中心に生きていたなら、反抗や無視もできたでしょう。しかし母は、子どものためによかれと思い、いままでそういう考えにもとづいて生きて来たのです。いま、私がそんな母に、「あなたには子どものことばかり考えていず、自分の生き方を考えなさい。そして、私は一人で歩いていくから、ほっておいてください。」といったら、それは私のわがままとしかうつらないでしょう。

結局、私は母の信用をこわすのがこわいんだと思います。私が母をすてないかぎり、私のなかの母は居すわるでしょう。なんだかさみしい気がします。そして親子なんていったい何なのかと、考え込んでしまします。いまのところ、その答えは見つかっておりません。

どら息子、母を語る

いもむしころう

ゴリキイの「母」なんて、あれはつまんないね。うまくできすぎてるよ。息子がパクられたのをきっかけに年老いた母親が目覚めていくなんて。最後にはデモの先頭に立って旗まで振るんだから。うちのお袋なんかだったら、ウデがだるくなるからってんで絶対旗なんか振らない。第一あそこまで目覚める母親なんてめったにいませんよ。でもあれは息子が良かったからかもしれない。それを言われるとぼくとしては弱いんだけど。

ぼくの母は、性格的にはあんまり「女らしい」人ではないと思います。昔は、人前で意見を言うことなどなかなかできないような人だったのですが、ある時期から変わってきたのです。今ではじぶんの思うことをはっきり言わないと気がすまないたちで、普段の人づきあいも心にないお世辞を言うのは大嫌いだし、国鉄やデパートへの苦情申立ては毎度のこととて、こないだも近所のスーパーの前の自転車置場があふれて歩行者のじゃまになるから取除れ

と、市役所へひとりでかけて行ったり、共産党の市議会議員に電話したり、家の前で駐車禁止を唱えているパトカーつかまえてこんな暇なところでやらないで肝心のところを取締れと文句言ったり、それでも結局、警察の上の方で誰かがあのスーパーから金を受け取って手心加えているんじゃないかろうか、パトカーの婦人警官はハイハイ気のない相づち打ちながら聞き流していたし、共産党の議員は何とかしますと言ったけどなんするんかいな、などとぼくに話したりします。

ぼくには兄がひとりいます。その兄が中学生だか高校生の頃のこと、ある日母に向かって言いました。「お母ちゃん。今まではぼくが勉強のことやら何やらでお母ちゃんに励ましてもらうたけど、これからぼくがお母ちゃんを励ましてあげる番じゃ。これからの時代は女の人も世の中のことに知らないかん。しっかりしてくださいよ。」

なんと立派な息子でせう。それにひきかえ弟のはうはどうだ。母はこのとき、兄が何やら不思議なことを言っているという気持ちで聞いていたそうですが、それから少しづつ本を読んだり女たちの集まりに出かけて行くようになりました。市川房枝女史の話をよく聞きに行ったようです。でもそんなとき、父には隠れて行かねばなりませんでした。父は、母がそういうことで出歩くのを嫌ったからです。

初めてそういう集りに出かけて行ったとき母は一生懸命でした。地図で場所を探しながら、雨の降る日に傘さして、ひとりで行きまわりました。母が母のために弁当を作ったやりました。父は、母が何か別の用事ででかけたとき、子どもたちに言われてまんまとだまされていたようです。母、四十代半ばごろのことです。それまで母は、人前で意見を言うことなどできないような人だったのですが、どんどん変わっていききました。

しかし、こんな一面を持った母でありながら、過去から現在に至るまで彼女は生活のほとんどを、夫や子どもたちや孫たちの日常的な次元での世話をやくことに費してきました。そしてその結果、そういう忙しさに追われていないと逆に、不安に陥るようになんて見えます。母は専業主婦で、かつて外に出て働いたことがありません、このことが、彼女の個性を伸ばし、もっともつと自由に生きるための——結婚している人はみんな、ぼくには不自由に見えてしまうのですが、そういう画一的なものの見方はこの際やめて、結婚という枠のなかにも自由なり不自由なりの度合に幅があることを認めるかどうか、それはともかくとして——より現実的なうらづけを持ち得なかった大きな理由ではないかと思えます。そしてまた、そのこと自体が彼女の個性を形づくってものいるようです。「お父さんが嫌うからしょうがない。」

と言って母が何かを諦めるとき、それは父への思いやりであるよりもむしろ不満の声でありながら、同時に、それ以上自分を主張すればかえって自分の生き方を根本的に問い直さねばならなくなるかもしれない危険性をさけて、いまあるままの体制のなかに逃げ込んで行く彼女の弁解でもあるのでせう。

さて話はガラッと変わって、ぼくの思春期のこと。ぼくが子どものときには、母はぼくの期待にすべて応えてくれるものでした。しかし幸福な母と子の時代がやがて終わり、ぼくの期待するものが現実の母よりも大きくなつていき、母の持っていないものをぼくが求め始めたとき、息子は母に反抗し、あるいは無関心にさえなっていくのです。ぼくの十代なかばから二十代初めにかけては、心理学用語の正しい定義は知りませんが、マザーコンプレックスの好例だったのではなからうか。子ども時代の母と子の関係が、少なくともぼくの側から見て不満の少ないものであり、そのことを自覚しないほど満たされていったものであればあるほど、いったん母という人間の限界が見えてしまうと満たされない思いが強くなる。そのとき母と子が互いに人格を尊重し合つて新たな人間関係をつくっていくというふうなら良いのでしょうけれど、かたや母はいままでの母と子の関係に固執し、こなた甘やかされて我儘放題に育った

息子は自分の欲しいものしか考えない。母が息子の世話をするということで成り立ってきた関係は、息子がもうそういう世話を必要としなくなることで終わるわけですね。理解力を伴わない愛情の押しつけがましさに息子は辟易し、母親は息子のことが心配で、この心配は実は、二人の状況を理解できない、そこから何も得られないという虚しさから来る不安なのでしょうが、それを母自身は息子への愛情と呼ぶわけです。この状況を理解できなかったという点では、ぼくも同じですが、ただぼくにとってそれが苦痛とはならなかった。だから母の抱いている子ども像からどんなんはみだして遠ざかっていく息子がそこにいる。

それもそのはず生意気なことに、ヘルマン・ヘッセの小説『知と愛』の主人公ゴルトムントが生涯求めて放浪した聖母マリアや、『デミアン』のエヴァ夫人、はたまたロマン・ロランのヒロイン、アンネットなどの心像をぼくは求め始めていたのですから、母としてはたまったものではありませぬ。親の手のうちを超えた外の世界にどうやって適応していくかわからない。人間世界の愚かしさが見えてきて、自分自身もその愚劣な世界の一部であることを気づかずに、けなげにも世界に反抗しようとする、そんなとき、ぼくを導いてくれる、あるいはぼくを守るために世界を敵に回して闘いをも辞さないような、そ

ういう偉大な母の像ですね。

無論ぼくは、それを自分の母に求めることをせず、とにかくむしろ母に対してそういう点では失望したからその代償として、そういう心像を求めるようになったのかもしれない、というような通俗的なしろりと診断はしないほうが無難ですけれど、ぼくはその心像をろまんちっくな恋愛に求めるようになるのです。だから、そう言えば当時、「母性」という言葉をしきりに使っていたなあ。憧れをこめて。しかし、母親にせよ恋人にせよ、なま身の人間にすぎない者に、そんな偉大な母性像を求めるなんて、ムリな話ですよ。男ってバカだね。女の人たちは、どうなんです？ 偉大な父性像に憧れるなんてことは、あるんでしょうか？

仕事に盗られた、
と思つた日も……

三 高 邦 子

私にとって母はどんな存在なのか、改めて考えてみたことなどほとんどない。そう言えばごく若いころ、社内報に働く女について書いたとき、ほんの少

し母についてふれたことがあったのを思い出した。

ページをたどって抜すいてみよう。

「(前略) 職業につくということが、収入を得るための目的であってはいけない。人間としてより充実して生きるためには職業に生きるということが必要だ、と思ったときこそやるべきである。近ごろ私の母は、この事を実行している。彼女は働くことの喜びを、四十歳近くになってから初めて知ったのだ。

彼女の仕事は、特殊な才能を必要としないだけに私は不安を感じるが、楽しそうに共働きをしている彼女に、私は何も口出しするまい。お母さんががんばれ、と、むしろ励まして、新しい時代の女として見てやらねばならないと思う。(後略)」

主婦の再就職について、二十代前半のひとり身の私はこんなふうに考えていたのだった。

母は成金の娘であった。長者番付に必ずのるほどの家であったが、家庭は暗かった。祖父は親戚の女を妾にして、祖母はそのために病気がちだった。母は両親の愛を知らずに育ったという。家庭教育も十分とは言えなかったようだ。

いわゆるお嬢さん育ちのまま、エリートサラリーマンと結婚した母は、有閑マダムになるはずであった。

ところが、終戦後の混乱期に父は職を失い、我が

家は路頭に迷うはめになってしまった。お決まりのたけのこ生活が三年ほど続いたが、それにも限度がある。中三の私を頭に小一まで、四人の子をかかえて、母は働きに出るようになった。

母はたちまちのうちに、みごとな「働く女」になった。そのあまりにもたくましい変容ぶりに、私はとまどい、妬ましくさえ思ったことを覚えていて。私たち四人の子の母……。父の妻である母……。それ以外の世界で生きる母など考えられなかった――。

世間知らずでお人好しの女、尽くすだけで自己主張などしない女、哀れではあっても、たくましくはない女……。母は、そんな女のイメージが強かった。私たち四人の子は、そんな母に思いきり甘え、そのくせ決して尊敬のまなざしで見ることなどせず、母とはそういうもの、女とはそういうもの、と思っ

て暮らしてきたのだった。

働き出してからというものの、母の眼はキラキラと輝くようになり、//生きていくという実感//を得たものの持つ、さわやかな魅力がにじみ出るようになった。生活苦が少しは和らいだこともあるとは思いう。しかし、それだけではない、何か執念とも思えるほど、すさまじい迫力を感じるのであった。

私が高校生になったころ、父が再就職して生活も安定してきた。私は当然、母は仕事を辞めると思っ

ていた。が、一向にそんな様子もない。いったい母は、何を考えているのだろうか。私は不思議だった。小学生の弟たちや妹をカギツ子にすることに、ためらいもせず、いきいきと仕事をしている母のありようが……。

「そんなバカバカしい仕事に大切な時間を費すなんて——。生活が楽になるのでもいいけれど、私はお母さんがもつとのんびり暮らしてくれただけがいいの」何度こんなセリフをはいたことだろう。そのたびに母は「そう言ってくれるのはうれしいけれど、まだまだあなたたちを大きくするために、お金がうんといるのよ」といって、悲しそうに笑った。

ただお金のためだけに働くのだ、あなたたちのために働くのだ、と母は言った。けれども、その眼は、そのことを肯定していなかったのを私たち四人の子どもは知っていた。

ずいぶん長い間私は、//母を仕事に盗られた//と思ひ込んでいた。ひとり身のころは、仕事がそんなにいいものだとは思えなかった。社内報にはあんなふうに書いたけれど、ホソネを言えば、母は家に居てほしかったのである。

結婚して、仕事を辞めて、子どもを産んで、長いあいだの//何とも言えない空虚な期間//を過ごした後、私は三十七歳で再就職した。子どもは、母が働き

始めたころの妹や弟たちよりも小さかったけれど、私はためらわずにカギツ子にし、余程の事がない限り、母を当てにしないようにして、いきいきと働いている。

そして母は、六十一歳のいまも、ずっと同じ職場で働き続けている。

私の幼い娘たちも、母や私のように、//働く母親//になるに違いない、私はそう確信している。

子を持つて知る子の恩

長 縄 幸 子

私がかつて母親に育てられている子どもでもあった。そしていまは二人の幼な子を育てている母親である。私の場合は、母に育てられていた子どものころより母であるいまの方がずっと気楽である。私はときどき親に育てられている子どもほど、窮屈な存在はないだろうという感を抱く。道端で遊んでいる子どもが急にかわいそうにいじらしくなって、抱きしめてやりたいような気持ちにおそわれることもある。私はそういった子どもサイドの物の見方をするほうであるから、母というイメージに対しては厳し

人間かもしれない。

私と母との関係を書こうと思う。母はまことに普通に通に私を育ててくれた。私の服を母はミシンで縫ったし、お弁当を作るのを忘れたこともなかった。教育熱心であったし、男女交際にも寛大であった。だけれども私は人間としての母とはあまり合わなかった。とくに思春期のころは相当の反抗をした。しかし失望したりはしなかった。

母に対してある種の失望が湧いたのは、私が結婚し長男をお産してからである。母はお産や孫の世話があまり好きでなかったらしい。第二子がすぐでできるとイヤな顔を露骨に見せた。私は姉の所へ世話になることを決めたが、母は姑と世間への気がねから私と生まれたばかりの次男を二週間家に呼び寄せた。長男は姉が見てくれた。だけれども「世話になりたくない」と思いながら世話されることは苦痛であった。二週間たつとすぐ微熱があるにもかかわらず私は家へ帰った。その夜四〇度近くの熱が出、うなり声を出しながら次男に乳を飲ませた。つぎの日医者は腎盂炎だと言った。このとき母への期待はブツリと切れた。その後年子を抱え悪戦苦闘したが、決して母を頼ろうとは思わなかった。どんなにくらくとも夫婦二人でやり誰も頼らなかつた。失望はもうしたくなかつたのである。

しかしながらつい最近のことなのだが、私は意外

なことに気がついた。母への期待はあのとき切れたが、甘えはまだそのまま残り、恨みがましく思い真の精神的自立などできていなかったのではないかということがある。成人してもなお私は母に対してある意味で自己犠牲を強いていたのではないだろうか。その証拠に父だって母と同じことしかしなかったのに、父に対してはなにも責めていないのである。そのうえ母は私たち（姉も含め）に何の期待も初めからしていないのである。老後は自分たちでやるつもりだし、あてにしているのは弟のほうへである。

夫の母と夫との関係を考えると、根本的に母子関係に疑問が湧いてくる。夫が大人になつてからのことであるが、夫の母は夫をただ引きずつただけである。姑はそれまで寄りかかつていたつれあいが死ぬと息子に寄りかかつてきた。その息子が自立心のあつた一人前の人間であつたならあまり問題はなかつたかもしれない。けれどその息子も自立できていない頼りない人間であつた……。こうなると悲劇である。母子と言えども大人になれば人間的なつき合いしか方法がない。しかし自立していない人間同士は人間的なつき合いなんてできないから、血縁関係だけが残り、心ある関係は事切れる。子どもは母親に恩を感じるどころか重荷を感じるだけである。

一般に「子を持って知る親の恩」とか言うけれど私はいっさい感じなかつた。私の場合は「子を持つ

て知る子の恩」ただそれだけである。こんなに自分に幸せを与えてくれる子どもに対して親は、「子どもを育ててもなにもならない。」というような言葉をなぜはくのだろうと、逆に思った。私は現に二、三度母からそう言われた。母のなかにも「自分が母である」というおごりがあったのだと思う。

私が子どもを持った理由は自分がほしいから持っただけであって、子どもの側の理由からではない。勝手に私は子を産み育てているだけである。子どもはほんとうは産まれてきたくなかったのかもしれない。日々子育てで苦勞していることは私が望んでやっていることである。そのかわりに子育て中の楽しみもいっぱいある。それ以外何もない。私が母となつた理由は。

あまりに母というイメージは歪められて作られているのではないだろうか。そしておろかな女たちがただ母親であるという事実で満足してしまつて、自分に価値を与えている。が子育てをして何か自分に残ると思つたら大間違ひである。あるのはただ子育てしながら自分自身で考へて学び取つていくことだけである。いい母であつても人間的にいいとは限らない。いい人間であらうとすればいい母であらねばならぬ。母とは人間の一部分である。そしてそれは子どもにとってではなく、自分にとって最も重要なことなのである。

大島二枚

漆田和代

突然、母は上京して言った。

「あんたが死ぬんじゃないかと思つて！」

二十五のころ、私が男のことで問題を起こして、それを誰か余計なことをする人が田舎の両親にわざと知らせたのである。父母にとっては青天の霹靂であつただろう。

母はおろおろし、どうなつてゐるのかと尋ねたが、私はいつものように何も言わなかつた。するとおつかぶせるように、そんな男とつき合つても損するばかりだとか、娘をキズモノにされて悔やしいなどとべらべら言つた。泣きこんで行けるところがあつたらどんなによかつただろう。気持ちには堪へたまふまま、むしろ母を少しばかり気の毒に思つて眺めていた。

「ところであんた、晩御飯のおかずはどうする？」

ひょいと母は話題を変えた。一瞬啞然とし、次の瞬間ムラムラと怒りに似たものがこみあげた。が、母にぶつけることはせず、自分のなかに納めてから、

何も食べたくない、と言った。先刻気の毒に思った
 気持ちとはどこへやら、しんとした寂しい気持ちに返
 って行き、どうかして母をやり過ぐそうと、ぼんや
 り考えはじめるのだった。

私には一歳九カ月まで寝起きをともにしたという
 母の懐の暖かさについて何も記憶がない。ある夜睡
 れないまま、おばあちゃんのところへ行く、と自分
 から母のふとんを出て行ったという。後年思いみる
 に、気の変わりやすい母のもとを安全と感じられな
 くて出て行ったのではあるまいか。

翌早朝、産気づいた母は弟を産んだ。

以来、父母と襖一枚隔てた部屋で、祖母の懐に顔
 を埋め足をからませて睡った。夏には祖母のほだけ
 た胸の萎びた乳房を、ふざけて人前でも吸うまねを
 した。皆、私のことをおばあちゃん子だと言った。
 しかし、祖母といっても、睡りの前の数刻は果てしな
 い不安に苛まれた。

暗い天井の節を見ていると、さまざまな模様がち
 らちら現われ、網になって私を絡めとり、見る見る
 うちに深い、底なしの淵に引きずりこもうとする。
 かと思うと、寝ている真下から大地が裂けて私を飲
 み込もうとするのに、誰一人気がつかない。

もし祖母が、私だけを溺愛し、脈々とした一体感の
 なかに包み込んでくれていたなら、この不安は和ら

げられていただろうか。それはわからない。祖母は
 慕い寄ってくる弟たちをも同じように愛し、えこひ
 いきはしなかった。祖母の傍らにいて私にはフェエ
 な感覚が身についたような気もするが、遠慮深くて
 身近な人に対してもうちとけることが下手だった。

小学三年生のとき祖父が亡くなった。もう小姑も
 居なかった。家のなかに母と祖母との口争いが絶え
 なくなり、私たち姉弟も心を痛める日々が続いた。
 果てもなく言い募り合った挙句、母はよくふて寝を
 した。そして、農家の嫁が昼日なから寝ておると
 いうことがあるものかと言いつつ、腰の曲がった
 祖母のほうに畑へ出て行くのだった。祖母にだけ組
 するという気にもなれなかったが、ふて寝とか、出
 かけたついでに何となく暇を盗むとか、母にある意
 情でいじましいところははいやであった。

父はいつもこの口げんかには加わらなかった。威
 圧的なところは少しもない替り、人間関係にも人の
 心の世界にも関心をもてない人であったから、母が
 波長が合わないと感じたのは無理もない。母の寂し
 さがわかるようになったのは、私が三十を幾つもす
 ぎてからのことである。

母は料理にも家のなかを整えることにも気まぐれ
 にしか熱がなく、家のなかもしまりがなかった。片
 づけなさいと私に口で言えはすむと思っているお手
 軽さも気に入らなかった。細い身体の母には、農作

業はつらい仕事であり、そのうえに家事の負担は気の重いものだったであらうが、できてもできなくても自分でひっかぶってやるというけなげさも見えなかった。自分の身を粉にしても他人の喜ぶのを見たがる犠牲的精神の塊みたいな祖母と比較されて、気の毒ではあるが、小学校も五、六年になると、私は声に出して呟いたものだ。「母のような生き方はしたくない」と。毎夕私の仕事であった夕餉の竈の火を見つめながら。後年調理が私の大きな関心事の一つとなったのは母への反発がきっかけであったかもしれない。

「○○君というのはどういう子？　××君とどっちがよくできる？」

変だと思ったら母が私の日記を盗み見ていた。中学生ともなれば日記を書くのはいたって普通のことかもしれない。が私には書くという行為自体が恐ろしく恥ずかしかった。自分が他人に見透かされ無防備になる危険をおかすようなものではないか。

そのブレーキに打ち克って書いたのは、自分の心の動きそのものが不確かで書きとめなければ跡かたもなくなくなってしまふ、別の危うさから逃れたかったからである。心ときめく男の子たちの名前や、ほのかな思いなども綴ってあった。その日記を母が見た／＼がこのときも、怒る替りに沈黙した。母が怖いからではない。ここぞとばかり踏み込んで来るときの母

のえげつない言葉に、私自身が耐えられないのだ。

東京の大学に入って、一人の生活が始まった。ずい分手紙も書き、母も結構筆まめに応えてくれた。父は手紙を書かなかった。時間と距離とを置いてみると、私も母も互いに美しい思いやりを文字にしたためないではいられなかった。母も変ったのであるう、今度こそは母と寛やかな心で話をしたいと思った。しかし帰省してみると、半日もたたないうちに甘い期待は打ちくだかれた。ほのぼのと母に向かって開きはじめて心が、神経を逆なでするような母の一言二言で無惨にしぼんだ。もうまともな口などきいてやるものか、とそのたびに思った。そのくせ数日たつてまた母の心を迎え入れるような口をきいてしまふ。それが毎度いやな思いで報いられるから、今度は決意の持続しない不用意な自分に腹を立てるのである。

この軋轢は母と接するたびに繰り返された。

離れて暮らすようになってから十七年余り、基本的にこの関係は変わらなかった。そうは言っても二十代も半ばになると、薄々気がつきはじめていた。自分が父でもなく祖母でもなく母にこだわっているということを。いやなことではあるが母と自分がきわめて似ているということ。私は常にとめどない心の動揺に悩んでいた。自分で自分をもてあますこ

ういう不安定さは確かに母のものであった。

母はまた、実にしばしば口先だけで心にもないことを言った。自分では気がつかないので、傷つけられた人が反撃でもないかぎり母も傷つかず、どうでもよいことだったからたいていはすぐに忘れてしまいうようだ。あるとき私は、自分の言葉の意味をまるでわきまえずにものを言っている自分に気がついた。別れたくない男に、もう別れようかと言っている自分。矢も盾もたまらずに逢いたかったのに、逢うとそんな気になったのがウソみたいに感じられる男に、離れていられないなどとやっぱり言ってしまった自分。言葉は重量を失い、ふわふわと漂いはじめていた。自分と言葉との関係がわからなくなり、感情、直感、決意……の何一つが自分にさえ当てにならなかった。自分の存在そのものが疑わしい……。

私と母とが違っていたのは、私は言う端から言葉と自分との乖離を感じたことであろう。だから私は、自分の言葉にさえ深く傷つき、いや言葉と自分がついにバラバラになってしまった状態を認識し、なすすべもなく蹲ったのだ。日記を書くこともやめた。五年ないし七年を要して徐々に私の感情が脈うち、言葉が意味あるものとして戻って来るプロセスは本稿の主題を離れてしまう。その長い、心という密室での治癒過程に母は何のかかわりも持たなかったが、いま思えばこの暗いトンネルを潜ることなし

に母と出遇うことはできなかったであろう。

私が母を受容することができたのは三十五歳の夏であった。

父が交通事故に遇い、子どもたち三人——東京にいた私と末の弟、他県で勤め人となったすぐ下の弟——が呼び寄せられ、母とともに交替で徹夜の看護に当たった。幼児二人をかかえたすぐ下の弟の妻や妊娠七か月の末の弟の妻もかけつけて、気も動揺した祖母の面倒から家のなかいっさいまでを仕切ってくれ、看護体制の後背をガッチリ支えてくれた。

頭蓋に穴の開いた父は手負いの獅子のようにのたうちまわった。包帯を巻いた上からシーツを丸めて手足をがんじがらめにベッドにくくりつけても、ベッドごと軋むありったけの力で荒れ、一睡もしなかった。手術までの数日、頭部の動揺を避け点滴を続けるために二人がかりで力づくで父を押さえつけていなければならぬ。何としてもしのがねばならぬ眼前の事態を非情に直視しながら、自ずと私たちは寡黙になった。会うことも次第に稀れとなったこの十七年のうちに、二つ違い六つ違いの弟がいつの間にか育ち切って、三人の大人として対面していることを知って感に堪えなかった。

三日目に父はやつと短い睡りに落ちた。無駄に体力を損耗して荒れ止んだ父を見ると、いまさらのよ

うにその瘦身に胸を打たれた。黒々とした腕は筋ばってしなびていた。腕の太さに似合わない肩先の筋肉だけが、農夫であることを証明していたが、そこだけが白い乳下から腰にかけては、少女のように可憐な細さで肋が浮きでていた。禪からはみ出した小さなベニスには管がさしこまれ、父の意志にかわりもなく排泄が行われていた。クローラーもない病室に夜半食用蛙の低い呻きを聞きながら、生まれて始めて「骨肉」という言葉の溢れるような熱い思いを噛みしめたのだった。

父方の叔母たちが揃って見舞いに来て、看護のローテーションに加わろうと申し出てくれた。十分な睡眠がとれず疲れ切っていた私たちには有難い好意であった。が枕もとで叔母の一人と母が口論を始めてしまった。父の余りの瘦身にびっくりして叔母が「もう百姓は無理だっただに。あんな注意深い兄さんが事故に遇うたあ、身体が参っただよ。去年大病をしたときにやめやあよかったに、欲をかいてまあ、兄さんは誰に財産を遺さあてうだね。こんねに瘦せてしまつて……」と言いだした。既に父の衰えように十分衝撃を受けていた私たちは黙って聞いていたが、叔母のばやきは次第に母をなじり家を継がずに外へ出てしまった私たちをなじることに、矛先を転じて行つた。父はもう何年も前から私たちが家を出てそれぞれの仕事につくことを認め、世間に

対してもむしろ誇らし氣であつたことは疑えなかつたが、そのことの帰結として自分の身に無理を積んでいたのかもしれない。私たちは再起不能となるかもしれない父を扶養する覚悟をそれぞれ自分に問うて、あえて叔母に抗弁しなかつた。すると母が、「聞いとやあ、あんまりだあね。助かるだか、助からんだか、元通りになるかならんかわからんで心配しとおる私んたちの前で、言いたい放題を言うたあ……。あんたに言われんでも、お父ちゃんさえ助かつてくれやあ、まあ百姓はせん。漆田の田地をたたんでもあんたらあの世話にゃあならん。帰つとくれん。」

泣きべそ半分の母の抗議で座は白けきつた。私は母を撫でさすつてやりたいようなぞくぞくした気持ちに襲われた。後にも先にも母の態度が毅然としているのを見たのはそのとききりであつた。が、それで十分であつた。

手術の経過がまだわからないころ、いや手術の以前から、母は病院に来るたびに洋服をとりかえて来た。弁当を運んだり見舞客を連れて来たりでときには日に二、三回家との間を往復していたが、そのたびに違う洋服を着て現われるのである。立派なドレスなぞ一枚も持たず、私が着ているとすぐ手に通してみたがり似合うとこれいいネというのであげてしまったのだとか、何ということもない服ばかりであ

った。御丁寧に私があげたネックレスまで変えてくるほどで、末の弟はついに見かねて母に苦言を呈した。お腹の大きな妻の手前もあつたに違いない。そうだね、と私も口添えしたものの、いかにも母らしいと心の中ではほくそ笑んでいた。

それから数日して母は数十万円の大島を買った。ちびちびとつまらないものを思いつきで買う人だったから、確かにこれは一世一代の大散財であつた。その翌日にもう一枚、同じ値段の白大島を買って私にくれた。いまや全く私には母のことが理解できた。この支離滅裂な突拍子もなさこそ、母という人の身上であつた。父の遭難という予期せぬできごとによって惹き起こされた心のパニックを、こんな突拍子もないやり方でしのごうとしたのだと思われる。呆氣にとられている弟や弟嫁たちに、私は母の心的エネルギーを放ちやる独特な回路について説明し母を弁護していた。確かにその突拍子もなさは私のなかにも伝わっているものであつた。

幸いなことに父は回復した。二か月近くの入院、六か月余りの機能回復訓練により、いまでは左手指、右足指の一部機能を除いて、元通りに復することができた。父が一言百姓は続けると迷わずに言つてから、母は叔母の前で切った啖呵のことなど忘れたように二人で畑仕事を続けている。申し添えなければ

ならないのは、父の退院後母は風船がしぼむように氣力を失せ、ほぼ二年間家族以外のものとのつきあいを断つていたことである。病院の往復に上がりこんでおしゃべりに時を過ごした呉服店の氣のよいおかみさんのところにも近寄らず、あんな散財をしたことを悔やむふうさえあつた。着物好きの私は和解のしるしのような白大島に喜んで手を通し、予期していた母のこの反動期の症状を見守つた。

いま母は昔のように元氣になつて相かわらず憎らしいことを平気で言う。がそれで私がへたることもなくなつたから私なりの反応を返してやっている。いわば、世間並みにやつと日常的な葛藤のレベルに移行することができたのだといえよう。もっともこれは私の側からの三十数年の母とのつき合いを見た見方である。母の方は先日、

「あんたあ、お父さんに顔が似てきたねえ。そのいつくそうなとこなんかお父さんにそっくりだ」とあきれたようにまじまじと私を見つめたくらいだ。傍らでそれを聞いていた父はうれしそうに笑つた。母には全然私という人がわかつていないのである。がもはや私はそれを残念にも思はず、たしかにこのちぐはぐな夫婦の両因子を自分が受けついでいるのだなあと、母の言葉に耳を傾けていた。

ライバルにしてよき友人

高橋 ますみ

「母子心中もせんで、よう生きとるなあ。」

そう言った人に悪気があったわけではなく、ごく自然に、母と私へ向けて出たことばだと思う。そのとき私は中学生で母は入院中。母と私にとって「母子心中」は思いもつかなかったことで、そのときは、聞き流したのだけれど、貧困のなかで闘病中の状況を客観的にとらえた表現だったのだと思う。本当に苦しかったときは、一度も「母子心中」ということばは、私たち自らは出なかったのに、それから十数年後、母の長年の夢がかなって、国連ユネスコと国際有職婦人クラブ連盟の招聘を受けて、羽田を飛び立つとき、期せずして、どちらからともなく、「母子心中しなくてよかったネ」と言ってしまった。母にとっても、胸にためてあったことばだったのか、それからは、二人そろって、おいしいものにありついたりときなんかにも、「生きていてよかったネ」と抵抗なく言えるようになった。

どんな苦しいことも永遠には続かず、「時」は状

況を変えていく。時はたつことによって力になってくれる。私は幼いときからの成長の過程で、「時はたつもの」だということを実感として覚え、いまでも状況判断をするとき、時の力をかなり計算に入れるようになった。

終戦の直前、小学一年生で父を失ってから私が結婚するまで、母と二人だけの生活が続いた。三十四歳で夫を亡くした母は、立ち退きを迫られて、空き部屋を探すときも、職を求めて、履歴書を持って町の有力者に頼みに行くときも、いつも幼い私の手を引いていた。女が働かねばならないことは、女の不幸せを象徴するような時代であった。

もともと病弱ではありながらも専業主婦であった母だが、夫を亡くした年に、旧制女学校の国語教師に再就職した。その当時、名古屋市郊外の疎開地では、東京女高師（現お茶の水女子大学）の文科を卒業していることが、珍重されたようで、学歴社会のおかげで親子の命がつけなような気がしている。母の健康状態では、多くの戦争未亡人たちがやらざるをえなかったような行商や女工の仕事には、体力的に耐えられなかったのではあるまいか。

私は小学低学年から、小さな主婦になった。学校から帰ると八百屋さんへ出かけるのが日課で、ほう

れん草と油あげの入った煮込みうどんと、サンマの塩焼きばかりを毎晩作って母の帰りを待っていた。母は、四年間の教師生活の後、昭和二十四年試験を受けて新聞社の文化部の記者になった。今日ほどマスコミが高く評価されてはいなかったけれど、復員婦りの失業者が殺到しての行列で、その上、試験科目にあった英語には、十数年ぶりにお目にかかる始末だったとか。その日、母は、弁当に持っていたふかし芋を、新聞紙にくるんだまま、手もつけないで持ち帰ったことだけを鮮やかに覚えてる。

その後、十五年間の記者生活のうち、私の中学から高校時代にかけて、母は過労から、再起不能といわれるほどに健康をそこね、四年間の入院生活を送った。それは、私たちにとって過酷な試練ではあったが、私が母からも、世間からも、一番多くを学んだ時期である。

古事記のやおよろずの神々のおおらかさも方丈記の「ゆく河の流れはたえずして」から感じられる仏教的無常観も、旧約聖書の「神乎え神取り去り給う、神の名は誉むべきかな」といったヨブの信仰も、ありとあらゆる、古の賢者の知恵を総動員して、励まし合って生きていた。

保護するものとされる者というよりは、親しい戦友か同志のような関係だった。母は、いつも意識的に私をつき離して育てていた。先の命の保障がなか

っただけに、母にもしものことがあった場合、それが私にとって、決定的な打撃にならないようにとの配慮もあったのだと思う。それ以上に、一個の人間としての尊厳は個が確立してはじめて保たれると母は考えているようだった。母と娘は別個であって、相互の人生を混同させることはなく、いつも私との間には一線が引かれていた。命を守るためには、飢えたら盗んでも生きのびよと、西欧の宗教は教えていると、私に言いさかせもした。今ほどに社会福祉がなかった時代である。

私が病気のときには、母は決して仕事を休まなかった。自分の病気は、欠勤の理由にはなるけれど、「だから子持ち女は」とは言われたくないし、後に続く働く女たちの信用にかかわるからと私に説明し、私が盲腸の手術予定の朝も、「ひとりりで耐えるのですよ」と言い置いて出勤していった。働く女の市民権がまだあまりない時代でもあった。私は、腹痛にうめきながらも、母の立場を理解できたし彼女の姿勢を誇りにも思っていた。その後、私が就職し、労働運動にも参加するようになって、労働者の人間としての権利実現という側面から、母のがんばりを必ずしも肯定しようとは思わなくなった。ただそのときの母は、仕事に生きるといふよりは、仕事を続けることによって、暮らしをたててのに命がけだった

のである。

私が初産後、はじめて病院のベッドのうえでわが子をだこうとしたとき、母は、まだ人間らしくもない、赤ん坊を渡しながら「大丈夫かね？ この子に負けないようしっかり勉強なさいヨ」と私にささやいたのである。私は虚をつかれ茫然としてしまった。子どものころには、世の母親のように「勉強しなさい」とはついぞ言わなかった人である。母も、私が赤ん坊のときからライバルとして育てていたのだから。母自身、生涯学ぶ姿勢をくずしていない。

私が中学へ入ったとき、母も同じレベルから英語を独学しだした。外国のかん詰を切るとき、チヨコレットを食べるとき、母はよく辞書を引いてから封を切っていた。通訳もなく一人で各国を公式に旅行したり、英語で電話をかけたり、スピーチをやっている母が、実は、四十歳を過ぎてから、娘とともにABCからはじめたことを人は知らない。

母は、新聞社を定年退職したのち、文化センターに勤務したり、短大の講師をしたりしていたが、六十歳で再婚をした。「女が年を取ることに希望が持てるようになった」と母の友人たちは祝福してくれた。女盛りには、一度も美しいとは人に言われたことのない母であったが、このごろは、「あんなふう

に美しく年を取りたい」と若い人に言われたりしている。失われていく若さ以上のものを生きながら学び取っているからだろうか。

母は、誰よりも自分自身を大切にし、自分自身の精神的な自己完成に生涯をかけている人であり、私にとっていまは一番親しい友人でもある。

〈父子家庭〉に育つて

長谷川 知子

母が逝って、二十八年になる。九歳の兄と七歳の私と父を残して、母がその人生を終えたのは三十六歳のときである。始業式を二日後にひかえた四月六日、私は伯母に連れられて、家への道を急いでいた。もう一日、春休みを伯母の元で過ごすはずだったが、「ハハキトク」の電報が届いた。常磐線の小さな駅には、タクシーなどむろんなく、途中の部落まで乗り合い馬車が日に何回か行きかうだけだった。徒歩で小一時間の道程は、子連れにはいっそうきつく、途中一二度は休憩するのが習わしになっていたが、その日は、一度の小休止もなく、歩を進めた。山桜がふくらみ始めた田んぼ道の向こうで、私たち

を待ちうけているものが、ただならぬものだということを感じていたように思う。

「母の死」、それは私が人間の死と対面した最初なのだが、その悲しみを知ったのはずっとあとになってからのことである。当時、その地方では土葬が習わしだったようだが、母は火葬されるため、十キロほどの道のりを父の勤める学校の乗用車に乗せられて行った。棺に入り、車の後部座席のドアを開けたまま運ばれていく母をみて、「窮屈じゃないかな。落っこちないかしら」と考えたことを思い出す。

私を産んだあと、母は心臓弁膜症で体を蝕ばまれていったという。祖父の絞る山羊の乳で育った私は、その幼児期のはとんどを祖父母のもとで過ごした。

だから、私の記憶には父がいて母がいて、私たちの兄妹がいる（家庭Vの映像は、小学校入学をはさんだわずか二年ぐらいいしか残っていない。いまでも、幼い日を思い起こすと、私の前に表われるのは、祖父母が一番多く、母の姿はごくわずかしかでてこない。クリスチャンだった母は、なぜか夜空の星になっ

不在Vは何者にもとって代えられない、現実の悲しみだったようだ。

母の死の直後、父が結核で倒れ、入院。兄と二人、祖父母、叔父夫婦のもとで二年余り過ごす。小学校五年の秋、上京。それ以来父子三人で家事を分担（とはいっても、その大半は父に負っていたのだが）しての生活が始まり、（父子家庭Vで思春期を経た私である。いまにして思えば、私のなかにある（人性Vへの淡泊さ、あるいは（人女Vであることの意識の希薄さは、母という同性の存在が欠けていたことによるのかも知れない。だが、当時の私にはさほどの欠乏感はなかったように思う。好きな文学の世界にひたり、いかに生きるべきかを悩み、友人たちと議論するのに忙しかった。母がいない」という事実、子はそれを日々の生活のなかで受けとめていくしかない。母なし子は不憫だ」という世間の目、「さびしいでしょう」「えらいわね」という大人たちの同情の声を私は聞き流してきた。実際、母がいないということだけで、自分が不幸だとは思えなかった。子ども心にも誇れる父がいたし、祖父母や伯母・叔父たち、隣り近所の人々など、信頼できる関係が補償されていたと思う。また、母が生きていたころから、伯母のやっている養護施設で、戦災孤児たちやさまざまな理由で親と別れて生きている子どもたちと身近に接してきた体験は、私の意識形成に大きな

影響を与えてくれた。

父・母・子がワンセットの△家庭▽が公認された生活単位である日本の社会では△母子家庭▽も△父子家庭▽も、ときには△共働き家庭▽さえも欠損家庭とみなされている。また、結婚しない成人の男女（とくに女）も、子を持たない夫婦も、はみだし者とされる。そして、こうした環境で育った子には、非行を初め、種々の問題児が多いと言われてきた。しかし、人が生きていくうえで大切なものは、決して器の形ではない。どんな器でも、たとえ、欠けていようと、そこに入っているもののありようこそが問題なのだ。一般的に、両親ともに過ごすのが、子にとって望ましい環境に相違はない。だが、人間の生命には限りがある。そして、人間が個的存在である以上、だれにも代理はできないだろう。しかし、子は、いずれ一人立ちしていく者だ。幼い子にとっては、自分への愛情と関心は不可欠のものだろう。乳児期には、それこそ一〇〇パーセント他者の保護なしには生きられない。だが、たとえ愛情であれ、善意であれ、相手の意志や感情を無視した△一方的な関与△が、子の一人立ちを著しくはばんでいるのではないだろうか。

今日、大きな社会問題になっている△家庭内暴力△△親殺し△などのショッキングなできごとは、私たちに重大な警鐘を鳴らしているように思える。物質

的（経済的）な豊かさのなかで、△関係不在▽の家庭が拡大再生産されているのではないのか。にもかかわらず、保育園に通う子は△保育に欠ける子△とされ、△母原病△なる造語がマスコミにもてはやされ、子をますます母との狭い密室に閉じこめようとしている。私にあった△母のいないさみしさ△は、ある意味で、△母子一体論▽の社会通念によって助長されていたように思えるのだ。

四歳の娘にとっては、母である私の存在が何よりも重要らしい。だが、彼女が、私の生きざまを問いだす日も真近いだろう。子として体験できなかったが、母として、一人の新しい人格の成長のプロセスを体験したいと思う。それには、健康に留意し、自分の生命を大事にしたいと痛感している。

母の重み

君名地 知 子

あれは高校二年の夏であった。私は友人と三人で、そのうちの一人の家が一夏借り切った葉山の海の家に長逗留をしていた。海水浴もほどほどに、私たちは終日本を読みふけり、夜はいつまでも議論をした。

東京からは、三人の母親が時折り監視に現われて、二、三日滞在して行く。ある晩、私たちはいつものように夜の更けるのも忘れて、話に熱中していた。そのころ既に、両親との葛藤をいやと言うほど味わいつつあった私たちにとって、話題がいきおい家族や親に及ぶのは、自然の成行きであった。

「係果は少ないほどいい。成長してしまった子にうっては、親とは重荷でしかないんじゃないかしら」と私は言った。

しばらくして、襖の向こう側から母の嗚咽が聞こえて来た。話に熱がこもるうちに、私はその晩そこに私の母が寝ていることを失念してしまったのであった。忍び洩れて来る泣き声に声をかけることもせず、口を噤んだ。

私には、母がなぜあんなに激しく泣いたのかわかっていた。

母は、私生児として生まれ、生まれ落ちると同時に遠縁にあたる家に、実子として預けられた。子だくさんの家であったというから、望まれて貰われたのではない。おそらくは身内の恥を隠そうとする配慮から、経済的に多少余裕のあった家が養育を引き受けたに過ぎない事の成行きであったのだろう。母が小学校に上がるころ、ある家に後妻に入ったことによって安定した生活を得た実母は、母を手元に引きとった。先妻の子どもたちをはばかってか、籍は

そのまま、姓も違うままに同居することになったのだという。

母の哀しい生い立ちを知ったのは、私が小学生になってまだ間もないころであった。私の着着を縫う母の膝元に、当時から同居していた母方の祖母の姓とは違う母の旧姓が書きつけられた物差しを見つけた私は、不思議さを堪え切れずに、母に尋ねた。

母は、まだ幼い私を静かに見据え、そして淡々と自分の生い立ちを語った。そして、私の父も同じような境遇であること、それ故に理解し合って結婚したこと、そしてまた、私の祖母について、自分は多少の恨みを感じたこともあるが、やはり途中から手元に呼んで育ててくれたことを感謝していることなどを。

「なんと言っても、本当のお母さんだから」と、そのとき母は言った。

若くして自活した母は、働きながら勉強し看護婦となった。私の父と結婚すると決めた母は、苦勞して得た職を惜しげもなく捨てた。おそらく母にとって、家庭とは何かが何でも堅牢に築き上げねばならぬ城であったのだろう。そして我が子を慈しみはぐくむことを、何よりも大切に思っ来て来たに違いない。

その母が、私の冷酷な言葉を聞いて、悲しまぬはずはない。母を悲しませている自分に痛みはあったが、やはり私には私で、自分の発した言葉にあくまで拘泥する思いもあった。私が見た母と祖母の絆は、

母の態度がいかに寛大であらうとも、母にとってはやはり重荷であるように思えた。そして、思い入れも過多に私に向けられる母の愛も、母の担うものとは違う意味で、当時の私にはやはり重荷と感じられることが少なくなかったのである。

私が四歳のときから同居している祖母を、随分かまって貰ったにもかかわらず、私は嫌っていた。その感情は母の生い立ちを知らずと以前からのものだったと思う。それは幼児が本能的に老人を嫌うあの感情もあったかもしれないが、幼い者独特の鋭い嗅覚で、祖母のずるさのようなものを感じ取っていたのかもしれない。

つれあいに死別した祖母は、自ら希望してその身を寄せて来たという事情のせいか、あるいはまた、妻の母という弱い立場から来る父への遠慮のせいか、ひっそりと身を縮めているようで、我が儘一つ言うことはなかった。けれども私は、そうした姿勢のなかに、まるごと自分の身を託すような、老後の居場所を必死で確保しようというような態度を感じて、不愉快さを払拭できなかった。明治生まれの祖母にとって、それは当然のことであり、ありふれた日本の女の老後に過ぎなかったのかもしれない。私は、そうするより術のなかった祖母にもっといたわりを持つべきであったと、いまでは考える。けれど、若い日の私には、怠惰な生き方としか映らなかった。

だから、祖母に対する母のやさしさを、私はどうしても理解することが出来ないばかりか、歯痒い思いを感じていた。歯痒いと言っても、なにも祖母に冷たくして欲しかったのではない。ただ、母の内部で、さまざまなことが十分整理されていないように思えたし、人間の内部をどうしてもっと冷徹に透視しないのだろうかと訝る苛立ちであった。

「本当のお母さんだから」と母はたびたび言った。「本当のお母さん」であるということは、その人に対する批判眼を封じてしまうほどのものなのか。「本当のお母さん」という言葉の前に、自分の心理の裏や行為の裏側に付きまとうもろもろのものを直視せずに、ただひたすら親孝行と結びつけてしまう母の姿に、私はやり切れなさを感じていた。

父として同様であった。父のもとには月一回、几張面に実母から葉書きが届いた。送金の礼とともに、手元不如意をいつも訴えてよこす葉書の文末には、一際大きく、「母」と書かれていた。

土地一番と言われる富豪の家へ嫁いで、子をあらたに三人もうけたこの祖母は、夫の死後、その財産が長男の手に握られていて、小遣いが十分でないという理由だけで、月々の送金の他に、たびたび金の無心をして寄こした。遠い昔に自分を捨て、若い日に自分を拒んだ母が書いて寄こす一行のやさしい言葉に、父は抗し切れない様子であった。絶ちがた

い実母への想いと、やはり「本当のお母さん」への義務感であろうか。多少の成功をおさめた父は、自分がこうして母に尽くすことによって、心の平安を得ようとしたようである。

こうした両親の姿を見ながら育った私にとって、母というイメージは、甘美な陶酔や感謝といったものとは全く異質の、八子にとって母親とはいったい何だろうVという、考えれど尽きぬテーマにはかならなかった。このような眼で両親を観察し続ける娘に、両親は当惑し、不満であつたらしい。明るく素直な兄とくらべややもすると反抗的な私に、両親はよく、「こんなにかわいがっているのに、どうして」と言つて淋しがつた。実際、私は二人の愛で身動きできないほどに愛され、大切にされて来たと思う。ふり注がれる愛の中に、感謝を期待する両親の押しつけがましさが含まれていたとしても、それは仕方のないことだとは思ふ。反発はしつつも、両親の人生を考えればどれだけ恵まれているかと、普通より以上にそれを感謝せぬわけでもなかった。けれど、素直に、単純にはいかない。行為の後にべっとり貼り付いたさまざまな心理を、同時に見てしまう眼が私には身についてしまつていたから。

聡明な母は、あの夏の日以来、私がもはや母と子の蜜月を終えて、容赦ない批評者の眼で自分を射る

存在となつたことを悟つたようであつた。それから母に大きな変化はなく、私の前に立ちふさがつて自己主張をすることもなかった。

しかし、私はそんな母をとくとき痛めつけた。自分の将来を語るときなど、意図するわけではないけれど、必ず母の生き方をまっこうから否定する形となつてしまつたものだ。祖母の人生の蹉跌は、一人で人生を切り拓けなかつたことにあり、それを目のあたりにして来たはずの母が、何故に職を捨て、家を守り抜き子を育てることに邁進する道を選んだのか、我がことのように口惜しく、私は母を問詰めた。

いまにして思えば、母の苦衷をもつと察すべきであつたが、人の心は読めても、慮るやさしさのない青春であつた。

私が見る限り、両親にとつて両方の祖母はどんなに心のふるさとであらうと、事実上は重荷であつた。

母方の祖母は、それから数年して足の怪我がもとで寝付き、一昨年の秋、十五年間寝た切りの生活に終止符を打つた。臨終の床で、祖母は私の手を把み、喉の奥から声をふりしほるようにして

「あたしは、お母さんを、手離さなかつたから……」と言つた。

自分になつてくことのなかつた孫への抗議であつたのだらうか、それともまた、我が子に看取られなが

ら死を迎えることができた満足であったのであろうか。

いま、私には六歳になる娘がいる。母が私たち兄妹と与えようとした愛と、私がこの子に感じる愛は同じなのだろうか、とふと思う。

仕事に追われ、淋しい思いをさせることも多い。年齢よりも無理して大人っぽく振まうこともある娘ではあるが、この子は私をどう見ているのだろうか、とつねに考える。私には、母のように家庭を何よりも大切にしようと思う心がけは無い。子供への愛と同時に、自分を生かしたいとも強く思う。無私にはなれない私である。

望むわけではないが、将来、家庭をこわさぬとも限らない。そんなとき、娘は、かつて私が母をなじったのとは反対の言葉で、私を問詰めるのかもしれない。

母、仕事と一人立ち の出発点

美 森 成 生

あるとき、私が外出から帰って家に入ろうとすると、ちょうど父がどなっているところでした。

「そんなに××（私の名）がかわいいんなら ××を連れ出て行け！」

もちろん、母に対して言っているのですが、だいたい、怒り心頭に発すると「出て行け！」と言うのが父のくせでしたから、私はへまた、やっとなるわい！と思って、わけを聞くと、

「○○（兄の名）も××も、同じ子どもなんですけん、××にも、もう少し金を（学資の意味だったらしい）かけてやってください」

と、何かの拍子に母が言ったことが原因らしいのです。私は何と言ってその場を納めたのか、もう覚えていませんが、何ともバツが悪かったのを覚えています。

私が十九歳のときで（現在——一九七九年——母は八十七歳私は五十一歳ですからいまから三十二年ほども前のことです）、当時、金なんかクソくらえ、と思っていたころでしたのでへおふくろも、つまらんことを言うてくれたVと言う気持ちと、それでも、そんなに悪い気はしなかった（なにしろ、まだまだ妻が夫に向かって、そんなことをやすやすと言える体制ではなかったので）ことがないまぜになって、バツが悪かったのだと思います。

私は十九歳から二十歳になるころ、生活も経済も両親と別れたので、その後、このようなことは起こらなかったと思いますが、一面それだからかもしれない。

ません、母親と私の親子関係を考えると、このとき、一番最初に思い出されますし、その関係を象徴的に表わしているように思えるのです。

子どもの少ない現代の親と違って、子どもさんの平凡な昔の親にしてみれば、たくさんの子どものなかには別に差別という強い意味合いでなしに、子どもたちに対する等しなみの愛、そのうえにプラスアルファ分として、お気に入り、お気に入りでない子どもが、父には父の、母には母の、という具合にそれぞれできるのは、自然の人間感情であったと思います。

体力、資質ともにすぐれた兄にくらべて、私は十人きょうだいの下から二番目で、たいしてすぐれた資質も持たず、そのうえ、きょうだいじゅうで一番の病弱とくれば、母にとっては、とにかくにもかばってやらねばならぬ存在だったのでしょう。

この病弱であったことが母と私とのありようを他のきょうだいと違ったものにしたのだと思います。

母から、よく昔話を聞いたのを思い出します。(この場合の昔話とは、いまで言う民話・伝説、それに母の娘時代に実際に経験した話などを、ひとまとめにして母が語った、昔話と言う意味で使っているのですが)とにかく一八九二年(明治二十五年)生まれの母としては、語るとすれば昔話しかなかったわけで、私の病気のときはもちろん枕もとで、その他

のときは、ちょいちょいと仕事の合間に、あるいはちょっとした外出で、母と行動をともしたとき、長い話とか断片とか、その折々に母はよく私に(いま思い出しても、なぜあんなに語ったのか判らないくらい多く)語りました。

これが、十九歳ごろまで(昔話について言えば)続いたのですから、他のきょうだいにくらべ私が一番、母とは情緒的に近くいたと思います。もちろん、中学生のころから以後は、母の娘時代の話が主でした。それがノートに取ってあれば、ゆうに「明治三十年代女聞き書」の本が書けるくらいの分量だったと思うのですが、いまは覚えていても断片的で、ただ強く心に残っているのは八女に生まれなくてよかったVと感じたことです。母は、そう言うものだったと肯定的に語ったのですが、私は八女に生まれていたら、不当に損ばかりしていただろう。男に生まれてよかったVとつくづく思ったのを覚えています。そのくせ、家庭での差別——私(男)から見れば逆差別(?)の好遇——を当然のことのように甘受していたのです。

しかし、ベタベタと甘やかされていたわけではありません。子どもを甘やかすほど、経済的にゆとりなどなかったのですから、私には私の家事手伝いが、病気のとき以外はあったわけで、風呂焚きと、かまどの火の番、時には魚を焼く事が私の仕事でした。

母が忙しい折には、野菜などを切り刻んで、あとは母が調理すればよし、というところまでやらされるときもありましたから、これは後に十年位続いた自炊生活に役立ちました。

役に立つと言えば、母から昔話を多く聞いたことは、現在たずさわっている、民話の再話の仕事を進めて行くうえで、大変役に立っていると思うのですが、それが、どのような影響を私に与え、どのように役立っているのかは、それにとつぷりつかっている現在、はっきりとはわかりません。

ただひとつ、おぼろげながら感ずることは、仕事の出発点に母がいるように思えることです。それは母の語りさま——むかし話があるがままに語るのではなく、自分に引きつけた所で語っていること、これはむかし話に対する母の無意識の解釈に通ずると思うのですが、——にあるように思います。

出発点と言えば、もう一つの事が思い出されます。

私は父と不仲になった一時期がありました。いまだから考えれば簡単なことで、私の反抗期に対する処置を、父が誤ったからに過ぎず、これも仕方のないことで、父は幼少の折に両親と死別したので、親に反抗したことがなく、私の兄のその時期には兄は寮生活（旧制高校の）に入っていたので、私の反抗に父としては初めて会ったわけで、子の親に対する反抗に余裕を持って対処することができなかったの

しょう。その結果、たまに意見の衝突があつて親子げんかが行なわれる、といったような生やさしいものでなく、完全な不和の状態が長く続きました。

その間にあつて、母はずいぶん苦しんだのではないかと思います。あげくの果てに私に言うことには（つくづく述懐するように）。

「あんたをお腹に持つとる折に、満足に食べる物が無うて、それで体の弱い子ができたんじゃないかと思つて、それに、父さんのことをうらみがましゅうに思つたこともあるんで、それがあんたにうつつてしもて、父さんとの仲が良ういかなのじゃなかと、あんたには、二重にすまんと思とる」

こう言われると、八このクソ親父の、ワカラランチがVという私の祖先も鈍るのです。鈍つても矛の納めようがないので、あるとき、もう見かねたのが母が言いました。

「どうしても父さんと合はんようなら、あんたも昔流に言えば元服も過ぎとるんじゃないから、一人でやつていったらどうぞね。父さんがどないに無理なことを言ういうたて、母さんは別れるわけにはいかなが、あんたは、いずれば別れて一人でやつて行かにゃいけんんじゃないけん。昔から男には裸一貫で立派にやつていった人はようけおる。あんたにできん筈がない」これを聞いて、私は母親に捨てられたような気が、そのときは、しました。

「ただ、別れるにしても、いまのままで別れたらいけんよ。けんか別れは一生後悔が残るけんね。無理なこと言ういうたて、父さんも親よ、世の中へ出たら、もっと無理なことを言う人がおる。そのたびにいちけんかしょつたら世間は渡って行けんぞね。無理なこと言うがの思つても、こらえとらにゃならん折がある。そのつもりで、あんたも父さんとは他人になつたつもりで、無理な、と思つてもこらえておみ。いまのままじゃ、母さんは二人の間にはそまつて、つろうてならんがね」

この言葉が、素直に聞けたのは、母を気の毒に思う心と、母の日ごろの行動が、この言葉と矛盾していなかつたからだと思います。そして、親きょうだいとは一べん他人になつて、それから親きょうだいの関係を見直しながら、私がひとり立ちして行く出発点に、この言葉がなつたと思います。

いま、きょうだいは、それぞれに年老いて、老母をいたわるといふ、幼いころ母親からいたわられた関係と、ちやうど逆転したような関係にあるように見えるのですが、私には、この年になつても、まだそのような精神的な関係ができ上がつてないように思えます。

だから、子にとって母とは、と問われて、私にとって母とは、とあらためて考え直して見ると、母は私の出発点であり、かつて私が出発したときのまま、

私の後姿を見つめている、近いと言うか、生など言うか、そんな存在にある気がします。

それと言うのも、私が二十一歳になるころ別れた後に、

「××（私の名）がしょんぼりしとる夢を見たが、にっちもさっちも、いかなのじゃないかしらん」とか、

「××が嬉しそうな顔をしとる夢を見た。うまいこといっとるらしい」

と、たびたびもらしていたと、妹から聞いたことを思い出すたびに、その時が奇妙に符合していて、当時、薄気味悪く思ったことを、忘れられないからかもしれません。

炎の中に

斎藤 千代

バラソルを、すんと立てて、おどるように前を歩いていた母は、ふつと立ちどまるとバラソルをすばめた。くるくると巻くなり右肩にあてた。拍子をとって歩きだした。

よろこんでいる。からだじゅうでよろこんでいる。

いとしい娘が帰ってきた。一年半も会えなかった娘が帰ってきた。海の方から帰ってきた。

そのよるこびで拍子をと、槍のようにバラソルかついで、ララララ、ランラン歩いている。

そうとわかつていながら恥づかしさいっぱい、娘はたもとにむしゃぶりつく。「やめて！ やめて！」

「いいじゃない、うれしんだから」

ララララと、なおも歩き続けて、ふいに振り返る。

「あたしが死んだら、しめつばいことは好かんよ。レコードかけて。そう、行進曲がいいねえ」

何を言うのか、と、娘の腹の中は煮えたぎる。また「死」だ。物ごころついて、初めて知った父の年は六十、母は五十、まわりの大人たちの年齢を、ともにはるかに越えていて、言われなくてもどんなにおびやかされてきたことか。夜半、隣室の寝息が聞こえなくなると、たまらず起き出し、そつと鼻に手をあてて息をたしかめていた、幼い娘のことなど、あなたは皆目ご存じないのに！

その一方で、十八歳の娘はまた思うのだ。いつか母が死ぬ日、この光景を思い出すにちがいないと。

「己れの欲するところに従いて行矩おこなうをこえず」という人間の理想像の一つを現し身で具現したかのような父に対して、母は「己れの欲する所に従いて行矩をこえる」ことのある人である。

矩をこえるごとに娘は傷つき、悲しみ、憤った。どんなに母を愛したいことか。その愛をなぜあなたは自ら放棄するのか。——それは、ひりつくほど乾き、水を求めながら、しかも手もとに水がありながら、その水を飲めない、飲まない、苦しさにも似ていた。なぜあなたはもつと自制しないの。歯に衣着せずものを言うの……。ハラハラしつゝ母を見つめる目は年ごとに陰しくなっていく。

その憤りは、母に向けられるとともに、自らの内なる母へと向かう。自己否定・自己嫌悪は年々深くなっていた。

舞楽や仕舞いに興じ、謡い、大鼓おほづを打ち、笙・箏びんを奏する父は、雅の人である。花を分け、茶を立てても、母の遠く及ぶところではない。

母は野の人に徹する。

悪童の溜まり場となった我が庭の樹から樹へ、ハンモックを吊るす。こおろぎを採るといえば、たちまち十数本の一升びんに水を満たし、日蝕があると聞けば、乾板に墨を塗って子らとともに空を仰ぐ。子どもたちの保母であるというよりは、餓鬼大将の一人に似ている。

あふれてやまぬエネルギーは、裏庭に花を育て、野菜畑を耕やす。一羽飼いだめた鳥は、たちまち数十羽にふくれあがる。卵をかえす楽しみにとりつか

れるのである。かえりきらない卵は、自らの肌を保温器とする。襟もとからビヨビヨとひなが鳴くとき、得意は最高頂となる。

幼い娘は母の風圧に圧倒され、風の吹かぬ無風地帯に隠れ棲む。蔵書室の奥は格好の隠れがである。蟻が餌を運ぶようにくわえこんだ本の山の中で、娘は自らの世界に埋没する。

女性解放を志す女は、多く、己れの母の屈従の生涯に端を発するとか。自己形成の軸は、「母のようにあわれな生涯は送るまい」と思うことであるという。

「母のような生き方はすまい」を軸にしたのは同じであったが、その相対する母の生き方は同時代人とはちがっていた。

母は果敢な女権論者だった。

女は、なぜ大学に入れないの、なぜ職業が限られているの、なぜ女は……、なぜ……。

母は語り続ける。その無念をはらす記事の一つでも見つけると相好をくずす。「とうとう女の理学博士が生まれて！」

その博士が母と同窓であることも母を鼓舞する。

「さあ、文学博士も生まれなくちゃ！」

娘には、それが立身出世主義と映る。

十数年の教職の経験を、「女は校長にも教頭にも

なれないんだからね。男でありさえすれば、どんなに無能でも上に行くのに」と嘆息するとき、娘は心のなかで白い目をむく。△誰が上に立ったつていいじゃありませんか△△あなたはなぜそんなに自分の学歴にこだわるんです。人間の価値とは何のかかわりもないのに▽

声高な母の女権論は、「女は声高にも言わぬもの」と、見えないおきてが張りめぐらされた△世間△のなかで撓ね返る。至るところで耳にする父への讃辞に対し、母に向かう毀誉褒貶の激しさは娘を当惑させる。

△お願いだから、人目につくようなことはしないで……。静かに耐えて！▽

屈折して娘に撓ね返る石の痛みを娘は全身で受けとめ、その痛みを決して母には告げない。そのかわり、心の底で母がゆるせない。

「親というのは、大きな木のようなものだ」と、父は言う。「子どもたちは鳥だ。翔び立ってこそ鳥なのだ。ああ、どこへでも翔び立つがいい。木はますます根を張り、枝をさしのべよう。疲れたら、傷ついたら、いつでも帰っておいで」

ひなの尻から卵の殻が落ちるのを、ぬれた羽が少しづつ乾くのを、父は遠い目で静かに見まもり続ける。

母は語らない。語る代わりに実行する。「親は子に餌を与えるものよ」——ひなの口もとに餌をまき、殻をむしりととりたがり、ぬれた羽をなめようとする。鳥は地面を蹴立て、まかれた餌を無情にも投げ返す。女は、なぜ母性なぞを持っているのだ！

すこしずつ、何かが見えてきたのは、ずっとあとのことだ。

父は、△男▽だからこそ大樹に徹することができたのだと。△男▽はだまって立っていさえすれば△世間▽が評価する。もしも、母という△女▽が樹に徹したなら、△世間▽は決してゆるすまい。……ほれ落ち葉があんなに積もって……。まア、ひなの羽も乾かないのに……。

父は、△男▽だから、静かにおだやかにすごせたのだ。黙していても、前途は坦々と、そして洋々としている。除かけなければならぬ障害はない。

具体的にひとつひとつ母の憤りが、わかってきた。不合理だからこそ、理不尽だからこそ叫んでいたことも。そしてそれが、どんな孤立無援のたたかいだったかも。母は自分の学歴にこだわっていたわけではない。△女の最高学府△と、当時言われたところを出てさえも△世間▽が正当に遇さない、その不正を憤っていたのだと。

母のあふれるエネルギーを受けとめる生涯の仕事

を持続できれば、あれほどエネルギーを拡散させただろうか。ひとときは育児を天職と思い定めて去った職場に、未練はなかっただろうか。

母を駆り立ててやまなかったものが見えてくるにつれ、母を見る目は少しずつ変化して来た。

とはいえ、もうひとつ胸に落ちぬものがある。壁をへだてて母をまさぐるような、このいら立ちは何だろう。

母の像を、思いきって白日にさらしてみる。その像に重なって、実像をはるかに超えた△理想像▽が二重映しにみえてきた。

「こうあってほしい」と思う△理想像▽と△実像▽の落差に苦しんでいたのだとハッと気がつく。では、その△理想像▽を構築したものは何か。陽光のなかに△理想像▽をひっぱり出し、光にすかしてとつおいつながめると、くろくろと何かが浮かぶ。△世間▽だ！ △世間▽の求める理想像に母を近づけようとして、どんなに苦しんでいたことか……。

からくりが、やっと心に落ちたとき、△男▽である父は、母よりもずっと自然に、らくらくと△矩▽の内側にいることも見えてきた。△男▽に要求される△矩▽は人間としての本質の範囲内にある。それにくらべ、母にはなんと多くの過酷な△矩▽が要求されていたことか。……女は何と言われようと言

返すな。女は大口あけて笑うな。女は耐えよ、忍べ。父に求められている△矩▽を母にもあてはめてみると、長い間、信じ込み、思い込んでいたほどには父母の間に落差がないことがわかってくる。母の短所と思い定めていたことも、△男▽なら長所ともなり得たのに……。

光に透かして、見えなかった母が見えてきたとき、目の棘は、やっとハバリと落ちた。そのとき、母を刺すと同時に自らも刺し続けてきた棘の呪縛から、ようやく自由になる自分を感じた。

母を愛したい、愛したい、と切望しつつ、どこかで母を愛しきれない自分に自ら憤り、しかもその憤りを母へは向けず、ひととおりの親子としてやさしくつきあっている自分をゆるせない、自罰、自己嫌悪から、やっと解き放たれる魂を感じた。

どんなに至らないところがあるにしても、母は母なりに、精一杯生きてるではないか。ダメ人間ならダメでもいい。ダメはダメなりに受けとめていこう。——その想いは、私をやさしく包んだ。それは、私自身の「ダメ性」をも受け容れ、受けとめることでもあったから。

心がやわらかになり、ひろがり、のびのびと軽くなるのを感じた。

母と話したかった。

生まれてはじめてほんとうの会話がしたい。

たもとにむしゃぶりつくのではなく、魂にむしゃぶりつきたい。そして思いきり泣き、心のなかをからっぽにし、今度こそ、心から母を支えたい。

が、そのとき、母の老いはすでにすすんでいた。娘の声は耳に届いても心に達するだろうか。むしゃぶりつくのには重さを失った魂を思うと、足が重かった。

きょうこそ、と思いつつ、日が流れた。ほんとうにきょうこそは、と、早朝から目覚めたその朝、母の計報が届いた。

つかのまの昼寝のように、母は小さく、やすらかに眠っていた。一九七六年七月、家人さえも気づかぬうちの、九十三歳の天寿であった。

ごうごうと油は音立て、炎は真紅に迫る。いま、その火のなかに送り込まれようとするひつぎに声をかけた。「いつてらっしゃい」

どんなに激しい火勢であれ、どんなに熱い炎であれ、母なら笑って飛び込むだろう。怒りたいときは怒り、笑いたいときは笑い、風に真向かってまっすぐに歩いた、あの母なら、火もまた涼しと感じるだろう。「行つて！ この世から翔び立つ変身の儀式を受け取めて！」

火口にすべりこむひつぎに、母の笑顔が浮かんだ。私は行進曲を口ずさんだ。

母から子に語り伝える民話集

不思議な釣鐘

お領内の寺々から集められた釣鐘が、城の片すみに、一時の間、野積みにされとったそうだが、夜になると、延命寺の鐘が、ひとり

で、かアんえりたやのーン、オンオンオンで、鳴りだすそう。最初の鐘は、海に沈んでしても、これは、そのあと、新しくこさえた鐘じゃのに、おんなしように、かアんえりたやのーン、オンオンオンで、夜になると、ひとりでに鳴るんじやとい。



日本図書館協会

選定図書

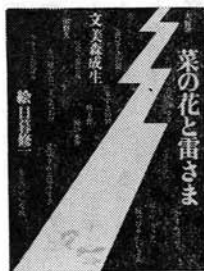
美森成生・文

藤川秀之・絵

B5変型上製

1800円

菜の花と雷さま



やがで春になって、南の方から菜の花が咲きだして、ほこ谷まで、黄色に連なつたんや。娘が播きもて行つたんが、咲いたんよのう。

それが春の風に波うつとる。南から、黄色の道がでたような。その道をたどつて、娘は戻つて来たんよ。

美森成生・文

日暮修一・絵

B5変型上製

1800円

日本図書館協会選定図書
全国学校図書館協議会選定図書

菜の花と雷さま

BOC 出版部

〒160 東京都新宿区新宿1-9-6
電話 354-3941(代) 振替 東京3-39331

おかげさまで、 どうもおもう？

子どもをとりまく環境の悪化をめぐってケンケンガクガク、大人たちの議論はあつと断たない。なかには手っとり早く母子関係に原因を求め、鬼の首でもとつたような勇ましい議論もあります。少々陳腐な印象を覚えます。そんな世のすう勢のなかで、母親がしつかり自立し、自分の判断で子どもに接しなければならぬのはもちろんですが、さて子どものほうは母親をどう見ているのか。

対象は五歳から十三歳までの子ども。冷静にさまざまな角度から自分にとっての母親の位置を考えるには至らない年齢です。子どものたくましさ、しなやかさ、そして時には怖さをも覚悟して、各地のへあごらへんが試みたインタビュー。原則として自分の子どもはしていません。

Q 1 あなたいくつ？ 何年生？

Q 2 お母さんと仲良し？（高学年には）よく話をする？

Q 3 どんなお母さんが好き？

Q 4 あなたのお母さんはそう？

Q 5 これはやめてほしいとか。

Q 6 あなたのお母さんお仕事してるのかしら？ お家にいる？

Q 7 お仕事続けてほしい？

Q 8 お母さんに叱られたことは？

Q 9 お母さんに叱られたの？

Q 10 お母さんの言葉で好きな言葉ある？

Q 11 きらいな言葉は？

Q 12 大人になったらお母さんに何してあげたい？

Q 9 （女の子に）どんなお母さんに
なりたい？

*

研吾くん 五歳・男（東京）

お母さんと仲良しだよ。本を読んだりして、よく遊ぶよ。

よそのお母さんのことはわからない。ボクのお母さんはぜーんぶ好き。きらいなことはない。（なおもしつこく聞く）

さっきぜんぶ好きと言ったろう？

お母さんは仕事してる。お仕事知ってる。本を作る仕事だよ。

お母さんにねえ、もっともつと遊んでほしい。たかすけ（弟）をいじめるなつて、よく叱られる。（Q 7に）わからない。

大きくなったら絵を書いてあげたい。



ごはん作ってあげたい。だってボク、お料理つくるの好きだもの。

(母三十歳。編集者。一歳下の弟と四人家族。父は画家。)

*

もりえちゃん 六歳・女(東京)

お母さんの好きなところは、やさしいところ。私がもう少し保育園で遊んでいたいのに、早く帰りましょ、と言っておくるのはいや。よくお母さんは、「会社に遅れちゃう」って言っている。

お母さんがお仕事しているのはいや。だって保育園はお昼寝があるからいいやなの。

今のお母さんが好き。

大きくなったらお仕事をてつだいたい。

(母三十七歳。会社員。)

*

克人君 六歳・男(京都)

お母さんと仲良しと思う。本読んでくれたりするから。絵本の話とかするよ。お母さんは、やさしいお母さんだから好き。きれいなところはね、すぐおこるところ。すぐたたくところ。

お母さんは家にいる。お母さんにね、朝早く起きてほしい、ボクより遅い時があるから。それから、飲むもの作ってほしいな。お母さんに叱られたことは何回もある。弟を泣かしたときとか、おもちゃ片づけへんかったとき。

お母さんの好きな言葉なんてわからへん。きれいな言葉は、「片づけなさい」「テレビばかり見たらあかん」。

大きくなったら、働いてお母さんにお金いっぱいあげんの。

(母親二十八歳。専業主婦。両親、弟の四人家族。)

*

恵美子ちゃん 六歳・小一・女(青森)

(Q2に) ウン……にやなくハイ、ハイ。お母さんと、よく話をするよ、ガッコ(学校)の話。

ママはいじわるするシテ。(から) きれい。ぶたぐ(ぶつ)し。それからうーんとなあ(よく考えてから)、風呂で屁たれるからきらい(とゲラゲラ笑う)。

(Q4に) ない(喜々として)。 (今のままでいいの? と問うと) うん。

ママの仕事知ってるよ。家でご飯作っ

たり、畑仕事をしたり、それからなあ、ニンニクを取ったり、ミョウガを取るんでえ。ホタテ（養殖）もやってるし。（そういうお仕事をこれからもやってほしい？ の問いに「うん／＼」と力強くうなづく。）

恵子（妹）を泣かせるなってよくおられる。（Q7に）ない（と首をかしげる。思い浮かばないという感じ）。

大人になったら、お金を取ってあげたい、アハハア……（とけたたましく笑って、テレクサそうだった）。

（Q9に、うーんとなあ、やさしいお母さんになりたい。（けんかしてもおこらないお母さん？ と聞くと）いや。

（母親三十歳。両親とも農業。四歳の妹と祖父の七人家族。）

*

てっちゃん 七歳・小一・男（名古屋）

仲良しだよ。学校のこととかいろんなこととお話するよ。やめてほしいことはすぐにカッカときておこること。目がきらりて口裂け女になっちゃう。でも全然おこらないのはいやだね。ママは毎日お出掛けするけど何しているの知っ

てるよ。毎日ちゃんと言ってから出るから。朝ごはんのとき皆の一日のやることをゼットい言うから、今日はだれがどこへ行く日か家じゅう知ってるもん。僕は遊ぶの大好きだからママが毎日仕事とか行くほうがいい。そのほうが叱られるのが少なく済むから。でも友達とけんかしたりしたとき、作戦教えてくれたりするからいるほうがいいときもあるよ。ママが年寄りになったり病気のときは大事にしてあげる、きつとね。

（母三十四歳。パートの仕事とグループ活動をしている。父親は会社員。子ども二人）

*

実くん 七歳・小二・男（京都）

仲良しかどうかはまあまあなあ。学校のこととか、夏休みだったら、宿題や工作のこと話す。今のお母さんでいいよ。きらいなところは、おこられたりようするところかな。やめて欲しいところはないよ。

うちのなかでミシンの仕事してる。してもいい、お金たまるし。けど気をつけないとあかん、体しんどくなるから。

きらいなところはとくにない。叱られたことはある。悪いことをしたときとか、失敗したのを話さないでそのままにしておいたりしたとき。

好きな言葉はね、悪いことをしたときに「これからしたらあかんでえ。」って言うの。きらいな言葉は、わかんない。大人になったら（内職の）お手伝いしてあげたい。

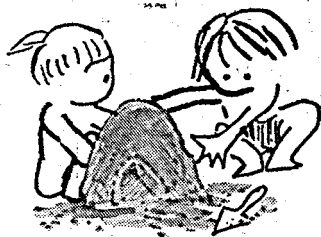
（母、うちのなかでミシンを踏んでいる。弟と四人家族。）

*

じゅんちゃん 八歳・小二・女（鹿児島）

洋服やバッグをいっぱい作ってくれて優しいときは好きだけど、ケン（弟）とけんかすると、いつもおねえちゃんのくせにと私ばかり叱るからきらい。ケンはまだ小さいから……でもケンだって悪いんだよ。旅館にお客さんが増えて忙しくなるとすぐにおばあちゃん（実家）のうちへ私たちを連れていって、今度はおばあちゃんが忙しそうになるんだよ。

おかあさんは、もつときれいにお化粧するとカッコイイのね。それにね、男の人みたいにいばって歩くのをやめてほ



しい。友だちに言われてはすかしかったもの。

(母三十三歳。夫の家が旅館業でシ
ズン中のみ手伝う。父親は公務員、弟
と四人家族。)

*

マリコちゃん 八歳・小二・女

(名古屋)

ママと仲良しかなあ? 学校のことや
友達のことよく話すけど……。よく遊
んでくれるお母さんが好きだなあ。うち
のお母さんとにらめっこするといつも負
けてばかりいる。だってお母さんおもし
ろい顔をして笑わせるんだもの。

お父さんとよくけんかするのが気に入
らない。すごいけんかでハラハラしちゃ
う。わたし泣きそうになっちゃう。

お母さんはわたしが幼稚園の時から会
社で原稿書くお仕事しているの。頭が良
くなるしお金がもうかるから働いてほし
いと思う。だけどお家にいたときは洋服
や人形つくってくれたけど、今は忙しい
といって何にもつくってくれないので寂
しい。大きくなったら私も働いて、いろ
んなものを買ってあげたいなあ。

(母三十九歳。雑誌編集者。父親は会
社員。子ども二人。)

*

博美ちゃん 九歳・小三・女(茨城)

ママと、けんかするときもあるけど仲
良し。よく話するよ、学校でどんな勉強
したかとかね。

やさしいお母さんが好き。ママはそう。
おこるときもあるけど。ママのきらいな
ところは別にないけど、すぐおこるのを
やめてほしい。ママの仕事は掃除とか洗
濯とかかなあ。夜遅くまで遊びに行っ
たりすると叱られる。「おりこうだね」っ
て言ってくれるのは好き。「遊んではか
りいて勉強しなさい」はきらいな言葉。
(Q8に) わかんない。(Q9に) わか
んないけど、やさしいお母さんかなあ。
(母三十七歳。専業主婦、父公務員、
五人家族で一人っ子。)

*

あかねちゃん 九歳・小三・女(埼玉)

(Q2には考えこんだ末) わからない。
やさしいお母さんが好き。家のお母さん
は、(真剣に考えこんで) わからない、
……まあやさしい、かな。きらいなこと

はすぐおこる、さやか(妹)とけんかをする。とつくみあいのけんかをするから。学校から帰ったら一時間勉強をするけど、マンガなんか見えていけないことがあると、後で帳面を調べておこる。

もう少し早く帰って来てほしい。(母親は六時か六時半に帰宅するというので質問を続けてみる)私は早いときは三時ごろ、遅いときは五時ごろ帰ってくるの。帰ったら自分で勉強するの。家にはおばあちゃんがいて、時々おつかいに行っている。おつかいがイヤなわけじゃないけど、お母さんにいてほしい。お父さんは早いときは八時、遅いときには十時ぐらい。(お父さんが早く帰ればそれでもいいの?)……やっぱりお母さん。

お母さんのお仕事は知らない。できればやめてほしい。(お母さんがお仕事を続けたいって言ったら?)お母さんがしたければしてもいい。

お母さんの口グセは、おばあちゃんのお仕事を手伝いなさい、っていうこと。お洗たくもおばあちゃん、お掃除も。私がお洗たくものを出しっぱなしにしているとよく叱られる。

どんなお母さんになるか、考えたことない。おとなになったら、お母さんと一緒にくらしてあげたい、お母さんがいいだと言わなければ。

(母三十?歳。共働きの公務員。子ども二人。同居しているのは実母。)

*

マキコちゃん 九歳小三・女(東京)

お母さんのネ、えこひいきしないところが好き。思ったことをきちんと言うところも好き。きらいなところは(ちょっと考えていたが)、ない。お仕事は続けてほしい。叱られるのは、するって言ったことをしなかったときとか……。お母さんいつも同じことは言わないの。もっと他の質問はないの?

大人になったら学者になって、お母さんに輪とらない薬作って飲ませてあげる。お母さんは今くらいで、私は二十歳

くらいがいい。私とお母さんにはあまりなりたくない。漫画家になりたい。(お母さんにもなってみたらどうときくと)そうね、お母さん孫がほしいって言うから。

(母四十二歳。出産後別居。子どもは一人。フルタイムではないが、会社で

事務をとる。)

*

真弓ちゃん 九歳小三・女(京都)

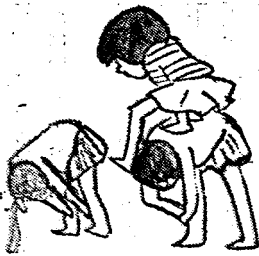
お母さんとはよく話をするほうだと思う。学校のこと、友達のこと、夕飯を食べながら何でも話す。お母さんが好きだから、お母さんのようになりたい。どんなところが好きかと言うと、ケーキを焼いてくれたりするようなところがとくに好き。きらいなのは厳しく叱るところ。でも、厳しく叱られても、すっきりして、お母さんをもっと好きだと思える。毎週土曜の夜には仕事に行くので、朝まで留守になる。毎日だと寂しい気がするが、週に一度だから、がんばって仕事をしたい。おとなになったら、学校の先生になりたいと思う。おもしろくなかったらやめるかもしれないけれど、ずっと先生を続けていたい。

(母は非常勤の産婦人科看護婦で、主に宿直勤務。父親は会社員。)

*

梨花ちゃん 九歳小三・女(神奈川)

お母さんは、私のお母さんだから好き。話はし過ぎるほど話すけど、時々「あ



なには強情ね」と叱られるの。自分も本
当に強情なくせに。お母さんは、家の中
のこといろいろするのが好きみたい。し
ょっ中うちの中の模様変えをして喜んで
るわ。お母さんは、とっても難しい大学
で、英語もペラペラだから、英語の本
も難しい本もたくさん読むの。でも何に
もお仕事はしないの。きつと私たちがい
るからね。でも、私の叔母さんなんか、
子どももいるのに、それに体も弱いのに、
いろんなお仕事してる。そのうち本を出
すんだって。うちのお母さんも、やれば
できるのに……。そういう人の娘だった
ら鼻も高いし。

(母三十八歳。専業主婦、父親は会社
員。子ども二人。)

*

俊一くん 九歳・小三・男(神奈川)

お母さんの行ってる教会の先生が、毎
週一回うちに来て聖書のお勉強をするん
だ。それが大きい。わざと遅く帰ると、
お母さん、泣くんだ。泣かれると困るか
ら先生の話聞くけども、こんなことし
てない友達がうらやましい。このごろお
母さんがテニスを始めたので、あまり口

うるさくなくなった。学校の先生に何か
言われたみたいなんだ。でも働きには出
てほしくない。寂しくはないけど、夕飯
早く食べたいから。

僕のこと「落ち着きがない」とよく言
う。

(母三十五歳。専業主婦だが、新興キ
リスト教の信者。父親は個人経営者。
子ども一人。)

*

まきこちゃん 十歳・小四・女(東京)

お母さんとはあまり話をしない。話す
ことは学校のこと。お母さんのきらいな
ところはね——、そそっかしいところ。

お母さんがいつも「早くしなさい」っ
ていうのは好きじゃない。

お母さんが仕事をしているのはいや。

(寂しそうに) 家にいてほしい。でも私
は、大きくなったら仕事をしたい。会社
員はいや。雇われるのはいやだから。前
はデザイナーになったかったけれど、今
は大学の先生になりたい。でも、たくさ
ん勉強しなくちゃいけないからね……。

(だんだん声が小さくなる)

おとなになったら、私お母さんにはな

りたくないの。だってね、いつもうちのお母さんは、「子どもに骨までしゃぶられちゃうのはいやだ」って言ってるから。

私が大きくなったら、お母さんに、庭付きの家に住まわせてあげたい。

(母三十五歳。会社員。核家族で、子ども二人を育て働き続けている。父母会活動にも積極的。)

*

れいちゃん 十歳・小四・女(東京)

(ちょっと考えこんで) お話するほうかな。やさしいお母さんが好き。お母さんいつも一緒だなんてえ……お仕事をしていたほうがいい。言ったことないけどほんとともう少しやせてほしい。勉強のことを言わないともっといいのに。テレビを見ながら夕ごはんを食べたい。叱られるのは私が悪いことをしたとき。いつも口ぐせなのはクルマに気をつけなさい。お母さんにしてあげたいことって……母の日に何かをあげるくらいかな。おとなになったら保母さんになりたいけど、お母さんなんて(とピンとこない様子)、うちのお母さんぐらいならなれそう。

(母三十一歳。共働きで出版社の宣伝担当。子ども二人。)

*

マユコちゃん 十二歳・小六・女

(名古屋)

お母さんとはとても仲良しだと思う。友だちと同じくらい何でもよく話すの。でもお母さんはこわい人。勉強や手伝いをきちんとしないと、まず口でワアワアと大声出してすぐ叱られる。それからすぐにたたくの。とくに痛いところをねらうからかなわない。

「おりこうだね」と言ってくれば、うれしくなって何でもするの。すぐ「バカ、〇〇もクソもない」って汚ない言葉を使うの。それにすぐ「テレビ消しなさい」って言う。あれ困るんだ。友だちと話が通じなくなるもん。

お母さんは会社で雑誌の編集の仕事しているけれど、いつも家にいないので寂しい。会社を辞めて家にいてほしいと思う。大きくなったら家にいるやさしいお母さんになりたいなあ。

(母三十九歳。父親は会社員。子ども二人。)

*

彩木ちゃん 十二歳・小六・女(東京)

お母さんは、私の話をよく聞いてくれる。でも、時々それに説教くさい話を加えて相づちを打つからちよつといや。でもうちのお母さんの言うことは、先生や他のお母さんの言うこととちよつと違って、時々驚いちゃうけれど、よく考えてみるとわりと正しいの。友だちは、自分のお母さんのことバカだバカだって言ってるけど、私は自分のお母さん、頭がいいと思う。だけど、こんな頭のいいお母さんの子って、大変じゃない。頭が上がらなくて。友だちなんか、トルストイの「復活」読んだだけで両親から偉いって驚かされてるのに、うちでは、黙殺。母の本棚なんか見ると、ズラッと本が並んでいるのを見ると圧倒されてしまう。母が仕事をしてるのは、当然で感じていつも見てるけど、私も子どもを育てながら働くかどうかはわからない。働くなら、子どもがいらないほうがいいみたい。私が今、寂しいから言うんじゃないくて、とても疲れるようだから。

(母、三十九歳。文筆業。子供二人。)



*

智子さん 十三歳・中一・女(奈良)

中学生になると「お母さんとは口もきかない」という友人もいるけど、うちは何でもよくしゃべる。先生の悪口、男の子のこと、性のことなど。でも、話すときはいつも「親子じゃなくて個人と個人」と言ってるくせに、親の顔で迫ってくることも多い。「他人に頼って生きるな、自立しろ」と口ぐせ。この間、大げんかして「出ていけ」と言われたので、一晩家を出たの。国際児童年の作文募集があって「絶対に書いてみる」と約束して、締切間際に「止めようかな」と言うのと、「一旦口に出しておいて」と叱られた。ふつうのお母さんと私の母の中間をとり//自分のことは自分でやりつつも、他人のことも考えられる大人//になりたい。(母四十二歳。生花と話し方を教える。奔放なリブの活動家。父親は医者。子ども兄と二人。)

*

けいこさん 十三歳・中一・女(名古屋)

私と母は仲いいと思う。お友だちとうまくいかないとき相談のってくれると

か、じゃれちゃったり。理想の母という

のは、優しくって、ユーモアがあつて芯の強い人で信頼できる人。まあうちの母もいい線いってると思う。やめてほしいのは、すごい大声でおこること。心臓が止まりそうになる。とはいっても慣れてるし、急に態度変えてシヨボシヨボ叱られても気持ち悪いけどね。今うちの母はほとんど家にいないけど、行き先とか何やってるか話してくれてるから不安はないし、続けて欲しいと思ってる。私の将来のことだけど、母になりたくない。だって大変なことだし、自分ができるなんて全く自信ないから。

*

(母三十五歳。数グループに参加、自宅で和裁仕立物をする。子ども二人。)

誠くん 十三歳・中一・男(東京)

口はよくきくけど、話というほどじっくり話すことはあまりない。いい人なんだけど、何というか、美しくないんだよね、すべてに。ガサガサしていて、がんばってるのはわかるけど、汗飛び散らしてるって感じでどうも。学校の行事などにも少々出しゃばり過ぎて、このごろ恥

ずかしいな、と思うことがあるんだ。何というか何でもかんでも一生懸命になっちゃうんだなあ。老人ホームのボランティア、生協の役員、PTA、教会の世話役、町内会と。

去年は僕の受験に血道をあげていたら、入試に失敗したら、急に反省したのか、やたらにキーキなんか作って、食べる、食べるってサーブスする。親思いの僕は、我慢して食べちゃう。叱られたことはないなあ。むしろ、何でもない僕の行為に時々感激して、やたらにふいちゃうから困るぐらい。でも母親って、どこでもあんな程度じゃない。期待してないよ。

(母四十歳。父親は会社員。子供二人。専業主婦だが、地域活動に忙しい。)

*

のりこさん 十三歳・中二・女(鹿児島)

母とは学校生活のことよく話します。とてもよく聞いてくれるし、話していて楽しいです。PTAとか婦人会とかで元気に動きまわっている母は大好きです。仕事はね、役場の職員をしているのだけど、このまま長く働き続けてほしいん

です。元気で活発な母はとても好きですが、叱るとき、ず——っと前の問題まで持ち出してクドクド、いつまでも言われる点がとてもでもないやなんです。

手話を覚えたりして養護施設に勤めたいと思っています。今の自分の心のままに大人になりたい。大人たちを見ていると素直でないというか、サッパリしてないというか、ものすごくきらいなおとながたくさんいるもの。どんなお母さんになりたいかなんて、考えたこともないし、全然わからない。

(母四十五歳。父親は農業。子ども五人。)

*

雅和くん 十三歳・中二・男(京都)

母とは、まあまあ仲の良いほうだと思う。話はあまりしないが、話すとしたら学校のこと、クラブのことが多い。

口うるさく言わないで、注意するときには悟すように言ってくれる母親がいいと思うけれど、僕の母はすぐに感情的になつてギョァギョァ言う。母のきらいなところは、口うるさいところ。

母は風呂屋の番台の仕事をしています。

母子家庭なので母は働かざるを得ない。母への希望、たまには旅行などで家を留守してほしい。干渉されない自分の時間をもちたいので……。

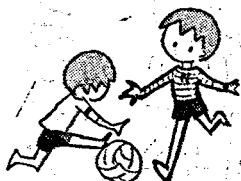
学校で問題をおこしたときなど、口できつく言われた。時には父親がわりの叔父を呼んで来ることもある。

「早く大きくなって、金をもうけて、一人前になれ」というのが、母の口ぐせ。僕もそう思っている。きらいな母の言葉はげんかをしたときなどに、前歯が抜けている僕に対して母が「歯抜け／＼」と言うこと。また、「勉強ができない」と言われるのもきらいだ。

大人になったら、おいしいものを食べに連れて行ってやりたい。養老院などに入れたくない。一緒に住もうと思っっている。

(母親三十三歳。職業・風呂屋の番台。

祖母と母、四歳の弟の四人暮らし。しっかり者の祖母が、時には家族の支柱になつてくれている。祖母の言葉のほうに重みをもって迫ってくることが多いと彼は語っていたが、母とはまた違った形でつながり合っているようである。)



＊

はじめから統計的に意味のある調査を
めざしたものではありません。子どもた
ちの母親に対するママの声を聞き出した
かったのです。

ハッとするような、あるいはうーんと
うなるような子どもの声を期待しまし
たが、御覧のとおりだいたい空振り。面接
者の巧拙に関係するのかもしれないが、
ともかく子どもの答えは良識的で妥当な
線。

たとえば、年齢を問わず「お母さんの
きらいなところ」に「おこる」ことをあげ
ている子が多いが、逆に「しつかりおこ
ってくれる」「お母さんを求めている」。
また「お母さんに家にいてほしい」「子が
いる一方、意外と、母親が仕事をするの
を理解している子も多いのです。

働く母親にとって「やめてほしい」は
やはりショックな答え。たとえばア
カネちゃんのお母さんと後で話し合っ
てみましたが、やめようかと短絡しないほ
うがよいようです。子どもの欠如感・不
満足感は接する時間の量だけでなく質に
大いに関係している。子どもにうるさそ

うに接したりしていないか、よく点検し
てみてください。また母親の仕事を具
体的に知っている場合のほうが知らない場
合にくらべて、子どものなかで納得し、
やめてほしいが出にくいこともご参考ま
で。

年齢が上がるにつれ、母親の生き方や
仕事をかなり客観的に評価したり、批判
もあつたりするようで、もはや母親の生
き方そのものが、子どもの評価の対象に
つながるようです。

ともあれ、母親が子を育てながら、自
立した人間として生きるには容易でない
状況下にあつて、子と母の「いい人間
関係」を目ざしていきたいものだと思
う意味でも、意義あるインタビューで
あつたと思います。

パンフレットをどうぞ／

『私たちの男女雇用平等法をつくる
会』が「性差別にくさびを／」のパン
フレットを作りました。ぜひご一
読を／詳細は一六〇頁のＡグループ
紹介Ｖ参照して下さい。一部二百円

グループ

インタビュ



(東村山市A学童クラブ)

Rさん	二年生	Tくん	二年生
Sくん	二年生	Kくん	三年生
Mさん	一年生	Kさん	三年生
Oくん	一年生	Hくん	二年生
Uくん	一年生	Wくん	二年生
Jさん	二年生	Oさん	二年生

きょうはみんなのお母さんのことについて、ちょっと聞きたいんだけど答えてね。みんなはお母さんと仲良し？

大勢 うーん、仲良し／＼(元氣よく)

Rさん でもやっぱりきらい。憎らしい。

どんなところがきらいなの？

Rさん おこるところ。

数人 そうそう、おこるところ。

Sくん おもちゃ買ってくれないところ。

Mさん 弟ばかりかわいがる。うちの弟

大きくなったからお母さんと結婚

するっていつてんだよ。

Oくん 外に出すところ。きのう出され

たの、はだしのまま。

Sくん 夜？

Oくん うん。

Sくん こわかったでしょ？

Oくん こわくなかった。パッタつかま

えてきた。

Oくんはきのう何か悪いことしたのかな

Mくん お母さんがおこるとき角が生え

たみたいでこわい。(笑い)

どんなことするとお母さんにおこられる

の？

Mくん しらけ。いたずらするとおこる。

数人 悪いことするとおこる。

じゃあね、反対に、お母さんのどんなと

ころが好き？

Sくん おもちゃ買ってくれるところと

ガチャガチャさせてくれるところ

とこはんつくってくれるところ

と。あといっぱいいっぱいある。

Uくん やさしいところ。

Jさん おかあさんのおいがすぎ。す

ごくいいにおいがするんだもん。

お母さんの好きなおもちゃもたくさん

さんあると思うんだけど、こんなお母

さんだったらいいなーなんていうお母さ

んはどんなお母さん？

Sくん こわくなくてやさしくって、

何でも買ってくれるお母さん。

おこるときにはちゃんとおこっ

てね。

おこるときにはおこっているのね？

Sくん そう。

Rさん きれいでやさしいお母さん。で

もやさしすぎたらだめなの。き

びしくないと、子どもがだめに

なっちゃうから。

数人 やさしくってこわくないお母さ

ん。

やさしくてこわくないお母さんがみんなの希望なのね。

お母さん、みんなに毎日どんなことよくいってる？

Tくん 日記書きなさいっていう。

それから？勉強しなさいとかいわない？

数人 あまりいわない。

みんなよくお母さんとお話する？ 学童であったこととか、学校のこととか、友だちのこととか。

Tくん 一学期にはねーよくはなしてたけどねー夏休みにははなさなくなっちゃった。ぜんぜんはなさない。

どうしてかな？

Tくん わかんない。

ほかの人はどう？

数人 ぜんぜんはなさない。

お父さんにもはなさないの？

Tくん うん。お父さんにはなす暇ない

もん（不満気に）。

Kくん とときしかはなさない。

ふーん、お母さんとあまりはなさない人が多いんだね。時間がないのかなー。

じゃあねえー、みんなが大きくなって、大人になったらお母さんにどんなことしてあげたいと思う？

Sくん

弟が大人になってもね、まだガチャガチャの癖があったら俺が集めた消しゴム全部あげるよ。

親孝行かな？ 何でも買ってあげたい。

夏休みになったらねー、おとうさんとお母さん連れて伊豆へ行く。

Sくんはやさしいんだね。Sくんのお母さんは幸せだね？

Sくん まあね。

ほかの人はどう。大きくなったらお母さんに何をしたい？

数人 親孝行。

みんなは大きくなったらお母さんと一緒に住んでいたい？

Sくん うん。いつまでも一緒に住んでいたい。あつ、でも離れて住みたい。

どうして？

Sくん 大人になったらマンガばかりよんでるの。

Oくん 大人になってもおこられるとつまらない。

女の子は大きくなったらどんなお母さんになりたい？

Rさん きれいでやさしいお母さん。

Oさん わたしはお母さんになりたくない。

なぜ？

Oさん くらうするから。

Kさん それに子ども産む時痛いから。

Oさん 大きくなったらお金持ちのひと結婚するの。仕事はしなくてもいいし、大きなきれいな家でお料理を作ったりさ。

Rさん そうそう、それがいい。

大きくなったらお母さんみたいにお仕事をしている女の人じゃなくていいの？

Oさん うん。お仕事はしないの。

みんなはお母さんが働いているの好き？

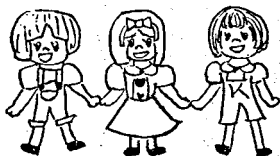
いいと思う？

Sくん うん。だって給料が貰えるもん。

給料貰っていろんなもの買えるから。

Hくん

金持ちになるから働いていたほうがいい。でも学童は自由に遊



べないからイヤだ。自転車で乗り回したいのに。

Wくん そうそう。それにクラスの友だちとも遊びたいのにさー。

うーん。そういうみんなの気持ちはよくわかるんだけど……。

Rさん ねー。お母さんのことはかり聞いて、どうしてお父さんのこと

聞かないの？

そうね。じゃあ今度はお父さんのこと聞こう。

みんなはお父さんと仲良し？

大勢 うーん。(元氣よく)

どんなお父さんが好き？

Rさん かっこよくてハンサムで、足が長くて頭がよくてお金持ちのひと。

うわーすごい。

お父さんにどんなことしてほしい？

Kさん おもちゃを買って欲しい。だってお父さん一年に一回ぐらいしか買ってくれないんだもん。

お父さんのことも、もっとたくさん聞きたいんだけど、今日はこの辺でおわり。また今度ね。

これは、都下東村山市のある学童保育の午後のひととき、一年生から三年生までの十五人を対象としたもの。

子どもたちの母親は、全員働いている。子どもたちは母親が働くのを事実として受け取めているが、しかし女の子の答えには、複雑なものも……。『くろうするからお母さんにはなりたくない』『子どもを生むとき痛いから』『からは、そろそろ女の子を解放してあげたいものだ。』
一様に、『おこるときにはちゃんとおこって、やさしいお母さん』を求め、『大きくなら親孝行をしたい』の答え。ここでは働きながら、子どもとのかなりいい関係を作っている母親が多いようでした。

※学童保育(学童クラブ)——小学一年生から三年生までの、両親共働き、保育に欠ける状況の児童の生活を守るために、下校時から五時まで、学習指導と生活指導を行なっている。一学童保育所(クラブ)の定員は三十人から五十人くらいで、児童二十人に一人ぐらいの割合で指導員がいる。都内では、区部に四百三十八か所、市町村で二百十六か所ある。

ひきさかれた関係のなかで

石 川 公 子

子を産んだ親は、子を育てる。自然の姿として、子を産んだ女は母と呼ばれ、子を育ててきた。母性は、女の生まれもった本能である——と。しかし、養護施設に入所してくる子の生活歴を知り、その母たちとの面会を続けていくなかで、その思いは覆されずにはいられなくなる。「産む」ということと、「育てる」ということは、私のなかでそれまで区別されてはいなかった。子を産んだ母ならば、当然子どもを育てるにふさわしい愛情をもっていると考えてきた。だが、「産んでも育てようという気持ちがない」母親たちの存在、それをどう考えればよいのだろうか。

以前、毎日のようにコインロッカーから生後一、二週間の赤ん坊が、いや時には生後二、三時間の嬰兒が発見され、ショッキングなニュースとして騒がれた。ゴミの山に新聞紙に包まれて捨てられていた嬰兒、汽車のトイレで生まれ、ヘソの緒をつけたままの姿で置き去りにされた嬰兒など、児童相談所で取り扱う日常のケースの姿である。

最近の施設では、孤児はほとんどいない。多くは、崩壊家庭の子どもたちである。家庭の崩壊は、不可抗力的な死別を除いて、社会・経済的貧困、家庭の精神的不和によるものが多い。家庭が崩壊し、機能が停止する要因としては、親の死、入院、入獄、両親または片親の家出、別居、離婚等があげられるが、そこには親の個人的責任だけではなく、親をとりまく種々の社

会問題があり、子どもの状況をいつそう複雑にしている。

選ぶことのできない子どもたちは、このような複雑な事情のために施設に入所してくる。彼らは、自分たちの親に対して、どのような感情をもっているのだろうか。

揺れる心——母への思い

おとうさんとおかあさんは、せいかつのこととよくけんかをします。そんなとき、ぼくはねたふりをします。むねがどきどきしています。おとうさんは、いつもおさげばかりのむので、おかあさんはよるはたらきにいきます。八月十日に、おかあさんは「むかえにくるからね」といって、いえをでていきました。そして、ぼくはしせつにきました。おかあさんはやくむかえにきてください。

(小学校三年・T雄)

酒飲みのお父。夫婦げんかが絶えず、生活のため夜の仕事を始めた母親は、客といっしょに家出。日常的な両親の争いのなかで、家庭はT雄の幼い心に、悲しみと不安を与えただけで、決して、彼にとって安らぎの場ではなかったはずだ。けれども、彼は、母親の家出の日を忘れず、母の姿は、彼の心を揺さぶり続けている。

このケースのように、親の事情で家庭から放り出され、母と

の関係を一方的に切られた子どもたち。この子たちの母への執着はかなり強いように思える。施設の生活のなかで、子どもと親との精神的なつながりを保っていくのは、親の訪問や休暇の際の帰宅、通信などを通しての交流である。一般的に、これらの回数が多い子ほど、施設や学校での生活に適応しており、情緒的にも安定している。親自身が、子どもを一日も早く引き取りたいと望んで、必死に働き、毎週、休みには面会に訪れ、来られないときには電話をかけてくる、そういう親の場合、子どもも親の姿勢を感じ、日々の生活への意欲的な取り組みがみられる。

だが、現実には、こうした親は少数者であり、子どもを施設に預けていても、あまり心配せず、引き取りたいと思っていない者が目立っている。これに対し、約半数近くの子どもたちは、一日も早く、親といっしょに暮らしたいと望んでいる。だが、その多くは幼児、小学生で、中学・高校生になると、親といっしょに住むことに消極的な傾向がある。彼らの父親批判、母親批判は鋭く、冷たいものがあり、憎悪を示すものも多い。その例として、中学生(女子)の作文と、ある兄妹のケースをあげてみよう。

母への憎しみ

父と母は離婚して、私と妹は母といっしょに暮らしていた。

小学校四年のときに、母は二回目の結婚をしました。そのとき、私は母をあまり好きではありませんでした。その父がよくお酒を飲んで、母をけったり、なぐったりしていました。母は夜の仕事に出るようになり、朝に帰ってくる生活がはじまり、母もときには酔って帰ってくるのがいくどもありました。それから、母は若い男の人といっしょに、家出をしてしまいました。それから父はお酒をあびたように飲み、私と妹にぼろりよくをふるいます。こんな事になったのは、母が家出をしてしまったからです。母を憎みます。母のようにふしだらには絶対になりたくありません。もし会いにきてても、会いたいとは思いません。

(中学一年 M子)

△ケース1V

A雄とK子は、母親の家出のあと、父親が幼い兄妹をアパートに置き去りにして失踪したため、施設へ入所してきた。A雄六歳、K子五歳のときである。母親・父親の失踪後、誰もわからず一週間ほど兄妹で過ごしていた。その間、A雄の学校の給食だけ食べていたという。A雄の病気で担任の先生がこの状況を知り、すぐに祖父母に連絡する。だが、祖父母とも働いているため、兄妹の面倒をみきれないということで、措置された。夏休み等で祖父母の家(父方)に外泊するたびに、母親の悪評を聞いて以来、K子は母を憎む気持ちを強くしていった。両親は

その後離婚をした。再婚した母親が、K子が中学二年のとき引き取りを希望したが、K子は頑として頭をたてにふらなかつた。K子がどちらかと言うと、父親つ子だったことも手伝っているかもしれないが。そのK子も、高校卒業後、母といっしょに住み始めたが、結局、半年もたたずに家を出てしまった。A雄の方も、積極的に母を受け入れたわけではなかったが、いっしょに生活するうちに、除々に気持ちもほぐれていったようである。

この二つの事例には、酒や賭けごとに溺れる父親、その借金や生活そのもののために夜の仕事に出、身をくずしていく母親という家庭崩壊の一つのパターンをみる事ができる。このような家庭で幼少期を過ごしたM子やK子が、思春期になって思いう出するのは、大人の世界の醜さだけなのだろう。「愛と憎しみは紙一重」と言われるが、彼女たちは、「母を憎む」ということで「会ってみたい」という愛を求める気持ちを表わしているようにも思える。K子の場合、父親の両親である祖父母に、「ふしだらな女」と母が罵倒されるのを聞きながら、それを受け入れなければ、祖父母にもつきはなされる不安があったのだろう。相対的に、男子のほうが母親に対して寛容であり、理想化した母親像を抱えていることが多い。これに対し、女子は母親を同性としてかなり厳しくみている。「母のようにふしだらには絶対なりたくありません」というM子。だが、なぜ母がそうい

う状況に追いこまれていったか、それを知らなければ、第二、第三のM子は続くのだ。女子の母への批判の厳しさは同性としてのものと同時に、「育児は母」という社会通念に裏打ちされたものとも思える。

子を殺した「親権」

ハケース2V

S子は、父親の蒸発、母親の乳児をつれて働けないという理由で、満一歳で乳児院に預けられる。その後、母親は行方不明。施設の集団生活に順応できないS子は、感受性が強く、人一倍、大人の愛情を求める子であった。彼女には、一対一の人間関係が必要であった。幸い、五歳になったとき、里親委託へと措置変更になり、里父、里母に可愛いがられ、笑わない子といわれたS子が笑顔を取り戻したのである。そして、閉ざされていた心がほぐれ、言葉ものびやかに表現できるようになり、里母へ素直に甘えるようになっていた。そんなある日、突然、実母が現われ、引き取りたいと申し出た。

五年ぶりの母子の対面は、母親からの暖かい声かけもなく、S子はおびえて里母にしがみついていた。S子が母親のもとに引き取られて三か月、体中の青アザややけどが痛々しく、ひどい打撲で入院。そして、真冬に、庭の木に一晚縛られて、S子は死んだ。

里親家庭で育てられた一年間、里親の暖かい愛に支えられたS子の明るい笑顔とのびやかな成長——母親に引き取られてからの虐待の生活——はあまりにも対照的である。

「親であること」を放棄しておきながら、ある日突然、「親」として名のり出、「親であること」を主張する。我が国では、一般にそういう親を含め、実親のみを承認している。里親とか養子縁組による実質の親子関係は、評価されないのである。これに対し、アメリカの場合、「親」と「親に代わる養育者」とは明確に区別して考えられている。だから、福祉法においても、「育てなかつたら親ではない」とされ、「育てるものが親」ということが一貫している。

崩壊家庭が多くなるにつれて、子どもを施設に入れても面会にも来ないし、手紙一本よこさない親が増えている。だが、その親たちが何年もたって、子どもたちが中学・高校を卒業する頃になると、子どもの就職を目当てに現われることがよくある。手のかかる間は放置し、子どもが働けるようになると「親権」をかざしてくる。第三者の立場から見ると、腹立たしく、ふりきつても当然と思うのだが、子どもは、もろくも親について帰るケースが多いのである。他人から見ると、どんなに悪い親と思われても、子は親にひかれるのだからか。親と子の生物的、宿命的なつながりは他にかわることはできない。だが、S子と

里親のように、親以外の大人が、育て、保護することも可能であり、互いに信頼しあう人間関係が成り立つと思う。

「生活」と「管理」のはざま

このことは、私たち施設で働く保母、指導員にとつての課題でもある。日々、そうした関係の成立に努力しているのだが、この十年、施設では保母、指導員の勤務体制の確立問題で揺れ動いている。かつては、保母は全生活を施設に投入し、保母のプライベートな生活と子どもの生活が重なりあうことが良しとされていた。だが、この体制は、保母には大きな負担となり、精神的ストレスは大きく、子どもとの関係にも悪影響を及ぼすことにもなった。こうして保母たちは、プライベートの保証と職業としての確立を叫んできた。施設は、子どもたちにとっては、まるごと「生活の場」であるが、保母、指導員にとっては「職場」である。この「生活」と「仕事」ときちんと割り切れない点で、悩まされることが多い。職業としての専門性と同時に人間性も要求され、プライベートな生活の保証がなければ、長く続けることは無理である。実際、施設の保母の勤務年数は保育所の保母とくらべて非常に短い。保育所の保母は、結婚後も仕事を続けられるが、施設の場合、二―三年で辞めてしまう者が多いのが現状である。

そして一方、勤務時間や勤務内容が改められていくことで、

施設に子どもたちの「生活」が失われ、「管理」が強まってしまうのではないかという懸念も抱いてしまふのだが……。

ともあれ、施設は、子どもと保母、指導員の共同の生活体験の場であり、日々、互いに共感できる人間関係を築いていこうとするとき、保母、指導員一人一人の生きざまが問われるわけである。

最近、崩壊家庭の子どものみならず、中流の、家庭の形は整っている家の親（とくに母親）が、子育てに手をやいて相談所に来ることが多い。子どもの暴力、母親への虐待、登校拒否、非行という問題に、母親はおろおろしている。このような子どもが施設へ措置となるケースが増え、施設は、精神治療的教育をも要求されている現状である。

こうした子どもたちの場合、母親が常に子どもにベッタリくついている。それに対し崩壊家庭の場合、まったくの放任、放置という、一見、相反する対応がみられるが、その根は同じではないだろうか。過保護と放任という親の子へのかかわり方はどちらも子どもの人権を認めていない点で共通していると言えないだろうか。

子どもを一人立ちする者と見、共感関係を重視した人間関係を求めるならば、誰が親であるかではなく、親とは何かという問いの追求が必要なのではないだろうか。

（養護施設保母）

夏の子ども楽園村を訪ねて

宗久知恵子
佐藤 統子



子どもにとって夏休みは、日ごろの学校や都会生活を離れて、自然のなかで新しい発見や観察、そして集団生活を体験する絶好の機会である。今年の夏も全国各地で、いろいろな形のこのような体験の場がくり広げられたことと思うが、私たちあごら編集部もその一つ、ヤマギシ会夏の子ども楽園村を訪ね、子どもたちの生活ぶりをのぞいてみることにした。

私たちが案内されたのは、「銀河鉄道999」で子どもたちの夢を運んですっかり有名になった鳥山線大金駅から車でゆられること十分、那須岳の南に広がる田園地帯の村はずれに建っている三箇小学校であった。ほとんど予備知識もなく、緑の林に囲まれたキャンプ場を想像して行つた私たちは、いったいどんなことをここでやっているのだろうという思いにとらわれた。

// きまり// が一切ないなかで

校門を入って行くと、暑い陽ざしのなかで盆踊りのヤグラを組みたてている何人かの青年たちがニコニコと迎えてくれた。都会ではめったに見られなくなった木造の校舎が、子どもたちの二週間の生活の場だというお話をうかがいながら、子どもたちのクツがいくつも並んだ玄関で、やつのこと自分たちのクツを脱ぐ場所を空けて上がってみると、ちょうど昼休みの時間だったらしく、建物中、教室や廊下を走り回っている子どもたちのにぎやかな声につつまれていた。

すみに積まれたフトンももはや半分くらい崩れ落ちた(子どもたちの格好の攻撃目標らしく)教室のなかでは、何人かの男

の子たちが怪獣の絵を囲み、ワイワイガヤガヤ何か熱心に討論している様子。おどろいたことにそのそばで朝の早い活動と満腹のためか、板の間でスースー気持ち良さそうに眠っている豪傑君もいた。女の子は私たち新参者に関心があるらしく、そばに寄ってきては何かとまどわりつく。スタッフの方から、「お前、下着を全然変えないんだって」といわれてもすました顔で、「平気よー」。

その日の午後はソフトボール大会。一週間泣いてばかりいたというB君（小学一年）も、なぜか見ているほうが暑くなるようなダブダブの長ソデ、長ズボンを身にまとい、みんなの声援のなかで元気いっぱいバッターボックスに立った。E子ちゃん（小学三年）も男の子顔まけのヒットをとばし、得意顔。上手な子も下手な子も、女の子も男の子も、みんな一緒になってソフトボールを楽しんでいるようだった。

この楽園村では「何々をしてはいけません」「何々を守りましょう」というきまりは一切ないそうで、それだけ雑然とした子どもの集団という印象は受けるが、子どもたちはとうとう、どの子もまっ黒に日焼けして、のびやかにここでの生活を過ごしている様子だった。

一日二食の食原則

ヤマギシ会夏の子ども楽園村は今年で五年目。全国九か所のヤマギシ会実顕地で八月一日から十五日までの二週間開催された。日ごろ、ヤマギシ会の卵・鶏肉・野菜などを食べている都

会の子どもたちを実顕地「村」に迎え入れ、村で生活している人たちとともに「楽園村」を創造していこうというものである。ただ私たちが訪ねた首都圏那須実顕地に限っては、参加希望者が予定以上に多くなり、村で受け入れられなくなったため、廃校になっている近くの三箇小学校を宿舎にあてていることになった。ここで楽園村での子供たちの生活ぶりを、楽園村速報からいくつか拾ってみたいと思う。

全国楽園村の今年の共通テーマ「わたしはやります」みんなとともに」

八月二日 元気いっぱい、にぎやかさいっぱいに百数十人の子どもたちが勢ぞろいしました。「はらへうた……」の声のなかで食生活の原則に取りくみます。今日のテーマ「最初で決まります」。

八月三日 今日のテーマ「そろそろですね」。ヤマギシ講座始まる。楽園村では日増しに研鑽態度のとれる子どもが増えています。高橋氏の「トリの食生活」や猿田氏の「輪と和」、五十嵐君の「生物の名前と形」など各話を目をかがやかして聞いています。各グループでの作業状況は好評を博しています。太田原実顕地の「バッサイ」、他のグループでの「タマゴとり」「まき餌」など。子どもたちは、おなががいとさわいでいたのが、食事も忘れて作業せろとさわいでいます。

八月七日 今日のテーマ「どうどうと」。子どもたちも少しづつ自分のペースをとりもどして、のびのびと楽園村の生活を楽しんでいます。これからは一人ひとりが自分のよさをどうとうとだしていくときです。そんな楽園村をみんなとともにやっ

ていきたいものです。

この速報のなかにもでてきているように、楽園村で創造していこうとしているもの、すなわち、それはヤマギシズムの村づくりでもあり、興味深い特色となっていることとして、まず一日二食の食原則がある。スタッフの方の話では、子どもたちも最初のうちは食生活のリズムの変化にとまどう様子だが、すぐに慣れてしまうそうである。間食が多く、いつも半満腹状態にいる子どもたちもこの楽園村では「はらへったあ」と食事にとびつくようだ。二つ目として、ヤマギシ講座である。ヤマギシ



会は独特の養鶏を生産基地として、新しい共同体づくりをしているが、鶏を育てるなかで人間が生きていくために学ぶことがたくさんあるという。楽園村でも、子どもの年齢にあわせて自然や生物（ここでは鶏）をテーマにして、新しい発見や観察をしていこうとするものである。そして三つ目が、実顕地での作業である。これも子どもの年齢に応じて作業を

するということで、小さな子どもたちは、産みおとした卵をケージのなかからとってくる作業であったり、少し大きな子どもたちは鶏にエサをまく作業であったりするそうである。この他に子ども研鑽会という話し合いの時間も生活のなかに取り入れられている。

楽園村の生活はだいたいこのようなことを中心に進められ、あとはもっぱら遊びのようである。男の子も女の子も一緒にほりだらけになって、ソフトボールに興じていた子どもたちの歓声が、今でも耳に残っている。そして、もう一つ非常におもしろいと思った点は、楽園村の作業も講座も遊びも、やりたくない子どもには無理に押しつけないということである。それでは集団としてまとまりがなくなってしまうのではないかという気がしたが、どうやら多くの子どもたちは大人が考える以上に好奇心が旺盛で柔軟性に富んでいるらしく、逆に日常の規制から解放されて主体的に活動に参加しているとの話であった。

（注）研鑽とは、話し合いやヤマギシ講座のなかで自己をみつめ、磨いていこうとするもの。楽園村での子ども研鑽会のほか、毎月一般の人たちに対して、一週間の特講（特別講習研鑽会）が開かれている。

生き方が変わる人も

私たちは楽園村に手伝いに来ていた一人のお母さんと出会った。そのお母さんのお話を一部紹介すると「楽園村に来る前はボーイスカウトで一日一日のスケジュールがキチンと決まったキャンプの経験があったので、そんなものかと思って、二週間

どんな生活するのって供給所の人に聞いたら、鶏小屋でも作るんじゃないのって言うのよね。ヤマギシの鶏っていったら大変なものだし、小学生の子どもがとてもし作れるものではないしね。二週間、特別寂しいとか心配はあまりしなかったわね。私はノン気なのかしら。もちろん今ごろどうしているかなとか、手紙でも寄せばいいのとは思ってたけれど。待っているほうとしては、間でもちょっとゴタゴタした事があつたりして、あつという間に過ぎてしまったという感じ。それで二週間終わって子どもたちが帰ってきて、とってもかわいいのよね。かわい顔をしているの。私は平凡な母親だからその時点で子どもがとくに変わったとは気がつかなかったけれど。……………」

このお母さんの話はまだ続き、楽園村に子どもが参加したことがきっかけとなって、子どもも親もそれからの生き方が大きく変わっていったということであつた。

ルボを終わって

私たちは子どもたちの楽園村での生活をほんの少し垣間見たに過ぎなかった。何日か子どもたちと一緒に過ごすことができたなら、ヤマギシ講座や作業のなか、そして遊びのなかで、子どもたちのさまざまな表情に出会えたように思う。たった二週間のこの体験が子どもにどのような形で残されていくかは、とうていはいはかることはできない。しかし、いま子どもをとりまくさまざまな状況のなかで、子どもにとっても親にとっても一つのインパクトを与えてくれた楽園村の生活であつたこと

は確かであろう。

「気持ち穏やかにして、ニワトリに接すると、健康なニワトリに育ち、そして健康な卵が産まれるんですよ。人間の場合も同じじゃないんですか。だからイライラしたり、腹を立てる人はニワトリの世話や、子育てをしないようにしているんです」スタッフの方のこんな言葉のなかに、ヤマギシ会の子育てに対する基本的な姿勢が秘んでいるような気がする。ただ私たちに、ニワトリと違って、むしろ喜怒哀楽が豊かなほど人間らしいのではないかという疑問が残ったけれども。

またヤマギシ会のスタッフの保育を担当しているのが、全員女性だということには考えさせられた。子どもを育てる場合、母親の役割と同様、父親の役割も重要だろう。以前は男性も保育を担当したというが、そのほうが子どもにとってもよりいい環境であつたと思うのだが……。保育だけではなく、炊事係を女性だけが担当するのは、幼児のころから、男女の役割分担を固定させることになりはしないだろうか……。それらのことを、ちよつぱり私たちは心配したのだ。

それとは別に、ヤマギシ会のスタッフの方がたは、とても親切であつた。ちよつぱり楽園村の作業が一段落したころでもあつたらしく、ジープを駆って各実地をていねいに案内してくれた。ヤマギシ会の牛乳は乾いたノドにはとてもおいしかったし、トマトの味も一味ちがつた。そして帰りしなにいただいたヤマギシ会の有精卵にも、私たちが久しく忘れかけていた本当の自然の味が含まれていた。

あこら20号発行記念講演会より

これからの女性解放運動

水 田 珠 枝

皆さん、こんにちは。

△あこら▽というのは難題ばかり吹きかけるところだな、というのが私がいま感じていることです。前には△あこら▽二〇号にウーマン・リブの歴史を書いてくれというご依頼を受けて、ついうっかりお引き受けしてしまったばかりになんとか書かなければならなくなりました。古い時代を手がけてきた私が、まだ十分整理されていない問題が山積みする現代のリブについて書くんですから、無謀ともいえるわけで、編集部のご意向に沿ったかどうかわかりませんが、ウーマン・リブの歴史ならずウーマン・リブの歴史的位置づけを書いてしまったわけです。

ところがまたまた難題を吹きかけられました、「これからの婦人運動」についてしゃべらなくてはならなくなりました。「これから」のことなのですから、だれひとりとして十分確信をもって話すわけにはいかないはずです。それをこうやって大胆にも壇上に上がってきたのですから、皆さんおそらくいい心臓だと思っていらいっしょでしようし、私自身もそう思っております。でもこれは、私ども女性の全体の問題ですし、だれでも考えなければならぬ、だれかが問題提起をしてたき台のひとつも出さなければならぬのではないか、そんなふうに考えて、これもお引き受けしてしまいました。



そこで今日の話は、だいたい次のようなことを内容として考えてみました。まずこれまでのさまざまな運動のなかで、女性解放運動を、もちろんここでは日本の問題ですけれども、どう位置づけるかということ、次に、女性解放運動を展開する場合にどこから出発すべきかということ、それから第三に、これまでの女性解放運動の過程ででてきた問題。この第三の問題はいろいろありますので、そのすべてをお話することはもちろんできませんが、私が運動にかかわってきた経験を通じて感じたこと、考えたことのいくつかをとり上げてみたいと思います。そして最後に、今後の展望について、皆さんとこ一緒に検討してみたいと思います。

●戦後革新運動の流れと女性解放運動

まず女性解放運動を、革新運動との関連でどう位置づけるかという問題です。こういう問題を取り上げるのは、現代の女性解放運動の性格をはっきりさせておきたいからです。女性解放とは、現実に女性がいろいろな点で差別されているという認識がまずあって、その差別の状況を変えようという要求だと思えます。変革の要求をもたない女性の運動は、女性解放運動とはいえないわけです。そして、私たちをとりまく状況を変えようということでは、革新運動と共通の課題をもっていることになります。

戦後日本の歴史をながめてみますと、革新運動にはほぼ十年ごとに節目があったように思われます。二九四五年に日本は敗戦を迎え、五年後の一九五〇年には冷戦のさなかで朝鮮戦争が始まり、翌年にはアメリカ合衆国と単独講和を結び、安保条約が調印されました。以後現在に至るまで安保体制が維持されてきたわけで、この安保体制からどう抜け出すが、戦後の革新運動の大きな課題となりました。安保体制の破棄を目ざして、約十年後の一九六〇年には安保反対の大運動が全国各地で繰り広げられたことは、皆さんご存知のとおりです。しかし反対運動は、大々的に繰り広げら

れましたけれども、結局は安保条約を破棄するに至らず、七〇年のチャンスを持つことになりました。その七〇年には六〇年の時のような大規模な運動もなく自動延長になりました。来年はいいよ八〇年。今日（六月二十三日）が六〇年安保の大規模な闘争があった記念すべき日ですが、来年安保体制が崩れるとは今の段階では思われません。戦後の革新運動が十年の節目をつくってきたのは、アメリカの軍事体制から脱出するチャンスが十年ごとにくたという事ですけれども、来年の八〇年は、革新運動にとっては暗い見通しのなかで迎えることになりそうです。

こうした革新運動の高まりと退潮とを、日本経済の景気変動との関連でみてみますと、革新運動が高まりをみせた時代は高度成長時代にあたっておりまして、政治的には反安保闘争、経済的には生活向上を目ざす賃上げ闘争が柱となり、そして実際に賃上げ闘争は一応の成果をあげてきました。ところが七〇年代に入り、石油ショックに見舞われますと、社会のさまざまなひずみが前面に出てきて、従来のような賃上げ闘争だけではなくともならない事態になってきました。

それからもうひとつ。石油ショック以来の不況に加えて革新運動を困惑させている問題に、社会主義国家間の闘争があります。原理的には社会主義国の間に戦争はないとされてきたのですが、ソビエトと中国の争いは資本主義国と社会主義国の争い以上に激しいものがあるようです。それにカンボジアの虐殺やベトナムの難民など、これまでの社会主義の理念では予想もしなかったようなことが次々と現われて、社会主義に期待をかけていた人びとの間で、社会主義とは一体何かが問い直されなければならなくなりました。もっとも従来の社会主義の思想や運動に対する批判は、いま始まったことではなく、六〇年代の新左翼の運動や学園紛争に表われてきました。でもこれらの運動は、運動の激しさの割合いには成果をあげることができなかったようです。

何だか話が政治評論みたいになってしまいましたけれど、問題は女性解放運動の位置づけです。

私は、現代の女性解放運動こそ、日本の国が始まって以来の、天の岩戸以来の大規模な女性の運動ではないかと思っています。明治以来、平塚雷鳥さんのほかの優れた方がたがいろいろな運動をおやりになり、文筆活動や演説でも重要なことをいっていらっしやいます。でもこういう運動に

くらべて、現代の運動ははるかに規模が大きくなっていますし、また多様化しています。

先程、女性解放運動は現状変革の課題をもっており、その意味で革新運動と共通の基盤のうえに立つのだと申しました。しかしここでもうひとつ指摘しておかなければならないのは、女性解放運動と革新運動とは同じ形の波を描かなかったこと、革新運動が高まりをみせたころは女性解放運動はむしろ軽視され、女性の側でも家庭志向が強まった時期だったということです。女性解放運動が高揚したのは革新運動が退潮期に入ってからで、安保闘争も、組合の賃上げ闘争も、スチューデント・パワーも壁にぶちあたったころ、一番遅れてこの運動が登場しました。現代ヨーロッパの女性解放運動も似たような状況を背景としているようですし、この点強調しておく必要があるのではないかと思います。つまり、男性中心の解放運動であることに疑問をもたなかった従来の革新運動が反省期に入ったときに、遅れてきた女性解放運動は、女性の立場に立つことによって、女性と男性両方の解放の課題を提起することができ、壁にぶつかった革新運動にもひとつの突破口を提供することができたということです。産む性として、家事労働力の担当者として位置づけられた立場に立つことにより、生産活動、消費生活、生命の生産、さらにそういう人間の営みのうえに成立する社会構造の全体を新たな視点から分析し、新たな行動の課題を提出することができたということです。

●なぜ意識革命か

こうした女性解放運動を推し進めるにあたったの原点は、意識革命だという話に移りたいと思います。

ここでは、生物学的差異が男女差別のベースにあるという問題から入っていきたいと思います。この点をはっきりさせておかないと、性差別や女性解放を語る場合に不必要な行き違いを生じるのではないかと考えるからです。性差別を身障者や民族の差別などとひっくり返して差別問題と呼んだ

りするのがその例で、こういう呼び方をすると、第一に、差別問題を何か特殊な問題にしていまいまずし、第二に、性差別とはかの差別との違いをあいまいにしていまいます。第一の点についていいますと、生物学的差異に基づく差別も、そうでない差別も一緒にして差別問題と呼ぶならば、当然階級差別もそれに含まれるはずでし、差別問題は社会問題全体と同じことだとさえいえます。ところが実際には、差別問題は労働問題などとは次元が違うという見方があるわけで、このあたりに不合理が生まれてきます。第二の点は、生物学的な性の差異をベースにみないと、たとえば女性を身障者と同じハンディキャップをもった人間と位置づけて、そこから差別問題を考えるという姿勢がでてきます。しかし人類の半数がハンディキャップをもつというのは、大変おかしい話なのです。

第三に指摘しておきたいのは、生物学的差異が男女差別のベースにあるといいましたけれども、これは、差異であつて差別ではないということです。もし女性は出産するから差別されるのだといつてしまいますと、差別をなくす一番早い方法は出産機能返上ということになります。男女の生物学的差異は一定の社会条件の下で差別になるので、そうであるからこそ、その社会条件の変革が女性解放の課題になるわけです。一定の社会条件とは、出産よりも物をつくることに高い価値をおく状況のことで、そういう状況が古代から現代まで続いてきたのですが、そこでは物をつくることにより多くのエネルギーと時間を投じることができる男性が、出産によつて労働を中断しなければならぬ女性より優位に立ちました。そしてこういう男女関係が家族という枠のなかにがっちり組み込まれ、女性の産む性と労働とを利用したこの組織のうえに社会が成立し維持されてきたのです。さらに悪いことには、こういう男女の差別的関係を、「これはおかしい」と思わないように女も男も作られてしまいました。女は生まれながらに男に尽くすものだとか、女は出しゃばつてはいけないのだという観念が、男にも女にも染みついてしまったのです。ですから、女性を解放するには、この観念を追いつくこと、意識改革から始めなければならぬわけで、これが現代の女性解放運動で提起された基本的な課題なのです。

まず意識革命からといいますと、いろいろな反論がでてきますし、反論に答えるということも、

女性解放の重要な課題です。反論のひとつに、意識の変革を先行させるのは観念論で、社会科学を知らない者のいうことだというのがあります。しかし私は、意識革命から始めるのは、女性解放の特殊性なのではないのです。これまで人類が経験してきた人間解放に、市民革命期の市民階級の解放と、社会主義革命における労働者階級の解放がありますが、このふたつの解放に共通するのは、解放の主体が生産力の担い手であり、だから解放が可能だった、ということです。ところが女性の場合には、男性にくらべて「生産力の担い手です」と大きな声ではとてもいえない。では生産力の担い手でない人間がどうすれば自分を解放することができるのか、これまでの人間解放と違って、自分の置かれている状況の認識、状況に甘んじてきた自分自身を変えることから出発しなければ、という理屈が出てくることになります。

また、革新的な方がたのなかにあるんですが、女の意識変革といいますが、女、女といひすぎるとか、男に敵論だとか反対するんです。もちろん一緒にやろうという男性とけんかをしたとは思わないんですけども、こういういい方には、男に都合よく作られた社会のなかで、どのように自分が女性を利用して利益を受けてきたかという自覚がしばしば欠けているのではないかと思われるます。女性が、つくられた自分を変えていくには、男と敵対せざるを得ない場合がある、非常に多くある、そこを通過しないで協力への道はないということをはっきりさせておきたいと思っています。

女性の意識変革は、男性中心社会を揺り動かすことになるでしょう。保守的な男性はそれに脅威を感じて、従来の状態を維持するために意識変革を食い止めようとします。皆さんのなかにはご存知の方もいるかと思いますが、愛知県教育委員会が作ったパンフレットがいい例で、それによると、「男女の特性教育を通じて昔ふうのたくましい男とやさしい女を育成するべきだ」といっています。年ごろになると「男は男であることを確認し、女は女であることを納得する」必要がある、といっているのですけれども、女はやっぱり損だけれど我慢しろという意味がありと読み取れます。これを受けた先生方のほうでは、男の子に草取りをやらせて、その間に女の子におにぎりをつくらせたり、男は剣道、女はお茶やお花という時間を作ったりしています。

このように、女性が意識を変えろという今までの歴史になかったことをやりだすと、あちこちから反対がでたり、圧力がかけたりしますけれども、反対意見には答え、圧力ははねのける努力がまた、意識を変えろ運動でもあると思います。

●運動のなかでの問題

七〇年代に入って高まりはじめた女性解放運動は、国際婦人年には大きな山を迎えることになりました。東京でもいろいろな運動が行なわれたと聞いていますが、私の住んでいる名古屋でも、いくつかの新しい組織が生まれ、活動しました。その時の経験を話してみたいと思います。

国際婦人年だから今年は何かしましょうということ、何人かが呼びかけ人になり、女であることを共通の場として集まってみないかといいましたころ、お年寄りの方も若い方も、いろいろな立場の方が大勢参集してくださいました。そこで、女性はいま不利な立場におかれているから、このあたりで女性の地位を高め権利を拡大させましょうという訴えをしましたら、だれも反対しない、大賛成だということです。

ところが、それから先が容易なことではなくなりました。何回か会合を重ねてみて分かったことは、何が女性の地位を向上させ、権利を拡大することなのかという具体的問題になると、意見は千差万別なのです。「私はヴォランティア活動が生きがい」という人があるかと思うと、「ヴォランティア活動などするから女の労働はただだと思われる」という反対意見がでてくるんです。また「主婦労働を評価し、もっと主婦の財産権を認めるべきだ」という主張があるかと思うと、「自分は結婚しないで働き続けてきた、三食昼寝つきでできた女性を保護する必要はない」という批判がでる。要求が具体的にしなければならぬほど、意見が分かれてしまふんです。

女同士はよくけんかをするとか、足を引っ張り合うとか非難されますけれども、これをみていま

すとその事実を否定することはできません。しかしこういう対立は、女の人が悪いというより、女性がおかれてきた状況に問題があるというべきでしょう。男を一人前にして社会で働かせるという目的が中心におかれて、その目的に合うように女が位置づけられている、男が小さいときには母親が、一人前になれば妻が世話をする、男はさんでこういう立場におかれるんですから嫁と姑の対立など起こらないほうが不思議なくらいです。男中心に位置づけられた地位から女の人たちが自分の権利を主張しようとすれば、対立は必ず生まれてくるわけで、「女の要求」などと簡単に一般化してはいえなくなります。

こういう対立がはっきりしたこと、対立した意見が面と向かって語られたこと自体、女性解放運動が進んだ結果だとみることができると思います。それでも対立は乗り越えなければなりませんし、その方法が模索されなければなりません。それにはまず必要なことは、私たちがそれぞれ、対立した場所におかれているのだという認識をもつことではないかと思えます。自分の立場も相手の立場も女性のひとつの立場なのだとすることを認め合ったうえで、立場を一度越えて女性の問題を論議するという努力がなされるべきではないでしょうか。立場に拘束された思想とか、利害関係に基づく主張と、科学的な理論とを分けるといふ問題は、男性の思想のなかでは論じられてきましたが、女性の思想についても考えてみていいのではないかと思えます。

対立した意見が論じられる場合にしばしば感じたことは、討論の技術というか姿勢というか、そうしたものを私たちが十分身につけてこなかったことです。「女の子は理屈をいうべきでない」とか、「皆の前ではしゃべらないほうがいいのだ」といった習慣や教育が、女性の能力や性格をゆがめてしまい、それが会を進めるうえでの障害になっていることです。また、組織に参加するひとりひとりに、組織に対して責任をもつという意欲が欠けていることも痛感しました。何か問題にぶつかる組織を支えようという人が出にくい。その結果、活動が沈滞してしまうという例をたびたび見ました。

それからまた、男性にくらべて女性が運動のために出しうる資金があまりに少ないということも

痛感しました。原水爆禁止を訴えるためにアメリカに代表を送る署名とカンパが集められたとき、ひとりカンパの単位を、百円にしたらと提案しました。ところがある主婦の組織では、家計をやり繰りしている人の集りだからと三円という数字をだしてきたのです。やや極端な例かもしれませんが、女性の経済力、生活のなかで運動が占める比重などを考えると、複雑な気持ちに襲われました。

●政治運動と女性解放運動

はじめにいたしましたように、女性解放運動は革新運動と共通の課題をもっている、となると、そういう組織とどういう関係をもつかが当然問題になってきます。労働組合との関係を考えてみようと、昨年の暮れ、「国際婦人年あいちの会」では組合の幹部を招いてシンポジウムを開きました。労働組合の方がたのご意見によりますと、「労働運動はすべての被抑圧者の解放を目ざしている。女性への抑圧は独占資本の搾取によるのだから、女性の運動も労働運動に結集すべきで、男と女を対立したものとみるべきではない」というのです。そうしましたら女性の方から、「妻が内職しないといい賃金をといた組合のスローガンは、女性の労働権を考えていないではないか」「女が一生働き続けるためには、労働者の日常生活をどうすればいいと考えているのか」といった質問ができました。これに対して組合の幹部の方は、「今までにそんな質問を受けたことはございませんし、考えておりませんでした」ということでした。労働組合にも女性は大勢いるわけですが、組合の内部でもまた外側でも、女性の要求をはっきり掲げた運動がどうしても必要だと思いました。それから政党との関係があります。この前の参院選挙あたりから女性解放運動は政治に目を向けはじめ、東京では女性の候補を立てて運動が繰り上げられました。名古屋ではその直前に、女性独自の政治運動ではなくて、自治体首长選挙Ⅱ名古屋市長選挙への女性の立場からの参加という形で、政治、政党に関わりをもちました。その結果は、革新側が、政党の基礎票は相手方の二分の一

しかなかったのに、七万票という大差で勝利しました。新聞社の世論調査などと照らし合わせてみますと、七万票の差は女性票ということになります。この経験を生かして今年初めに行なわれた愛知県の知事選挙でもがんばろうと思ったのですが、政党、労働組合、学者・文化人という方がたが集まって行なわれた候補者選定の段階で、革新側は行き詰まっていました。こんなことになるんじゃないかと思いついて、候補者選定段階から女性の参加が必要だと私も考えてはいたのですけれども、「選定は自分たちで、女性の方は候補者が決まってから大いに街頭で運動して下さい」というのが、選定にあたった方がたの姿勢だったようです。ここでも女性の要求をきちんと掲げた組織的運動が必要だということを感じました。そして同時に、どういう形で女性が政治にかかわることができるかは、今後に残された大きな課題だと思いました。

●これからの女性解放運動

あと半年足らずで一九七〇年代に終わりを告げることになります。前にも申しましたように、七〇年代の女性解放運動は、規模からいっても提起された問題の重みからいっても、女性の歴史のうえで画期的な運動だったといえると思います。これを受けて今後の運動をどう展開していくか、することができのかが、八〇年代の課題となるわけです。これまでに私は、現代の女性解放運動の位置づけ、意識変革の意義、運動での経験など、ちょっとくどいくらいにお話をしてきたのですが、その意図は、八〇年代の運動は基本的には七〇年代で出された問題を継承していくのだといったかったからです。意識変革などはまだまだこれから多くの問題が出てくるでしょうし、運動の過程でも克服されなければならない古い意識が顔を出してくると思います。

しかしひとつの区切り目を迎え、運動のうえで新しい展開があるように思います。女性解放の要求を一口でいってしまえば、女性も男性も同等に、労働の場でも生活の場でも自立した個人として

生きていくということではないかと思うんです。この要求を、これまでの運動では、具体的に優生保護法反対、家庭科の男女共修、保育所設置、性別役割分業の廃止など、さまざまな角度から取り上げてきましたし、今後もそれは続けられることと思います。これらに加えてこれからは、労基法、雇用平等法の問題がクローズ・アップされてくるのではないのでしょうか。

たとえば「性別役割分業を廃止せよ」といっても、現在のよう採用時から男女差別が大手を振ってまかり通っているような状態では平等は実現しません。女性の意識変革が重要だといっても、それを支える経済力を女性がもたなければ挫折してしまうでしょう。外へ出て働かない専業主婦でも意識の変革はできるのだ、という意見を聞くことがありますが、私は、基本的には、専業主婦が専業主婦として自らを解放するのは困難ではないかと考えております。しかし、現実には主婦が働きに出るにはいろいろな障害や差別がある、この障害や差別を取り除くためには、労基法や雇用平等法に取り組まなければならない、この意味では、これは働く女性だけの問題ではなく、主婦の問題でもあるということになります。

労基法や雇用平等法については、すでに活発に運動をしていらっしゃる組織がありますし、△△△でもティーチ・インを重ねておいでになります。これからの女性解放運動の重要な課題として、この問題について私なりに感じていることを申し述べてみますと、これまでの運動とちょっと性格が違うんではないかと思われる点があります。従来の運動では、賛成とか反対とかの姿勢をはっきり打ち出した運動が多かったのですが、雇用平等法のように新しい法律を作るといふ運動になりますと、話はそう簡単ではない、専門的知識や経験も必要となります。それに政府や政党、労働組合も、それぞれの立場からこれに取り組んでいますから、それにどう対応していくか。また、これまで、女性の眼が労基法の母性保護撤廃の問題のほうに多く注がれてきましたので、それを雇用平等法を作るほうへもどう向けていくか。どんな法律もそうでしょうが、この種の法律はとくに、法律を作る過程での運動が重要な意味をもっていることを考えますと、できるだけ多くの女性の力の結集が必要となってくるでしょう。いまいましたようなわずかしい問題に対処しつつ、女性の

立場にしっかりと根をおろした、下からの運動をどう展開していくかが、八〇年代初めにぶつかる大きな課題といえるでしょう。

労基法、雇用平等法の問題と並んで注目しなければならないのは、大平首相提唱の「家庭基盤充実」政策です。自民党の特別委員会が発表した対策要綱によりますと、家庭を国家社会の中核的組織として位置づけ、老親の扶養と子供の保育、躰は第一義的には家庭の責務だとして、そのための施策を講じようというのです。どうやらこれは、女性を利用して現在の諸問題の解決を図ろうとしているように思えます。これは、老人の介護や子供の保育、躰を家庭の義務だ、つまり実際には女性の義務だとして、女性の働きたいという欲求を抑え、働いている女性は家庭に帰し、その分、男性失業者を減らすことができるし、福祉予算も削ることができる、政府にはとても都合のよい政策です。

これが発表された時、私はナチスの政策を思い出しました。ワイマール体制下のドイツには、女性の国会議員、大学教授がいましたし、管理職にも女性は就いていたのです。ところがナチスが登場して、「女の場所は家庭だ」といい出し、そういう地位から女性を追払って男性にとって代わらせ、「男は外、女は内」という体制を徹底させて男性のエネルギーを外へ向け、ドイツは戦争への道を進んで行きました。有事立法とか元号法制化などとなげて考えますと、「家庭基盤充実」政策は危険な要素をはらんでいるように思えるのです。

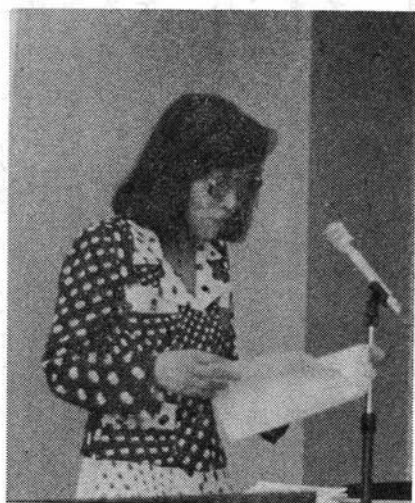
家庭基盤の充実などといいますと、安定した家庭、温かい家庭といったイメージが浮びやすいのですけれども、七〇年代の女性解放運動の特色のひとつは、こういう家庭のイメージに対し、女性抑圧の組織としての家庭を暴き出したことにあるといえます。七〇年代を継承するこれからの女性解放運動は、家庭をめぐる政府のうえからの政策に対して、さらにははっきりした姿勢を示さなければならぬのではないのでしょうか。

（市邨学園短期大学教授）

〔一九七九年六月二十三日 新宿文化センターで講演〕

主婦のあり方を問う

松井やより



松井です。まず自己紹介ですけど、この間「女ならやってみな」というデンマークの映画を見たんです。男と女の世界が全くさかさまになっていて、普通だったら部長が男で、秘書とかタイピストがみな女という職場が、あるとき女が部長になり、使われるほうが男だというふうに入れかわったところを、非常にユーモラスに描いているんです。私の毎日の生活というのも、

去年の十月から立川支局長になったので、十一人の大の男——二十三歳から五十五歳まで、全員男なんです。世間とはアベコベの世界で、女一人ががんばっているわけです。

私が朝日新聞社に入っしたのは一九六一年で、その頃就職試験

を受けさせてくれる所が、なんと出版社と新聞社と、あと二、三社しかなかったんですね。それで出版社二つと新聞社を受けたら、たまたま新聞社にまず合格した。で、入社してみたら、恐ろしいくらいに男社会で、広い編集局に女が一人という状況なんです。それは二十年たったいまでも、あまり変わっていないんですけど。

母親から自立を学んだ

実は、私高校二年生のとき病気になる、まる四年間、療養したんです。そういう長い病床生活で、病者というか、世の中からとり残されるということがどんなにつらいか、身にしみて感じたわけです。自分は体が弱いから、多分結婚もせず、一人で生きていかなければならないのではないかと、それで何か生きていくための手だてはないかと考えたわけです。たまたま四畳半の小さな部屋ですつと寝てましたので、いま「翔んでる」という言葉が流行っているのですけれど、私はその頃、本当に「翔びたい」と思ってたんですよ、毎日寝てますから——（笑）。寝るといっても、まる一年間トイレにも行けない絶対安静で、起きていいといわれたとき足が立たなくて、歩く練習から始めたぐらいだったから、本当に「羽があったら」と思ってたんです。それで、外国語をやって、元気になったら世界へ行きたい。

行けなくてもせめて翻訳を通じてでも広い世界とつながりをもてたらと思いい、それで語学を選んだわけです。それが一つの武器となつて、新聞社の入社試験にも受かり、結果として身を手助けしたんじゃないかと思うんですね。というぐらい、女というのは、この日本では男と同じ能力をもつただけではダメなんですね。女は子どもを産むというハンディキャップを負わされているやっかいな存在だと、世の中が頭から思い込んでいる。それを補う何かをもっていなければ太刀打ちできないということを身にしみて感じたんです。

私は小さいころから誰かに養ってもらう、食わしてもらおうという屈辱的な生き方を考えたことが一回もないんです。それはどうしてかという、一つには病気を通しての体験があるんで

すけど、もう一つは自分の母の生き方というのが、自然に身についていたんです。私は妹が三人います、妹たちとの小さいころの話題は、大きくなったら何になりたい、どういう仕事をしたいかだったんです。結婚するのは当たり前と思つていましたが、どういう人の所にお嫁さんに行くとか、話したことはなかった。女の子の育て方というのは、やっぱり母親の生き方というのが、どんなに影響があるかということを、自分自身の体験からも感じるわけです。

私は典型的なカギっ子で、学校から帰って、母を探して、さびしいと思つたことも確かにあります。うちの母は、キリスト教関係の仕事なんです、必死になつて飛び回っているのを見て、私は子どもなりに共感をもつたんですね。自分もそういうふうになつていきたいと自然に感じたんです。以前に田中美津さんという大変戦闘的なウーマン・リブの女性、うちの母に会つたときに、「あなたのお母さんは先天的リブね」なんて感心するぐらい、いまでも七十歳以上ですけど、保育所なんかやって活動的ですね。身近にそういう元氣よくやっている女がいるのといないのでは、ずいぶん違うのではないかと思うんです。

松田道雄氏の専業主婦肯定論

今日は働いている女の方も多いし、専業主婦であることに疑問をもっている方も多いと聞いたものですから、ぜひ話したいなと思つて来たんです。で、まず、一冊の本を手がかりに考え

たいと思います。岩波新書で松田道雄著『女と自由と愛』という本が最近出ています。私はたまたま本屋で手にとって、「女」も好き、「自由」も好き、「愛」も好きだから（笑い）買ってみたんですね。夏休みに読んでみて、これほど不愉快な本は、最近ないと思った。よく売れているというし、大変好評な本のようで、これを読んで、「ああ良かった」とほっとしている女性、それに男性も結構多いというのを聞いたんですね。

この本の主旨を一言でいうと、「外で働くよりも、家庭にいる専業主婦を職業として認めなさい、それが女の幸福ですよ」ということです。それはなぜかという点、「家庭」というのは、男社会、管理社会の解放区なのだから」という。ここに書いてあることは一つ一つ頭にくることばかりなんですけど（と憤然と）、たとえば「早く結婚したほうがいいですよ、遅れるといい結婚はできませんよ」とか、しかも、「女の人は頭のよく切れること、学識の深いこと、男社会のなかでもゆうに生活できることは、はじめからひもになろうと思っている男以外には魅力になりません」とか、ひどいことがいっぱい書いてあるんですね。あげくの果てには、「夫は外で働く、妻は家庭を守る」という役割分担を決めたからには、夫が家に帰ってきた時、外の世界にはない快適を用意するのが妻の仕事だ」そうです。こういう考え方の人が、日本ではまだ多い。それが世間の常識なんです。『働く能力のある者は働かなければならない』などという考え方は、とんでもない」という。「男本位の世界なんですよ、だから自分の能力というものとよくよく相談して。よくわきまえて、外で働くなどということは考えず……」と書

いてある。結局、結論としては「編物など好きなことに熱中して、男に快適さを用意して、ちよつとつつましやかな市民運動でもしたらよい」という。「つつましやか」にやれっていうんです。私、家庭の主婦がこれを読んだらこれまでいろいろ悩んだり、何かやってみたいと思つていても、「なるほど、そうだったわ、何も無理して家庭の外へ出る必要なんかない」と主婦として生きることを正当化するんじゃないか、と思いますね。

とにかく、これを書いた松田道雄氏は七十歳を越えている明治生まれのおじいさんで、小児科のお医者さんです。進歩的な思想の持ち主で、私も松田氏の書いた『ロシア革命』にしてもいろいろ読んで感動したことがあるんです。そういう人がですよ、そこら辺の週刊誌でくだらないおしゃべりをしている男じゃない人が、岩波書店という良心的と見られている本屋からこういう本をへいま、出すVということに、日本の女をとりまく今日の状況があると考えざるを得ないんです。

この人が一番言いたいのは、「女と男は生物学的に違う」ということ、たとえば、もうとつくの昔に、アメリカの女性解放運動の人たちが論破している古臭い理論、「男の性欲は非常に能動的であり、女の性欲は受動的だ」なんていうことをいままち出して書いているんですね。しかも、もう一つ問題なのは、日本のいろんな運動をやってきた女性を、たとえば「平塚らいてうは強い女であつて、売春婦の人たちのことを考えた廢娼運動、矯風会の人たちは弱い女たちの運動だ。しかし強い女の運動も、弱い女の運動も、いまはいらなくなった。というのは、いまは女の人も法的平等を勝ち得ているのだし解放されるもの

がなくなったから、目標を失った」と恐るべき現状認識なんですね。普通の女と、選ばれた女をことさら分けるおきまりの手です。「普通の女」というのは、日常的な落ち着いた結婚の形式、そういう普通の生活というものが、一番幸せなんだ。選ばれた女だけが革命とか、女性解放運動とかを言うのである。戦争中のように、一億国のために、なんていうのはけしからん。自分のマイホームというものを、とにかく大事にしなくてはならない。そして、「専業主婦になるか、働く女になるか、どちらがよいかを強制するのではなくて、自分で選べばよい」というわけです。この人は選べると思っているんですね。

相変わらず「男は仕事、女は家庭」のすすめ

私はこの本を読みながら、相も変わらぬ「男は仕事、女は家庭」という役割分業というものが、いかに時代錯誤かということとを、松田氏は考えていないと思いましたね。小児科のお医者さんなのに、いまの人口の変化や、ライフサイクルの変化というものの、なんの関心もないんじゃないですか。まさか女の平均寿命が八十歳にも伸びて、しかも子どもの数は一人とか二人とかいう時代に、夫と子どものためにそんなに長い長い女の一生を捧げなさい、という、そんな時代ですかって言いたいんですね。それに家事労働の変化というものもあります。家庭電化製品などの普及で、朝から晩まで家事に追い回されることもなくなりました。相も変わらず、女は家のなかにいて、管理社会で

疲れ切った夫を快適に慰める解放区としての家庭、という考え方を、非常に進歩的、良心的といわれる男性が、わざわざ本に書いて教えさそうとしている。

もう一つこの本について、けしからんと思ったのは、何回も何回も「いまは男本位の世界ですよ、男尊女卑の習慣が残っている社会ですよ、だからそういうなかに入って女が仕事をするのは大変だからやめなさい」。つまり男本位の世界であることに、自分は男として責任を全然、感じてないし、何一つ変えようとしなくて「家庭にいなさい」と説教する。こういう男本位の世界を変えることをアドバイスするんじゃないで、
「編物」や「つましやかな市民運動」をすすめる。こんなことで男本位の社会がどうやって変わるのか。そういう男社会を、松田氏は固定させようということが見え見えなんです。

さっき言いましたように、私はもう二十年近くも朝日新聞の記者をしていて、支局長と「長」がつくから、ちよつとエリートっぽい感じがするんですけど、支局長なんて朝日新聞社で百人以上もいるんですよ。今年は朝日新聞創刊百年で、初めて女が支局長になった、それぐらい新聞は遅れているんです（笑い）。そういう意味で、下っ端の下っ端の管理職で、わずか十人かそこらの部下を抱えるようなポストに女がついたというだけで大騒ぎする。女性記者たちが何かやるとすぐ、「エリートだ」、「あなは能力がある」、「あなたは特別だ」、「あなたは強い女だ」とか、いろいろまわりの男性から言われるんですね。「普通の女はダメだが、あなたは例外だ」といわんばかりにね。こんなふうに女の人を選ばれた女、エリート女と、普通の女、ただの

女、というふうに区別するのは、女性の側もやるんですが、それを松田氏はことさらに強調するわけです。「特別な才能をもった選ばれた女は、女性解放の運動でもやればいい。しかし普通の女たちは、家庭で静かにしていच्छい」と。女を分断する発想ですね。

もう一つ、松田氏は専業主婦でいられるのは、経済的に恵まれている女性たちだ、という点を忘れているのか、わざと無視しているのか……この厳しい消費社会に夫の収入だけで生きていける階層というのは限られていると思うんです。何かの形で経済的に補なわないと、いまの物価高の日本で暮らしていない状況があるのに、そういうことに全然触れないで、夫に経済力のある妻のことだけを、女性全般として述べているまやかしがあるんじゃないか。

ただ、問題なのはこうした男女分業論というか、専業主婦礼賛論は、実は松田氏だけの意見ではなく、日本の社会では多数意見だということです。また、経済的な理由で働いている女の人のなかにも、「夫のかせぎで生活できるなら、専業主婦でいたいなあ」と思っている人たちが、たくさんいると思うんです。つまり、賃金も安い仕事につかされている女性が多いですからね。その意味でこの本は、いまの日本の女にも男にも非常に受けて、売れるだけの素地があるという状況なんですね。私はそういう日本の状況について、なかなか変わらないなあと絶望的な気持ちになることもあるんですけど。

ただそういう多数派ではなくて、いまの状況に対しておかしいんじゃないかと思う女の人たちが、少しずつ増えているとい

う現実もあるんで、松田氏はそういう女たちの力を恐れて、「いや、そうしないほうがいい、家庭という解放区にいなさい」ということを言いたかったんじゃないかとさえ思うんです。もし女の人たちがみな「編物をして、夫に快適な場所を提供する」という生活に甘んじている状況であるなら、わざわざ七十を越えたおじいさんが、——二年半も費して、女の人たちのために書いたそうですが（笑）、そんなことはしなかったと思いますね。やっぱり「それはおかしい。もっと人間らしく生きたい」と思うようになった女の人たちが確実に増えている、と考えたいですね。

女性記者、なんと一%弱

私はこの本を読みながら、もしも松田氏のいうような専業主婦がもっとも増えたとしたら、世の中、どうなるかと逆に考えてみたわけです。というのは、私の職場はほとんど九十九%が男性です。主な新聞社の女性記者の割合を調べたら、なんと〇・八%なんです。一%にも満たないわけです。こんなに女が少ないのは日本のマスコミぐらいで、これは異常なことだと思うんです。たまたま公害問題の取材で、ストックホルム国連人間環境会議に行ったとき、日本からは百人以上の記者が押しかけたんですけど、なんと女性は私ととう一人テレビ関係の人だけ。新聞記者は私一人が女性なんです。ところが世界各国から千五百人ぐらいの新聞記者が来ていて、記者会見に出ると女性記者が三分の一ぐらいもいるんですね。

日本の新聞社は女性記者は数少ないうえに、ほとんどが婦人欄担当なんです。社会部とか政治部とか経済部とか、世の中を動かしている、牛耳っている側を取材する分野にはほとんど入っていないわけ。そんな異常なことを異常だと思わないのが、日本のジャーナリズムの現実です。テレビのプロデューサーとか、番組を作る人も圧倒的に男の人が多い。なぜそういう男が作る新聞、男が作る番組を毎日毎日押しつけられていることにもっと怒らないのか。

私はいま立川支局長として三多摩地域のニュースを全部カバーしているんです。三百万人以上の人が住んでいて、地域の問題がいっぱいあります。保育所の問題、老人の介護の問題、消費者の問題など非常に女の人に関係深い問題があるんです。ところが日々の取材は男性がやりますから、私が女性支局長としてがんばっても、なかなか女性の視点で地域のニュースを書いてくれないんです。だから私は、この支局に一人でも女性記者がいたらどんなに違うだろうと本当に感じるんです。支局の男性記者たちはとくに女に悪意をもっているわけではなく、わからんんですよ、女にとって切実な問題が。男性の記者たちは、たとえば保育所の取材をすると、女たちが考えているのは逆の取材をしたりするんです。どういうふうに取り材するかというところ、保育所が足りなくて困るというのではなくて、保育料は安すぎるからもっと保育料を上げたかどうか、というふうな記事になっちゃう、そんなふうな取材なんかしてもらわないほうがいいくらいです。そんな状況ですから、私は毎日の生活のなかで、女性にとって大切な問題をもっとマスコミで取

り上げなくちゃいけないのに、それを取り上げる場にいるのは男ばかりという実態を何とかしなければと思うんです。それにはもっともっと新聞社のなかにも、女の人たちが入ってきてほしいわけですよ。

男社会へどんどん入って変えよう

「そんな男中心の管理社会のなかに、女が入って、男と競争して、男みたいにするということに、何の意義があるのか」とよく反論されるのですが、私はそれは敗北主義だと思うんです。そういう観念的なことをいう女の人が日本に多いから、男たちが権力をもっている社会を変えることができない。まさに男たちが望むとおりのことを、日本の多くの女たちが言っているわけ。女性解放を唱える側の女たちがね。たくさん女の女たちが男社会のなかに入っていかなきゃ変わらんんですよ、外にいてブツブツ言っているだけではね。入っていく場合は男と同じことをやるんじゃなく、女であるということそのまま保って、男社会をゆさぶり動かしていかなければ、いつまでたっても、状況は変わらないと思うんです。

それはマスコミに限らず、たとえば国会に取材に行っても、見渡す限り男、男、男。女と言えば速記者ぐらいですよ。日本の政治というものは男が牛耳っているということが、イヤというほどわかるんです。女が家のなかに引っ込んでいたんではこういうこともわからない。なんでもっとそういう所に日本の女

は入っていきうとしないのかなあと思うんです。国政レベルだけではなく、地域の政治にもね。今年の四月に統一地方選挙があったんですが、このへあごらVの山本かなえさんという方も、東村山市で女だけの選挙で当選したんですね。それはすばらしいことだと思っただけです。なんで、市会議員というポストを男に任せなきゃいけないのか、市会議員なんて別にむずかしい仕事じゃない。はっきり言って誰でもできるんですよ(笑)。昔からのお百姓さんで土地を持っておじいさんとか、どこかのお店なんか経営しているおじいさんとか、そういう男の人が市議をやっている。何億円かの市の予算の使い方を、そういう男の人たちに任せないで、どんな女の人たちが市議になって女にとって必要なことに支出させるようにしたい。

三多摩地区には三十二市町村あるんですが、女の議員が一人もいない市がいくつもあるんです。こんなバカげたことが、もう二十一世紀に近づいている時代に、なんで許されるのかと思うんです。家のなかで編物なんかして、男に快適な場所を用意するなんてのききなことをやってもらえませんか。もう私は松田道雄氏をやっつけてやりたい。(満場爆笑・拍手の渦)

私は男社会のなかにいるから、こういうことがよく見えてくるんですよ。というのは、本当に一人か二人の女性議員が入るだけで、ずいぶん変わっちゃうんですね。三鷹市とかいろんな市で女の議員たちが活躍していますけど、本当に真面目で熱心で男の市議なんかより、ずっとよくやっていますよ。保育の問題一つとっても、寝たきり老人の介護のこと、緑を守っていくことなど、一生懸命勉強して、地道に取り組んでいますね。女

の人たちは汚い妥協や取り引きでごまかしたりしないし、がんばっていると思うんですね。

市役所の職員はどうなっているか、私はたまたま関心をもったので支局の男性記者たちに記事にしてもらったんです。課長以上の女性管理職の人数を調べたら、二十六市のなかで、課長以上の女性がいるのは十一市しかない。市役所の管理職の仕事はそう専門的でなくなってきたんです。普通の大学教育を受けた男の人が、年次がくれば管理職になっているんですから。自治体には二十年、三十年勤めている女子職員はいっぱいいて、全体の三分の一か、半分近いでしょう。ところが女子の管理職は本当に少ない。課長が三人いるところが一番多くて東村山市。あと二人のところは二、三市ありますけど。女性部長はたった一人いて、それは府中市です。

私はとくに地方の政治は、女がやらなくちゃいけないと思うんです。よその国ではそうなっていますね。たとえば、オスロの市議会は過半数が女とか聞いてびっくりしたんです。来年、デンマークで国連婦人の十年の中間会議があるそうですが、前に行ったとき、女市長さんにインタビューしました。アメリカで二番目の大都会、シカゴの市長さんも最近女性を選ばれましたね。

学問の世界なんか日本は男の学者が圧倒的ですね。もっともって大学なんかで女の人たちがいろんな研究もやらなければならぬと思う。男の人たちの発想だけでは、いつまでたっても生産第一の学問に終始しちゃうんじゃないかと思うんです。裁判所でも、日本はど女の裁判官が少ない国は珍しいですし、

大企業が女性を入社試験からしめ出しているなんていうのは、日本だけの特別な現象なんですね。東南アジアの国に行っても同じ大学を出ているのに女子には入社試験を受けさせないなんていう国は、どこにもないですよ。こんなバカなことが、いまでも日本ではまかり通っているわけね。女子は採用しても別ワタなんです。堂々と女性を差別している。そういう状況に対して怒りの声も多い。日本では、自分で何かやりたいと意欲をもっている女には、どんなに壁が厚いかということを身にしみて感じるわけですね。

いまはパイオニアの苦しみを背負う

そういうわけで、私はエリートだ、何だと、同性からも罵倒されつつ、男社会のなかに入り込んで女であることを日々つきつけて仕事をしているわけです。私は自分の「役割」をはっきり意識しているんです。男のようになろうと思わないで、女であるということを書き通すギリギリのところでがんばるということです。といっても、まず男と同じに仕事をできなければ誰も相手にしないわけで、男と同じに仕事をして、なおかつ女であり続けるといふ綱渡りみたいなことを、努力してやっているわけですね。どうしてそうしなければならぬかという、いまの時代はまだ日本では圧倒的に男の社会である。それを、男女平等社会に変えていくためのパイオニアの時代なんですね。だからパイオニアの苦しみというものを背負う女が一人でも増

えていかなければと思うんです。なんでそんなにがんばるの？とか嘲笑う人も多いです。うちの亭主まで「そんなにいつも原稿用紙と悪戦苦闘していると、そのうち原稿用紙に頭つつこんで死ぬんじゃないか」なんて笑うんですね。だけど普通の原稿のほかに、女の問題も書かなくちゃいけない。マスコミはあまりに限界があるので、ミニコミで対話せざるを得ないんですよ。だからどうしたって必死になっちゃうわけです。原稿用紙のなかで死ぬれば本望だわ」なんていうんです。いまの時代はそのぐらゐの覚悟でやる女が、一人でも二人でも増えないと男がのさばっている世の中は変わらないですよ。

もう一つは男社会のなかに入り込んで、「ゲリラ」になろうと思うんですね。男社会のなかに入ったって仕方がない、と最初から入口の前で立ち止まってしまったんでは、どうやって男社会をゆさぶれるのか、それじゃ敗北主義ですよ。私は男の人たちが、女の言い分に対してせせら笑うような態度をとるというのもよくわかるんですね。つまりいまのような女の抗議のやり方では、痛くも痒くもないわけね。社会のどこかで責任をとらなくていい場で、いろいろ言ったぐらゐじゃ男社会はビクともしない。彼らにとつてやつぱり一番恐ろしいのは、自分たちの場に入ってこられることなんですよ。百何十人いる社会部の記者のなかで、女の人はいくら一人いるだけですが、お互い励まし合って、ファイトを燃やして、大いにゲリラ的にやっているんです。二人がいるために、社会部の男の人たちも、表だって女の悪口なんて言えないわけです（笑）。私たちはすごく恐ろしく思われているんです、その点で。これは私が自分に課し

た生き方ですが、それぞれの女の人がいるいろいろなしんどい条件を背負っているわけで、私と同じようにやる必要はもちろんありません。ただ一人でも多くの女たちが、それぞれのやり方で、バイオニアに、ゲリラになってほしいんです。

というのは、松田氏が「専業主婦でいいんですよ。働くかどちらかを選びなさい」といってもそれを女が選べないということ。つまり、女が働くこうと思っても働く場がなくて、女であるというだけでしめ出されている状況や、選択できないという現実があるわけですね。松田氏は働きたいなら働ける、と思っているわけです。これは基本的に間違った認識なんで、じゃあ、松田氏がそういう状況を知って変えてくれるかといえ、変えてくれないわけです。女自身が闘って変えていくよりはかないわけですね。だから女が働くか、あるいは家庭のなかで生活するのは、個人の自由ですから、国家権力で「あなたは働け」と強制するのは私も大反対ですが、現在のように働こうと思っても働けない、仕方なく家庭に閉じ込められる生き方を強制されているのも問題です。そういう状況を、女自身でどうやって変えていくか、だと思っています。

誰かの犠牲のうえに成り立っている生活

もう一つは、選ぶことができるようになって女性が主婦として家庭のなかで生きていくということもいいんじゃないかという個人の自由は、確かに私も尊重します。だけどそういう生き

方というものが、誰かの犠牲によって成り立っているようなものではないか、ということを考えてほしいんです。

七五年のメキシコの国際婦人年の会議で、アメリカの女性解放運動あるいはヨーロッパや日本のような先進工業国、いわゆる豊かな国々での女性解放運動に対して、貧しい南の国々の女たち、第三世界の国々の女たちが、「あなたたちは特権のなかで男女平等を言っているんじゃないか」という非常に厳しい批判をしたんですが、私は当然だと思うんです。メキシコ会議では素適なドレスを着て「女性の地位を向上しましょう」と次々と立派な演説をした各国の女性の代表のなかに、あのイランのパーレビ国王の双子の妹のアシュラフ・パーレビ王女もいて、あの女性が会議の最もスター的な存在だったんです。何しろ巨額のカネを国連に寄付しましたから。イランでどれだけの人たちを殺し、拷問にかけたか分からないパーレビ体制の一員である彼女が、きれいなフランス語で女性の問題を演説した。そのイランからは「女性の社会学者が投獄され、拷問されているので、彼女を何とか救ってほしい」と悲痛なアピールが日本にもきていたわけなんです。そのような弾圧をやっているのは、まさにパーレビ一家だったんです。だから、イラン革命で追放されてしまった。

それに、フィリピンのマルコス大統領夫人。素適なこういう（手振りや肩のふくらみを示す）民族衣装を着て、達者な英語でスピーチをやり、ミス・フィリピンの美貌をひけらかすように写真入りの演説草稿をばらまいていました。けれどあの国では戒厳令でどれだけの人が投獄されているかわからない。トン

ドというマニラ郊外のスラムの人たちは、トイレも何もない水びたしの小屋でやっと生活している。そういう人たちに「なんとか人間らしい生活環境を」と立ち上がった、三十何歳のトリニダート・ヘレラ夫人というカトリック系の女性活動家を捕えて、乳房とか、性器にもすごい拷問をした。それが、マルコス一家のわけでしょう。そういう各国の文字どおりエリート女性、政府代表として確かにすばらしい演説をしていましたけど、彼女たちが自国の貧しい人々、女たちに何をしているかと思うと、私は今憎しみをもってしか、思い出さないんですね。

その会場のきらびやかな雰囲気と対照的に、外に出れば、八つか十ぐらいの女の子が裸足で、一握りのガムを売り歩いているんですね。少し暗くなると十四、五歳の女の子が街に出て、客を引いているわけです。それから会場近くの大きなホテルのまわりでは、インディオの女の人たちが道端に坐り込んで、ボロボロのショールをかけて、赤ん坊を抱いて、雨に打たれて物乞いをしているわけです。そういう貧しさ、悲惨さというものを、私はどうしても忘れることができないんです。だからメキシコの当時のエチエペリア大統領が、主権国の大統領としての演説で、「最も虐げられ、抑圧された女たちは、わが子にパンを与えられず、学校にやることもできない、そういう母親たちだ」と、まず、開発途上国の何億という女たちの生存権を訴えたわけですね。

そういう貧しさというものは、メキシコだけじゃなく、すぐ隣の韓国に行っても、東南アジア、たとえばインドネシアのジャカルタなんかに行ってもある。ほんとに小学生ぐらいの女の

子が、バタヤの籠をしょってゴミをあさって歩いているし、小学生ぐらいの男の子が、どんどん走ってくる車の前に立ちはだかるようにして、新聞を売り歩いているわけです。そういう子どもたちと、今の私たちの日本の生活と関係がないかというものすごくあると思うのです。

私は去年の秋に、マレーシアの公害関係の会議に行ったんですね。ボルネオ島の北のほうにサバ州、サラワク州の二州があるんですけど、サバ州にキナバル山という、東南アジアで一番高い、四千メートル以上の山がある。国立公園になっている実に美しいところで、そのキナバル山の中腹に、三年前に日本が開いたマムート銅山があるんで、そこへ行っただけ緑が剥がされたように、泥だらけのハダをむきだしにしています。この銅山でとれた銅は、全部日本に持ってきて電気や電話の電線なんかの原料になって、私たちの生活を豊かにするために使われている。ところが露天堀りでどんどん堀った土を山と積み上げたため豪雨で川を伝って、ふもとの村にドツと流れ込んでしまった。その小さな村の田んぼは、全部銅を含んだ土で覆われてしまったため、結局、米もとれなくなり、川では魚もとれなくなつた。

銅山を見たあと、私はその村を訪ねてみたら何世紀も昔から静かに田んぼを耕やしているようなとってもやさしい、正直なカダザン族の人たちが、突然日本が銅山を開いたために、米も魚もとれない悲惨な生活につき落とされた。原始的な高床式の家に住み、六人も七人も子どもを産んで貧しく暮らしているわ

けですが、私はその小さな家に入ってみて、電話はもちろん、電気さえないことにものすごくショックを受けたわけです。村のすぐそばでは豊かな銅がとれているにもかかわらず、そこに住んでいる村人たちは何の恩恵にも浴さないで、逆にすごい公害を受けているんですね。その一方で日本ではその銅を使ってどこでもあかあかと電気をつけ、電話がどの家にもあるという便利な生活が成り立っている、という関係を、私たちは考えたことがあるかというんです。

もう一つマレーシアでショックだったことは、ペナンというきれいな島の対岸に、クアラ・ジュルという小さな漁村があるんです。この数年間にその漁村のすぐ前に、大きな日本の工場がいつぱいできたんです。東レとかカネボウとか、不二サッシとか農業の会社など。ところが、その工場からどんどん廃液が流れてきたために、その漁村では魚がとれなくなり、子どもたちは学校へ行くお金もなくなってしまうんです。その村へ行ったら、戦争中、日本軍にやられていることがわかったんですね。聞いてびっくりしたのは、コナツツという三十メートルぐらいの高いヤシの木に、村の人たちがちよつとでも日本軍に協力しなかったら「登れ」と言われる。木に登ると根っこから木を切る。上からドドンと落ちて死ぬ。死なないと日本刀で殺したというんです。この村は、戦争中日本軍からひどい目に遭い、今度は公害でひどい目に遭っている。これは今の日本と東南アジアの関係のまさにシンボルなんです。

私たちの「アジアの女たちの会」の機関誌に、「クアラ・ジュル・ある村の死」というマレーシアの詩人の詩を訳して載せ

たんですけど、工業の汚染のために小さな村が死んでゆくことを嘆いた詩を読んだとき、これをやっているのは誰かという私たち日本人なんです。つまり、日本の企業が国内では工場を作れなくなつて、海外に作るという経済活動のうえに私たちの生活が成り立っている。日本の高度経済というのは、女たちを抑圧しながら、男たちがバカ働きをして、その結果として日本人一人当たりのGNPは、六千ドルを突破しているんですよ。ところが東南アジアの貧しい国々は二百ドルとか、よくてもマレーシアの五百ドルとかです。つまりその生活水準の差というのは、金持ちの大邸宅が一軒あつて、周りに掘つて小屋があるというのと同じ状況だということ、そういう不平等がいままで許されるのか、私たち日本の女も目を開かないといけないと思うし、家のなかに引込んでいたのでは、わかりっこないんです。

戦争協力をした「銃後の妻」たち

私は、松田氏に言いたいのは、「戦争中、滅私奉公で何でも国のためにといったのはけしからん。家庭をもつと大事にしろ」といわれるけれども、日本の女は「家庭を大事にした」から、戦争が起こつたともいえますよ。あの残酷な戦争というものを、日本の女たちは封建的な家制度にしばりつけられて、防ぐことができなかったんです。反戦に立ち上がるところか、日本の女たちは積極的に戦争に協力したんですね、銃後の妻として。

私は戦争中の日本の残虐行為というのを、中国に一年いて、イヤというほど知らされたんです。一つだけ例を挙げますと、平頂山という村が昔でいえば「満州」にあるんですが、その村には抗日ゲリラがいるというんで、ある日、日本の兵隊がトラックでやってきて、三千何百人の村人たち——赤ん坊も老人も全部、「崖のほうに行け」と言ったわけですね。鉄砲で脅かしながら一人残らず、崖の下に集めた。そうして、その人たちを全員銃殺したんですね。生きている人がいるといけないというので、ガソリンまでまいて焼いた。その残虐行為を隠すために、後ろの崖をダイナマイトで爆破して土をかぶせ、三千何百人かの虐殺された遺体を隠したのです。

たまたま何人かの子どもたちが生き残り、その人たちがあとでこういことがあったと証言したわけです。それで七、八年前からそこを掘り出したら、白骨がどんどん出てくるわけ。私が行ったときは、その白骨をそのままにして、その上に屋根を作って「同胞遺骨記念館」というものができていたんです。子どもを抱いたお母さんの白骨や、それから胎児の骨なども見える。まだ死んでないだろうと割られた頭、ガイ骨なんかもある。八百何十体という遺体が殺されたときのままの格好で骨になって残っているんです。それをみたとき、私は卒倒しそうになった。そういう残虐行為を戦争中やっていたということを、日本人の誰が知っていたか、知らなかったと思うのです。

醜い日本の母子関係

私は知らないというほど、恐ろしいということはないと思います。日本の企業が若い女子労働者たちを、「女工哀史」さながらに安く使っている例が、韓国でもタイでもいっぱいあるんです。私たち日本の女性たちは、そういうことを知らされないように育てられている。日本の女性の関心は、家庭のなかのこと、それに自分の子どもをいい学校にやるということだけが最大の関心であるというふうに育てられている。受験シーズンに一流ホテルなんかに行くとかすこいですよ。まるで受験生の息子がプリンスみたいにいばり返って、お母さんが奴隷のようにご機嫌とりをしている。そんな母子のカップルを見ると、情けなくなるというか、みじめになってしまふんです。この母親の姿が。

息子がちよつと頭がよくて、いい大学に入り、いい企業に入りますね。その一流企業というものがどれだけ犯罪的なものか、公害問題を通じてよく分かるんです。たとえばチッソは水俣で水銀を流し、大勢の人たちを狂い死にさせた残虐な殺人企業でしょう。その企業の幹部は、全部東大卒、一流大学卒ですよ。水銀の入ったお魚を知らずに食べたお母さんから、胎児性水俣病の子どもが何人も生まれた。生まれたときから、耳も聞こえない、目も見えない、完全な植物人間です。そういう子どもたちを、本当に心をこめて育てたお母さんたちは、漁師のおかみさんなんですね。何も学問があるわけでもないんでもない貧しい女の人たちですが、一流大学卒のチッソの幹部にくらべて、人間としてどれほどすばらしい人たちか、水俣に行ってみれば感じました。

逆にチッソの幹部たちのお母さんというのを考えると、自分

の息子を将来一流大学に入れ、一流企業のエリートにしたいと必死になっている母親は、いつてみれば、チッソみたいな殺人企業の幹部にしようということでしょう。その人の夫は多分、そういうエリートなんでしょう。そういう息子が成人して自分の女房にどういふ人を選ぶかといえ、オフクロさんみたいに奴隸のようにかしずいてくれる女の人を求めるでしょう。で、そのお嫁さんもまた自分の息子に仕えて、エリートに仕立てようとする。その醜い悪循環というものが、日本の典型的な母子関係なんです。

すばらしい韓国の闘う母たち、娘たち

そういうことで、日本の多くの女性には、子ども、子どもで、よその国で誰が殺されようと、そんなことにはひとかけらの関心もない。ところが貧しい、悲惨な状況のところに、すばらしい女の人们がいるんですね。

私が本当に感動した韓国の女性の一人に李小仙という人がいます。夫は飲んだくれで子ども四人を日雇いや行商などして育てるのですが、とにかく貧しい生活だったんです。長男は金泰老という人で、裁断師としてソウルの平和市場の縫製工場にやっと就職したんです。とても正義漢で、職場の少女たちの悲惨さに堪えられなくなつたんですね。立ち上がることもできない低い天井の仕事場で、十何時間も働きつめて、まるで監獄部屋みたいな所で十代の女の子たちは、どんどん結核で倒れていく。

彼は学問もなく労働基準法も分らないけれども、何とか労働条件をよくしようと立ち上がろうとしたんです。

でも弾圧がひどくて、どうにもならなかった。彼は深い絶望を感じて、自分の命を捧げようと決心したんです。そして遂に一九七〇年秋、ソウルの町の中でガソリンをかぶって抗議の焼身自殺をしたんですね。息子がガソリンをかぶったというんでお母さんの李小仙が駆けつけると、金泰老は全身大ヤケドの苦しいなかで、「お母さん、ぼくの遺志を継いでください。／＼みんなが人間らしく生きられるようにしてください。／＼」ということを何回も言うんですね。結局、彼は数時間後に死んでしまったのですが、李小仙は息子の「志を継いでください。／＼」という叫びを、自分で実行したのです。

息子が働いていた平和市場に入って食堂の賄い婦などをしながら、貧しい女子労働者たちが、少しでも労働者としての権利に目覚めて、立ち上がるように労働教室というものを開くわけです。金泰老の残した日記を読んで駆けつけた学生たちと一緒に。だけど女子労働者たちが目覚めて闘うようになると、体制や企業側は困りますから、あらゆる弾圧を加えたんです。何度逮捕されても、李小仙はひるまなかった。学問もなく権力もない、五十いくつの貧しい女の人が、どんなに警官に打たれても「失うものは何もない」と捨て身で闘い、何回も投獄を繰り返しているんです。最近釈放されたと聞きましたけれど。

李小仙はいまや「韓国六百万労働者の母」と言われ、女子労働者たちに一番信頼される指導者になっているわけです。彼女は松田氏のいわれる普通の女、普通の女以下です。だれよりも

貧しく、虐げられていたという意味で。そういう一人の女の人
がどんなにすばらしい闘士になったか。こういう女性が隣りの
国にいるということを、日本の何人の女の人たちが知っている
んだらうかと思います。それは私がいま働いているマスコミの
責任でもあるけれど、そういう情報は私たちが自分たちの手で
伝え合う以外、誰も伝えてくれないんですね。

韓国では紡績女工さんなんかも、ものすごく闘っているん
です。東一紡績という大工場で、初めて女性だけの組合執行部を
選出したんです。そうしたら体制ベッタリの上部団体がそんな
ものはいけないと圧力をかけた。そして昨年二月、女性の執行
部を選出させないために、何をやったかといえ、暴力団的な
男たちを選挙当日に投票場に集め、バケツに糞尿を入れて、投
票にきた女子労働者に、ぶっかけたんですね。なかにはゴム手
袋をした手で、大便を口の中に押し込んだり、耳の中に押し込
んだり、ものすごい妨害をやったわけです。有名な糞尿事件で
す。ところがそんなことをされても、女子組合員たちは屈しな
かった。政府主催の労働関係の集会に行つて抗議したんです。
そうしたら女子労働者たちを逮捕し、百二十何人を解雇する
という弾圧をしてきたんです。警察の金網つきの護送車に押し込
まれても、泣きながら「自由の歌」を歌い続ける少女の写真が
新聞に出ていました。

韓国語で「オモニ」というのは母の意味ですけど、オモニの
強さに、私は本当に感動するんです。韓国で民主化闘争をやっ
ている人は、金大中とか金芝河などの男の人たちの名前がいつ
も出ますが、実際闘っているのは、女の人なんですね。投獄さ

れている詩人の金芝河のお母さんなんか、エリート女どころか
実に庶民的なおばさん、まさに普通の女ですけど、KCIAの
弾圧の目をくぐつて、いろんな署名集めをしたりして活動して
いる。強いんですね。

それから、二人の息子が学生運動で逮捕されたあるお母さん
が、こう書いているんです。「自分の息子二人も逮捕され、K
CIAにもものすごく拷問されて堪えられない。なんとか、自分
の息子たちを救つてほしいと折つた。しかし、私は間違つてい
た。なぜ、自分の二人の息子のためだけに折つたのか、自分の
息子たちと同じように、たくさんの方々たちが拷問されて半死
半生の目に遭つていてではないか。なぜ、逮捕されている人た
ち全体のために祈らなかつたのか。本当に自分の息子のことだ
けしか考えなかつたことを、エゴイズムだと深く反省した」
。母性愛というものが、ここまで高められているというこ
とに、私は感動したわけです。

本当の母性愛というものが、何かを考えるきっかけになつた
のはこのような隣国の女性たちの生き方を知つたからです。
日本の国内でも、やらなくちゃいけないことはいっぱいありま
す。それを、自分の家庭さえよければと知らん顔をして、主婦
の座にあぐらをかいているとすれば、それは人間として許せな
い。犯罪的とさえ思いますね。

社会とつながり、女たちの支え合いで解放を

私はたまたま、松田氏の本と全く対照的なベティ・フリーダンの『女性の神秘』のことを考えるんです。今年出た松田氏の本は「専業主婦を職業として認める」と言っている。ところが、それより十六年前の一九六三年にアメリカの女性が書いたこの本は、「主婦は職業ではない」と非常にはっきり言っているんですね。つまり、「家庭の外へ出て、人間として社会に貢献する」ということを基本に考えなくちゃいけない」と、強く訴えているわけで、同じ主婦の生き方を論じたもののなかに正反対のことを言っているのが、驚くんです。一方は世界に名だたる男尊女卑国の「進歩的」といわれる男が書き、片方は女性解放の炎をあげたアメリカの女が書いた。それにしても、同じ先進工業国でも、女に関していえば、何十年もの開きですね。

結論としては、これまでいろいろお話したような、大きな社会的問題に大きく目を払って、フリーダンのいうように、人間として当然社会に貢献するという責任をとらなければ、本当の解放はない、というのが私の考え方なわけです。自分だけ解放されたんじゃないって、そんなことはあり得ないでしょ。七〇年代の日本の女性解放運動に欠けていたのは、そういう意味で、社会とのつながりのなかで自己の解放を目ざしていくという視点です。どうも、日本の女性のなかにはすごく劣等感が根深いんですね。自信がない。精神的に自立していない。「女はできないんだ」「女はダメだ」という考え方をもっている人が、まだまだ多いんです。そういうふうな教育されてきたんですね。私が対照的だなあと思ったのは、ある企業が「女は男よりも能力が劣っていると思うか」という質問を日米の女性にしたら

アメリカの女では「劣っている」と答えた人が四〇%しかいない。ところが日本の女は三十何%の人が、「劣っている」と答えたというんです。私は日本の女の人たちが、ほかの国の女たちより、能力がもともと劣っているなんていうことはないと思う。なぜかと言えば、一年間中国で暮らしてみても、中国の女の人たちが男と同じように社会的に活躍しているのを見てきたんです。

学校の校長もやれば、漁船の船長もやれば、市場の経営もやれば、バスの運転手もやる。それこそ何でもやっている。中国の女たちが、日本の女たちより、知能や体力がまさっているとは思わないんです。彼女たちはつい三十年前までは、テン足で縛られたり、世界でもっとも侮蔑され、差別されていた女たちでしょう。それがいま、やろうと思ったら何でもやっているわけですよ。そういうことを女はやれないと社会が思わせるか、女もやらせればできると見るか、が一つのポイントになると思う。日本ではいまでも女性を劣等視しているんですから、女自身もまず、自分のなかにある「結局、男にはかなわないから、世のなかのことは男にまかせればよい」という劣等感を、克服していくことが、一番大切なことだと思うわけです。

それには、やっぱり女の人一人でできないですね。そうじゃなくて女同士、支え合い、手をつなぎ合ってやればできると私の体験からいえます。

もともと話したいことがあるのですが、時間がオーバーしてしまいましたので、この辺で終わります。(拍手)

(朝日新聞東京本社立川支局長)
「一九七九年七月二十二日」名古屋市婦人会館にて」

あごらのバックナンバー

1号<女が働くこと> 200

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
- 資料 働く女は過保護か
- 面接調査 共働きを調査して (絶版)

2号<女性と能力> 200

- 調査 働く女性の地位向上をめぐって
- ティーチン 女性と能力
- 研究 女性はなぜ管理職になれないか

3号<主婦の解放> 200

- 調査 団地の主婦の解放意識
- ティーチン 主婦の解放をめぐって
- 解説 二分二乗法 伊東すみ子

4/5号<何かしたい主婦のために> 300

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
- インタビュー 壁を破った人々
- 資料 2つの差別裁判を考える

6/7号<運動をすすめよう> 350

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
- 資料 各国の母性保護
- ティーチン 婦人運動をすすめるために

8号<子殺しを考える> 380

- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
- ティーチン 性の二重性をめぐって

9号<働く女と主婦の接点> 430

- 論文 働く女と主婦の接点 神田道子ほか
- 調査 働く女と主婦
- ティーチン 人口抑制と産む性 (絶版)

10号<女と法> 700

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
- 資料 法律の中の女性
- ティーチン 産む性と法律 (絶版)

11号<女と教育> 750

- 論文 主婦が学ぶということ 伊藤雅子
- 調査 教科書の中の女性差別
- ティーチン <女と教育>を考える

12号<国際婦人年世界会議> 750

- 記録 国際婦人年世界会議とトリビューン
- 感想 メキシコ・キューバ——私たちの旅
- 資料 世界行動計画、ILO活動計画ほか

13号<国際婦人年国内集会と行動計画> 750

- 記録 国際婦人年国内集会
- 調査 ちまたから見た国際婦人年
- ティーチン 国際婦人年とメキシコ集会

14号<女の記録入選発表> 750

- わたくしが見たアメリカ 水田珠枝
- 新女大学研究 エリザベス・マウア
- 隣りがこわい 佐多稲子

15号<職場の中の女性差別> 750

- 調査 日本の著名企業100社にみる男女差別
- 概説 女子労働市場の現状 正木直子
- 論文 女性と半専門職 天野正子 (絶版)

16号<女と結婚> 750

- 文化人類学から見た日本の結婚・祖父江孝男
- 「しあわせな結婚」の実態 J・バーナード
- ティーチン「結婚の幻実」●随想 私と結婚

17号<女と生涯学習> 780

- 女性の生涯学習への一提言 高野フミ
- 女子成人教育の問題点 中山宣子・野々村恵子
- 調査 婦人学習グループ ●ルボ 女が学ぶ所

18号<いま女性解放は> 1300

- ティーチン日本の女性運動をどう展開するか
- ルボ いま職場でたたかう39人の女たち
- 資料 女性差別に関する国連条約ほか

19号<女にとって子どもとは> 800

- 論文 日本近代の国家と母性 中嶋 邦ほか
- 討論 日本の女性運動をどう展開するか(統)
- 資料 優性保護法改訂をめぐる経過と論義

20号<女性解放と男女雇用平等法> 1300

- 論文 女性史におけるウーマンリブ 水田珠枝
- 論文 女性解放論の模索と反省 田中寿美子
- 資料 労基法研究会報告 雇用平等法案ほか

〔調査報告〕

日本の著名企業144社にみる女子社員への待遇

B O C 調査部

国際婦人年を契機として、女性の地位は大きく向上したといわれる。たしかに、地位向上に向けてさまざまな動きがあったことは事実だが、働く女性の地位にはどのような変化があったのだろうか。

『あごら』編集部は、一九七六年、「女子学生の就職を考える会」と共同で、「日本の著名企業一〇〇社にみる男女差別」を調査し、『あごら』15号に発表、大きな反響を呼んだ。民間によるこの種の調査の必要を感じた私たちは、一九七八年三月に中間調査を行なったが、第一回調査から満三年を経過した七九年八月、第三回調査を実施した。

〔調査の目的〕

働く女性の状況は、単に就労女性の地位を物語るにとどまらず、広く女性一般の地位を示す尺度ともなる。その意味でも、働く女性の平均賃金が男性の五五・八％であるという事実（一九七七年労働省調査）は、勤続年数や就労時間の差を考慮したとしても大きな問題である。多くの男性は、これは、女性の勤続年数が

短く、就労時間の短縮を女性自らが望む結果だと指摘するが、では女性はなぜ勤続年数が短いのか、なぜ短い就労時間を望むのか、その原因から掘り下げてみなければなるまい。

勤労女性については、周知のように労働省・総理府等の膨大な調査がある。私たちができ得るのは、量的には極めて限られた調査にすぎないが、民間の、それも女性のサイドに立った男女格差や母性

保障についての調査が皆無に近い現状の中で、女性自身による調査の必要を感じる。しかし調査には多くの費用を要するため、なかなかその機会を持ち得なかったが、今回、NHK教育テレビ「文化シリーズ」『現代社会の仕組み』の中の特別企画「働く女性はいま」放映に関連し、調査費の一部を得ることができたので、調査にふみきることができた。調査結果の一部は、九月六日・十三日の両日にわ

図1 初任給格差

'76 N=98	57.1%	33.7%	9.2%
'79 N=114	31.3%	34.0%	27.8%
	なし	あり	不明
		比較不能	

たつて放映されたが、ここにその詳細を報告したい。

〔調査方法・調査期間〕

調査対象は、一九七六年と同じリストによつた。すなわち朝日年鑑所載の著名企業約千九百五十社中、一般人の周知の企業で、女子社員が多数勤務し、労働組合を有すると思われるもの千社を選び、それを二十二の分野に分類し、二百十六社を無作為抽出したものである。

著名企業を対象としたのは、現在の日本では、女子の労働条件がよく、かつ就業者も多く、女子労働の方向を左右する大きな力となっているのは、何といつても大企業だからである。

調査期間は、予備調査を一九七九年三月八日―二十日間にしない、本調査を七九年八月四日―二十五日間に実施した。

調査対象は労働組合の婦人部長（または青年婦人部長、青婦対策部長）とし、婦人部を設けていないところ、該当部長のいないところは担当執行委員または書記とした。

調査方法は電話質問を原則とした。前二回の調査では、アンケート用紙を郵送したのち電話質問を行なったが、あらかじめアンケート用紙を送付すると、一般に防衛的になり、会社の中核と綿密な連絡をとつて回答を行なったり、回答を拒否するところも多かつたためである。

今回は、折あしく各社の夏季休暇と重なり、調査時期としては決して好適ではなかつたが、三回の連続調査では最高の回答率（六六・七％）を得ることができた。なお回答百四十四例中、約六割にあたる七十七例は、一九七六年の回答対象と同じである。

〔調査項目〕

調査項目は、男女格差と母性保障を中心とした。男女格差では、イ、初任給、ロ、十年後の賃金、ハ、職種・仕事内容、ニ、定年、ホ、結婚退職制、ヘ、出産退職制、ト、諸手当・施設の適用（家族手当・住宅手当・持家制度・社宅）、チ、管理職への登用、リ、四年制大卒者の格下げ扱い、の十二項目を調査し、母性保障

図2 昇給格差

'76 N=98	45.9%		48.0%		6.1%
	なし		あり		不明
			比較不能		
'79 N=144	13.2%	41.7%		22.9%	22%

表1 入社10年後の給料（月給）の差

差 額	件数	%
5 千 円 未 満	3	5.0
5千～1万円未満	4	6.7
1万 ～2万〃	6	10.0
2万 ～3万〃	1	1.7
3万 ～4万〃	4	6.7
4万 ～5万〃	4	6.7
5万 ～6万〃	0	0
6万 ～7万〃	1	1.7
7万 ～8万〃	2	3.3
8万 ～9万〃	0	0
9万 ～10万〃	2	3.3
10万 円 以 上	3	5.0
大差あり	3	5.0
女は男の65～70%	1	1.7
〃 約85%	1	1.7
若干ある	1	1.7
無回答中初任給から差のあるもの	24	40.0
計	60	100.2

では、イ、生理休暇の日数および有給率、ロ、産前産後休暇の日数および有給率、ハ、育児時間の長さおよび有給率、ニ、育児休職制の有無とその期間および有給率、の八項目を調査した。

なお、その他として、イ、女子社員の平均勤続年数、ロ、有給休暇の初年度日数と上限、ハ、一週間の就業時間、を調査した。

さらに、被調査者の個人的な見解として、自分の職場を女性にとって働きやすい職場と思うか否か、ロ、男女雇用平等法の賛否、ハ、労基法改訂（母性保障の撤廃に関するもの）について、意見を徴した。

〔調査結果の概要〕

一、男女格差

1 初任給格差

—— 三分の一に明瞭な格差 ——

七六年の調査では、「あり」三三・七%、「なし」五七・一%であったが、今回は、「あり」三四・〇%、「なし」三一・三%、「比較不能」二七・八%であった。「あり」はほとんど変動がないが、「なし」は五七・一%から三一・三%へ、大幅に後退している（図1）。

ここで問題となるのは、約三〇%に及

図3 職務内容の差

79 N=144	多少あり 5.5%		なし 32.0%	不明 7.6%
	あり 54.9%			

図3' 仕事に差別を感じる理由

N=87	責任者、研究職につけない		営業等につけない	
	補助職のみ 41.4%	単純作業のみ 18.4%	12.6%	その他 20.6%

「比較不能」グループである。男子は四年制大卒のみを、女子は短大卒および中高卒のみを採用しているため初任給比較ができないものであるが、このグループにおいては、男子は初めから幹部社員、女子は補助労働力という色彩が強い。これは、男女同学歴の者を採用しないことによる巧妙な差別隠しとも考えられる。七六年と今回とは、被調査者および調査方法が若干異なるうえ、七六年は、「初任給格差があるか」という単純な質問であったのに対し、今回は初任給の実際を調査したため、差別が一層明らかになった面もあり、単純な比較はできないが、情勢は樂觀をゆるさないと言えよう。

2 昇給格差

——なしは二三・二%のみ——

七六年は「なし」が四五・九%で、「あり」四八・〇%と大差なかったが、今回は「なし」は二三・二%にすぎず、「あり」は四一・七%、また、女子の十年勤続者がいないための「比較不能」は二二・九%であった(図2)。

数字のうえでは格差が非常に拡大した感があるが、前回「昇給格差があるか」という設問であったのに対し、今回は入社後十年の同期の男女の実際の給与額を比較したため、格差がいやおうなしに露呈したとも考えられる。年次の推移とは解釈しないほうが正しいと思われるが、これまた事態の重大さを物語っている。四年制大卒卒、同期入社男女社員十年後の月給の差は、表1のとおりである。五千元以下から十万元以上にまで散在しており、中には男性が女性の倍額以上になっているところさえある。

平均値をとると、十年後の男性の平均月給は二十一万三千七百七十六円であるのに対し、女子は十六万三千三百四十一円で、男子の七六・六%にすぎない。この格差は、諸手当や賞与では通例さらに拡大するから、これらを含めると一層大きなひらきになるものと想像される。

3 職種・仕事内容の格差

——「格差なし」は、約三分の一——

「格差あり」と認めたものは五四・九%

図4 定年格差

'76 N=98	79.6%	16.3%	1.0%
			5.1%
'79 N=144	83.3%	16.7%	不明
			その他あり

で、「多少あり」五・五%を加えると六割強が格差があることを認めている(図3)。「格差あり」と認める理由のうち最も多いのは「女子は単純作業と補助職のみ」(三十七例)で、次は、「責任ある仕事や研究職・制作担当者にならない」「職分が上がらない」「外勤・営業・出張からはずされ、昇格・昇給にひびく」が各七例、「雑用専門」「経理・総務・電話交換手」のみ女子を採用」が各四例、「同じ仕事でも程度の低い仕事を与えられる」「研修期間の差をつけられる」が各二例、「資格があってもその任につけない」「大卒でも高卒と全く同じ仕事」「打ち合わせに参加できない」「同じ仕事をして補助職としてしか認められない」が、各一例であった。

「格差なし」は三二・〇%にとどまった。

4 定年格差

——ほとんど変化なし——

「定年格差あり」は、前回は一六・三%だったのに対し、今回は一六・七%、「格差なし」は前回七九・六%に対し今回八

三・三%で、共に有意の差は認められなかった(図4)。

ただし、前回回答を得た事業所について個々の変化を調べると、前回格差のあったところで今回解消しているものが二例認められた。

「格差あり」について、男女の定年時の年齢差をみると、最大が前回十歳、今回七歳、最小が共に一歳であるが、年齢差の平均は前回、今回とも全く同じ四・一歳であった。

5 結婚退職制

——制度としては皆無——

結婚退職制は憲法違反という判決が出て十年を経過したためか、さすがに制度として設けているところは一例もない。が、退職金その他で優遇措置をとり、一種の勧奨としていところは十五例、一〇・四%あった。また、制度としては設けていないが、「結婚した人はほとんど全員やめる」と、「慣習的退職制」を認めたものも五例あった。

図5 家族手当の適用

制度なし				
'79 N=144	適用 39.6%	条件つき 22.2%	女子にはなし 18.1%	不明 12.5%

図6 住宅手当の適用

条件つき 5.5%				
'79 N=144	適用 54.9%		女子にはなし 22.9%	不明 6.9%

6 出産退職制

—— 残存する内規 ——

内規ながら「あり」が四例（二・八％）認められた。「やめるのが通例」「出産まで働き続ける人はほっとかない」と「実質的退職制」を認める声が多く、制度以前の問題を考えさせられた。

7 諸手当・施設の適用

A 家族手当

—— 給与体系に残る家制度 ——

制度として家族手当を設けているのは七九・九％だが、「女子にも適用」は、三九・六％で「条件つき適用」二二・二％を含めると六一・八％が女子にも適用している（図5）。

「条件つき適用」は、「世帯主または主たる生計維持者」であることを条件とすることを特に言明したもののだが、「女子にも適用」の中にも、実質的には「条件つき適用」が多く含まれるものと推定される。現実には、純然たる母子世帯または老親扶養者のみに限られて、実際の受

給者は稀少のようであり、給料格差拡大の一因ともなっている。また、「妻帯手当」を月額二万五千円支給している企業で、病夫をかかえて働く妻には「夫帯手当」を一円も支給しない例も認められた。

B 住宅手当

—— 給料の一部になっているが ——

八三・二％が制度として設けており、「女子にもあり」は五四・九％で「条件つき適用」五・五％を含めると計六〇・四％が女子にも認めている。「女子にはなし」は、二二・九％である（図6）。

女子への適用率が六割とはいえ、住宅手当は、基本給を押さえる手段として実質上は給料の一部となっている企業が多いことを考えると、「女子にはなし」二二・九％は、明らかに性差別と言えよう。

C 持家制度

—— 制度は拡充、だが女子は除外 ——

財形貯蓄を含め、七七・八％が持家制

図7 持家制度の適用

N = 98	76	42.9%	21.4%	32.6%	5.1%
		適用	女子にはなし	制度なし	不明
N = 112	79	41.7%	4.2%	31.9%	9.7%
		条件つき			12.5%

「社宅を有する企業は七七・八%で、前回の五七・一%を大幅に上回っているが、女子への適用は一七・四%のみ（前回二一・四%）で、やはり女子は疎外されている（図8）。男女を含めた伸び率が二〇%を上回る中で女子は減少していることは、男女の格差が拡大されたことを物語る。賃金のように端的な数字としてはあらわれにくい、福利厚生面での男性優遇が進められているといえよう。

D 社宅

——保有率増加の中で
適用率は減少——

度を有しており、前回（六四・三%）に比べ総体に拡充されている。が、女子は四一・七%が適用され、「条件つき適用」四・二%を含めても、四五・九%に認められているにとどまり、前回の四二・九%と大差ない。一方、「女子には適用されない」は三一・九%で、前回の二一・四%に比し拡大している（図7）。持家制度が全般に拡充されている中で、女子への適用は見送られたとの解釈も可能である。

E 寮

——ほぼ横ばい——

八一・九%が寮を有する（前回七七・五%）が、そのうち女子寮があるものは三二・六%で、「条件つきで寮入可」七・六%を加えても四〇・二%であり、前回（三五・七%）に比し、有意の差は認めがたい（図9）。

8 管理職への登用

——約四分の一が管理職にも女子——

被調査者が労働組合のため、非組合員である管理職の状況は把握していないところが多かったが、「あり」は二三・六%に達した。ただし労働組合の誤認（厳密な意味では課長職以上でないものを課長職とする）も混入していたのではないかと推定される。（管理職者ありと回答した企業の一部について、その氏名を企業側に確認したが、管理職でない者が含まれていた例もあった。また、その数は一企業につき一二名が大半であった。現実には二三・六%あったとしても、男は

図8 社宅の適用

				3.1%
'76 N=98	21.4%	35.7%	39.8%	
	はいれる 条件つき 2.8%	はいれない	制度なし	不明
'76 N=144	17.4%	57.6%	11.8%	10.4%

一〇〇%であることを考えれば、過小であることは言うまでもない。

二、母性保障

1 生理休暇

——制度としては労基法を上回る——

生理休暇が認められている日数は、図10のとおりである。「申請日数」(一・三・二%)と「必要日数」(二・九%)を加えると、三六・一%で最も多い。次は二日(三一・二%)一日(二二・九%)の順であり、「無制限」も二例に認められた。ただし有給率は非常に複雑で、一日目一〇〇%、二日目六四・四%、三日目〇%など漸減型、一日につき給料八百円カットなど、多くのパターンにわかれ、表示することは困難である。給料計算のために要する人件費を考えると、一〇〇%有給にすれば問題ないのと思われるものも少なくなく、権利を行使することへのいやがらせ的なにおいすら感じた。また、「申請日数」「必要日数」などとうたっているも、必要日数を一〇〇%保障するのはその半数で、一日二日のみの有給保

障が四分の一、全く無給が四分の一である。

制度として認められていても現実にはとりにくいというところも多く、ある工場では、「工場勤務者はほとんど女子のため、操業率が低下するのでとれない。本社の事務職は男子がカバーするためとれるが」と嘆いていた。生休の必要度が高いのは、事務職よりもむしろ現場労働者だと思われるが、このような現実と制度のギャップについて、もう少し調査する必要がある。

2 産前産後休暇

——過半数が労基法以上——

労働基準法では産前六週間産後六週間以上と定められているが、労基法どおりの合計十二週間は四七・九%(前回四三・九%)で、約半数を占めている。第二位は合計十六週間で一九・四%(前回二三・四%)、以下十四週間一三・九%(前回一〇・二%)、十三週間一一・八%(前回八・二%)の順となっている(図11)。労基法を上回るものが五〇・七%と半数

図9 寮の適用

76 N = 98	35.7%	41.8%	22.5%	1.0%	
	あり	なし	制度なし	不明	
79 N = 144	32.6%	43.1%	8.3%	9.7%	6.2%
	条件つき				

を超えているのが注目される。最長は産前十週間産後十週間、計二十週間だが、これは一例で、有給率は〇%である。ただし、労基法を上回る長期休暇を獲得しているところは概して有給率も高く、ほとんど一〇〇%有給となっている。恐らく労組が強く、権利の主張の強いところであろう。ただ、制度としては完備していても、実際は、女子はほとんど結婚や妊娠を契機に退職し、適用例はほとんどないというところもかなり見受けられた。

有給率は図12に示した。

(なお、八十五日、九十日、百日、百三日、と日数計算のところもあったが、統計は、それぞれ十二週、十三週、十四週、十五週に含めて計算した。また、産前・産後の期間の組み合わせは多様だが、表示が複雑になるため、合計期間で処理した)。

3 育児時間

—— 約八割が有給 ——

労働基準法では一日六十分(または一日二回三十分ずつ)一年間となっている

が、大半(七四・三%)は基準法どおりである。しかし九十分(四・二%)、百二十分(二・一%)など、基準法を上回るものも七・七%あった。また、労基法では有給を義務づけていないのにもかかわらず、七七・三%が有給保障している。七六年の調査では、労基法どおりは五九・三%で、「育児時間はない」が二一・四%もあったが、周知・徹底が普及したものと考えられる(図13)。

ただし、産休同様、現実に適用を受けている者は稀少である。「なし」「三十分」などは労基法違反であるのに、合計七・六%もみられるのは、該当者がいないことを物語っているとも解釈できよう。

4 育児休職制

—— まだ低い実施率 ——

「あり」は一二・六%(十八例)で、期間は一年が最も多く(九例)、次が三年(三例)となっている。しかし有給保障はほとんどなく、基準内給与の六〇%が一例、社会保険料分のみ支給が二例のみである。勤労婦人福祉法による奨励制度

図10 生理休暇の日数

'76 N = 98	92.9%					5.1%	0.1%
	あり					なし	不明
'79 N = 144	制限なし 1.4%					申請・必要日数	
	3日	2日	1日				
	4.9%	31.2%	22.9%	36.1%		3.5%	

表2 勤続年数

平均勤続年	'76 N=98 (%)	'79 N=144 (%)
3年未満	4.1	1.4
3年以上 4年未満	22.5	13.2
4年以上 5年未満	15.3	13.2
5年以上 6年未満	18.4	19.4
6年以上 7年未満	5.1	9.0
7年以上 8年未満	6.1	6.9
8年以上 9年未満	2.0	5.6
9年以上 10年未満	3.1	4.9
10年以上 15年未満	2.0	8.3
15年以上	0	4.9
不 明	22.4	13.2
計	100.0	100.0

女性の勤続年数が短いことが女子を重用しない大きな理由とされているが、今回の回答百二十五例の平均は六・五年で、七六年の五・二年より二五％伸びている。また七六年には六年以上の企業は一八・三％にすぎなかったが、今回は三九・六

最短は三十三時間、最長でも労基法を下回る四十七時間で、平均は四三・六時間であった。労基法の限界の四十八時間労働は、一社もみられなかった。

女性の勤続年数が短いことが女子を重用しない大きな理由とされているが、今回の回答百二十五例の平均は六・五年で、七六年の五・二年より二五％伸びている。また七六年には六年以上の企業は一八・三％にすぎなかったが、今回は三九・六

労基法より確実に短縮

1 勤続年数

ほかに参考として、平均勤続年数、有給休暇日数、一週間の就業時間を調査した。

三、その他

があるにもかかわらず、七六年度に比べてもむしろ減少している（図14）。

2 有給休暇

大部分は労基法以上

上限はほとんどが労基法どおりの二十日で、例外は八例のみ（最高三十六日）だが、初年度は平均十・二日で、労基法を上回っている。

3 一週間の就業（拘束）時間

図11 産休の期間

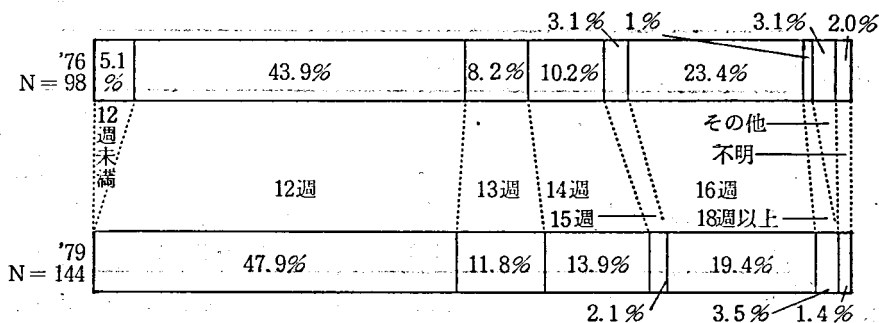
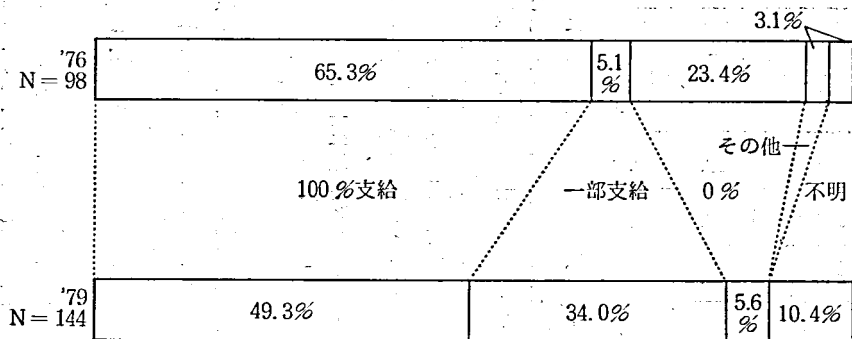


図12 産休時の有給率



最後に、回答者の個人的見解として、「自分の会社の働きやすさ」を尋ねるとともに、「雇用平等法および労基法改訂に関して」質問を行なった。

四、あなたの会社は

女性にとって働きやすい

職場か

—— 半数が「働きやすい」 ——

この質問は回答者個人の主観的判断で答えてもらうものだが、回答者の半数をやや上回る五三・五％が「働きやすい」と答えた。「よくない」は二三・九％で、「あまりよくない」四・九％を加えると、約二割が「よくない」と感じている。「どちらとも言えない」も、同じく二割弱、一八・〇％である(図15)。

ただし、何ををもって「よい」とし「よくない」とするか、その理由を自由回答で問うた結果は、表3に示すように、きわめて多様である。

まず、「働きやすい」と答えた者のうち最も多かったのは「仕事がラク」十例で、「男女の格差がない」九例、「労働条件が

図13 育児時間

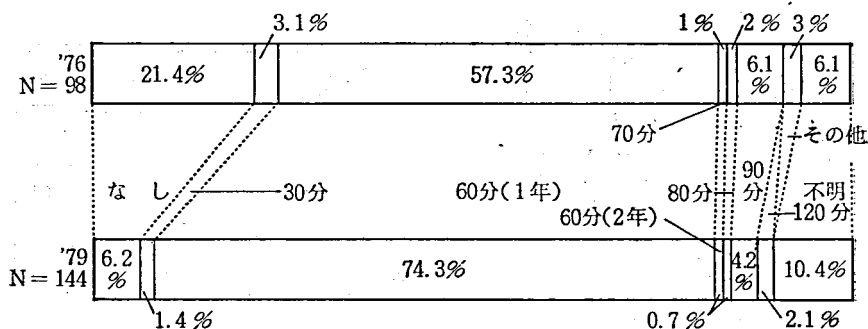


図15 自分の職場は女性にとって働きやすいと思うか

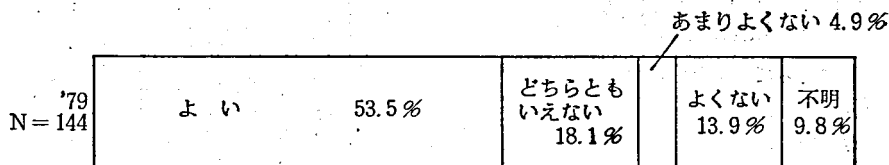


表3 女性にとってよい職場だと思う理由（数字は回答数）

雰囲気・環境志向		労働条件志向		働きがい志向	
仕事がラク	10	給与等労働条件がよい	14	格差がない	9
気らく・きびしくない	6	結婚後・中高年でも続けられる	6	差別意識がない	3
人間関係がよい	5	休みが多い	4	努力次第で伸びる	2
家庭的	3	働きやすい	3	能力を評価される	2
大事にされる	2	有給休暇がとりやすい	2	責任を持たされる	2
女性の伝統的適職	2	残業がない、少ない	2	働いただけ実績が上がる	1
女同士がまとまっている	2	就労時間が短い	2	社会勉強ができる	1
言いたいことが言える	1	福祉面が整っている	2		
仕事が清潔	1	育児保障がある	2		
場所がよい	1	労働過重でない	1		
たのしい	1	女の働く権利保障	1		
ボーイフレンドを求めやすい	1	マイペースで働ける	1		
		男女とも配置が適正	1		
	35		41		20

図14 育児休職制

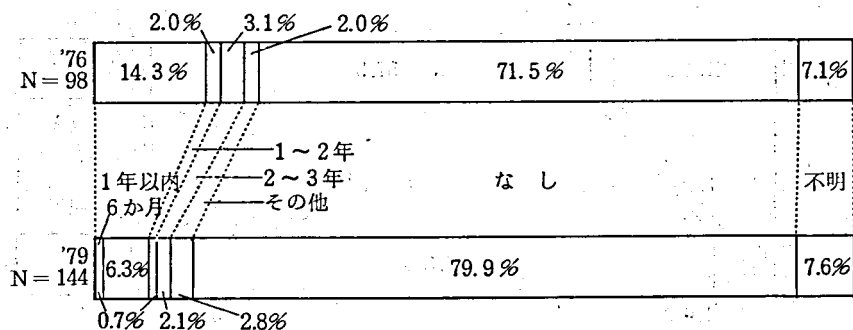


表4 女性にとってよくない職場だと思う理由

女性にとってよくない理由	回答数
女性差別がある	22
働きがいがない	12
仕事が過重	7
長く勤続すると圧力がかかる	6
過保護でスポイルされる	4
母性保障が不十分	2
人間関係が悪い	3
配偶者を探しにくい	1
計	57

よい」七例、「人間関係がよい」五例、「休日が多い」「待遇がよい」各四例と続き、以下、「気楽でゆのんき」「家庭的」「きびしくない」などの「ゆるま湯志向」と、「働きやすい」「結婚後も続けられる」「給与が非常によい」「差別意識がない」の「労働条件志向」がそれぞれ三例であった。二例は、「有給休暇を完全消化できる」「男の多い職場なので、女が大事にされる」「伝統的な女性の職場で適職」「女同士でまとまっていて雰囲気がい」「残業がない・少ない」「就労時間が短い」「福祉面が整っている」で、一例は「たのしい」「言いたいことが言える」「ボーイフレンドを求めやすい」「仕事が清潔」「メー

カーに比べると労働過重でなく働きやすい」「隣りが公園で環境がよい」など「環境重視派」に対し、「女性の平均年齢が高い」「三十代・四十代の女性も働き続けており、年齢制限を感じない」「能力を発揮できる」「婦人労働が主体なので、一生働き続けられる」「社会勉強できる」「努力次第で伸びる」「働いただけ実績が上がりやりがいがある」「責任を持たされる」「育児時間がとれる」「育児休職制がある」「働きやすくないが、本人の努力で将来がひらける」「仕事はきついがやる気があれば評価される」「労組が強く、女の働く権利が守られている」「マイペースで働ける」「比較的新しい会社なので働きがいがある」「男女とも配置が適正」など、「女性の地位重視派」が目立った。以上を「雰囲気志向」と「労働条件志向」。「働きがい志向」にコーディングして掲げてみた(表3)。「雰囲気志向」六三・六％に対し、「働きがい志向」と「労働条件志向」の合計は六一・〇％で、ほぼ伯仲している(複数回答)。

一方、「働きにくい」理由の筆頭は、「やる気のある人にはつまらない」(六

例)で、続いて「男性中心の職場」「女性は補助職のみ」が各五例、「過保護でスボイル」が四例、「男女差別がある」「賃金格差がある」が各三例、「出産後続けにくい」「結婚後は続けにくい」「やめる人が多く、長くいると風あたりが強い」「仕事が忙しいのに昇給しない」「生理休暇・有給休暇がとりにくい」「仕事が過重が各二例。以下一例ずつは、「役職につけない」「責任を持たされない」「能力に見合った仕事を与えられない」「能力が生かされない」「明白な差別はないが差別の雰囲気根強い」「減量経営で子持ちへの攻勢が激しい」「待遇が悪い」「賃金が男より低い」「男の仕事の肩代わりをしているのに賃金には格差がある」「ぬるま湯的でおもしろくない」など、女性差別憤慨派が多いが、「時間に追われる(銀行)」「労働時間は短い、仕事の密度が濃い(保険)」「男女とも腰かけの(建設)」「男女とも仕事が過重」「人間関係が悪い」「女性が多く、感情のもつれがある」「全く自由がない」「男女平等すぎて女も重労働」「配偶者探しむずかしい」などの意見も見られた。

以上をコーディングしたのが(表4)である。女性差別が撤廃され、責任ある仕事を与えられて、長く勤めても白眼視されなければ、女性のモラルは向上するものと思われる。

五、雇用平等法と労基法改訂について

この質問に対しては回答拒否が多かったが、「あえて回答者個人の意見を言て頂ければ」というかたちで意見を述べてもらった。

1 男女雇用平等法について

——賛成は反対の三倍——

男女を合わせて四二・四%が「賛成」、六二%が「条件つき賛成」で、計四八・六%が賛成、これに対し、「賛成の点も反対の点もある」(四・九%)、「基本的には賛成だが時期尚早」(三・五%)、「態度保留」(二・三・九%)の中間派グループは計二二・三%、「反対」は一五・三%で、賛成派が多数を占めた。

これを回答者の性別に見ると、女子回

答者(総数八十四名)は、「賛成」(五一・二%)、「条件つき賛成」(二・三%)で賛成派が計五三・五%、「賛否両面」(六・六%)、「時期尚早」(二・三%)、「態度保留」(二・三・一%)など中間派は計二二・四%、「反対」は一五・五%であったが、男子回答者(総数六十名)は、「賛成」(二二・〇%)、「条件つき賛成」(一一・七%)で、賛成派は合計四一・七%であるのに対し、「賛否両面」(三・三%)、「時期尚早」(五・〇%)、「態度保留」(一五・〇%)の中間派が計二三・三%、「反対」は一五・〇%で「賛成」が女子より多少、少なめのはかはほぼ同じであった(図16)。(ただし男女雇用平等法については、男女とも、名前を聞いたこともないという者が多く、趣旨を説明したうえでの回答であること付記しておく)。

2 労基法改訂について

——生理休暇撤廃に抵抗——

次に、政府側から雇用平等法の抱き合わせとして提示されている労基法改訂問題について質問してみた。

イ、生理休暇撤廃に絶対反対か

「絶対反対」が三五・四％、「廃止してもよい」七・六％、「個人的には廃止してもよいが、全体を考えると何とも言いかねる」が五・六％で、「わからない」および「個人的見解は言えない」が計五一・四％であった。

口、賃金・昇給・昇格等、あらゆる男女差別が撤廃されれば、生理休暇は返上してもよいか

「よい」は一六・〇％にどまり、「完全に平等になっても生理休暇は必要」は一・八％、「返上しても平等にはなるまいから必要」三・五％で、賛否がほぼ拮抗した。ただしこの問題については、「わからない」「回答保留」が圧倒的多数で、六八・七％に達した。

ハ、男女とも有給休暇をふやして生理休暇に代える

「賛成」は二〇・一％で、「絶対反対」一

〇・四％、「慎重に考えなければわからない」四・九％、「わからない」「答えられない」は、合計六四・六％であった。

ニ、女子の残業規制撤廃には絶対反対か

「絶対反対」二〇・八％に対し、「撤廃してもよい」は八・三％、「慎重に」が五・六％で、「わからない」「答えられない」は六五・三％であった。

ホ、記者・プログラマー等、特殊な専門職に限っての時間外規制は撤廃してもよいか

「特定の専門職に限るならよい」二〇・八％に対し、「絶対反対」六・三％、「慎重に」三・五％で、「わからない」「答えられない」が六九・四％であった。

ヘ、野放しの男子の残業を規制して女子なみにする

「賛成」は二八・五％に達したが、「絶

対反対」と「できない」は、共に六・九％であった。「絶対反対」の理由は、残業代が生活費に繰り込まれていることを理由としている。「わからない」「答えられない」は五七・七％。

以上を通観すると(図17)、態度保留がどの設問に対しても六・七割を占め、この問題についての討論がまだ十分行なわれず、個人の思考も煮つまつていないことが感じられる。ただし生理休暇撤廃には最も強い抵抗が認められた。

「調査を終わって」

以上が調査結果の概要である。

国内行動計画が策定され、女性の地位向上に政府自身も乗り出した七七―七八年をはさみ、女子社員の待遇にはかなりの改善が認められるのではないかと期待しつつ調査したが、予期したような好ましい変化は認められなかった。初任給格差・昇給格差は、横ばいなし拡大の傾向にあり、「差別隠し」もすすんでいる。一方、福利厚生施設は一般的には拡充の

図16 雇用平等法について

女 N=84	51.2%	6.6%	2.3%	2.3%	13.1%	15.5%	9.5%
男 N=60	30.0%	11.7%	3.3%	5.0%	15.0%	15.0%	20%
全 体 N=144	42.4%	6.2%	4.9%	3.5%	13.9%	15.3%	13.9%

賛成
 賛成の点も反対の点も
 条件つき賛成
 時期尚早
 保留
 反対
 不明

図17 労基法改訂をめぐって

生理休暇 撤廃に 絶対反対	35.4%	5.6%	7.6%	51.4%
平等が実 現すれば 生休返上 も可	16.0%	3.5%	11.8%	68.7%
生休に 代えて 有給休暇 をふやす	20.1%	4.9%	10.4%	64.6%
女子の 残業規制 撤廃は 絶対反対	20.8%	5.6%	8.3%	65.3%
特例は 残業を 認めても よい	20.8%	3.5%	6.3%	69.4%
男子残業 の女子 のみ規制	28.5%	6.9%	6.9%	57.7%

肯定派
 慎重派
 否定派
 「わからない」および無解答

傾向があるにもかかわらず、女性への適用はほとんど伸びておらず、男女格差はむしろ拡大しているとさえ解釈することができる。

●女性よ、なぜ憤らないのか

結婚退職制・出産退職制・若年定年制・定年差別・賃金差別について、この十年間に、裁判闘争で女性側の勝訴が相次いでおり、「男女差別は憲法違反」と確認されているにもかかわらず、高収益企業で強力な労働組合があるという、最も恵まれた層においてさえ、女性は初任給に始まって、昇給・昇格・仕事内容等、あらゆる面で大きな差をつけられ、社宅・寮・持家制度等の福利厚生面でも、住宅手当・家族手当等の諸手当でも大きなひらきがある事実を、どう受けとめればいいのかである。率直に言えば、「男の半人前」として遇されている姿が如実に浮かび上がってくるにもかかわらず、人権問題に関して最も敏感であるべき労働組合ですら、「やむを得ない」ないし「当然」として見すごしている。

この解説の中でも、たとえば女性への適用率が七〇〇程度であれば、「適用率が高い」としたが、本来、すべて女子も一〇〇%でなければならぬはずのものである。

もしも、被差別部落出身者や身障者、朝鮮人等にこのような差別が加えられれば、騒然たる社会問題になるはずである。女性が人口の半分を、そして労働力の三分の一を占めていながら物言わぬ現状は、正に「最後の植民地」の感が深い。

一方、子を産むという社会的機能を持った女性に対する母性保障は、労働基準法を上回る傾向が強くなっているが、現実には受給該当者がいないところが多く、生理休暇も実際にはとりにくい。

こうした現状を、企業側はどのように考え、今後どのように対処しようとしているのか、三十八社ながら人事部の意見を徴した結果は、ほぼ異口同音に、「女性をできる限り登用したいが、現実には女性に戦力として期待できない」であり、「女性は賃金が低いからこそ採用している」と明言したところさえあった。すなわち、基本的には「臨時の人手」として

利用しているのであって、「基幹要員」とは、まだ考えられていない。

これは、景気上昇の掛け声の中、男子の大卒の採用が前年比三〇%増と伝えられる本年でさえも、女子の四年制大卒は前年比二二%減という事実にも認められる。

あえて言えば、女性は大企業からは、相も変わらず、単純未熟練労働力以外のものとしては期待されていないのである。

女性の側に立てば山ほどの言い分はあるが、一部の女性の華々しい活躍が伝えられるにもかかわらず全般的には女性に期待もされず信用もされていないという事実は、重く受けとめなければなるまい。

人間が信頼を得ることはむずかしいが、信頼が崩れるのはいとも簡単である。しかもひとたび不信の目を向けられたのちにそれを回復するのは至難のわざである。信頼の回復には、百の弁解よりも一つの実行が必要であろう。私たちは、その信頼を回復する場を保障する法律、たとえば「男女雇用平等法」の実現を目指すとともに、まず、それぞれの職場で、信頼し期待される存在となって、隣りの

男性の認識を変えていくことが重要ではないかと考えられる。

●勤め続けてこそ

状況を変えられる

このきびしい状況の中で、唯一の救いは、勤続年数が伸びていることであろう。特に、「六年以上の勤続」が、前回の一八・三％から三九・六％に大幅に上昇したことは、明るい希望を抱かせる。

「女はすぐやめる、だからあてにならない」という、差別への口実に対する反論は、勤め続け、その職場で責任を持つこと以外にはあるまい。どちらがトリで、どちらがタマゴであるにせよ、どこかでその悪循環を絶つほかない。

これに対し、母性保障充実の傾向は、働き続ける女性を支える何よりの力となると考えられる。母性保障の拡充が唱え続けられ、現実にはその実行が拡大されてきたことも、勤続年数を伸ばす一助になっていると思われる。

「各社別明細」を一覧して頂けばわかるように、労働条件のいい企業では明らかに長期勤続の傾向がある。それが女性の

労働条件を高め、管理職者もふやしている。トリとタマゴの悪循環を絶つ努力は、労働者と使用者の双方に求められなければならない。

●まず女性の権利を十分に知り、活用を

もう一つの大きな要素は、労働組合の中で女性の地位を強くすることである。婦人部長の大半はいまだに男性であり、「仕事はレク(レクリエーション)中心」という人が多かった。「青年婦人部」と、青年と婦人を一緒にしているところでは、さらにその傾向が強く認められた。

女性が婦人部長のところでも、「男と女では仕事がちがうのですもの、給料の差があつて当然でしょう」と自ら言う人、産休・育児時間・有給休暇等についての規定を知らない人も多く、権利意識が概して薄弱なのに驚いた。主張なきところには権利はない。まして権利についての知識がないなどというのは、回答者がどんなに若年であっても、少なくとも労組の婦人部担当者としては許されることで

はあるまい。

一方、かなり意識の高い男性の部長でも、女性差別を人権問題としてとらえている人は極めて少なく、「男は有給休暇の半分も消化できない状況なのに、女は完全消化し、ほかに生休までとる、これ以上、女を優遇する必要はない」という声は少なからず聞かされた。

女性差別が労働者全般の中に差別を生み、労働者全体に対する攻勢となることを、繰り返し繰り返し男子組合員に訴え、共闘の足がかりをつくらなければならない。

高齢化社会の中、いまや中高年の雇用創出が重大な問題になっている。女子と中高年層が一つのいすを奪い合うのではなく、共に人間らしい社会を保障する社会を目指して助け合う方法を考えることは、いま最も緊急かつ重大な問題ではないだろうか。

●「人間らしい生活」を 問い直そう

しかし一方、「期待されざる女子社員たち」が、男子とはおのずとちがった独

特の価値観を生み出していることは、興味深い。

たとえば、ある婦人部長は、「なぜよい職場と思うか」という質問に対し、「環境が非常によいから」と答え、「なぜ環境が非常によいと思うのか」という追求に対して、「日比谷公園の隣に位置しているから」と答えて質問者を驚かせたが、考えてみると、そのような意味での環境のよさも、本来、人間が希求しなければならぬものであらう。

「よい職場と思う」理由の半分が、「仕事がらく」であることに目をむく人もいるだろうが、生産性一本で汚染されている男性からは、恐らくこのような回答は返って来まい。「よくない理由」の一つとして、「女性は過保護すぎる」をあげた男性が数人いたが、「女性が過保護」なのか、「男性が過重労働」なのか、高度工業化社会の中で考え直すことも、重要である。

女子の残業規制撤廃に反対するならば、当然、三六協定で野放しになっている男子の残業未規制を問題にしなければならぬまい。今回の調査で、唯一の例では

あるが、M重工業が、「男子もすべて残業は月間十時間内にとどめている」と回答したことは、救いであつた。「十分な人員配置があれば、残業は必要ないはず」をモットーに、組合がかちとった成果というが、残業代にしがみつかなければならない賃金や、残業を必要とする人員構成こそ問題なのは、自明のことのはずである。

今後の中高年層の雇用創出の問題ともからみ、六十年前のILO第一号条約さえ批准されていない日本の労働界のあり方が、真剣に問われなければならぬまい。

● 深めたい保障と平等の討論

雇用平等法・労基法改訂をめぐり、女子労働界はいま天王山を迎えた観があるにもかかわらず、残念ながらその認識が労働組合においてさきわめて稀薄であることは、今回の調査でも残念ながら認められた。雇用平等法の名前すら聞いたことのないものが多く、労基法改訂問題は、専ら「生理休暇撤廃」としてとらえられていたことはショックであつた。中

には部内で研究会を設け、真剣に勉強会を重ねるところも見受けられたが、一般には関心が低く、危機感ほとんど認められなかった。

一つには、組合の中で婦人部の占める位置が概して低いことが原因と思われるが、雇用平等法・労働法改訂とも、単に女子の問題ではなく、労働者全体の問題であるという認識がないことが主因であらう。さなきだに働かすぎの日本人男子労働者は、女子の残業規制が取り払われたときにどのような影響を受けるか。

世界的な労働時間短縮の風潮の中で、時代逆行的な日本の労働界のありようは、男女が共に真剣に考えなければならぬ問題のはずである。組合全体の問題として取り上げられていないことに、憂慮を深くした。

母性保障の撤廃は、労基法研究会の提言では、産休の延長ならびに平等法制定の見返りのかたちで提示されているが、その目玉となっている産休の延長は、すでに過半数で実現していることが今回の調査では明らかになった。育児時間も八割が有給保障しており、現実に労基法を

上回っている。提言は、母性保障の拡充に關しては、むしろ現実を認め現実に合わせてしようとするものとも言える。それを目玉商品として利用して生理休暇を撤廃し、危険有害物質の扱いを認め、一部とはいへ時間外勤務や深夜勤務の制限を取り払おうという動きがあるとしたら、それはトリッキーなものと言えよう。

もちろん、法のうへで母性保障がさらに拡充されることは歓迎すべきことであり、推進を強く期待したいが、必要以上のPRにまどわされて、もっと大きな問題をのがしてはなるまい。

雇用平等法・労基法改訂に關しては、個人の全く主観的な意見をたずねたのもかかわらず、回答を保留した者が多かった。女子労働のかかえる問題の最も端的で本質的な部分——保護と平等にかかわることだけに、軽々には論じがたいことはもちろんだが、回答保留者の中にはかねてからの問題意識の欠如を感じさせられる者も少なからず見受けられたのは残念であった。

好むと好まざるとにかかわらず、労基法研究会の報告に基づく審議は着々とす

められており、来年には政府案が提出される予定と聞く。女子労働の実態に根ざし、労働者自身の要求に基づいた案を自ら出していく努力が必要であらう。

社会党に続き、野党各党も雇用平等法案提出の動きがあるが、どんなに労働者の福祉を目指す法・制度であっても、労働者自身の意識の高揚のない中に制定されたのでは、決して十分に機能するものではない。繰り返しての討論を重ねる中に問題点を明らかにし、末端まで認識を深める運動が、緊急に、そして幅広く展開されなければならないことを痛感する。

●就職は、チェックポイントをたしかめて

最後に、個別企業の実態表を掲げる。七六年の調査では、個別の社名を明らかにして大きな反響を呼んだが、その後、回答者個人に圧力が加えられた例も発生したため、今回は業種別に無作為に配列した。就職に際し、最も関心を抱くのは通例初任給であるが、初任給がその後どのような格差を将来するのか、職務内容は女子の希望を満たすものであるのか、

給与に比し勤務時間は長いか短いか、有給休暇や母性保障はどの程度かなど、幅広いチェックが必要であらう。また、企業の姿勢そのものが人間を尊重しているか否かは、最も大きなポイントとなり得よう。たとえ、親企業は恵まれた労働条件であっても、その周辺に恵まれぬ関連会社を多く配置したり、嘱託・臨時雇いなどの名で不当に低賃金の未組織労働者を多く雇用していないかどうか、大きなチェックポイントとならう。女子学生に最も人気があるマスコミや出版界の中には、正社員の待遇は拔群によいが、年正社員の採用を手控えて、女子のほとんどは臨時職員として採用しているものも少なからずある。また、どのように脚光を浴びている企業にせよ、その中で女性差別が公然と行なわれているなら、「人間を尊重しない企業」と断言し得るのであらう。女性差別は人権侵害の象徴であることを、男子の求職者も肝に銘じてほしい。次回の調査では、それぞれの企業が実名入りでそのデータを公然と発表しうる程度に状況が改善されていることを、心から期待したい。

(注) ♀は男女同一 一は該当なし ※は工場のみ ○は女子にも適用 △は条件つき適用
 ×は適用せず なしは制度そのものがない意 (以下同じ)

大卒10年後の賃金		定 年		結 婚 退 職 制	出 産 退 職 制	家 族 手 当	住 宅 手 当	持 家 制 度	社 宅	寮
女	男	女	男							
144,800 109,100 —	151,000 120,790 不明	56 57 ※50 55	〃 57 55 〃	なし なし なし	なし なし やめる	○ ○ △	○ ○ なし	○ ○ なし	× × ×	× ○ ○
171,000 不明 女子は男子 —	260,000 不明 の65~70% 不明 不明	58 55 55 55	〃 〃 〃 〃	なし なし なし 優遇 なし	なし なし なし なし なし	なし なし × △ ○	なし なし × △ ○	× ○ × ○ ○	× ○ × × ○	× ○ × × ×
169,350 — — — 115,000 160,000 — 148,600 — — — — —	187,310 不明 不明 不明 125,000 200,000 — 180,600 — — — 不明 —	60 55 55 53 55 51 55 55 55 48 51	〃 〃 57 58 〃 〃 57 60 〃 〃 56 56 55 56	優遇 なし なし なし なし なし なし なし 優遇 優遇 優遇 なし	なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし	△ ○ ○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 不明	なし ○ ○ ○ ○ ○ ○ なし ○ ○ ○ ○ ○ ○ 不明	△ ○ ○ ○ なし ○ ○ ○ ○ × △ × ○ △ △ 不明	○ × ○ ○ × ○ × × × △ × × × △ 不明	○ × ○ ○ × × × × × ○ △ △ 不明
— — — 140,000 — — — — — — —	— — — 190,000 不明 — 254,200 190,000 —	60 56 57 56 55 60 58 56 50	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 55	なし 優遇 なし なし なし なし なし やめる なし	なし なし なし やめる なし なし なし なし なし	× △ × △ ○ × △ ○ 不明	○ △ ○ △ ○ × ○ × △	○ × × ○ × ○ × × 不明	× × × ○ × × なし × ×	× ○ × ○ × ○ ○ ○ なし ○
138,000 — 不明	145,000 216,500 大差あり 不明	55 55 55 60	〃 〃 〃 〃	なし なし なし なし	なし なし なし なし	○ △ △ なし	○ △ △ ○	○ × ○ ○	○ × × なし	× × × なし
— —	— 不明	57 48	〃 55	なし なし	なし なし	○ ○	○ ○	× ×	× ×	× ×

女子社員の待遇（企業別明細）（A-1）

企 業		初 任 給							
		大 卒		短大・高専卒		高 卒		中 卒	
		女	男	女	男	女	男	女	男
水 産	A	111,000	"	99,000	—	95,000	—	—	—
	B C	105,000	118,000	97,000	—	93,000	—	—	—
建 設	A	98,000	113,000	94,000	102,500	89,500	92,000	—	—
	B	113,000	"	93,500	"	89,000	"	—	—
	C	101,500	117,000	93,000	107,000	90,000	97,000	—	—
	D	102,500	123,000	94,810	105,950	89,920	—	—	—
	E	108,100	121,900	103,090	—	98,300	—	—	—
食 品	A	108,570	122,870	100,220	—	89,750	102,760	—	—
	B	—	119,400	—	108,400	99,100	—	91,700	—
	C	—	114,000	98,000	—	91,000	—	—	—
	D	—	123,000	101,900	—	99,300	—	—	—
	E	113,500	"	—	—	97,000	99,000	—	—
	F	—	—	—	—	—	—	—	—
	G	—	114,576	98,287	—	95,177	—	—	—
	H	—	114,500	—	—	—	—	—	—
	I	—	—	—	—	—	—	—	—
	J	107,601	114,101	98,096	—	—	—	—	—
	K	112,000	"	101,000	"	93,000	"	—	—
	L	120,000	"	—	—	96,500	98,000	—	—
	M	102,700	116,000	98,300	—	93,800	—	—	—
織 維	A	—	—	—	—	82,500	—	—	—
	B	—	106,000	86,000	96,000	77,000	86,000	70,000	—
	C	—	—	102,000	—	100,000	—	—	—
	D	101,750	110,440	97,520	—	77,320	"	66,000	"
	E	—	—	—	—	—	—	—	—
	F	91,000	115,000	84,000	—	78,500	—	65,500	—
	G	—	111,000	64,500	—	91,000	"	—	—
	H	—	"	84,000	"	—	—	—	—
	I	—	—	—	—	—	—	—	—
石 油	A	108,920	119,200	103,580	—	96,750	"	—	—
	B	105,948	121,917	104,749	—	103,877	107,256	—	—
	C	—	122,000	102,100	—	100,500	"	—	—
	D	不明	不明	不明	—	—	—	—	—
ゴ ム・ 皮 革	A	100,000	118,400	99,100	—	93,800	—	—	—
	B	101,900	不明	97,500	不明	92,000	不明	—	—

大卒10年後の賃金		定 年		結 婚 退 職 制	出 産 退 職 制	家 族 手 当	住 宅 手 当	持 家 制 度	社 宅	寮
女	男	女	男							
140,000 119,988 137,000	140,000 222,437 171,000	55 55 55	" " "	優 遇 な し や め る	な し な し	な し ○	な し ○	な し × ○	× × ○	× ○ ○
140,700 — 12万前後 163,870 168,355 — — 150,000 187,266 —	158,000 — — 227,803 215,651 — 24万~25万 220,000 235,878 不明	58 60 55 55 55 58 60 60 56 55	" " " " " " " " " "	な し な し な し 優 遇 や め る な し な し 優 遇 な し	な し な し な し な し な し な し な し な し な し	○ ○ ○ △ △ × △ × × ○	○ ○ ○ △ ○ ○ ○ ○ ○ × ○	な し ○ ○ ○ △ ○ ○ × × 不明	× × × × × × × × × × 不明	× × × × × × × △ × × ○ ○
— — — — —	不明 不明 201,195 201,000 不明	55 58 55 55 55	" " " 60 "	な し 優 遇 な し な し	な し な し な し な し	× ○ ○ ○ ×	× ○ ○ ○ ×	○ 不明 不明 ○ ×	○ 不明 × × ×	× ○ × な し ×
— — —	不明 不明 不明	57 58 45	60 " 55	な し な し な し	な し な し な し	× △ 不明	○ △ 不明	× ○ 不明	× × 不明	× △ 不明
— 118,000 — — —	不明 128,000 不明 225,000 不明	55 56 58 60 56	" 60 60 60 60	な し な し 優 遇 優 遇 な し	な し な し な し な し	不明 △ △ ○ ○	不明 な し × × な し	不明 ○ ○ × ×	不明 な し × × ×	不明 × ○ × × ○
— 133,950 — 160,000 — —	— " + α 不明 210,000 不明 不明	60 55 55 58 60 60	" " 58 " " "	な し な し な し な し な し	な し な し な し な し な し	不明 ○ な し × ○ 不明	不明 × な し な し ×	不明 ○ × ○ 不明 な し	不明 ○ × ○ 不明 ×	不明 × × ○ ○ 不明
— — — —	不明 不明 不明 不明	55 55 50 55	57 " 55 "	優 遇 な し な し	な し な し な し	○ な し 不明	○ × × ×	○ × ○ ×	○ ○ ○ ×	○ △ ○ ○

女子社員の待遇（企業別明細）（A-2）

企 業		初 任 給							
		大 卒		短大・高専卒		高 卒		中 卒	
		女	男	女	男	女	男	女	男
紙・パルプ	A	120,838	"	102,749	"	96,800	"	—	—
	B	103,250	115,400	103,250	—	92,050	103,250	69,900	80,200
化 学	C	—	—	—	—	—	—	—	—
	A	—	—	—	—	—	—	—	—
	B	—	—	—	—	97,190	—	—	—
	C	—	110,100	89,100	—	86,200	—	—	—
	D	118,300	122,600	110,700	—	103,780	107,510	93,960	—
	E	111,706	118,438	107,300	"	100,751	"	—	—
	F	118,400	"	106,100	"	98,250	"	—	—
	G	121,310	"	104,828	"	95,972	"	—	—
	H	97,000	121,000	94,000	—	91,000	97,000	—	—
	I	117,188	"	—	—	93,052	—	—	—
	J	105,300	不明	—	—	92,800	—	—	—
窯業・セメント	A	—	102,000	90,000	—	83,000	86,000	74,000	"
	B	106,700	115,500	99,000	—	91,500	95,100	—	—
	C	88,752	111,363	85,396	—	—	—	—	—
	D	104,000	114,000	95,000	101,000	89,000	91,000	—	—
	E	—	113,625	89,792	100,425	87,508	90,800	—	—
産業機械	A	105,000	不明	101,000	—	—	—	—	—
	B	96,200	118,000	—	—	88,000	91,000	—	—
	C	91,000	—	87,000	—	83,300	—	—	—
電 気	A	113,000	118,000	—	—	98,000	99,000	—	—
	B	101,000	106,000	—	—	80,000	"	—	—
	C	103,000	"	87,000	"	78,000	"	—	—
	D	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
	E	—	—	86,000	—	—	—	—	—
輸送機器	A	—	格	差	あ	り	—	—	—
	B	116,500	"	—	—	94,200	"	—	—
	C	—	—	86,000	—	82,000	—	—	—
	D	110,000	120,000	95,000	—	90,000	—	—	—
	E	98,400	"	88,600	—	—	—	—	—
	F	110,000	120,000	102,400	106,700	98,500	"	91,500	—
鉄鋼・金属	A	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—
	B	—	121,000	—	109,000	—	—	—	—
	C	—	120,000	95,500	—	92,000	—	—	—
	D	—	121,000	96,000	—	93,000	—	—	—

大卒10年後の賃金		定 年		結婚 退職制	出産 退職制	家族手 当	住宅手 当	持家制 度	社 宅	寮
女	男	女	男							
160,000 —	200,000 — 不明	60 55 60	" " "	なし なし なし	なし なし なし	○ × 不明	○ ○ 不明	○ × 不明	× × 不明	○ △ 不明
— 124,000	不明 —	55~65 58 60	65 " "	なし なし なし	なし なし なし	不明 不明 ○	不明 不明 ○	不明 不明 ×	不明 不明 ○	不明 不明 ○
150,000 165,800 男の70% —	250,000 274,600 (金額不明) 300,000	55 57 58 55	" " " "	なし 優遇 なし なし	なし なし なし なし	△ △ △ △	△ △ △ ×	× × × ○	× × × ×	× × × ×
— 204,870 — — 190,000 240,000 — 240,000 178,000 —	— " 不明 不明 不明 " 不明 " 不明	60 55 58 56 60 55 60 60~65 60 55 60	" " " " " " " " 57 "	なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし	○ × △ △ △ ○ △ △ △ △ ×	○ × △ × × なし × × ○ ○ ×	○ ○ ○ △ × なし ○ ○ ○ ×	なし × × × × × なし × × ×	なし ○ ○ ○ △ ○ ○ △ ○ ×
不明 — — —	不明 不明 186,616 不明	55 55 55	" " "	なし なし なし なし	なし なし なし なし	△ △ △ △	× × × △	× ○ ○ ○	× × なし ×	× × × ○
— 145,400 150,000 204,500 140,000	不明 204,000 227,000 229,500 不明	60 57 58 57 57	" " " " "	なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし	不明 △ △ △ ×	○ × × × ×	○ × × △ ×	○ × × ×	○ × × △ ×
— —	不明 不明	56 56	" "	やめる なし	なし なし	△ △	○ △	なし △	なし ×	なし ×
120,000 164,700 184,324	150,000 259,500 217,078	55 55 58	" " "	なし なし なし	なし なし なし	なし × ○	○ × △	○ 不明 ×	なし × ×	なし × ○
160,000	"	58	"	なし	なし	なし	なし	○	○	○

女子社員の待遇（企業別明細）（A-3）

企 業		初 任 給							
		大 卒		短大・高専卒		高 卒		中 卒	
		女	男	女	男	女	男	女	男
精密機械	A	108,600	115,200	99,250	—	94,000	—	—	—
	B	—	—	93,400	—	90,000	—	—	—
	C	104,000	113,000	—	—	91,000	—	—	—
製造業 その他の	A	—	不明	—	—	不明	—	—	—
	B	95,000	—	87,000	—	85,000	—	—	—
	C	87,500	100,000	85,000	—	83,000	86,000	78,000	—
商事・貿易	A	—	115,000	100,000	—	—	—	—	—
	B	111,200	—	97,700	—	—	—	—	—
	C	114,000	—	100,000	—	—	—	—	—
	D	—	115,000	102,000	—	89,000	—	—	—
百貨店・スーパー	A	116,000	—	97,000	—	91,000	—	—	—
	B	109,600	112,100	—	—	92,000	—	—	—
	C	113,000	—	96,500	—	89,000	—	—	—
	D	109,000	110,000	94,000	—	88,500	—	—	—
	E	—	—	—	—	—	—	—	—
	F	113,000	—	96,500	—	89,000	—	—	—
	G	116,000	—	99,500	—	91,000	—	—	—
	H	102,000	—	91,500	—	84,000	—	—	—
	I	103,000	115,500	97,000	—	88,000	—	—	—
	J	105,500	—	98,500	—	91,500	—	—	—
	K	—	—	—	—	86,500	—	—	—
損害保険	A	—	117,000	92,000	—	87,000	—	—	—
	B	—	117,740	93,460	—	84,880	—	—	—
	C	96,500	—	77,800	—	71,000	—	—	—
	D	—	126,046	100,045	—	93,090	—	—	—
生命保険	A	—	110,000	92,000	—	87,000	—	—	—
	B	—	—	92,000	—	87,000	—	—	—
	C	—	100,000	92,000	—	87,000	—	—	—
	D	—	—	92,000	—	87,000	—	—	—
	E	—	110,000	92,000	—	87,000	—	—	—
不動産	A	—	—	95,000	—	90,000	—	—	—
	B	120,500	121,500	99,500	—	90,500	—	—	—
運輸・航空	A	—	—	88,000	—	74,700	—	—	—
	B	96,100	106,500	90,100	—	82,000	—	—	—
	C	119,231	130,572	110,727	116,397	91,303	92,705	—	—
通信	A	98,800	—	87,300	—	80,000	—	—	—

大卒10年後の賃金		定 年		結婚 退職制	出産 退職制	家族手 当	住宅手 当	持家制 度	社 宅	寮
女	男	女	男							
差なし 163,000	(金額不明) 215,000	57 60	" "	優遇 なし	あり なし	なし △	なし ○	× △	× △	× ×
差なし — — 237,000	(金額不明) 不明 不明 240,000	55 55 55 55	" " " "	なし 不明 なし なし	なし 不明 なし なし	× ○ △ ○	△ ○ × ○	× ○ ○ ×	× ○ × ×	○ ○ ○ ○
120,000 130,000 — — 173,600 199,800 —	女の 10~20%増 140,000 不明 不明 " " 不明	55 55 57 53 65 60 58	" " " 58 " 65 "	なし なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし なし	○ ○ ○ ○ 不明 不明 ○	○ ○ ○ ○ 不明 不明 ○	なし ○ × ○ 不明 不明 ○	○ なし × × 不明 不明 ×	○ ○ ○ × 不明 不明 ×
— — 差あり 242,670 166,200	不明 不明 (金額不明) 245,166 "	55 58 55 55 56	" " " " "	なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし	○ × ○ × ○	○ ○ × ○ ○	○ × × ○ ○	× × × なし ○	× × × × ×
207,900 — — 146,400	" 不明 不明 156,400	55 57 56 55	" " " "	なし なし なし やめる	なし なし なし やめる	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	× なし × ×	× なし × なし	× なし × なし
190,000 202,000	250,000 "	55 55	" "	なし なし	なし なし	△ ×	○ ○	× ○	× ×	× ×
— 220,000 — — 200,000 255,000 209,590 216,500 — 214,610 247,400 230,000 —	200,000 " 不明 " " " " — 225,830 257,300 " —	60 60 60 なし 56 60 55 60 55 60 60 55	" " " なし " " " " " " " "	なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし	なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし	不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明	○ 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明	不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明	× 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明	

女子社員の待遇（企業別明細）（A-4）

企 業		初 任 給							
		大 卒		短大・高専卒		高 卒		中 卒	
		女	男	女	男	女	男	女	男
ガ電力・ス	A	117,900	"	96,800	"	93,400	"		
	B	—	116,150	96,660	—	95,960	"		
銀行・金融	A	95,000	"	84,000	"	78,000	"		
	B	—	—	—	—	—	—		
	C	—	98,000	—	—	78,000	"		
	D	—	100,000	91,000	—	82,000	—		
サ ー ビ ス	A	110,300	"	96,900	"	92,400	—		
	B	—	116,300	—	—	96,400	—		
	C	—	103,000	88,000	—	88,000	"		
	D	106,000	不明	91,000	—	87,000	"		
	E	125,500	"	—	—	116,100	"		
	F	120,000	"	—	—	100,600	"		
	G	121,900	"	110,100	"	102,600	"		
新聞・通信社	A	119,600	不明	—	—	—	—		
	B	116,000	不明	96,000	—	90,500	—		
	C	96,000	不明	—	—	83,000	不明		
	D	101,500	"	—	—	—	—		
	E	107,400	不明	—	—	89,700	不明		
放 送	A	101,000	不明	—	—	—	—		
	B	86,900	不明	—	—	—	—		
	D	129,700	"	103,000	"	95,600	"		
広 告	A	100,500	不明	90,500	不明	—	—		
	B	108,500	"	93,000	"	86,500	"		
出 版	A	—	149,200	—	—	—	—		
	B	138,420	"	—	—	—	—		
	C	—	—	—	—	—	—		
	D	—	—	—	—	—	—		
	E	—	—	—	—	—	—		
	F	—	—	—	—	—	—		
	G	—	—	—	—	—	—		
	H	—	—	—	—	—	—		
	I	—	—	—	—	—	—		
	J	—	147,800	132,000	—	—	—		
	K	120,000	—	—	—	—	—		
	L	—	—	—	—	—	—		

育児休業職制		続 年 数	平 均 勤 働	職 者 管 理 数	職 種 等 の 差 別
期間 (年)	有給率 (%)				
1 なし なし	0	12 事務5.19 工 12.25	0 0 0	ある 女性には雑用が多い 事務一補助業務、工場一手作業 補助職	
なし なし なし なし なし なし		5 7.5 2.5 4.3 3	0 0 0 0 0	事務は補助、対外交渉は男子のみ なし 一般に補助職 部門による研修に男女差 なし	
なし なし なし なし なし なし なし なし なし なし 1 なし 1	60	7.1 9.38 7.25 5 10 9.8 6 10.7 6.7 5 8.9 5 不明	0 0 0 不明 0 0 0 2 不明 0 0 0 0	なし なし 不明 ない ある 女性に補助職 " " 不明 力仕事は男のみ " " ある ない ない ある 女子は事務補助 ない 危険な仕事は男性	
3 なし 1 1 なし なし なし なし 1 なし	不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明	不明 4~5 3~4 3.2 3~4 5 5.1 3.5 2~3	不明 0 1 0 0 0 0 0 0 1	ない 表面はないが、責任ある仕事につけず昇給にも不利 ある 女子は補助職のみ ないとはいえない ある 主に補助 ある 補助職 ない 責任ある仕事もできる ある 補佐 ある 男はセールス、女は経理か総務	
なし なし なし なし		5 5 5~6 不明	1 0 0 1	ある 女子は転勤させられないので補助職 ある 女子はすべて高卒扱い ある 研究職につけない、職分が上がらない ある 責任ある仕事につけない	
なし なし		4.9 3	0 0	ある 主体は男、女は補助 回答拒絶	

女子社員の待遇（企業別明細）（B-1）

企 業	時 間 働	有給休暇		生 理 休 暇		出 産 休 暇		育児時間		
		初年度 (日)	最高 (日)	日 数	有給率 (%)	期間(週)	有給率(%)	(分)	期間 (年)	有給 率%
水 産	A	44	8	必要日数	100	6, 6	100	60	1	100
	B	40.5	8	1	100	6, 6	60	なし		
	C	40	8	2	100	6, 6	0	なし		
建 設	A	38	12	制限なし	100	6, 6	100	不明	—	—
	B	42	1/月	申請日数	100	6, 6	100	60	1	100
	C	41	9	1	0	6, 6	60	60	—	—
	D	38	9	必要日数	100	6, 6	100	60	1	100
	E	37.5	2	2	100	6, 6	60	不明	—	—
食 品	A	37	13	必要日数	100	6, 6	100	60	1	—
	B	40	7	必要日数	100	6, 7	100	60	1	100
	C	36.25	12	必要日数	100	6, 6	100	60	1	100
	D	40.5	4	2	0	6, 7	不明	60	1	0
	E	40.5	10	1	100	不明	不明	不明	—	—
	F	37.5	10	必要日数	100	85日	40	60	1	100
	G	44	7	申請日数	100	6, 6	0	60	1	—
	H	40	10	必要日数	100	7, 7	100	60	1	100
	I		3	2	0	6, 6	0	60	1	100
	J	39.7	6	申請日数	100	6, 6	100	60	1	100
	K	39.25	11	申請日数	0	45日, 45日	0	—	—	—
	L	40	5	必要日数	100	6, 6	0	60	1	100
	M	不明	不明	申請日数	100	7, 7	100	60	1	100
織 維	A	37.5	12	2	不明	7, 7	不明	60	不明	不明
	B	45	0	2	0	8, 8	0	90	1	100
	C	36.5	8	1	-800円	6	0	60	1	0
	D	39	0	2	100	8, 8	0	60	1	100
	E	37.5	7	2	0	不明	不明	なし	—	—
	F	40	7	2	100	8, 8	6, 6...95% 7~8...81.7% 6, 6...0 1~2, 7~8...60% 6, 6...100% 7~8...60%	60	1	100
	G	不明	1/2月	必要日数	0	8, 8	0	60	1	100
	H	40	2/3月	2	100	6, 8	0	30	1	100
	I	不明	0	1	100	2月, 2月	0	不明	—	—
石 油	A	36.5	12	2	100	6, 7	100	60	1	100
	B	36	9	2	100	6, 6	共済会40	60	1	0
	C	40	1	2	100	6, 6	0	60	1	0
	D	37.5	15	2	100	6, 7	共済会40	60	1	100
ゴ ム・ 皮 革	A	39	5	20	1	80	21歳以上100 " 未満 80	60	1	100
	B	40	5	不明	2	1日目100 2日目 0	0	60	1	100

育児休業職制		続 年 数	平 均 勤 数	職 者 管 理 数	職 種 等 の 差 別
期間 (年)	有給率 (%)				
なし なし 不明		7~8 11 3~4	0 0 0	ない ない ない	女を育てる方針
なし なし 不明 なし なし なし あり なし なし なし	不明	5 4 4 9 12.8 3~4 9.5 3 9.6 5.5	不明 0 ある ある 0 2 0 0 ある 0 15 0	ある ある ある ある ある ある ある ある ある ない	男子…営業、女子…補助的管理業務 女は補助 補助的な事務は女子 全く変わらない所もあるが部署によっては単純労働 研究職は差がないが、事務は差あり 女は補助職 女にも責任ある仕事を与えるし、優遇されている人 も中にはいるが…… コピー、電話番ばかり お茶くみ、コピーとりは女子
なし なし なし なし なし		4.5 事務 5.5 現場 13.6 8.1 4 5	0 0 0 0 0 0	ある ある ある ある ある	三交替勤務、外廻りは男子のみ 大半は単純作業 補助業務 女は事務補助のみ
なし なし なし		5.5 3~4 6.3	0 0 3	ある 原則的にはないが女は補助職 あるといえはある、ないと言えない	
なし なし なし なし なし		3.7 5~6 7~8 5.6 9.2	1 0 0 不明 0	特にない ない ある ない ない	営業などは男子 女の仕事は固定化、ただし制作部門にディレクター
なし なし なし なし 不明 不明 なし		— 3.5 7.1 5~6 不明 不明	0 0 0 0 不明 0—	ある ある ある ない 回答拒否 ある	男性のアシスタントにすぎない 責任ある地位につけない 設計部門では補助、電算はプログラマー プログラマーが多い 補助的、女子のみの業務でも職制にない
なし なし 不明 なし		4.9 4~5 4 4.5	不明 0 0 0	無回答 ある 無回答 ある	補助業務が主、責任職につけない

女子社員の待遇（企業別明細）（B-2）

企 業	時 間 働 賃	有給休暇		生 理 休 暇		出 産 休 暇		育児時間		
		初年度	最高	日 数	有給率 (%)	期間(週)	有給率(%)	(分)	期間 (年)	有給 率%
紙・ パ ル プ	A	37	5	20	必要日数	6, 6	60	60	1	0
	B	38	14	20	3	6, 7	100	—	—	—
	C	36.5	9	—	1	8, 8	0	不明	—	—
化 学	A	37	10	不明	2	8, 8	100	なし	—	—
	B	40	6	20	3	6, 7	0	60	1	0
	C	40	6	不明	請求日数	12	0	不明	—	—
	D	40	11	20	必要日数	100	100	60	1	0
	E	39	12	20	必要日数	13	80	60	1	100
	F	39	9	25	1	8, 8	0	60	1	100
	G	35	12	20	2	7, 7	共済会 100	60	1	100
	H	39	10	—	2	6, 6	不明	0	—	—
	I	41.3	4	21	1	6, 6	100	60	1	100
	J	42	1/25日	20	2	6, 6	100	60	1	100
窯業・ セ メ ン ト	A	45	4	20	申請日数	6, 6	0	60	1	不明
	B	41	5	20	1	6, 6	0	60	1	100
	C	40.5	11	20	その期間	6, 7	100	60	1	100
	D	39	8	20	1	7, 7	100	60	1	100
	E	38	8	20	不明	6, 6	0	60	1	0
産 業 機 械	A	35	6	不明	1	6, 6	0	60	1	0
	B	不明	6	20	必要日数	6, 6	0	60	1	0
	C	不明	不明	不明	1	6, 6	不明	なし	—	—
電 気	A	不明	不明	不明	2	6, 6	0	30	不明	不明
	B	40	11	20	必要日数	7, 8	0	60	6	0
	C	42	15	20	2	8, 8~9	特別共済会50	60	1	100
	D	38.8	12	20	3	8, 8	64.4%	60	1	100
	E	46.5	7	20	1	8, 8	6, 6...100 1~2, 7~8...85	60	1	100
輸 送 機 器	A	不明	不明	不明	1	6, 6	100	60	1	不明
	B	47	11	20	1	6, 6	100	60	1	100
	C	42	10	20	必要日数	6, 6	0	60	1	0
	D	38.8	8	20	3	6, 6	40	60	1	90
	E	38.8	6	20	2	6, 7	100	不明	—	—
	F	40	12	20	2	6, 7	100	60	1	100
鉄 鋼 ・ 金 属	A	41	6	不明	2	6, 6	不明	60	1	不明
	B	39.5	19	20	2	6, 6	0	60	1	100
	C	40.5	18	20	必要日数	6, 6	0	不明	—	—
	D	37.5	20	20	3	6, 6	0	60	1	0

育児休業制		続 年 数	平 均 勤	職 者 数	女 性 管 理 数	職 種 等 の 差 別	
期間 (年)	有給率 (%)						
なし なし なし		5.8 12 4.2	— 0 1	ない ある ある		重労働は男子のみ 女性は単純作業がほとんど 同じ仕事は同賃金だが……	
あり なし なし	0	不明 5 6	不明 0 0	不明 答えたくない ない		危険なところは男子、卸し、デパートへの出向は女	
なし なし なし なし なし		5 12 7.8 5	不明 0 6 0	ある ある ある あい		賃金差あり、住宅手当は男は1～2万、女は千円 女は26まで準社員、男は半年後社員、賃金差あり 同じ仕事をしていても補助職とされる	
3 なし なし 2 なし なし 1 1 あり なし なし	0 不明 0 0 0	7 3 6 5 6 6 5.8 6 3 6 3	0 0 3 2 不明 6～7 0 0 0 0 0	ない ない ある 建前はないが ない ない ある 特別にはないが ない		運転手・ボイラーは男のみ 販売が主なので、レジなどは女性のみ 係長級は質量共に女は劣る 昇進は遅いが、昇進が遅く仕事の与えられ方にも差 年齢給と職能給と勘案して一本化 外商の仕事は男子 外勤・出張は女子にない 事務職は補助的	
なし なし なし なし		3 6 5.49 4	0 0 0 1	ある ない ある ある		女子は判定職で、判断職にはつけない 女子の戦力化が図られている 補助的、打ち合わせ等に加われない 大卒でも一般に補助職	
なし なし なし なし なし		5 8～9 5.5 6 5	0 0 50以上 数人 数人	ある ある ある ある ある		初任給は同じだが昇給がちがう 25～6歳から男は営業に。女は長くいても係長 女は係長どまり 26～7歳以降、男は営業で伸び、差がつく 同上	
なし なし		4 3.5	0 0	ある ない		資格があっても契約業務はできない 責任ある仕事にはついていないが、昇給は遅い	
なし なし なし		4～5 5 3.5	0 0 2	ある ある ある		入社時の研修から男女別 女はコピーとりお茶くみ たとえば航空審査業務でルーチンは女、まとめは男	
3	0	不明	不明	ない			

女子社員の待遇（企業別明細）（B-3）

企 業		時 間 働	有給休暇		生 理 休 暇		出 産 / 休 暇		育児時間			
			初年度 (日)	最高 (日)	日 数	有給率 (%)	期間(週)	有給率(%)	(分)	期間 (年)	有給 率%	
精密機械	A	38.8	1/月	20	申請日数	40	6, 7	40	30	1	—	
	B	37.5	9	20	1	100	6, 6	75	60	1	100	
	C	不明	不明	不明	制限なし	1日目100	12, 12	0	60	—	0	
製造業 その他の	A	不明	不明	不明	1 -	100	6, 6	100	60	1	100	
	B	37	6	20	申請日数	100	6, 6	100	60	必要 期間	100	
	C	35	1/2月	20	1	100	6, 6	100	60		100	
商事・貿易	A	36.5	11	20	1	100	6, 8	100	90	1	100	
	B	35	14	20	1	0	6 ~ 8, 8	100	90	1	100	
	C	36.5	14	20	必要日数	100		100	90	1	100	
	D	45	10	20	必要日数	100	100	90	1	100		
百貨店・ス ー パ ー	A	37.5	12	20	必要日数	0	8, 8	100	60	1	100	
	B	38	6	20	必要日数	0	6, 6	0	不明	—	不明	
	C	37.5	7	20	申請日数	0	6, 6	共済保険40	60	1	100	
	D	35	8	20	申請日数	0	6, 6		60	1	100	
	E	36	6	20	申請日数	0	6, 6	不明	0	—	—	
	F	37.5	不明	不明	1	100	6, 6	0	60	1	100	
	G	35	8	20	申請日数	0	8, 8	0	0	—	—	
	H	37.5	5	20	必要日数	0	8, 8	100	90	1	—	
	I	39	4	20	申請日数	0	10, 10	0	120	1	100	
	J	42	9	20	申請日数	100	8, 8	85	60	1	—	
	K	37.5	5	20	申請不明	不明	6, 8	不明	60	1	100	
損害保険	A	40	6	20	1	100	6, 6	100	60	1	100	
	B	33	20	20	2	100	6, 6	100	60	2	100	
	C	34	11	20	申請日数	100	8, 8	100	60	1	100	
	D	35.5	12	20	1	100	6, 8	100	60	1	100	
生命保険	A	37	16	20	申請日数	不明	6, 6 ~ 8	不明	60	1	不明	
	B	37	1/月	20	毎潮1	100	6, 8	0.4%カ ット 0.8%カ ット	60	1	100	
	C	37	1/月	20	毎潮1	100	6, 8		60	1	0	
	D	37	16	20	毎潮1	100	14		100	60	1	100
	E	37	20	20	1	100	6, 7		100	60	1	100
不動産	A	38	10	20	必要日数	100	6, 6	100	60	1	100	
	B	37.5	12	20	不明	0	6, 6	0	60	1	100	
運輸・航空	A	35	16	20	毎潮1	100	6, 6	保健組合80	60	1	100	
	B	35	14	20	2	100	6, 6	100	60	2	50	
	C	37.5	20	20	2	100	8, 8	6, 6 ~ 100	60	1	0	
通信	A	40	14	20	2	100	6, 6	100	法定	〃	—	

育児休業職制		続 年 数	平 均 勤 数	職 者 数 女性 管理 数	職 種 等 の 差 別
期間 (年)	有給率 (%)				
なし		7.3	1	ない	現場のみ職務内容がちがう
なし		6	0	ない	現場は男、電話交換は女だが、事務系の差はない
なし 不明 なし		5.66 不明 3.5~4.5 4	0 不明 — 0	ない 不明 多少ある 明確な差はないが運用上差があり、重要な仕事につけない	
なし なし なし 不明 不明 なし 1	0	不明 11 4.5 不明 7~8 不明 4.4	1 0 0 0 8 0 0 1	ある ある ない ない ない ない ない 添乗業務に1人だけではつけない、サブのみ	女は一般事務か劇場窓口のみ 事務・営業とも女は補助職 車で外まわりの仕事は男（大卒女不採用）
1 なし 0.5 なし なし	0 0	平均40歳 3~4 13 3・40年も 定年まで 多し	0 3~4 不明 2 1	ある ある ある ある ある	電話は女性のみ、印刷は男のみ 印刷関係には女はいない 満足38%、不満44.8% 女は補助職。編集記者と交換手のみ社員 採用時点で編集・営業はほとんど男
なし なし なし なし		20 8~9 15 15~16	7 1 1 不明	ある ある ある ある	資格があっても副部長以上になれない 女の視点を生かす番組は作れない 現場の技術者・制作者は男 現場は差がないが一般事務は補助職 昇格しない
なし なし		6.6 5~6	1 0	ある ある	女は事務職（制作は男子） 上司の考えで配置を決め、個人差あり
なし なし なし なし なし なし なし なし なし 1 なし なし なし なし	社保料 のみ	不明 不明 不明 10 8.5 10.1 8.7 — 13.7 8 15 不明	1 不明 0 0 0 4 6 2 1 1 0 6 1 0	ない ない ない ない ない ない ない ある ある ない ある ない ある	ただし肉体労働は男 営業・編集・庶務は補助的な事のみ 表向きはないが受付や経理は女 ごく一部を除き補助的

女子社員の待遇（企業別明細）（B-4）

企 業	時 間 間 勤	時 間 間 勤	有給休暇		生 理 休 暇		出 産 休 暇		育児時間		
			初年度 (日)	最高 (日)	日 数	有給率 (%)	期間(週)	有給率(%)	(分)	期間 (年)	有給 率%
電力・ガス	A	38	15	20	2	100	6, 6	100	60	1	100
	B	37.5	0	20	3	100	6, 6	100	60	1	100
銀行・金融	A	40.5	14	20	申請日数	100	6, 6	100	60	1	100
	B	不明	16	20	不明	不明	6, 8	不明	不明	1	不明
	C	40.5	14	20	必要日数	不明	6, 8	不明	60	1	100
	D	40	16	24	必要日数	100	6, 6	100	60	1	100
サ ー ビ ス	A	38	7	25	必要日数	100	6, 6	70	60	1	100
	B	39.5	5	20	2	100	6, 6	100	なし	—	—
	C	40	6	—	特に不定	0	不明	不明	不明	—	不明
	D	38	—	—	なし	2	6, 6	不明	60	1	不明
	E	不明	—	—	2	100	8, 10	100	120	1	100
	F	不明	—	—	申請日数	100	6, 7	100	60	1	100
	G	42	—	—	2	100	7, 7	40	60	1	0
新聞・通信社	A	42	13	—	2	100	16	100	60	1	100
	B	42	18	—	2	0	13	0	60	1	100
	C	42	15~17	—	2	100	16	100	60	1	100
	D	42	—	30	2	100	—	100	60	1	100
	E	35	0	7	必要日数	100	103日	100	60	1	100
放 送	A	35	12	—	必要日数	100	8, 8	100	120	1	100
	B	36.5	20	—	必要日数	2日100	6, 8	0	120	1.5	100
	C	38	—	—	2	50	18	約99	60	1	100
	D	36.5	6	20	毎潮2	100	90日	100	60	1	100
広 告	A	35	9	25	1	100	6, 6	100	なし	1	100
	B	35	10	20	2	100	6, 6	100	60	1	100
出 版	A	35	15	20	2	0	8, 8	100	なし	—	—
	B	不明	不明	不明	2	100	8, 8	100	60	1	100
	C	不明	1/2月	20	必要日数	不明	6, 6	不明	60	1	不明
	D	不明	不明	不明	なし	—	8, 8	100	なし	—	—
	E	35	20	20	必要日数	不明	6, 6	0	60	1	0
	F	35	12	20	必要日数	100	8, 8	100	60	1	100
	G	35	12	20	1	不明	8, 8	100	60	1	100
	H	35	12	20	必要日数	100	16	100	60	1	100
	I	35	12	20	3	100	90日	100	60	1	100
	J	38	10	20	必要日数	100	8, 7	100	60	1	100
	K	35	16	20	2	40	16	不明	80	1	不明
	L	38	6	20	2	不明	8, 8	不明	なし	1	不明

子どもとつくる生活文化研究会

生活文化を問い直す

高度経済成長、都市化、核家族化、情報化社会、管理社会……という、いまも私たちが歩みつつけている道は、自然、生活、教育、文化のあらゆる面で荒廃をもたらしつつ、確実に私たちを人間疎外へと追いやりつつあります。

こうした時代の流れに抗って、奪われた人間性を取り戻し、さまざまな抑圧から私たち自身を解放するためにいまなさなくてはならないことは何なのか？ という問いかけから私たちの研究会は出発しました。

一九七六年、七人のメンバーが集まったとき、まずお互いの立場をさまざまなしがらみをひきずって悪戦苦闘している生活者としてとらえること、お互いに思想や信条を強制し合わないこと、一切の権威に盲従しないこと、子どもとともに学びともに育つ生活共同体としてとらえること等を確かめ合

ったうえで、ともに生きる場である家庭、地域、教育現場で、いま生活文化のありようが、どのようになっているかを問い直す作業にとりかかりました。その過程で仲間もますますふえ、問題のありかも次第にはつきりと見えてきはじめました。

たとえば、弁当の代わりにカップ麺を持ってきて、教室でお湯をかけて食べる中学生を問題にするとき、子どもの食生活の画一化、簡便化の背後にいったい何があるのか？ 母親の手抜きがあるのか、それとも母親の社会進出を支えるためか、コマーシャルリズムによる味の汚染の犠牲なのか、といった細かい目配りが必要であること。

いわゆる「手作り」の手放しの礼讃が、女性を再び家庭にしばりつけ、ひいては天皇家を頂点とする家制度の復権に結びつく可能性がないかどうかを検討すること。

生活文化の伝承には、親子、男女、公私といった人間関係の見直

しと、伝承に傾する文化の再創造を欠かすことができないこと。

こうした問題意識を共有する者同士が、互いに協力しあいながら開かれたかわりを結ぶために模索しあうこと。

つまりは、自立を目指す人間がともに生きる場より豊かな生活を築くために、お互いに力を貸しあって行こうというわけです。

複眼でとらえる

私たちは、ともすれば自分の立場にとらわれ、物事を一面的に見がちです。そして、そのことがこれまでお互いを孤立させ、連帯を阻んできたのです。そのことへの反省から、私たちは、一つの問題を常に複眼でとらえようとしてきました。大人と子ども、親と子、親と教師、男と女、消費者と生産者、個と集団、家庭と地域、中央と地方……幸いに全国に点在する四百

の会員には、あらゆる立場、年齢、職業が含まれていて、複眼の

寺内定方

電話 (03) -421-9013

働きをはたしつづ、子どもをめぐる危機的状況を告発し、新しい生活文化創造のための実践活動をそれぞれで展開しています。

研究会の活動は、会誌「宝さがし」の発行、生活文化講座、世話人研究会、個人およびグループの実践活動「この指とまれ」の四つを柱に、日常活動の総括と全国レベルでの情報交換を目的とした全国大会の開催を行なってきました。

会誌「宝さがし」は、私たちの生活文化を支え、色どっている人、物、心、自然、それらのかかわりもっている真価を問い直し、再発見することを願って、七十九年十月現在八号まで発行されています。

一号子どもとつくる生活文化とは（寺内定方、上田融ほか）

二号冒険遊び場などの実践レポート（大村虔一ほか）

三号義務教育を問い直す（上笙一郎、清川輝基、市村久子）

四号地域と子ども（片岡輝、毛利子来ほか）

五号生活の中の科学（井原聡、山口裕一ほか）

六号生きる力としての表現（桜井美紀、田中周子ほか）

七号待つ（第二回全国大会レポート）

八号いま、生活文化を問い直す①家庭から

一号を除いてバックナンバーがあります（七号までは三〇〇円、八号から四〇〇円）

生活文化講座、世話人研究会は東京を中心に随時行なっています

が、これまで長野県上田市、駒ヶ根市、兵庫県尼崎市などで、地元会員グループとの交流集会をもってきました。

実践活動「この指とまれ」は、会員各自が行なうもので、地域文庫、造型グループ、保育研究、子どものテレビの改善運動、絵本づくり、歌遊び、手づくりおもちゃ、民話伝承遊びの再創造、冒険遊び場づくりといったユニークな実践が全国各地で展開されています。

創造のよこぎを

全国大会は、第一回「この指とまれ」、第二回「待つ」、そして今年第三回は「つくる」をテーマに、全国から八十名の参加を得て二泊三日の日程で行なわれ、会員の実践レポートを中心に、四つの分科会で熱心な討論がくりひろげられました。新しい試みとして「自然の中で遊ぼう」「絵本をつくろう」「紙で遊ぼう」「地図をスケッチしてみよう」「語りきかせ」「小さな木工工作」「誰にでも歌はつくれます」という七つの実作交流が行なわれ、人と人、人との、ものとののかかわりをおして、大人と子どもの新しい出会いの場と生活文化創造のよこぎを体験しあいました。

この大会でいくつもの新しい「この指とまれ」グループが誕生しましたが、「女性解放を語る」グループもその一つ。これからの活動が期待されます。（片岡輝）

私たちの男女雇用平等法をつくる会

「男子のみ募集」「男正社員、女臨時・パート」「〇〇歳以下」「未婚に限る」「自宅通勤」等々立ちはだかる差別の前で働きたくても働けずにいる私たち女。

「男幹部職員、女補助職員」「賃金は男の半分」「結婚したら、出産したら退職するのは当然、定年はもちろん女が先」次々と形を変えて現われる差別洪水のまっただ中で働き続けている私たち女。

働きたいと思ったとき、働き続けようと考えたとき、私たちが学生であっても、主婦であっても、OLであっても、私たちが女であるというだけの理由で、差別という怪物が私たちに向かってキバをむき出しに出来ます。右を見て

も、左をみても、この女の状況には、変わりがありません。女たちの誰かが、キャリアウーマン、エリート女と呼ばれ、マスコミなどで祭り上げられても、男の二倍も三倍も働くことや、人間らしさ」と同意語の「女らしさ」を捨てて

ことが条件であるならば、それは狡猾な差別の別の顔をみせられているにすぎません。「男は仕事・女は家庭」という社会通念（性別役割分業意識）が、「女は本来養われるべきもの」であるから賃金は半分でよいV/A働きたいなら男以上に働かせるV/Aい

らなくなつたらいつでも首V等、企業の思いどおりの搾取と使い捨てを許し、雇用における男女差別政策を助長させて来しました。それ故に私たち女は、職場でも、社会でも半人前の人間としてしか扱われることなく、個人としての尊厳と自立を侵され続けて来たのです。

「つくる会」誕生、一月二十日、私たちは、「労基法改悪に反対し、私たちの男女雇用平等法をつくる大集会」を開催しました。八百人以上もの女たちが集まったことに、私たちは、私たちの苦しみと怒りの大きさに改めて驚き、同じ思いで聞える喜び

を感じました。ついに女たちの怒りの声が上がつたのだ——いわれのない差別とぶつかるたびにかみしめて来た、あの失望や屈辱に耐えるのはもういやだ。やり場のない怒り、あきらめに変えて生きるのはもうたくさんだ。欲しいもの（賃金の平等）を欲しいと呼びたい——。

そして、「私たちの男女雇用平等法をつくる会」が誕生することになったのです。私たちのこの会の目的は、狭義に言えば、前述したような募集や採用の段階における差別から、定年退職に至るまでの雇用に関するあらゆる差別を禁止する「男女雇用平等法」の制定と、それに基づいて実際に差別から女たちを救済するための機関である「男女雇用平等委員会」の設置を実現させることです。

もちろん私たちは、法律をつくれれば、性差別がなくなるとか、法律が性差別をなくすための最高手段であるとは思っていません。

働く女の現場から

しかし、私たちをとりまく現在の状況はめまぐるしく、一九七八年の国会には、社会党が「男女雇用平等法案」を提案し、最近では、共産党も「雇用における平等の機会・権利の保障に関する法律案」を発表しました。そして、その他の政党や労働省でも法案の検討が行なわれていると聞きます。また、労基法研の報告をめぐって、「保護か平等か」などの議論が盛んになり、保護ぬき平等論が幅をきかせています。

こうした状況のなかで、私たち女が、私たちの基本的な人権である母性保障や、労働権の問題を、政府や政党間の力関係にゆだねているならば、形ばかりの「平等法」によって、男女差別はますます拡大するおそれさえあります。だからこそ大切なのは、当事者である私たち女が主体となった運動であり、とりわけ、働く女たちの現場で

の運動です。そして法律や制度は一つの手がかりを与えるものだけといえるでしょう。したがって、私たちの会の目的は、単なる「男女平等法」の制定ではなく、働く女にも働けない、闘おうにも闘えないといった現在の状況を、女の労働権を確立することによって突破しようとするものなのです。

パンフレットも誕生

この「つくる会」ができてから八か月が過ぎました。会員は約二百名。名古屋をはじめ各地に「つくる会」が誕生しています。みんな

なが手や足、口、頭を総動員して活動しています。あなたも一緒に動きませんか？ 女の状況を私たち女が変えていくのではありませんか？

私たちはパンフレットを作りました。五月以降重ねて来た連続討論会で確認して来たこと——なぜ平等法が必要か、保護と平等との関係は、などなど——、これからの課題、私たちの会がめざすもの等、現在の私たちのすべてを盛りこみました。一問一答形式にしたり、さし絵を使って法案を説明したり、できる限りの知恵をしぼって作りました。紙面がなくて、ここには書けなかったさまざまなことが、あなたに読んでもらおうのを待っています。是非読んでみてください。そして、このパンフレットをもとに、いろんなことを話し合いながら、私たちみんなで「私たちの男女雇用平等法」を実現させるための運動を進めて行きましょう！



鉄連の七人とともに

性による仕事差別・賃金差別と闘う会

男女別の賃金差別が労基法四条違反であることは、秋田相互銀行の判決後定着してきました。しかし、この男女別賃金を合法的かつ合理的な形で残し、あくまでも女を低賃金におしとめようとしているのが、仕事差別のあらわれです。私たち「鉄連の七人と共に性による仕事差別・賃金差別と闘う会」が発足して、はや一年半が過ぎました。この間に、労基法研究会の報告が出され、労基法改悪への動きが一段と増すなど、私たちを取りまく情勢はめまぐるしく動き始めています。

しかし、国際婦人年以來、このように女性が働くことの問題がクローズアップされ、社会に進出する女性が増え続けるなかで、女性の労働権獲得のための組合や行政の取り組みはほとんどないと言って過言ではないでしょう。鉄鋼連盟の場合も、提訴に踏み切るまでの過程のなかに如実にあらわれています。

日本鉄鋼連盟で働く女性たちは

賃上げ率・一時金支給率が男女別に定められているという、あきらかな賃金差別を受けています。これに対し、原告となった七人は、執行委員になり、労組婦人部を中心に差別撤廃に取り組んできましたが、最後には男女に差がついたまま妥結せざるを得ない状況が続いていました。しかし、当局（鉄鋼連盟）は、男女差別賃金は合理的な説明のつかないことを認めざるを得なくなり、この男女別の差を、職務別の差に切り換える方針を打ち出し始めました。その第一歩として原告の一人である佐々木元子さんに、司書から事務補助職への配転を命じました。そして配転理由の説明を求めて、夕方まで辞令の受理を保留したことに對して訓戒処分にしたのです。これに對し組合は、人事権は当局にあるとし、ルールの問題で終わってしまいました。

女性は今全理事務補助職にしてしまつて、男女の賃金差別を職務による差にすりかえようとする方針のもとに、佐々木さんの配転が行なわれたとする私たちに對して、労働省の婦人少年室は、問題を取り上げるところか、結局は何もできないというお粗末さを示しただけでした。労働基準監督署の行政指導でも、この性による仕事差別を打開していくことは不可能と思われました。職務・職能給にカモフラージュされ、より巧妙に浸透してゆく性差別と闘うには、裁判を起し、働く女性みんなの問題として公にしていけない限り無理なのではないだろうかとの結論を得たわけです。そして提訴と同時に、同じように怒れる女性が集まり、「共に闘う会」の行動が開始されたのです。

現在、会員数は約三〇〇名。資金集めに東奔西走し、他の四団体とともに、四谷で合同事務所（ジヨキ）を設立。狭く高い（家賃）アパートの一室で、女たちがワイワイ

ガヤガヤあふれている状態です。

この機械万能の時代にフルに動く

印刷機などない私たちにとって、

会報「女・輪・生きる」や、ピラ

などの印刷作業が一番の問題なの

です。これまた印刷機を求めて東

へ西へ。そんななかでも、パンフレ

ット「女だから……は許さない」

の第二号が今年中に発行を予定し

ており、また、月二回、スケジェ

ールやささまざまな問題の検討をす

るために、運営委員会を開いてい

ます。月一回の学習会では、現在

ある賃金体系を把握し、私たちの

賃金論をみつけ出そうと進められ

ていますが、女性の賃金に関する

資料はほとんどないなど難航して

いるところですよ。また、大手町・

四谷周辺におけるピラまき（第三

水曜日）などの定例的なもののほ

か、他のグループとの連帯、共闘

なども行なっています。採用から

定年に至るまでの、あらゆる差別

をなくすこと、とくに表面的に現

われる賃金以外の差別を取り締ま



る法律がない現在、「私たちの男

女雇用平等法をつくる会」には積

極的に参加しています。また他の

裁判を闘っている人たちとの交流

会等、運動の輪を広げています。

こうした日々のなかで、公判も

十回を迎えました。今年からは証

人尋問が始まり、露骨に図々しく

破廉恥に言いがける鉄連の性差

別意識がますます明らかにされて

います。このなかで、社会通念がい

かに大きな武器となっているか、

私たちに立ちふさがる壁の厚さを

つくづく感じさせられています。

常に内に秘める強さ、やさしさを

美徳とし、支える力として育てら

れ、教えられた結果が、労働の場
において、補助職という名で表現
されているのです。

女性の労働権を「保護か平等か」

の問題として、すりかえようとす

る風潮の中で、仕事差別の実態が

いかに女性の人権を侵害したもの

であるかを訴えるとともに、女と

しての性を損なうことなく、のび

のびと働き続けたいと主張する

「共に闘う会」の運動は、ますます

重要になっていると思います。

今年の活動方針は、会員相互の

交流を持つことです。新しい仲間

との出会いが、何よりの楽しみです。

女性の連帯こそが真の労働権

を獲得する一歩だと思っています。

いまの労働のあり方は男性にとって

も良いとは思えません。性別役割

分業をなくし、男性も女性もとも

に自由に生きて、もっと豊かに人

生を楽しめる労働の在り方を、私

たちは求めています。

私たちの事務所を尋ねてみませ

んか！

あごら読書室

子どもの文化人類学

原ひろ子著

晶文社

この本は、一九六一年から六三年にかけてのベ十一か月、ヘヤーインデアンと生活を共した文化人類学者によって書かれました。ヘヤーインデアンというのは北極に近いタイガに住むカナダ国籍の原住民のことです。この狩猟採集民の生活を通して、人間の子どもがどう育っているかが観察されております。

総数三百五十人ほどの民族のもつ子育てが、今日の私たちに教えることのたくさんあることは、著者のするどい洞察力と研究によるのでありましよう。

教え・ならうという関係をもたないヘヤーインデアンにあつては、「自分で観察し、やってみて自分で修正する」こと

によつて「自分で覚える」ことで「自信にみち、生き生きとしていた」とありますが、「教えられるのに忙しい日本人」として考えさせられました。

また「人間というのは多様な生活様式を示しうる動物」であり、「人間が子どもを育てるといふのは、もつて生まれた可能性を特定の方向にのばしてやることであると同時にある種の可能性を抑えてしまふことである」という結論を引き出すために、他にもオランジャワ、ジャカルタアスリ、イスラエルのキブツ、パングラデシュ等の調査も合わせて提示されてあります。

この種の本は初めての私にも（だからこそと言ふべきか）とても楽しく読ませていただきました。

的はずれになることを承知で一つだけ。異なつた文化が今日の私たちになげかける、私たちの失つたものの見直しは

わかるのですが、なぜ私たちはこれらのものを失つたのか。その歴史的背景のふりかえりもあつてよかつたのではないかと思ひました。（紀）

（B六判 二〇六ページ 九八〇円）

婦人白書 一九七九年版

日本婦人団体連合会編

草土文化

子どもの幸せと自らの解放と社会の変革とを一つに結ぶ婦人運動を展望して、その現状と要求とを明らかにしようとする第四回目の白書である。

行政サイドの婦人の『現状と施策』とはちがつて、民間ベースの視座から、婦人労働者の視点で、問題状況を捉え直しているのが特徴である。四〇名の執筆協力者が動員され、本文の主張を補完する図表も、第一部の「親子関係」で七十四、

第二部の「婦人の現状と要求」で二百九、計二百八十三におよぶ統計資料が採録されている。これだけでも労作と言えるだろう。民間版、行政府版の両書を比較すれば、婦人たちの要求と施策とのズレや落差がはつきりするかもしれない。

ただし生活から権利、教育、文化、運動までの網羅的な編集なのでつつこみが物足りないこと、課題解決の視角が体制批判に偏重して、意識変革への取り組みが浅いこと等々で不満もある。でもこの白書が一つの拠点となって、思想信条による反発や牽引が、婦人運動の活力を引き出せばその功績は大きい。

白書が取り上げている多くの主張のなかに「子育ての地域連帯」や「婦人労働法制の課題と方向」に対する反論や高校家庭科の男女共修私案などが含まれている。これら一連の課題は、性役割の固定化を前提とする社会機構のなかで低賃金多就労型の共働き家族が急増してゆく状況に向けて、ぎりぎりの自衛策である。と同時に、性抑圧、性差別、性役割の見直しと取り組んでいる勢力とも通底する女性共通の要求ではないだろうか。とす

れば、女性解放の視点や理念で鋭く対立する間柄同士でも、具体的な対社会運動を組んでみれば、案外、協調し合える部分が多いのではないかと思った。

親も子も、競争と選別の体制に捕縛され、上昇群と底辺群とに階層分化されてゆく状況が見え見えなだけに、子どもの教育一つを考えても、魅力のある未来像と説得力がなければ、現状を方向転換させるパワーは育たない。家庭や職業をめぐる親と子のあり方を、婦人自らが具体的に模索し構築してゆくことで、年次ごとの白書がその里程標の役割を果たしていつてほしいと思う。巻末の年表も、刻々の婦人の歩みを掌握する手がかりとして評価したい。(木下ユキエ)

(A5判 三三四ページ 一三〇〇円)

魔女の審判

駒尺喜美・小西綾著

エポナ出版

あとがきで著者(駒尺)は述べている。「最も大きな差別問題、社会問題は、おそらく性差別だと思ふ。だが、最も分か

りにくいのもまた、性差別だと思ふ。それはセックスや愛がからまっているからだとわたしは思わない。性差別の見えにくいのは、社会の隅々まで、男と女の二分法が貫いているからだと思う。それは生き方から始まって、あらゆる価値意識、美意識を貫いている。A男は……VとかA女は……Vといった二分的発想を誰も疑わないほどこの社会のダブル・スタンダードは堅固にでき上がってしまったている」。

このわかりにくい性差別をわかりやすく説明したのが、この本の前半、「てん足されている女」(駒尺記)である。差別を正当化し、女性自身も誤解し、錯覚させる「母性」「母性本能」というものが、実は、支配者が女を支配し、閉じこめるために使うことばなのである、ということをやさざまな事例をあげ、平易に説明している。この例が科学的データあり、文学作品あり、投書あり、と実に楽しい。しかし、読み進むうちに、この作られた差別のからくりを腹を立てずにはいられなくなってくる。そして著者は、誰のためでもなく、自分のために生きるには、支

配される者、利用される者が、怒りの声を上げなければならないと結んでいる。

後半、「植民地としての女」は小西綾さんの講演を駒尺さんが整理したもの。

時間の関係からか、前半の「植民地」論がやや長く、「植民地としての女」論、つまり、女が、男（宗主国）の権威、権力から自立していくにはどうするかという本論が短いのが残念である。

同じ出版社から「魔女の論理」（駒尺著）も出版されている。こちらまぜひ読んでみたい本である。（M・K）

（B6判 二五四ページ 九五〇円）

性の深層

アリス・シュヴァルツァー著

寺崎あきこ訳

亜紀書房

この本は、A私の自己意識全体がまさにセックスに左右されていたのねV（二三三ページ）というように、女性が自分の性意識をのぞきこみ、正直に自分の感覚や感情に向きあい、それを告白（発）したものである。ある者は公然とレズビ

アンを、ある者は夫との抑圧的な性関係を、ある者は売春婦としての自分を。そして、程度の差こそあれ、どれぐらい自分のA意識全体がセックスに左右されていたかVを認識している。彼女たちが、左翼インテリ層に生きる女たちではなく、ごく普通の家庭の主婦や勤め人であり、そのために、ウーマンリブには関係のないと思っていた中・高年の女たちから大きな共鳴を得た（あとがき）のも納得できる。だから読んでいて、一人一人の女のなかに、自分の一部を自然に重ねあわせていることがある。時々重く、つらく、悲しい。時々楽しく、感嘆する。

ちょっと前、スペインのリブの人に日本の女性は、「自分をコントロールする」ということについてはどう考えているのかと聞かれた。もちろん性意識（性行為のみならず）を含めた自分の存在を自分で支配する、ということだ。そういうのは理解されかつ受け入れられにくくて、制度や法律の改革に走る人のほうが多いのではないかと答えた。答えは間違っているかもしれない。しかし、わかってもらい難い、という感じはぬぎがた

い。だからこの本をたくさんの人に読んでもらいたい。（貴）

（B6判 三四四ページ 一三〇〇円）

最後の植民地

ブノワット・グルー著

有吉佐和子訳

カトリーヌ・カドゥ

新潮社

男、いや男だけでなくある種の女をも含めた一つの大きな力の、女に対する考え方、姿勢に対して、その理不尽さ、残酷さ、不真面目さを暴露した書である。そこには、憤りだけでなく、深い哀しみが色濃く流れ、この問題を筆者がいかに深いところで自らの問題として引き受けているかが感じられる。

とはいっても、決して堅苦しい本ではない。フランス人らしいウィットに富み、それがまたキツイので、ところどころで吹き出してしまう。生きる姿勢に余裕があるのだから。それだけに、述べられている事実の客観性に思い当たり、こちらまたぞろ憤るというわけである。

先進諸国、アメリカやフランスでさえ

も女の生きる道は閉ざされ、あらゆる誹謗中傷が投げつけられている。しかもそれらの多くは冗談口で言われる。女のことを真面目に言うには口が高貴すぎるというわけだろう。

この、どのジャンルにも収めかねる本には、著名人の女を人間扱いしない言辭がいやというほど引用される。ふだん、長い演説の一部として耳にしても、また何かが示唆されそうなエッセイ、小説の一行を目にしても、感度の鈍いアンテナに響かなかったものが、こうしてスラズラと並べられると、さすがに強烈に響きわたり、はらわたが煮えくり返える。

些細な言葉尻にこだわっても事は解決しないのかも知れないが、複雑怪奇な、またともすれば日常習慣に隠蔽されがちな女性問題には、この方面からのアプローチも重大な役割を果たすし、少なくとも差別的証左にはなりうる。この証左を踏まえて、著者は論を進めるが、結論は出さなかった。しかし、彼女の姿勢はキッパリ打ち出した。もし女性が、肉体的力に恵まれて生まれてきてたら、男がするような行動を取らないとは言いきれない。

い。「明確なのは、人類からその半分を抹殺してはならない」すべてはこのへ共に♂という条件の中にある」という姿勢である。そこには、どんな困難に会おうと闘い抜こうという覚悟が感じられる。

この覚悟を少しでも我がものとするために、是非、一読をお薦めしたい。(磔)
(B六判 二〇六ページ 一三〇〇円)

女は男より優秀である

池上千寿子著

こま書房

シヨッキングな題である。装丁やイラストもいささかどぎつい。出版社が××ブックスというベストセラー・メーカーであることも、若干いかがわしい印象を与える。

しかし、読み進んでみると、明快・痛烈、古今の多くの文献を引用し、「女はバカである」という社会通念を、バツタバツタと切りくずしている。エレノア・マッコビー編『性差』の共訳者の一人である筆者は、おそらく『性差』にヒントを得、その大衆版の必要性を痛感して執筆したものに違いない。事実、『性差』

およびそれを発展させた同じくエレノア・マッコビーらによる一九七四年版の『性差心理学』から最も多くの引用がある。

残念なのは、引用文献の出所の記載がないことである。論者ならびに出版社に対する礼儀を欠くものであると同時に、せつかくの論拠を軽いものにしていくのが惜しまれる。(S)

(新書版 二二〇ページ 六五〇円)

リブ・ラブ・ライフ

小室加代子著

BOC出版部刊

リブとは、つまるところは人間と生命をいとおしむことではあるまいか。その深い洞察と愛に立つて、いたるところで分断されている、男と女の、また女同士間のコミュニケーションを、くり返し呼びかけ続けながら、女の生き方を考えた評論集である。

サンケイの記者を辞職直後の「サヨナラ三角四角の市民社会」に始まる各編は

男社会のおかしさを鋭くえぐり出すとともに、女の側として考えていくべきことも、きびしく問いなおしている。

独断と偏見に満ちた(？)舌鋒の鋭さとユニークさに迫力があり、信念には常に体当たりでぶつかなければおさまらない著者の潔癖さと、真摯な想いが全編にあふれている。最近十年間の、主として雑誌発表の十九編を、発表順にまとめ、同時期の婦人雑誌の内容があり、一種の婦人雑誌史にもなっている。(P) (B6判 三一七ページ 九八〇円)

眠れない時代

リリアン・ヘルマン 著

小池美佐子 訳

サンリオ

本書は、昨年日本でも話題をよんだ映画『ジュリア』でジェーン・フォンダが演じたリリアン、その人の自伝である。一九五〇年代のアメリカはあのいまわしいマッカーシー旋風が吹きあれていた。二十九歳のとき『子供の時間』で劇作家

の地歩を築いた彼女は、リアリズム演劇の代表的作家として評価されていた。その彼女に非米活動委員会からの召喚状が届く。一九五二年のことである。

本書はこの委員会出頭前後の数年間に焦点をしばって、当時の日記や手紙を折りまぜながら、彼女にとって「人生の不愉快な部分」である「あの時代のわたし自身の歴史」を描いている。自伝というと個人的な思い出話になりがちだが、ここには、あの激動の時代を実にクールにしかも自分の真実・良心に生きぬいた人のどっしりした重みがある。同時代を生きたヘミングウェイ、フォークナー、ヘリー・コーン、エリア・カザンなど多くの作家や監督が登場するのも興味深い。そして彼女自身が「わたしの人生で大きな位置を占めていた人」といつているダシル・ハメットについて書かれているのは勿論である。

時代は変わり、今やマッカーシイズムも遠い昔話になったかもしれないが、昨今の日本の政治状況の右傾化のなかで、ことの本质は依然問われ続けられているのではなからうか。彼女は委員会宛ての

手紙のなかで、「わたしは、良心を今年の流行に合わせさせて裁断することはできませんし、したくありません」と自分の立場を明らかにし、証言を拒んだ。彼女のこの勇気の基盤は何だったのか？ ぜひ一読をすすめたい。リリアン・ヘルマンへの魅力を誘う訳者のあとがきもすばらしい。(知)

(四六判 一四四ページ 一二〇〇円)

イタリア婦人解放闘争史

ーファシズムと戦争との苦闘五十年ー

ナディア・スパーノ ほか 著

柴山恵美子 訳

御茶の水書房

原題は『イタリア共産党における婦人問題』であり、扱っている年代は一九二一年から一九六三年までである。戦前はナディア・スパーノ、戦後はフィアンマ・カマルリングが執筆、二人とも共産黨員であり、レジスタンスや解放戦争に参加した婦人運動の古参指導者。訳者が一九七〇年代の展望を与える意味で、一九七一年の新母親労働者保護法と保育所設置

法の内容と制定経過を補足して、五十年史としたのであるという。

本書をイタリアの婦人運動の歴史の概説書、と期待して読む読者にはあてがはずれるが、イタリアにおける政治勢力としての共産党の大きさを考え合わせて、同党の立場からの婦人運動の歴史の総括として読めば、資するところが大きいであらう。

同党が、婦人細胞と男性細胞を分離せず混成細胞の創設を急ぐべきだ、などという姿勢を一九六二年になって示唆したというような記述は、日本の読者ならおやという気を起こすであらう。これは一例にすぎない。日本人による外国研究の意義は、その国の人々には当たり前で見過ごされがちだが、いちいち問題となつて比較（国際比較）という意識が働くことにあると思われる。本書に、そのような落差を意識した解説が付されていたらと望むことはないものねだりかもしれないが、訳者はイタリアについての研究を今後も続けていかれる方らしいので日本人研究者としての関心を鮮明に研ぎ澄ました研究を展開されるよう期待した

い。(和)

(四六判 三〇〇ページ 二〇〇〇円)

兎のさかだち

富岡多恵子著
中央公論社

辛口のエッセイ集である。新聞、雑誌に書かれた短文の再録であるから、どこかで読んだ覚えのあるものもあるが、改めてこうして八十編を一気に読んでみると、作家・富岡多恵子の輪郭がくつきりと突出されて来るように、まことに面白い。話題は、著者の日常のこと、交わりつつある日本のこと、旅の話、芸術の話、仲間の話と幅広いが、身近かな事柄のなかにも、作家の洞察眼は深く食い込み、凡人が平気で見ている所作の根本のところのおかしさを問うている。

兎のさかだちとは、大阪人が古くに、
「耳が痛い」という意味で用いたシャレ
だそうだが、とくに女性への批評は鋭く、
まったく「耳の痛い」話なのである。

才能ある作家として、著者は世の女性差別的偏見に対し、余裕ある態度で反論

を試みているが、そこは小説家、女権拡張論者とは大いに異なり、自由活達で、独自の美意識から発言する。

それにしても、耳の痛いのは読者はかりではなからう。さかだちし、満身創痍となつてゐるのは、著者自身なのではないだろうか。人間への尽きぬ興味と禁じ得ぬ嫌悪。この世に違和を感じつつも眼をそらすことなく、自己と他者の距離をじつとみつめているような、やすまることのない魂を、この一見威勢のいい文章の行間に見るような気がする。

耳朶の擦傷もさることながら、こうした発言をしながらじつとためこんだ耳垢を、更に抜けて見せてもらいたいという欲求を私は、強く感じた。(谷)

(四六判 二四〇ページ 九五〇円)

主婦が就業するとき

藤原房子著
轉 轍 社

日経新聞の記者として、七十二職種八十四人にインタビューした約一年半の連載記事をまとめ、主婦が働くということ、

適職とは何か、就業を軌道にのせるヒントなどのコメントをつけたものである。

掲載された八十四人は、過去に専門的な職業経験があるわけでもなければ、さし迫った経済的必要性もないが、それぞれ創意と努力を重ねて再就職し、あるいは自営の仕事を見つけた人たちで、その記録を読む限り、主婦の就労は比較的容易なような幻想を抱きそうになる。筆者はそこで最後に、それに該当する人を探すのが非常に困難だったことを断わり、職場では若い世代を求めているのは事実だとも注意している。女が働くことの底深い意味にもうひとつ食い込んでいない惜しさはあるが、働きたいと思う中高年の主婦にとってヒントとなり得る本である。筆者が言うように、「原料作りから商品化までの過程があまりにも長くなったため、その一部だけに携わると、女が荷なってきた生きる営みと無関係のように思われがちだが、そのどれも遠い昔には女性の手中にあった仕事で、必ずしも生活を放り出して外へ出て行くというふうには言い切れない」のである。事例が、家事経験に基づく職業から出発している

のも、そういう意味で興味深い。(千)(B6判 二九九ページ 一三〇〇円)

女が職場を去る日

沖藤典子著
新潮社

読んでいて何度も涙がにじんだ。評者とは同世代の一人である著者の悲しみ、怒り、絶望、心の揺れ動きなどが、直截に伝わってくる。著者のかかえていた問題(夫の転勤による別居、老父の病氣と死、子の進学、自分の離職)は、たとえば、たつたいま、評者がかかえていなくても、いずれは当面せざるをえなくなるほどの普遍性をもっている。誰が人のことだ、などと言えようか。家族の状態など全く無視した転勤の問題、それを拒否できないサラリーマンという男の姿勢のあり方、核家族における老人介護の問題、福祉の貧しさ、進学の問題、遠距離通勤(そうでないとか家を持ってない)。そして結局、著者は、悩み、迷い、話し合い、十五年間勤務した職を捨てて、夫に合流する。型の上では「自分が選んだ」ようにみえ

るが、「選ばざる」をえなかった悔しさが切ない。こんな時、一人一人の女は、何を基準に、自分のどの辺を覗いて「選んだり」、「選ばれたり」するのだろうか。多分著者は、「人は決して一人では生きていけないものだ(あとがき)と痛感したからです、と言いたいような気がする。

ただ、著者は、もっと会社に働きかけるよう夫を説得して欲しかった、という思いがぬけない。なぜ会社という組織の都合で人の生活が左右されなければならないのか、誰かが、どこかで発言しなければ、どうしようもないと思うのだが。(K)

(四六判 二七二ページ 九五〇円)

新女ゼミ8

キャリア作戦

下村満子・編著
講談社

『キャリア作戦』というタイトルは正直私にはむずかしい。職業とか仕事とかいうものは、本来、その人の生涯に深くかわり合い、その人間の人生設計に組み込まれるべきものだから……と、編者は

前書きで述べている。この編者の姿勢は編者自身の職業的自叙伝にも、菅原真理子氏はかの体験談やアドバイスにも貫かれており、講談社『新女ゼミ』シリーズでは異色の一卷になっている。

率直に言えば、『新女ゼミ』シリーズは、企画に多くの工夫をこらしながらも好評とは言えない。最もシリアスな女の問題を、風俗ふうにとらえようとしたところに一因があったのではあるまいか。全十二巻のなかで、この第八巻は、「婦人問題ざらゐる人にも婦人問題に近づいてもらおう」という当初の企画に最も沿ったものと感ぜられる。しかし、編集やイラストの安手さが、せつかくの内容を軽いものに見せているのが残念。(く)

(B6判 二五四ページ 八二〇円)

離婚は怖くない

依 萌子編

「国際婦人年をきっかけとして行動を起す女たちの会」離婚問題分科会

読売新聞社

離婚する——これは人生をともにしてきた男と女がつくり合った過程を精神、

物質両面にわたって清算することにはかならない。その際にさまざまな葛藤、懊悩が付きまとう。この本は、そうした感情をしっかりと見据えたいうえでそれを分析し、離婚は自分を見失うことにくらべたらそれほど怖いものではないことを女性たちの会話や手記を通して明らかにしている。とくに、女性にとって不安材料となる精神面、経済面、子どもの問題を各章ごとにとりあげ、知恵や工夫ひとつで乗りこえられることを教えてくれる。

とりあげられたケースは大変身近なものばかりだ。これは離婚したくてもさまざまな事情でできないと思っている人にとって、私にもできるかもしれないという勇気を与えてくれる。とくに母子寮、生活保護、〃駆け込み寺〃などを利用した例をあげ、経済的に自立できるまで社会福祉を胸をはって受けようと指摘している点は、離婚できる可能性をぐんと広げる。(もともと制度自体にも問題があるが。後記資料に〃駆け込み寺〃の問題が記されている。)

また、「トマト畑」という複合家庭の例(離婚した女性三人と子ども四人の共同

生活)は、離婚後の心のわびしさと生活面両方の工夫の仕方としてユニークであり、夢がある例である。手にしたお金は全部ひとまとめにして、完全な「共産制」をとっているという。

離婚という生々しい問題を扱った本であるにもかかわらず、読後感はむしろ爽やかだ。行間に力強い支えみたいなのを感じせるせいかもしれない。(U)

(新書判 一九〇ページ 五〇〇円)

わが愛と性の履歴書

丸山友岐子著

社会評論社

シリーズ今日を生きたい女の性と生①

性に関するホンネを激しく語った本である。著者は本文で「人生の戸口に立つての野心」を次のように書いている。「一個の人間として自分自身の二本の足で立ちながら、人としての自信と尊厳を損うことなしに、男との愛情生活をも全うできないだらうか」

働くことは空気を吸うのと同じことであつても、家庭の屋台骨がぐらつき出す

と、男たちは一様に妻に仕事をやめたらと言ひ出す。生活の形態がどんなに変化しよう、その変化についていけない男の意識の融通のなさ。それはどんなにベラルな思想を抱いている男であっても同じであり、もしかしたらこの辺に男の弱さが潜んでいるのかもしれない。とにかく著者は前へ前へと歩き出す。だがひたすら歩を進めながら、癒えぬ過去の傷痕が前方に立ちふさがるのを認めないわけにいかなかった。幼少の頃、「ニクツイ（みにくい）子」と言われ続けた著者は、「美しくなろう」とカミソリで顔を剃り、誤っておとして指を深く切った。指の傷の痛みよりも、きれいになろうとして失敗したこと、心に深い傷を負う。その傷は、二人の夫との生活に微妙な翳りをおとす。というよりも、二人の男もまた異質な癒えぬ傷痕をもって生き続けてきたのだ。「性」に自由になり得ない男と女の交わりは、むごく哀しい。

深刻な題材であるにもかかわらず、鮮烈な描写がかえって小気味よく、面白く読めます。この本の全面に流れる「潔さ」が、一種の爽やかさを醸し出しているよ

うだ。単なる自伝小説ではなく、高良留美子氏が指摘しているように、「ぎわめて緻密な頭脳によって計画され、実行された計画犯罪」のとおり、この本は、既成の出版メディアとライターとの関係性に敢然と挑戦し、「語りたい」意図を自作、自演、演出という方式で試みた並々ならぬ野心作なのである。今後のシリーズが待たれる。(統)

(四六判 二七三ページ 一〇〇〇円)

複製人間の恐怖

——みんなの遺伝子工学——

福本英子著

文一総合出版

セックスの機会をもたずに、人間の体細胞の一つから、ついに、クローン人間(複製人間)が創成されたというニュースは、全米を揺るがせた。結局それはその報道によって大もうけしようとした出版社の架空の報道であったことがわかったが、その書「In His Image——The Cloning of a Man」が大ハットし、出版社がボロもうけしたのは、複製人間に

対する期待と恐怖の両面が民衆に潜在していたからにはかならない。

筆者は、試験官ベビーの成功でも示されるように、人間の人工的創成が可能であることを幾つかの事例をひきつつ例証して、それが人類そのもののへの冒とくであることを強く警告している。

女性問題を考えるうちに、医学・科学分野に首をつっこみ、その視点から考えていきたいと思うようになったという筆者のねらいは意義のあるものだし、数少ない女性科学ライターとして、今後の活躍を期待したい。ただ、この書では、稿が進むにつれ説明がマンネリ化し、説得力が薄れてくるのは残念である。筆者の得意とする密着取材によって、より生々しい例証をあげれば、はるかに印象的なものになったろうに、と惜しまれる。(涼)

(B6判 二四四ページ 九〇〇円)

女が見たオーストラリア

足立良子著

ジャパン・タイムズ

オーストラリアの高校日本語科教師と

して滞在六年の著者が、折々に書き送ったオーストラリア印象記だが、ページ数の過半は女の状況に割かれている。

夕飯の材料の購入依頼を夫の同僚にも気軽に伝言する妻。子どもにプレゼントをしても礼は子自身が言うべきものと、決して礼を言わない母。夫の演出するバーベキュー・パーティで、人前で夫の腕の優秀さをほめそやす妻。あけつびろいで、母子一体、夫婦一体ではない慣習。一方、「我が子を殺さなくてはいけない」と子育ての重さを訴えるTV番組が大ヒットした背景、体制変革に闘うリブの動きに対し「主婦こそりっぱな労働」と、主婦労働の巻き返しに出た婦人連盟の活動など、日本の主婦と変わらぬ「主婦の重さ」にも目を配っている。

さらに、七八年四月に発効した男女平等法 Equal Opportunity Act や、最も保守的な文部省さえそれを支え、教科書の男女差別を問題化し、婦人問題の資料・絵本・ポスター等の展示場をつくり力を入れている状況、「保育所つき」で主婦も堂々と学ぶ大学、活躍するバス運転女性、ふえた看護婦など、国際婦人年

を契機に大きく揺れ動く多民族国家オーストラリアの側面が軽いタッチで描かれている。(R)

(B 6判 二五八ページ 九八〇円)

閻魔と女神

佐藤欣子 著

PHP研究所

淡い装丁、むずかしいタイトル、何の本かとあまり期待しないで読み始めたが、一―二ページでたちまち魅力にとりつかれた。日本人の文章としては稀有なほど乾いてさわやかな文、法律家らしい客観的な論証、明晰で判明な論理。たとえば「女子学生亡国論の亡国性」「ミスターアンドミセス」の欺瞞性」など、いい古されたことも、新しい切り口で示されて、筆者が国連の日本代表として人権や婦人の地位向上に活躍したことが、なるほどとうなずかれる。

アメリカに留学経験を持つ筆者は、閻魔を存在させる「異口同音」の日本社会の甘えの構造と、女神を理想とする個人主義的・合理的にすぎるアメリカの乾き

をクールに眺めつつ、あるべき正義を模索する。その意見の一部には賛同しかねる人もあると思うが、こびず、たじろがず、自説を貫きとおす態度に、戦後世代の日本女性がしつかり根を張りつつあることを感嘆せずにはいられない。(S)

(B 6判 二二五ページ 九二〇円)

性差

——その起原と役割——

エレノア・E・マッコビー編

青木やよひ・池上千寿子・訳

河野貴代美・深尾凱子・山口良枝・訳

家政教育社

男と女は生理的にちがう、というだけの「性差」が、「性差別」に拡大されていくのはなぜだろうか。その軌跡が明らかにになれば対応は容易になる。女性解放にたずさわる五人の訳者たちが、この膨大な学術論文集にいどんだのは、差別者たちを論破する理論的武器がほしかったからだろうと推察される。

原書、「The Development of Sex Difference」は、一九六二年から六四年にかけて、米国立スタンフォード大学で、

生理学・児童心理学・行動心理学・発達心理学・社会学・文化人類学の専門学者たちが性差について研究し討論した結果をまとめたものである。原著には百三十三ページ余に及ぶ精密なビブリオグラフィが載せられており、三分の一以上のページ数を占めているが、その姿勢にもうかがわれるように、性差の基礎研究への資料を提供しようとするものである。したがって性急に理論的武器を得たいと思う人にとっては、迂遠で歯がゆい印象を与えるだろう。一つの結論を提示するというよりは、従来の学説を整理し、集大成したものであって、研究者にとっては必携の本と言える。

しかし、最も興味深いのは、問題を分析し再構成した青木さんの序文である。「性差」と、「性差の社会的利用」「性差別」が混同され、あるいはわがちがたいものとして論じられている現状に出発し、「生物学的性差」という第一次の性差が、第二次の性差Ⅱ社会的性差から、さらに第三次の性差Ⅲ文化的性差に拡大されていく」プロセスを簡明に呈示している。

六〇年代初めのアメリカで、このよう

な基礎研究が着々と行なわれていたという事実、アメリカのリブ運動の根の深さを改めて痛感する。その意味でも一読に値するが、そのためには、貴重なビブリオグラフィが割愛されているのが惜しまれる。希望者には実費で頒布されることを出版元に希望したい。

ともあれ、このような労作が、訳者たちの多大の努力によって広く日本に紹介されたことを感謝したい。同時に、訳書ならぬ私たちが自身の手になる「性差」の文化的拡大の研究書が生まれる日を期待したい。(斎)

(A5判 三四六ページ 一八〇〇円)

世界のトップレディたち

下村満子著
朝日新聞社

『週刊朝日』に連載したインタビュ記事、「華麗に生きる世界の女性たち」を柱にまとめたもの、というだけあって、なるほど華麗なる女性たちが次々と登場する。

グロリア・スタインム、ケイト・ミレッ

ト(「性の政治学」の著者)にボーボワール。マリアン・ケロック(GE副社長)、エレン・スロスト(米国防副次官補)から、モンデール米副大統領夫人、ロックフェラー四世夫人、モナコ王妃グレース・ケリーまで。そして、「トータル・ウーマン」の著者マラベル・モーガンさんも登場する。

「世界の」といってもアメリカとヨーロッパ在住の女性たちの返答は、とくに著書などを通してなじみ深い方を除いては、おそらく長時間のインタビュを要約したものであろうせいもあって、もう一つ、人間が伝わってこないものどかしさが残る。

しかし、イタリアのジャーナリスト、オリアナ・ファラチ氏へのインタビュは圧巻。「愛と生と死」について語るファラチ氏の迫力と、彼女にこそまで語らせた著者のみごとさにも感嘆。まさに、現代に生きる「女のなかの女」と言いたいファラチ氏の人間像は圧倒的である。

ほかにイタリア前首相現保健相デ INA・アンセルミ、西独シュミット首相夫人、米大統領の母リリアン・カーター、

フランソワーズ・サガン、ハンブルグの飾り窓の女、と多様な女性たちの生き方に迫る。

どのインタビュアーにも共通なのは、世界的に広がりつつあるフェミニズム運動に対しての見解を求めているところ。女性である著者ならでは、みごとにインタビュアー集である。(T)

(四六判 四一二ページ 一二〇〇円)

女たちよ！男たちよ！

子供たちよ！

伊丹十三著
文芸春秋社

この本は、どのような人間に子どもを仕立てあげるかについて書いたものではない。育児とは一体何をするものかを探ろうとして書いたもので、このことを探求してゆく育児をする側の人間の生き方それ自体が問われてくるものだ、ということを書者は初めに述べている。

私は子どもを育てたことはないが、子どもとどんなかわり方をするかわり方することは、他人とどんなかわり方をするのかということにも共通すると思ひ、興

味をもつて読んでいった。この本は四部に分かれている。第二部「男たちよ」では著者のまわりで起きる日常の出来事について感じたことをニューモラスに綴っているが、私だったら、あまり感じずに過ごしてしまうであろうことを鮮明に浮かべてある。ここを読むと、多くの読者が自分の生活全般について顧みるのではないだろうか。

第三部「子供たちよ」は、作家や心理学者らとの対談が続く。昨今、社会問題化している子どもの自殺をめぐる対談から始まる。なぜ子どもが自殺をするのかについてはあまり語られていない。むしろ、その親がどのようなかわり方をしていたかについて話が進められてゆき、一体、人間とはどんな存在なのか、というところまで論議が進展してゆく。他の対談も単に「育児論」だけにとどまらず、それをも含む、もっと根本的な問題に関して対談が進展していった。やはり「育児論」を語るとき、「人間論」を抜きに語ることではできないのだろう。

(見)
(四六判 三七三ページ 九〇〇円)

第三期の女性

——ライフサイクルと学習——

天野正子著
学文社

「第三期」とは、「子育て以後」のこと。第一期—自分の成長期、第二期—次の世代の養育期。第四期が老後である。

戦前の女性は、第二期をもって生涯を終わつたが、現代の女性は、過去の女性のもつことのできなかつた新しいライフサイクル上の時期をもち始めており、これまでになく、さまざまな問題をもち始めていることが、多くの資料と、いくつかの雑誌・ミニコミ誌からの引用などにより、具体的に述べられており、このなかには「あごろ」「あごろミニ」も何か所かにわたって紹介されている。

そして、女性が、たくさんの問題をかかえながら、どのように生き、学習していったらよいか、かなり具体的に検討・提示されている。子育て中、子育て後の、迷える女たちには、必読の書と言えるだろう。(と)

(四六判・二二三ページ 一三〇〇円)

あじらのあじら

言いたいことは何でも言おう。
感想、反論、情報、思ったこと
を率直に言う読者の広場です。

20 号

『あじら二十号』発刊おめでとうございます。内容充実
していて、おもしろく読ませ
ていただきました。とくに田
中論文・本田論文は、二十号
にふさわしい内容で、読みご
たえのあるものでした。田中
先生のああいふ論文を載せる
ことが、『あじら』の一つの
特色といえるでしょうね。

ティーチ・イン、いつもお

もしろく、楽しみにしていま
す。労基法研究会報告と、雇
用平等法については、重大な
問題で、改めて考えさせられ
ました。「資本主義の中で女
が働くということ」も、さけ
ては通れない問題に真正面か
ら取り組んだかつこうで、大
変おもしろかったのですが、
もう一つ、どこかでつっこみ
の足りないような気がしまし
た。

続編を期待します。

(東京・香取智子)

あじらのあじらのあじらのあじらのあ

二十号、巻頭に重々しい論
文が三点、後回しにして読み
すむ。会誌的要素が普段よ
り濃厚であると感じるが、事
例には読みごたえあるものが
タップリあって満足。とくに、
平岡由己さんの「母の遺産」
には感動。彼女の生きる姿勢
の真摯さ、厳しさに心底感心
し、我が身を振り返り情けな
さ幾分。しかし、それぞれ身
尺に合った生き方しかできは
しない。その途上で出会った
他の生き方も、何かの種子に
なり、いつか実るであろう。

さて、論文をひもとく。女
性解放運動のむずかしさを再
確認。その定義付け、位置付
け、解説、そして何よりも運
動それ自体。漆田和代さんの
「結婚と女・我」は斬新で、少
少読みづらい感じでしたが、
一番我が身に引きつけて読む

ことができた。が、「いい論
文だ」と感心してばかりもい
られないようだ。
二十号のざっとした感想を
まとまりのないまま書いてみ
ました。

(東京・藤田久美子)

*

前略、先日あじら二十号を
購入、早速、読ませていただ
きました。これまで発行して
いらつしゃったご苦労の様子
など、努力の大きさに感心し
ながら若い私たちも学んでい
きたいと思いました。

雑誌をつくることはむずか
しいことと思いますが、今後
とも一人でも多くの人があ
じらVを知って、ますます発
展していきましますように。

感想として、内容がとても
いいと思います。毎号新聞切
り抜き帖が載っているのも、

丸山和興)

*

（仙台・安田佳子）

『あこら』が誕生して、七年になるといふ。すごいな、頑張つてゐるな、としみじみ感じました。

二十号に六人の女性の随想が載っていましたが、社会的

(東京・K・K)

ハワイから来た日系人(三十四歳)が、日本の女はおとなしすぎ、とくに主婦は何の主張もしないようだが……と不思議そうに言った。彼女は別にリブの闘士でも何でもな

いが、観察眼は、日本の下手

177

ಕಿರ್ಗೋಕಿರ್ಗೋಕಿರ್ಗೋಕಿರ್ಗೋಕಿರ್ಗೋಕಿರ್ಗೋಕಿರ್ಗೋಕಿ

へあごらVに加入して、二年が経過しようとしている。

うになつてきたのだ。

目に見えないながらも、除々に成長に向けて歩んでいる自分を見い出すのは、とてもうれしい（自画自讃かもしれないが）。△あごろVに入る前、私はいつも出口のない怒り、不満をかかえ、発散できずにいた。何の展望もない孤立無援の争いに終始し、怒りを爆発させては反省し、そのうち

△あからVは私の内的な自立をはぐくんでいた。それを軸にして、社会のなかでどう生きていくか、を問われるのはこれからであるが、女たちのつながりのなかで、いつかは見い出せるものと確信する。「女たちの団結は力強く、国境を越える」という松井やよりさんの言葉を、私も固く信じて今後を生きていきたいものである。

（東京・佐藤統子）

しかし、グループは一年前に解散して、私は働きたし一年半が過ぎました。

以前の人々との交流も少なくなり、このごろはもの足りなさを感じ始めています。職場は賃労働と割り切っているものの、お茶くみ兼雑用係みたいな仕事でいいのだろうか……、また、日常の平凡さを否定するのではないけれど、日常に流されたくはない、とも思います。

11

私はすばらしい人と出会う
とガゼン目覚め、ファイトを
燃やしてしまふ人間なので、
ぜひ△北東京Vの話し合いに
参加したいと思います。

(埼玉・橘久美子)

ているのかもしれない。ここらへんで、△あごら▽もその存続、いや存在をデモンストレーションしたら、彼女のようなシンパを会員として獲得できるかもしれない。どんなデモンストレーションが適當かわからないけれど、「地道に着実に」と同時に幾分かの派手さを△あごら▽も身につけていい頃ではないかと感じてゐる。（東京・村山みどり）

いう悪循環をくり返していた。いま、私はあの怒りの正体が見えてきた。と同時にその怒りの収拾策もわかってきた。つまりさまざまな女たちの出会いのなかでもまれているうちに、いつしか冷静な自分をばぐくみ、私を含めた他の人間との関係性が見えるよ

十六号、二十号を読んでいくうちに、五年前の「あんふあんて」のときのような喜びを味わいました。あのころはまだ自分自身のこともよくはわからず、ただ欲求不満の状態でエネルギーにグルーブを作っていました。

ア
ピ
ー
ル

名古屋市立のある幼稚園の卒園文集より

——大きくなったら何になりたいか——

〔男〕

車をなおります人	1
パイロット	7
タクシーの運転手	3
レーシングカーの選手	6
蒸気機関車の運転手	1
バスの運転手	3
ひかり号の運転手	1
大工	2
パン屋	1
本屋	1
野球の選手	7
サッカーの選手	1

計 34人

〔女〕

看護婦……………9
幼稚園の先生……………8
オルガン・ピアノの先生…3
おもちゃ屋……………3
おかあさん……………2
パレリーナ……………1
歌 手……………1
おえかきの先生……………1
バレーボールの選手……………1
スチュワードス……………1
人形屋さん……………1
本 屋……………1
レストランをやる……………1
おかし屋さん……………1

計 34人

いわゆる女の子、男の子と育てられる幼稚園生活のなかで、いろいろ感じることもあったが、あまり大きく出さず

に來てしまひ、いよいよ卒園。
もらつた文集に、卒園児ひ
とりひとりの様子や特徴のよ
うなことと、お決まりの質問

の「大きくなったら何になりたい」に対する答えが載っていた。

全体として幅がないのは、

その時々遊びや話題の中心が表われるため、片寄つてしまふのだと思う。女の子の場合、幼稚園の先生と看護婦が圧倒的に多い。幼

るなかで、おとうさんになり
たい人はいないのに、おかあさ
んをあげているものがあるの
は興味がある。職に関係なく、
おかあさんはそれ自体、職業
人と同じにうつるが、おとう
さんの場合はそうは考えられ
ないから、と解釈するのは思
い過ぎだろうか。

稚園の先生は、生活の中心人物だから懂れるのはよくわかるが、女と決められてゐるらしく、男の子で希望するものはまずない。看護婦は病院ごっこが流行つてゐるところからくるが、遊びのなかにはある医者になりたい人はゼロで、看護婦だけに集まるのはなぜか。女の医者に接する機会もあるのに。

男女同じものをあげているのは本屋だけである。おかあさん以外、両性ともなれる可能性があるのに、昔からの固定観念の域を出ていない。女なら何、男なら何と、はつきり表われている。日常社会がそうだからであらう。職業に限らずにみられるこのような固定観念を破って、自由に選べる環境をつくっていきいたいと思った。

(あごら東海・奥村和子)

新聞 切抜帖

1979年3月1日から

1979年8月31日まで

法・裁判

トバク女五人に実刑

平均五十八歳のトバク女郎
ループに六日、横浜地裁は懲
役六月を判決。夫や息子の嘆
願を退けて。(3・6読売)

定年、男女差別は違法

男より五年早い定年で訴え
ていた日産自動車の中本ミヨ
さん(六〇)に対し、十二日
東京高裁は「女子を女子なる
がゆえに差別することは企業
経営本来の道筋からはずれ公
序良俗に反する」と軍配、一
千百余万円の支払いを日産に
命じた。五十年の「伊豆シャ
ボテン公園女子定年制訴訟」
に次ぐ女性側の勝訴。各紙社
説も判決を支持。

(3・13—14各紙)

初夜の泥酔夫、敗訴

初夜に友人宅を訪れ飲み明
かし花嫁に逃げられた夫(二
九)の慰謝料要求を十四日、
仙台地裁は「花嫁への侮辱」
と棄却。(3・15読売)

この子に日本の国籍を!

父権優位の我が国「国籍
法」が国際児童年を機にクロ
ーズアップ。「愛児に日本国
籍を」と国際結婚の夫婦二組
が東京地裁に訴えを起して
いる。「アジアの女たちの会」
なども請願運動を始め、社会
党も「国籍法の一部改正案」
を国会に提出。「憲法の男女
平等の原則に反するのでは」
と社会党の土井たか子氏が国
会で質問。(3・16毎日)

自衛官合祀に違憲判決

殉職自衛官の夫の合祀申請

の取り消し裁判の中谷康子さ
んに。「合祀申請は自衛隊山
口地方連絡部職員と隊友会県
支部連合会の共同行為で、国
がこの申請に加わったことは
違憲」と判決、慰謝料全額の
支払いを命じた。しかし、合
祀申請の取り下げについて
は、「原告の訴えは理由がな
い」と棄却。(3・23朝日)

阪大教員内定取消し裁判

四十八年阪大の初の教員公
募に応募、事実上の採用内定
通知を受け帝塚山大を退職し
て待機したにもかかわらず、
放置され、約一年二か月後、
内定を白紙撤回された元帝塚
山学院大助教授西川祐子さん
(四二)の裁判で大阪地裁は、
「大学自治の名によって行な
われた教官人事の不法」とし
て請求通り一千二百二十二万
円の損害賠償の支払いを阪大
に命じた。(4・3朝日)

藤木さん地裁で敗訴

生活保護の支給裁判で勝訴した藤木イキさん(五五)が裁判費用の生活保護費払いを求めていたが、十一日、東京地裁は「法律扶助制度で解決すべき」と請求を棄却。

(4・11読売)

男本位の国籍法

日本の国籍法は父系優先血統主義で、沖縄の一部の子どもたちを無国籍にしている。米国人と結婚した杉山悦子さん(三三)は「女親が日本人でも日本人とは認められない国籍法に疑問を感じて提訴にふみきつた」と。国会に社会党提案で国籍法の一部改正が出されている。

(5・20朝日)

男女平等な政管健保

二番目の子どもを妻の健康

保険の被扶養者として申請した長野市の会社勤務のAさん

(三二)は、社会保険事務所に「子どもは男が養うもの」と拒否され、会社も家族手当を支給しない。健康保険法では、扶養する家族の健康保険は共働きの場合どちらでもよいことになっているが、厚生省通達(四十三年)は「原則として夫の扶養とする」。中島通子弁護士は「世の中の考え方が変わってきた現代にマッチした適用をすべき」と。

(5・22信毎)

別れた夫の損害賠償請求

「妊娠すると母体が危険」という妻のために、パイプカットを受けた夫(三〇)が、協議離婚した妻(三一)を相手取って一千万円の損害賠償請求訴訟を名古屋地裁に。

(5・30中日)

年金男女同率論

年金制度基本構想懇談会は「高負担時代」を告げる年金改革の処方せんを発表。現行の保険料率は男子九・一%、女子七・三%で一・八%の開きがあり、「男と合わせていくことを検討すべき」と。

(5・31読売)

妻の年金権確立へ

参院社会労働委員会で年金問題の集中審議で主婦専業の年金権確立も討議され、木暮厚生省年金局長は「夫の厚生年金で妻も処遇するのなら離婚や廃疾の際に何らかの給付を出すのが前提になる」と答弁。

(5・31日経)

妻の遺産相続が二分の一へ

法制審議会民法部会の身分法小委員会(小委員長、加藤一郎元東大長)は三日、遺

産相続の際の配偶者(おにもに妻)の相続分を現行の三分の一から二分の一へ引き上げる

などを内容とした「相続に関する民法改正要綱草案」をまとめた。(7・4毎日)

菊田医師の処分停止

厚生省から医業停止六月の処分を受けた菊田昇医師(五三)は、厚生大臣を相手取り同処分の執行停止申し立てを。東京地裁は「胎児の生命を救おうとするもので、他の破廉恥罪による医師の処分と同じに論じられない」と、処分の執行停止を決定。

(7・4読売)

配転女性アナ仮処分を申請

一方的にキーパンチャーの職場に配転された「ラジオ関東」の女性アナ、青津ナナさん(四一)は、「雇用契約違反」と東京地裁に仮処分を申

請。社側は「契約は一般放送職としてのもの」と反論。

(7・18毎日)

無認可保育所の悲劇、敗訴

四十七年に足立区「竹の塚ベビーセンター」でおきた乳児死亡事件は、「原因不明の突然死」として保育所、行政側に責任なしの判決。

(7・19読売・毎日)

政治

運輸省五試験を女性に開放

航空管制官・航空保安大学校・海上保安大学校・海上保安学校・気象大学の開放が五日、正式決定。

(3・6読売)

国内行動計画・その後

三月一日現在、自治体の行動計画が出来上がったのは、東京、北海道、岩手の三都道

県。埼玉、高知など十二県が目下策定中、策定意思のない県が十三県も。策定計画も男女の役割分担意識を固定化する記述がみられ、計画そのものの質が問われる。

(3・8毎日)

名古屋に女性環境部長

中尾初生さんが四月の異動で、「命を守るのは女性の本能です」と就任の弁。

(3・30中日)

皇宮護衛官に女性も

警察庁山田官房長官は五十五年度からの開放を目指して準備中と説明。女性の採用が制限されていた公務員十一職種中未開放は国税専門官、初級税務、入口警備官、刑務官、初級郵政事務官の五職種

となった。(3・24読売)

職場の男女平等で提言

都労働経済審議会は二日、「労働行政における婦人労働対策について」男女平等は不十分と都知事に答申、労働者、使用者、学識経験者の代表で構成する「職場における男女差別苦情処理委員会」の設置を提言した。

(4・3朝日・読売)

第三十一回婦人週間

「男女の平等と婦人の社会参加」をテーマに十日から十六日まで労働省主催で。今年は婦人の活動分野を広げることが重点におき、若年定年制、結婚退職制解消のための行政指導の強化。「男女平等問題研究委員会」(仮称)を発足、実質的な男女平等を確保するためのガイドラインを作成。同時に男性労働者の時間外労働制限等も問題化する。

(4・10各紙)

愛知県母子福祉会館開所

母子寮と母子福祉センターをそなえて、名古屋市北区金田町に完成。内職の指導、あつせんも。(4・11朝日)

“選挙カー”は乳母車

愛知県岩倉市議選で、婦人候補が中古の乳母車を押して「お願いします」。子供たちには拔群の人気。

(4・20朝日)

女性海上保安官の育成

舞鶴市にある海上保安学校では、全国で初めて女性の入校がOK。応募者も多数だが、すぐに勤務の海上勤務は無理と、当分はオカの勤めになる。

(4・25中日)

長野県婦人相談所

婦人保護施設が併設され駆け込み寺的役割も果たしており、五十三年度中の入所相談は二十五件、十三人が利用。担当者は「女性の意識が向上した半面、男性の横暴に泣いているケースも多い」と。

(5・10 信毎)

県婦人就業援助センター

主婦の技術修得、就業機会の拡大を目的に発足して一年。無料技術講習には百人弱と少ない。今後は魅力ある講習内容に。

(5・21 信毎)

家庭基盤の充実を

自民党の家庭基盤充実特別委員会は一日、家庭を見直し、親子の会話を取り戻すために、深夜テレビ、ラジオの禁止措置や、国民の祝祭日として「家庭の日」を設けるなどを提言。評論家の秋山ちえ

子さんは「いまさら政府や自民党が口をはさむ必要はない」と。

(6・2 毎日)

「体力必要、男子のみ」を訂正

愛知県人事委員会は、今年度から「社会福祉B」と食品衛生監視員となる「薬学B」の大卒職員受験資格を女子にも開放。

(6・16 朝日)

山口県「女審三〇年の軌跡」

山口県女性問題対策審議会が近く「女審三〇年の軌跡」を刊行。山口県の女審は二十四年に知事の諮問、建議機関として発足以来、「女の時代」を先取りし、声を行政にビジネス反映させるという他県に類のない活動を続けている。

(6・26 西日本)

望郷五十年、国籍取得志願

終戦の混乱で未だに無国籍のまま中国に住む日本女性、

田中和子さんが一時帰国した。「日本人なので、日本の国籍が取れば……」と。

(7・3 毎日)

都の審議会委員に女性を

足羽委員が、都の審議会の委員に占める女性委員の比率をただしたのに対し、知事は「将来、審議会委員の半数を女性にする」と約束。

(7・6 毎日)

「母子手帳」に父親の心構え

京都市は「母子健康手帳」にたばこの害や、父親の心構えなどユニークな内容を盛り込むことを検討中。

(7・11 京都)

赤松良子さん国連公使に

ニューヨークへは八月出発。「亭主もあちらで職探しでもないと言うし、息子もアメリカの大学に移ってもいい

し」世の心配よそにサラリ。国連第三委員会の担当として、婦人問題を扱うことにな

(7・22 読売)

都財政再建に女性委員

鈴木知事は二十四日、諮問機関・都財政再建メンバー十八人を決定したが、女性は二名。その一人、石原一子高島屋取締役は「女性として、家庭経済の観念はあるつもりなので、女なりのヒントを出せれば」と。

(7・25 読売)

労働

女子学生の就職戦線

女子の短大・大卒求人数は昨年比四九%伸びた(東京学生就業センター調べ)が、短大は九二%が一般事務で専

門・技術職は二%、大卒も八〇%が一般事務、専門技術職は八%（共立女子大調べ）。人気3はJAL（上智・青山・立教）で、「職場の花」は大卒に拡大した感じ。

（3・13—14読売）

スーパー業界に女性進出

今春、スーパー業界に五百人（大手六社）もの大卒女性が入社。ファッションセンスと知識を武器に管理職や専門職に。会社側も「彼女たちのなから店長も」と。

（3・18信毎）

悪化するパートの労働条件

東京・第十五回内職パート大会（主催・総評主婦の会）に三百人の主婦が参集。全体の五三・四%の時間給は「三百一円—四百円」で「二百円以下」も一・八%。月収平均四万九千九百円。前年に比べ

「ボーナスの支給されている人」五七・九%↓三九・五%、「休憩時間の有給」二〇%↓六・四%「残業手当がついている」五七・二三%↓一三・一%と大幅に減少。大阪市立大教授（経済学）竹中恵美子さんは「女性の社会参加とまわりがおだてても、こんな不平等があつていいのか」と。

（3・19中日）

パート、いまや主戦力

流通業界を中心にパートの採用が急増。大手スーパーは従業員総数の中でのパートの比率を五〇%以上に高めようとしている。（3・26朝日）

家内労働者が激減

労働省から、五十三年十月調査の家内労働の現状が発表された。家内労働者数百三十五万人。前年より八万六千人減。家内労働者の九割を占め

る内職希望の主婦がパートタイムの雇用に転じていることが減少に拍車をかけている。工賃は一時間の平均が女子で二百五十二円。パートの女子は四百五円。

（5・23読売、24朝日）

男女の初任給

五十四年度大卒男十一万一千四百七十二円（昨年比三・五%上昇）女十万四千三十一円（三・二%上）高卒男九万一千九百四十二円（三・四%上）女八万九千六百六十一円（三%上）。日本リクルートセンターの千百五十三社調査で。（5・26日経）

女性管理職は千人に三人

サービス業では八八%、卸売・小売業は四六%、金融・保険業は四四%が女子。婦人重役も出ているが、課長以上の管理職に就いている女性は

九百九十六人で〇・三%。一人もいない上場会社は九〇%、特殊法人は八三%。内訳は課長六百六十二人、その他二百四十六人、部長七十二人、役員十六人。未婚者が既婚者を上回り、上場会社では約七〇%。総理府が東京・大阪・名古屋の第一部上場企業千六百五十三社と特殊法人百十一（計三十八万八千五百七十七人）を調査した結果。

（6・3各紙）

パート主婦の雇用保険給付

千葉県下の全国競走場労組従業員約五千人に対する雇用保険請求を千葉県と労働省は却下した。月間十数日の勤務で年収三百万円以上の高給を得ているためだが、同じような状況の東京・埼玉では認められている。（6・8日経）

女性差別一万七百社も

日航スケジュールデスの早期

退職が国会で問題になったが同様な男女別定年制や結婚退職制などが全国一万七百社に存在していることが労働省の調査（従業員三十人以上）でわかった。六百企業は女子の定年を四十歳未満に、五百企業は結婚を定年とすると公認しており、労働省は改善指導に乗り出した。

昨年来の同省の行政指導で定年差別を撤廃したのは六千三百、男女差はあるが女子の定年を五十五歳以上としたところは百企業ある。

(6・9読売)

日産自動車の定年六十歳に

定年差別で敗訴した日産自動車は今年四月一日にさかのぼり女性の定年を延長すると組合に通告した。ただし裁判は不服とし、最高裁に上告中。

(6・16読売)

増えるパート主婦

総理府の五十二年度労働力調査ではパートは雇用者総数の八・七％、うち三分の二が女。一方無職の女性の希望する働き方の一位はパートで四三・一％、次が内職二八・四％で、普通に勤めたいは一三％だけ。

(7・9日経)

寝不足招く、婦人の残業

一日二時間の残業で、睡眠時間が三十分から一時間も減り、入浴者も六分の一に減ってしまふ、と労働科学研究所の斉藤一所長が発表。テレビや新聞を読む時間が減るだけの男性とは大違い。「女子保護規定の検討も、母性への影響だけでなく、女子特有の家事労働負担からの影響も考えなければ」と指摘。

(7・17毎日)

百貨店・大卒女子増員

高島屋百貨店は「高学歴女子」を今春の六割増の百九十七人（大卒十、短大卒百八十七）に。近鉄百貨店も大卒を倍の四十人に増員する予定。

(7・25京都)

主婦のパート長期化

労働省は五十三年度雇用動向調査で、パート労働者は三十五万人、昨年より一万人減だが労働者中に占める率は上昇と発表。女子は二十九万人で八割強、勤続期間は男は一年未満が七七％だが女は一年以上が四一％で長期化傾向。

(8・5各紙)

タクシー運転深夜営業陳情

二十三日、女性タクシー運転手十三人でつくる「ひまわり会」が森山婦人少年局長に労基法改正を陳情。「もうけ

のよい夜十一時すぎの仕事ができない。十三人中十人が母子家庭だが」と会長の井原恵美子さん（四七）は語る。

(8・24読売、8・28朝日)

活動

悪書追放

愛知県婦人団体連盟の婦人十五人が八日、国や国会に自販機の設置、取扱いに対する規制強化を求める法制化を陳情するために上京。

(3・9中日)

婦人議員を送ろう

長野県下の十二市町村には十三人の婦人議員がいるが、その数は余りにも少ない。統一地方選がスタート、せめて婦人の声を反映させる道をあ

けておかなければ……と上郷町などで機運が高まる。

(3・15信毎)

女たちの手で『出産白書』

出産経験者三千数百人のアンケートをもとに、「国際婦人年大阪連絡会」が作成した白書は、現代の出産にまつわる女たちの恨みを、共通の「財産」に結実させたもの。世話役の山中紀代子さん(三八)は「作成の過程で、子どもを産むということは公的なことだと、認識がうんと深まりました」と。

(3・23朝日)

主婦が「自分史」を編集

読売の投稿者の会「赤でんわ」の埼玉グループ十三人が『いま私たち主婦は』を自費出版、嫁・しゅうとめ問題などに正面から迫った。

(3・28読売)

パートはオバサン

「パート未組織労働者連絡会」結成準備のための連続討論集会を昨年十一月から毎月一回開いている山口静子さん(四四)。「パートタイマーはオバサンなのです、主婦であつて労働者ではない」と。税金控除の限度アップを求め、国会へ請願書を提出、署名運動を展開している。

(4・4読売)

翔んでる女「赤い気炎」

国際競争の激化を背景に日航がスチュワーデスの合理化に手をつけたのに対し「労働強化は許せない」と合理化案の撤回を要求。

(4・8日経)

新「女大学」を求めて

江戸時代の女の修身書『女大学』を一年がかりで読んだ

横浜市の婦人学級グループ「女大学セミナー」。さらに女が主体的に生きるための新・女大学を求めて女性史研究に取り組んでいる。

(4・10読売)

バック包装しないで!

愛知県半田市の主婦グループ「半田消費生活研究会」が小売各店に要望書を。

(4・12朝日)

安全な食品を

神奈川県の「相模原母と子の健康を守る会」(能勢千鶴子会長)は「より多くの人に安全食品を」と、同会が共同購入している有機農法の米や野菜を地元の小売店におく「開かれた」消費者活動ですめています。(4・14毎日)

防犯は主婦の手で

名古屋市千種区高見学区防

犯協会婦人部委員会(会員三百六十二人)が二十日、同学区内をパトロール、注意ステッカーをはる。

(4・21中日)

国際母乳連盟

赤ちゃんのため母乳育児をすすめているボランティア団体「ラ・レチエ・リーグ・インタナショナル」のマリアン・トンブソン会長が近く日本に来日予定。七人の主婦から始めた米国の運動が現在世界四十二か国、三千五百の支部に発展。約一万二千人のリーダー会員がお母さんたちの相談役に。(4・29朝日)

子を頼らずに生きるには:

大阪の主婦たちでつくっている「ミズのグループ」は昨年九月以来、このテーマで七回にわたり討議。夫婦だけの暮らしを考え「亭主教育」

を。(5・2朝日)

「シャンバラ」復活

さる二月末に閉鎖された京都の「シャンバラ」が五月一日より再開。新生シャンバラは、スタッフも十名近く増え、「シャンバラ・シスターズ」と称する会員運動を展開。出版部・販売部などの設立、図書の貸し出し、「英会話教室」「ギター教室」開催と多彩。(5・4京都)

婦人による模擬議会

婦人週間行事の一環として、十八日九子町役場で婦人による模擬議会が。婦人団体連絡協議会のメンバーが議長や議員にふんし、町長や役場の担当者に「健康問題」「婦人の社会参加」をテーマに代表質問、関連質問を。(5・20信毎)

離婚からの出発

「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす会」の離婚分科会が、四年間の調査研究成果をレポートに。離婚後後悔している人はゼロ。(5・23読売)

岸も国会へ喚問せよ

「松野氏だけでなく、岸元首相も国会へ証人喚問せよ」と二十四日、渋谷ハチ公前広場で、日本婦人有権者同盟や理想選挙推進市民の会の会員が、ビラやマイクで通行人に訴えた。(5・24毎日)

女たちの映画キャラバン

デンマーク映画「女ならやつてみな」の上映権を買い取り十都市で巡回上映中。(5・26読売)

母性・出産の保障要望を

国際婦人年大阪連絡会の代表は、二十八日、「母性の社会的保障とすやかに生まれる権利の確立を」と、厚生、労働、自治各省へ要望書を提出した。(5・29読売)

十七年目を迎えた『わいふ』

「考える主婦の投稿誌」『わいふ』(隔月刊)は今年で十七年目。定期購読の会員が千五百人にふえ、毎号意欲的な特集を組んでいる。(5・29読売)

弱視の子に手作り教科書を

福岡市の江頭千鶴子さんから五人の主婦は、五十一年から鹿児島盲学校の児童のために文字を拡大した教科書を送り続けている。墨で書き写したものを印刷、さし絵や装丁も手作り。(6・4西日本)

二十号を迎えた『あごら』

女性総合情報誌『あごら』が二十号に。広告もせず生き残ったのは、提供する情報の質によるもの。風俗や流行現象としてではなく、日常生活の中の事実として、女の問題を考え、記録する。(6・3、6・14毎日)

国際女性研究会

毎月一回、日本女子大井出祥子助教住宅で開催、外人もまじえ女性問題を勉強中。(6・23日経)

売春、売買を告発

矯風会製作の「恥しい日本人——観光買春を訴える」と無明舎の「沖繩のハルモニ・証言・従軍慰安婦」の二つのフィルムが都内で上映され静かな関心を呼んでいる。秋からはタイアップ、全国で「売春問題を考える上映運動」に発展させる予定。

(6・27毎日)

「女性副知事」を要望

市川房枝さんから「都民参加の都政をすすめる婦人連絡会」は鈴木都知事に①政策決定ポストへの女性登用②婦人問題推進のための恒常的諮問機関の設置などを要望。選挙公約実現をつきつけ、知事もタジタジ。

(6・29読売、7・5日経)

パート所得税控除を闘う

夫の配偶者控除は年収七十万円までだが、その引き上げ要求に立ち上がった一主婦の呼びかけに千五百人が署名、国会に持ち込んだ。

(6・30読売)

地域ボランティア交流会

身障児施設、老人ホーム等でボランティア活動をしている春日井市と、大府市のグル

ープが交流会を行なった。ボランティア受入側の問題、会、員を募ることなど話し合った。

(7・23朝日)

主婦らが本の修理

春日井市で、地域文庫で活躍している主婦たちが、図書館で本修理の奉仕。

(7・4朝日)

教科書に見る合成洗剤

合成洗剤を石けんに切り替えたのは全世帯の五%未満。その原因は教科書にもあるのではと、東京母親大会連絡会のメンバー中嶋峰子さんが、扱われ方の変遷を調査。洗濯用合成洗剤優位の記載がまだ大半。

(7・4毎日)

女性の能力銀行、東海にも

女性の力と社会を結ぶ「創造力の銀行」BOCの東海事業部がスタートした。主婦の

力はただ働きにされがちだが経済的にも自立をと、モニター・浄書・企画など、着実に一歩ずつ進めていく。

(7・5中日)

「集会託児やろう会」の男

京都で、女性の集まりがあるたびに、参加者の子ども世話を引き受けている男たちがいる。女を犠牲にしない生き方を、と始めたこの集会託児はすでに五十回に及ぶ。

(7・6京都)

『食べもの通信』創刊百号

食品公害を告発し、食生活の改善を訴えてきた月刊紙(家庭栄養研究会刊)が百号目を出す。九年间、若い栄養士たちが女だけで地道に活動、会員百人、定期購読三千部。

(7・7毎日)

男女共修生活科を

男は外、女は内という社会通念のもとで作られた技術・家庭科の教科書は、生活技術をもたない男と、生活費のない女を作りあげている。これを一人の人間として生きられるための教科「生活科」にするための会が名古屋でスタート。手始めに教科書の洗い直し中。代表奥村和子さんは〈あこら東海〉会員。

(7・10中日)

審議会へ女性登用を

名古屋市婦人問題懇話会(大脇雅子会長ら有識者十五人で構成)は十五回の討論を経て「女性から市民・自治体への提言」をまとめ、審議会・行政委員会への女性の積極的登用その他を市長に提出する。

(7・13中日)

主婦が手でさわる絵本作り

名古屋市瑞穂図書館のボラ

ンティアグループでは、五十三年から目の不自由な子どものために「手でさわる絵本」づくりをしている。試行錯誤の末、今では評判も高く、東京・名古屋・大阪・沖縄で展示会も開かれる。

(7・19朝日)

母校に「復学」した主婦たち

上智大独文科出身の三十八歳前後の主婦たちが毎月二回母校で勉強中。

(7・19日経)

女だけの劇団「やわらぎ」

大阪四天王子高校の演劇部卒業生で組織、「男に負けへん」と意気盛ん。

(7・29日経)

主婦連が絹手縫い糸テスト

昭和四十六年に続き二度目のテスト。強度は向上したが色落ち・退色は多いと発表、

JIS規格の引き上げを要求。

(7・31日経)

埴輪制作で古代女性史学が

奈良・帝塚山大の考古学専攻女子学生は埴輪を作り、古代女性の仕事を追体験、近く学界専門誌にも発表する。

(8・10読売)

草の実会が研究を冊子に

平和問題研究グループが『防衛問題を考える』を、教育研究グループが『女性差別をのりこえるために』をまとめた。

(8・21朝日)

主婦の奉仕で「声の図書館」

区立渋谷図書館に今秋誕生する。奉仕者は大半が三十一～五十代の主婦。

(8・25読売)

食品公害のパンフを作った

「子どもの未来をつくるさか

み親たちの会」(木村徳栄さんら)は公開講座も開き、子どもたちの未来に責任をもとうと運動中。(8・29毎日)

集会

太田さんをげます会

十日東京で、太田薫氏を支持する婦人団体の代表が集まり、美濃部知事に太田氏の支援要請することを決定。市川房枝さんは「美濃部都政は女がつくったもの。中立宣言なんてけしからん」と。

(3・11朝日)

総評、初の女性大集会へ

総評は二十九日東京で女性による「労基法政悪阻止、婦人の労働権確立」一万人集会を予定。参議院議員の市川房

枝さんは改悪反対アピール文書、書を婦人団体や学者に発送、「男とまったく同じ時間帯で働くことが男女平等の道ではないはず。女性に悪い労働時間帯は男性にも悪い」と。田中寿美子参議院議員も「平等を主張しながら、女子労働者全体が結束して保護廃止を食い止める方向を」と。

(3・25朝日)

全国婦人労働者中央大集会

二十九日、東京で春闘としては初の女性労働者集会(一万五千人参加)を開催、「労基法改悪阻止、婦人の労働権確立」を訴えた。

(3・30朝日)

第二十二回婦選会議

「政策決定に婦人の一票を生かそう」をテーマに東京・代々木の婦選会館で開催。「老人問題、教育、生活問題

など身近にかかえている女性こそ足元の地域に根ざした運動をすすめていけるはず」と。
(4・13朝日)

男女雇用平等法で討論会

幅広い層の会員二百人で構成する「私たちの男女雇用平等法をつくる会」は五月十二日百人が集会、六月三十日も集会を開く。
(5・13—6・29読売)

「石油の将来」の講演会

日本婦人科学者の会が二十日行なり。
(5・24読売)

全国高校女子教育問題研

第四回大会が広島で三日間開かれ、全国から女教師三百二十人が参加、「男女関係の問い直し」「愛のあり方」を討論、職業と精神の自立こそ愛の基本と結論。
(5・24信毎)

男も子育てをノ

「行動を起こす会」はこのほどシンポジウム「今こそ子どもと出会うとき、男も子育てをノ」を開いた。
(5・28京都)

バート問題など討論

「はたらく婦人の愛知県集会」が三日県勤労会館で催され、五百人が参加。
(6・4朝日)

労基法見直しをめぐって

五月二十六、七日、総評系「第二十四回はたらく婦人の中央集会」が東京九段で。また、「第二十回全国婦人の集い中央集会」が三十一日品川で。組織内の男性労働者とう共闘していくかが今後のカギに。
(6・4読売)

『あいら』二十号で記念講演

女の総合情報誌『あいら』二十号を記念する集いが開かれ、水田珠枝さんによる「これからの女性解放運動」の講演などがあった。
(7・2京都)

婦人研究者が婦人問題を

全国の婦人研究者約百五十人が、京都で婦人問題全国シンポジウム(主催、科学者会議)を開催。群馬大学教授・嶋津千利世さんが「労基法改定と婦人研究者」について講演。二日目の分科会では労基法改定に反対するアピールを採択。
(7・12読売)

女の生き方を探る

〈全国あごらのつどい〉が二十一・二の両日、瀬戸市と名古屋市内で開かれ、「自己の解放から社会に向けて」をテーマに三分科会で討論。
(7・23—26朝日)

毎日、中日

二十五年目の「母親大会」

「涙と訴え」の第一回大会から四半世紀、原水禁・勤評・安保・保育所と幅広く取り組んできた。参加者は主婦が漸減、いまは三〇%に。「一人ぼっちの母をなくそう」でスタートしたが一人ぼっちの子までふえた。父親と一緒の参加が待たれている。
(7・26中日、7・22読売)

家族社会学会セミナー

七月二十一—三日、国立婦人教育会館で。「性差別の文化的社会的背景」「共働きは性役割にどう影響するか」「子どもの社会化における性の分化」を百余名で討論、女性側からより光った問題提起がされた。
(7・31毎日)

重要な女性教師の役割

「男女関係の問い直し」をテーマに全国高校女子教育問題研究会が開かれ、小・中・高・養護学校の女性教師三百二十人が出席。

(8・25京都)

「子ども」シンポで嫁姑論議

愛知県日進町で、国際児童年記念シンポジウムが「子ども」をテーマに行なわれたが、外国人バネラーに対する会場からの質問は、嫁姑に関することばかり。司会者は「家庭円満が子どもにとって大切だということ」と苦しい弁明。

(8・30朝日)

母と女教師の会全国集会

「子どもの人権を問い直す」をテーマに二千人が集会。

(8・30読売)

調査・統計

子育て主婦の交際率は？

主婦対象のミニコミ誌『わいふ』が読者四十六人(平均年齢三十三歳、一・八人の子ども持ち)を対象にアンケート。一日に顔を合わせて口をきくのは四・四人で、相手の大半は近所の人や店の人たち。夫との一日の会話時間は平均三十八分。

(3・4朝日)

「腰かけ」意識強い女子高生

「結婚まで働く」、「卒業後二―三年」が計四八%。愛知県高教組婦人部が、商業科女子高生を調査した結果。

(3・6中日)

キャリアガールの理想像

イメージは「精神的自立」

「男なみに活躍」「社会的地位あり」。ベスト5は森英恵・兼高かおる・市川房枝・黒柳徹子・石井ふく子。「なりた」は三人に一人だが、勉強しているのはその四四・三%だけ。ボーラ化粧品品の二百六十人調査で。(3・7読売)

大学は出たけれど

大学婦人協会が、昭和八年から五十年までの大卒女子について調査。若い層ほど仕事の満足度が低いことが判明。「大学の大衆化で、働きがいのある仕事への就職が難しくなったからではないか」と調査にあたった日本女子大助教授の西村圭子さん。

(3・19日経)

八〇年代を迎える

ヤング女性の意識

「結婚しても共働きをする女性が増える」七七%。「キャリアウーマンが増え続け、女性の地位は向上する」四七・七%。「離婚をして再び一人で生活する女性が増えていく」三九・三%。「女性の管理職が増える」三五・九%。現役OLのうち「定年まで現在の職場にいる」六・七%、「いつか辞める」四〇%、「二年以内で辞める予定」三七・五%。その理由は結婚、他にやりたいことがある、給料が安いなど。カネボウ化粧品品の六大都市千二百人調査で。

(3・20毎日)

若い妻ほど夫の転職支持

転職者の妻二百三十六人の調査で二十代の九割は「夫の能力開発」「前向き」と受け

止め高学歴者ほど支持的。転職の相談を受けたのは七割、妻の意見を尊重したのはその八割、転職に満足は六八％。義理と人情にがんじがらめの夫より、妻のほうがはるかにクールでラディカル。

(3・25読売)

女子中高生が見た母の服装

家庭内の服装は満足は五九％だけで四〇％以上が不満。外出時は満足八三％。不満の内容は「もっとおしゃれを」二八・五％、「見だしなみに気をつけて」二二・六％、「清潔に」一〇・七％の順。首都圏の三百人調査で。

(3・30読売)

八〇年代の女性の生き方

共働きがふえる七七・〇％、キャリアウーマンがふえ地位が向上四七・七、離婚・独り暮らしが増える四一・

八、結婚しない人が増える三四・八、生きがい①結婚三七・八②趣味一五・七③仕事一四・〇④結婚と職業の両立一二・〇。あこがれの職業は①ブティック経営②スチュワーデス六・六③秘書五・九％。六大都市のOLと学生千三百四十七人の調査で。

(4・2読売)

関心高まる生命保険

国民年金、厚生年金、各種共済組合年金に加入している女性は八八％。女性の死亡保障の保険加入について「男性と同じくらいにすべきだ」と考えている専業主婦(十八歳未満の子ともがいる)は二九・六％だが、家族を養っている女性では九〇・四％に。二十一〜五十九歳の男女五百人を対象とした生命保険文化センター調査。(4・4日経)

新入女子社員の意識

なりたいのは「愛される女」で三四％、仕事面では「責任ある行動」「努力」「仕事に慣れる」がベスト3。銀行の百七人調査(平均年齢十八・七歳)で。

(4・5読売)

母の日のプレゼント

毎年する、何度かしたが計四〇％、三十代前半の二人に一人は毎年実施。百貨店の社員四百六十人の調査で。

(4・14読売)

女性が働く動機

経済的、精神的自立七三％、成長に役立つ五三％、趣味に合った生活ができる四一％、社会に役立ちたい九％、結婚相手探し一％。全国の銀行、信用金庫の女子社員四千五百人の調査で。

(4・14読売)

結婚の意義

「精神的に満たされ安定」三八％「社会的に一人前と認められる」三一％。適齢期は、「ある」七三・四％、うち女は七二・六、男は六三・六％、高齢者ほど適齢期を気にする。読売新聞社の三千人調査で。

(4・15読売)

主婦とテレビ視聴

平均一時間四十五分、最長は五十代以上で二時間以上、最短は三十代で一時間二十分。高年齢ほどNHKが好き。首都圏の主婦八百六十九人の調査で。(4・15読売)

さらに進む核家族化

厚生省の五十三年厚生行政基礎調査で、全国の寝たきりの人は五十三万人。うち六十歳以上三十八万六千人、一世

帯あたりの家族数は三・三人。核家族は二千七十六万八千世帯で前年より三十一万五千世帯増。二世代世帯は五百五十五万八千、一人世帯は六百二十一万四千。一人暮らし老人は百六万九千で、八割が女。

(4・15読売)

家庭科女子のみ必修の是非

現行制度を肯定する意見は一〇%。「高校では男女とも必修を」が五九・三%「男女とも選択」二五・九%「家庭一般の廃止」三・七%。中学校の技術・家庭科では八六・七%が「改めるべき」、小学校の男女共学に対しては七〇%が「当然」。家庭科の男女共修をすすめる会が教育学者、評論家百人にアンケート調査した結果。

(4・17毎日)

社会慣習の中の男女差別

長野県婦人問題県民会議が、男女千五百七十六人を対象に調査。「地域の共同作業で男女の取扱いに違いがある」三三・一%。そのうち「男女同じ作業をしても日当に差がある」六六・五%「女性が出た場合は出不足料を取られる」三二・四%。「冠婚葬祭に関する男女差別がある」は七割弱。「家庭生活で男女差別がある」は五四・一%。

(4・18信毎)

主婦の身の回り経費

昨年一年間に東京、大阪、名古屋の主婦は自分自身の身の回り品購入に、平均三十一万三千円を使った。これをも自分の収入でまかなっているのは二二%という東海銀行の調査。

(4・20毎日)

厳しかった女子大生の就職

希望どおりの会社へ就職で

きたか——「第一希望へ入社した」男子三八%、女子四五%。特に女子の大卒では「第一希望」三一・六%、「第二希望」三六・七%と第一希望の会社就職できたのは三人に一人。短大卒も第三希望までの会社へすら入社できなかった人は二一・二%に。勤続年数について大卒の女子は「ずっと働きたい」(二二%)「子どもができるまで」(九・七%)とやる気十分。東海銀行が新入社員を調査。

(5・8日経)

母子・父子世帯の生活実態

都内の母子世帯は五万二千九百世帯、父子世帯は一万一千八百世帯で全世帯の一・六%に。「生別」五九%(離婚が八割)、「死別」三四%、その他七%。未婚の母は五・七%で、年代別には三十一—三十四歳一三・二%、三十歳未満

一一・一%、三十五—三十九歳が七・一%。母子世帯の母親八六%が働き、四人に一人が臨時雇い。平均月額収入は十六万七千円で父子世帯平均二十三万一千円とかなり差がある。都民生局の調査。

(5・9朝日)

主婦が描く「翔んでる女」

翔んでる女の定義「結婚後も精神的に夫から独立している女」を過半数が上げ「自分の収入だけで生活できる女」「結婚後も外に仕事を持っている女」の順。そのイメージは「活動的」「自由」「知的」。四四%の主婦が「マスキミの作った虚像」とみなながらも「私も翔んでる女になりたい」が二五%を占め、「専業主婦であることも大切」一八%「私には関係ない人たち」一二%を押さえている。ショッピングの主婦百人調

査。(5・12日経)

高学歴ほど主婦專業

愛知県青少年婦人室が、主婦千六百人に調査。大卒に無職が五五・六%。高学歴ほど自意識は高いがなぜか無職。(5・17中日)

日本のお母さん

全国の十五歳以上の女性の七割、約三千二百万人がお母さん。子どものない新婚期は約四三%が仕事をし、出産、保育の時期は約二六%、子どもが学校に通う段階では約四九%、末の子が十八歳以上になると約五三%が働いている。妻の収入は年間約二万四千円と年々増えてはいるが、家計に占める割合は七・〇%。五十三年度の総理府調査。(5・18日経)

老親との同居は

経企庁の「家庭生活に関する調査」の老親との同居をみると、経済的負担では、夫の親との同居は、夫妻とも「負担が大きい」が約八%だが、妻の親だと妻の不満はほとんどゼロ、夫も二・九%だ。

「家事の負担」は夫の親だと妻の不満は八・三%だが実親なら六・一%。「身の回りの世話」も実親だと不満は二%。ただし親との人間関係が「うまくいってる」は夫の親のほうがわずかながら上回る。老親との同居率は七五%、うち妻の親との同居は七分の一だけ。欧米では同居率は二〇―三〇%、ほとんどが妻の親だが。(5・29毎日)

女性高齢者の生活

世話してもらいたいのは、長男(嫁を含む)三七%、娘二九%、子全員二四%。三人に一人が健康に不満足、八割

は病気の不安を抱く。装いは「好きなものを着る」「年とともに若くみえるように」が五十代では計七〇%、美容院にも月一回は行く、百五十八人の中流婦人の面接調査で。(5・31―6・21日経)

主婦の財布権

全権掌握は七七・三%、三十代は八一・二%だが、夫に相談なしで支出できるのは五万円以下が六割強。首都圏、京阪神圏の主婦三千三百人の調査で。(6・11日経)

部課長の八割は平等に反対

日本生産性本部は十二日、大企業の間管理職の意識調査を発表。「職場で完全な男女平等を実施するのは現実的でない」八二%「積極的に男女平等の実施に努力すべきだ」一八%。否定的な意見は三十代と五十代が八三%、四

十代が八〇・九%。大企業より中堅企業の方に否定的な人が多い。理由は「企業内は実力あるのみ」「女子社員には社会研修費を払ってもらいたいくらいだ」など。(6・13朝日、6・17信毎)

OL変身、デートより仕事

「一生仕事を持ちたい」五七%、「デートがあつても仕事が終わるまで待ってもらう」七一%、「デートを断わる」一一%、「仕事は結婚までは二〇%、「出産まで」は一六%。OL三百人の調査で。(6・14読売)

主婦の裁量権

住友ビジネスコンサルティングが、東京大阪の主婦千人を対象に調べた「友だち家族時代の生活リダー」消費をにぎる主婦の生活実態」の報告。給料ボーナス袋まると

派は二十代で七五%。日常の買物だけでなく家庭経営の重要事項にも主婦の発言力は大きい。特に若い主婦は社会参加と経済安定へ意欲的。

(6・21中日)

結婚祝い平均一万三千元

時計・アルバムなど生活小物がトップで三六%、以下、食器類・現金・家電・インテリア小物の順。現金で贈った人四十九人に対し、ほしい人は十四人だけ。丸の内のOL二百人の調査で。

(6・26日経)

朝、夫にしてあげることに

「くつみがき」二六・三%、「朝食の用意」二〇・八%、「出勤用の洋服を用意し、世話をする」一一・二%、「お弁当づくり」七・四%。くつクリームのメーカーが十代から五十代の主婦約一万八千人

を調査。(7・3読売)

「一生仕事を」のOLは六割

結婚するまで二〇%、出産まで一六%を引き離したが、関心事は①レジャー②美容と健康③流行④結婚⑤教養、職場では①給料②人間関係③仕事。ヤングOL三百人調査で。(7・8読売)

家族計画世論調査

希望する子どもの数は「二人以下」四九・三%(五十二年度四五・二%)、「三人」三九・五%(四二・一%)、「四人以上」八・五%(八・五%)。「子どもはいらない」二・九%(二・六%)。欧米先進国並みの「人口縮小再生産」へ。主婦約四千人を対象にした毎日新聞社人口問題調査。(7・9毎日)

主婦の社会活動

埼玉県が三年がかりで実施している婦人実態調査で最も活動しやすいのは①PTA②交友③町内会・自治会④婦人会⑤商店会・農協。しにくいのは①病人・障害者のためのボランティア②教育文化ボランティア③老人福祉ボランティア④公害反対運動⑤学習グループ活動。重要と思うのは①職業技術のための学習②PTA③病人・障害者・老人のためのボランティア④公共施設の促進運動。重要でないのは①宗教活動②商店会・農協活動③趣味・スポーツ④婦人会。(7・13日経)

家庭における婦人の意識

福岡県人権擁護委員連合会婦人問題委員会が県下既婚女性二千人を対象に。「男女平等になっっている」否定七〇%、「家庭内の女性の地位の現状」不満五二%。「女性の

地位を高めるに必要なこと」では「男性の理解と協力」が四七%、「女性自身が目覚める」が三五%、「女性の経済力を高める」が一〇%、「男は仕事女は家庭」に対しては、肯定五一%否定四八%。「家庭での家計管理者」は妻七八%夫一三%夫の親五%妻の親一%。(7・13西日本)

財産・相続でも妻の座向上を

夫の収入で得た財産は「共同財産」が六四%、夫婦別産は二一%、相続は「現行のまま」三九%、「妻の相続分を二分の一に」二八%、「三分の二に」一三%、夫の遺産を現行どおり「夫の兄弟姉妹に三分の一」は二七%、妻に全部が四四%、亡夫の親の遺産は「妻も相続できるように」五一%で、全般に妻の座向上の声が強い。総理府の「相続に関する世論調査」(三千人

で。(7・16日経)

「ずっと勤めたい」が約半数

働く既婚女性の働く動機は

「収入を得たいから」五一・六%、「家庭にとじこもりた
くない」「仕事が生きたい」
など社会派志向派も半数近
い。将来についても「ずっと

勤めたい」が四六・四%と、
キャリアウーマン志向。これ
に対し夫は「女性も社会に出
たほうがよい」(三八・七%)

「家計や生活設計上やむを得
ない」(三三・七%)と一応
理解を示すものの「いずれ・
すぐ辞めて欲しい」が六五・

二%と建前と本音の違い。
(太陽神戸銀行の調査)

(7・18京都、7・23読売)

途上国ほど就学率に男女差

プータンでは女は男の三分
の一、アフガニスタンは平均
二三%で女子は七%、エチオ

ピア平均二三%、女子一四
%、エジプト平均七二%、女
子五五%、タイ・ビルマは

七、八〇%で性差も少ない。
日本は共に一〇〇%、スウェ

ーデンは女子九八%、平均九
七%。(7・23日経)

離婚した女の現状

離婚母子家庭の母親の全国
組織「児童扶養手当を十八歳
に引き上げる会」が、会員調
査。「離婚した女の目」15

7のアンケートから」をまと
めて発行。「二一五歳の子ど
もを二人連れ、二十七歳で離

婚」が離婚時の平均像。大部
分の母親は離婚後仕事を持っ
たが、就労条件は不安で、収入

も年収で百万円未満が三六
%、百五十万未満が六一%と
低く、全体の三六%が生活保

護基準以下の状態。会員の宮
本モエさん(広島女子大教
員)は「仕事・家事・育児に

摩滅していく女の姿」と表
現。(7・24毎日)

増えている父子家庭

全国の父子世帯は約十万一
千世帯。年齢別では、四十歳
代が四六・八%、二十歳代

四・一%、三十歳代二六・三
%で三人に一人は二十歳、三
十歳代の父親。(原因)は離

婚、母親の蒸発など生別によ
るものが五一・五%、死別が
四八・五%で前回調査と比

べ、生別と死別が逆転。ま
た、未婚の父が〇・四%、約
四百世帯も。(父の職業)五

世帯に一世帯が日雇いか無
職、収入面も約四割が月収十
万―十五万円。帰宅は、六割

以上が午後七時以降で、子ど
もが炊事、洗たく、買い物な
ど家事をしている。年金もな

く、父子の福祉対策はゼロ。
二万二千世帯の父子家庭を対
象とした全国社会福祉協議会

の調査から。(7・25読売)

増える悩みごと相談

愛知県婦人相談所に「悩み
ごと電話」が設けられて三
年、一万三千百件を受け付け、

昨年は前年度比一〇・四%
増。年齢は三十代が三割、二
十、四十代が二割、内容は家

族問題が五九・六%でトッ
プ。(7・25日経)

夫を選ばば……

夫になる人の条件、一にお
金(三三・五%)、二に体力
(二七・五%)。理想の職業は

技師(一四・三%)、医者(一
二%)、商社マン(一〇・六
%)。結婚へのプロセスは

「恋愛→結婚式→初夜」が二
百四十四人。「恋愛→婚前交
渉→結婚式」が百四十二人。

「お見合い→結婚式→初夜」
「恋愛→婚前交渉→同棲→結
婚式」の順で「婚前交渉」が

かなり普へん的になってきている。「恋愛→同棲→出産→結婚式」も五人。(京都のヤングビレッジ情報センターの若い女性六百人調査)

(7・31京都)

小学生の家庭科観

男八〇・六%、女九五・八%の子どもたちが家庭科を「役に立つ学科だ」と答え、男では五〇・七%、女では七八・五%が「面白い」とし、特に調理実習は男七六・九%、女八二・九%の支持率。一方、日常生活で食事のしたくに参加しているのは、男七・八%、女二五・四%にとどまり、親に参加を押しとどめられている結果が。全国各地の小学六年生五百八十八人を対象に「家庭科の男女共修をすすめる会」が調査。

(8・10毎日)

結婚相手と知り合ったのは

職場二二・四%、学校一三・二、喫茶店等八・一、見合い八・一、アルバイト先七・七、旅先六・六%。結婚までの期間は一年以内が三二・四%。貸衣裳店の二百七十二人調査で。

(8・12読売)

専門職の母と育児

働く理由は「生活費のため」四四・四%「生活を支える」三三・一%「社会活動する権利と義務」二九・六%「仕事がおもしろい」二六・一%。子どもは保育所が二百七十五人、自宅で世話九十二人、実母か養母に預けに行く二十三人、他家に預ける・勤務先に連れて行くが共に十三人。学童の二一%はカギっ子で、学童保育は一七%。有職婦人クラブの会員四百三十二

人のアンケートで。

(8・15毎日)

初潮と初射精

恥ずかしい、不安などネガティブに受けとるのは男二一・一%、女四八・八%、うれしかったは男七二・七%、女四七・一%。初潮を迎えた娘に母は「自分と同じ女の道を歩むのか」と暗い顔をし、父親は「女らしくせよ」とカセをはめる。月経は月五日としても一生涯で六年にもなるのに。大阪府医学センターの調査で。

(8・19読売)

子どもの教育はどこまで

男児は大学七七・一%、大学院七・九だが、女児は大学三七・四、短大三六・六、高校二一・一。東京・大阪・名古屋の主婦八百七十八人の調査で。

(8・20読売)

男女のお小遣い比べ

中学生三千五百円対二千九百円、高校生九千六百円対九千八百円、大学生二万九千四百円対二万五千二百円、社会人三万九千五百円対三万七千二百円、主婦は一万五千六百円。『ぴあ』のレポートで。

(8・21読売)

日本女性の自殺率世界三位

厚生省の五十三年度人口動態分析で四十一・四十四歳の自殺率が二十一・二十四歳を初めて上回った。青年層は三十年代前半の三分の一に減ったのに中年層が上昇、女性はハンガリー、デンマークに次ぎ世界三位。

(8・28朝日)

変化・風潮

男の子のおしゃれ

小学高学年ともなると、男の子もおしゃれに強い関心を示す。毎日違ったものを着込む、友達とグループで同じものをそろえる、ブランドにやたら詳しいなど、女子顔負けだ。(3・2読売)

主婦の万引

プロ顔負けの手口が増え、スパー側も対策にやっき。生活苦からという者は、まづいない。(3・3読売)

ウーマンリブ・レース

筑波サーキットに総勢八人の女性レーサーが結集、JAF公認のレースが行なわれる。(3・3読売)

保父さんの卵二十七人

東京都立高等保育学院の男性志願者の約七割が不合格だ

だったが、合格者には公務員から二人、会社員から四人の転職組も。(3・8読売)

母乳体験記

東京の開業医が、十五人の母親の育児メモをまとめた小冊子『はじめてお母さんになった友だちへの手紙』を発行。母乳育児を志す母親の心の支えになっている。(3・9朝日)

おばあちゃんの育児教室

大阪でおばあさんのための教室。ベテランに今さらという心配をよそに、五十人が集まり、熱心にメモをとった。(3・12朝日)

結婚そして嫁と姑

相も変わらぬ問題が投稿欄に続々寄せられている。(3・13毎日(女の気持ち))

おばあちゃんの探偵団

板橋区仲町で一年前結団、空き巣撃退に活躍中。(3・13読売)

デパートに女性重役

高島屋の取締役に石原一子さんが内定。(3・14朝・毎・読)

デパート業界に女の商魂

女性重役誕生などで伝統的な女の館、百貨店は女性登用にさらに拍車、東急・大丸・西武・伊勢丹など、軒なみ力を入れていく。六八・四％の女性が「責任が重いほうがやりがいがある」だが、「軽い仕事のほうが気楽」も二九・二％。(3・21読売)

女医の卵、大量進出

筑波大の医学専門学群に女子二十六人が合格、二五％を

占めた。(3・21朝日)

女子サッカー連盟旗揚げ

二十一日、東京で結成。全国的女子チームは約二百。(3・23読売)

女性主役のTVニュース

キャスター、解説者、レポーターはすべて女性という初の試み「6時のサテライト」が、テレビ朝日で始まる。レポーターの一般公募には千三百八人もの応募があった。(3・23朝日)

コンピュター仲間

コンピュターの結婚適合性診断が人気を集めている。本拠を西独に置くアルトマン・システム・インターナショナルが一昨年からまとめた縁組は四百組。成果は好評だが、入会金が、なんと二十四万五千元。(3・25中日)

女が行く、ヒマラヤツアー

ネパール政府の登山制限緩和で、気軽に行けるようになった「トレッキングツアー」が女性に大人気。山男のあこがれの地が女性たちに独占されそうだ。(3・26日経)

女性マラソン全国大会

初の「レディースマラソン全国大会」に百六十八人集合。企画は婦人グループの「神戸マイベース」。

(3・26朝日)

参加する女性たち

手作り保育施設を作った主婦、農業表示を改善させた農婦、予算要求の裏づけに老人福祉の実態調査をしたボランティアなど、女性の社会参加はますます積極的だ。

(4・3—14読売)

防衛大に女子学生なるか

卒業式に出席した大平首相が「オナゴは入れないのかね」とボツリ。以後防衛庁内でホットな議論がかわされているが、決着がつかない。

(4・4朝日)

ふえた女性上位のCM

「お前がいいと言いのなら」とあるブレハブ会社。「二人で仲よくクッキング」と流し台メーカー。

(4・5、8・30読売)

女性の選挙意識の推移

「反戦平和」をうたった二十七年、「政治家の変節」を嘆いた二十八年、が、安保直後から何を叫んでも変わらぬというしつけムードに。「ひととき」にみる意識の変遷。

(4・6朝日)

男はエリートほど「弱い」

主婦会館の結婚クリニックが開所して半年、一番問題なのは一流大学—一流企業コースの男性。一人で来られず母や妻が予約。欲望を自然に発現できなくなった「原発性インポテンツ」が多い。

(4・6毎日)

妻から夫へ「学生交代」

結婚後、物心両面から支えられて大学院修士課程を終えた妻(三二)が、「今度はあなたが勉強する番よ」。夫(三二)は勤めをやめて医学部に転進。

(4・15、6・9朝日)

おしどり新記録

夫堀江謙一氏とともにヨット「マーメイド」で地球縦回り航海をめざし、昨年十二月十八日出発した鈴子夫人(三

九)は十五日、第一難関の魔のホーン岬を無事通過。日本女性初、夫妻だけによる通過は世界初の記録。

(4・16朝日)

助産所りバイバル

お産の大病院集中化の不満がふえているが、都心に助産所が店開き、夫や幼児など家族ぐるみで預かる。

(4・14読売)

サラ金利用三人に一人が女

名古屋弁護士会の「暴利金融被害者救済センター」が相談内容報告。承諾を得ないで保証人を立てるケースも。

(4・25朝日)

窓際族をおびやかす女子軍

西武百貨店では法人外商に大卒女子を起用、リコーは十年後には女子を三五%(現在一五%)にふやすなど女性が

進出。中高年男性をおびやしつゝある。(4・26日経)

高卒女子初任給二十万円

大阪の万代百貨店で。大卒男子と同待遇に。

(4・26日経)

「おわかさんをしのぶ会」

評論家山田わかと運動を共にした友人が故人をしのんで集まった。市川房枝さんが、『あめゆきさんの歌』だけでは、歴史的事実から言っても正しいとは言えない」として旧友たちによる伝記出版を提案し、全員が賛成した。

(4・28毎日)

女子大寮の自由度

昭和女子大など厳格な寮監制度をとるところから門限午前零時のお茶大まである。

(4・29日経)

施設へ預けっ放し

未婚の母が増えている。施設から立派に引きとる母もいるが、初めから手放すつもり的人也多く、預けたまま面会に来ぬ人も。冷い目のしわ寄せが子供に及ぶのを、施設の係員たちは辛い気持ちで見ろ。

(5・3信毎)

「知的女性」に香道ブーム

家庭用電子香炉が出回り、女子大には専門講座。が、道具だけでも百数十万円、こり出すとキリがない。香席は着物の展覧会の感も。

(5・5日経)

女性の犯罪、増加の一途

男の刑法犯は二十九万四千二人、十年前より一万五千人減ったが女性は六万九千人で二万三千人増。特に四十八年以來急増、若年化の傾向。

(5・8読売)

女が親元を離れる時

結婚と同時に親元を離れる人が圧倒的多数の日本で、OL生活五年目ぐらいから、親元を離れて自分の城を築く人が目立ち始めている。この「築城願望」にホクホクなのは不動産会社。「レディーズマンションコーナー」も出現。

(5・8日経)

雑誌は薄くモデルチェンジ雑誌に、薄型、低価格、情報満載型の波が押し寄せて来た。定価二百円代、文章中心でないと売れない。女性誌も併読される傾向にあり、個性化、薄型を迫られている。

(5・12日経)

西武百貨店監査役に女性

三枝佐枝子さん(五八)を登用、非常勤社外重役に。

(5・12読売)

妻や介護者が連帯

身障者を持つ同じ境遇の人們が横のつながりをと、愛知県東海市に「身体障害者の妻と介護者の会」が十三日発足。

(5・12朝日)

大型女性大歓迎

三十年前の平均身長百五十六・四センチ、今は百五十六・八センチ。Lサイズ人口は二七%、Sは八%に。

(5・24読売)

結婚からの脱出

夫の度重なる暴力から、やっと逃れて福祉事務所へかけ込んだ、かえって来たのは「もう一度やり直してごらんなさい」の言葉。夫に寛容すぎる身内や世間に業をにやし女性解放グループに助けを求めて、やっと離婚へというケ

イスもある。

(5・30—6・20読売)

年金改革へ高まる妻の声

離婚すると年金権を失うサラリーマンの妻の年金権をとの声。一方、働く女性の保険料率が男より低いのも問題に。

(5・31日経)

聴力障害の三女性、活躍

名古屋市の半額出資している「名古屋地下鉄振興会社」直営の洋菓子店「チカシン」で、読唇術をマスターした三人の女性が力を合わせて店を切り回し盛況。「仕事は、私の生きがい。多くの障害者のためにもがんばりたい」と。

(5・31朝日)

四十歳は女の折り返し点

四十はまだまだ女盛りの時代に。子育てから解放され、自分のための人生へ。世界的

に活躍する人も。

(6・4日経)

大繁盛、子ども一〇番

開設一か月の「こども一〇番」に連日五十件近い相談。「赤ちゃん一〇番」と同じ会社が設けたものだが、「やる気はどうしたら出ますか」という質問が年齢を問わずに多い。やる気のない子、と言われ続けている生活反映か。

(6・4読売)

主婦も自費出版時代

自費出版のすそ野が広がります主婦の本も続出。

(6・9日経)

登録して見合い結婚なんて

過疎化の激しい京都府日吉町で、結婚難解消めざして、「花嫁・花婿銀行」をスタートさせて満二年。関係者の熱意と努力にもかかわらず、縁

談成立はみないまま、開店休業。

(6・9京都)

喫茶専門学校さま変わり

プロを目指す人専用だったはずが昨今では、趣味として習う人が増えて来た。六割が主婦やOL。

(6・10毎日)

ふえる「幼児一時預かり」

三世代同居が多く保守的な京都にも、四、五年前から、目立ちはじめる。無認可保育所が月ぎめ保育のかたわら時間預りをしているケースも。

(6・11京都)

母親算数教室

塾通いさせている子の苦勞を知れど、武蔵野市のある塾で開講。受講料は無料。

(6・14読売)

まだ頼られている父親

父の日の標語に「どこの

人、寝に来るだけが僕の父」(二三歳)があり、「毎日が父の日」だった戦前の父は大暴落。がまだ精神的支柱として子どもたちは頼りにしている。

(6・16読売)

女性プロジェクトチーム

百貨店の企画・販売ばかりでなく新日鉄や富士通の資料誌編集も女性チームが活躍。

(6・16日経)

百円化粧品姿消す

「ちふれ」も最低百五十円に。

(6・16日経)

日本女性学会が発足

十八日、渥美育子・駒尺喜美氏ら十五人の発起で。

(6・19—23各紙)

母を問う

母とは何だろう。戦前型献身は息苦しい。女を生ききる

主張はわがままか。母のあり方をシリーズで問う。

(6・25—7・5、7・30—

8・26中日)

女の寿命七十八・三三歳に

アイスランド・スウェーデ

ン・オランダに次ぎ日本は世界四位、男は七十二・九七歳で二位。

(6・27日経)

「母親免許証」が必要では

小児科来院者中ほんとうの病人は四%、母親の再教育が必要と日本ブライマリ・ケア学会で問題に。

(6・27日経)

子どものしつけ相談急上昇

都児童センターの電話相談は昨年だけで六千三百件、東京少年鑑別所の相談件数も前年の三倍になった。

(6・29読売)

サミット追う女性報道陣

英国・カナダから女性首脳が来日、各国報道陣にも女性特派員が目立つ。

(6・29読売)

女性とビール

サントリーが、この一年間にビールを飲んだ経験を調べたところ、三人に二人が「飲んだ」と回答。

(6・30読売)

中高生のヘアスタイル規制

九割以上が実施。禁制は男子のロング、女子のバーマ、ポイコット騒ぎも続く。

(6・30日経)

女性バイク事故が急増

愛知県東海署の今年上半年事故状況によると、女性バイク事故率が昨年三%から七・九%に急増している。今後事

故防止のため、機会をとらえバイク講習会を開く予定。

(7・3朝日)

女子大学の住居学科

家政学部の中に住居学科を設けている大学が全国に五つある。岐阜女子大では、住宅の歴史、設計・管理から、生活マナー・隣人とのコミュニケーションまで学ぶ。ユニークなだけに、全国から学生が集まり、職業意識も高いが業界は男子優位、十分に腕を振えないのが悩み。

(7・8朝日)

母子電話に百十九件の相談

愛知県母子福祉連合会の「母子電話」開設。母子家庭の厳しさを反映して、一か月で百十九件。(7・8朝日)

全日本女子柔道選手権大会

世界の趨勢にあわてて開いた女子大会も今年で二回目。予選を含めると参加者は百七十九人で、昨年より四割増。(7・11読売)

オールド未亡人の解放感

販売作戦、主婦に焦点
夫の背広や車の購入も主婦
未亡人仲間が集まった。期

せずして悲しみより解放感が大きいという話になった。いずれも夫が財産を残してくれたお蔭ではあったが。

(7・13 信毎(女の机))

ダイバーの三割は女性

女性が急増し、ウェット・スーツもカラフルに。

(7・15 日経)

今年から女子マラソン大会

十一月中旬陸連主催で。

(7・15 日経)

広がる母子読書

表紙だけチラッと見て、「おまけつき」の雑誌を買い与える母が多い。学習テキスト、しつけ話が盛り込まれ、読書ぎらいがふえるのも当たり前。「一日十分でも親子で良い本を」との日本子ども本文化研究会は呼びかけている。

(7・16 中日)

少女ママの中絶増加

五十三年の未成年者中絶は前年比一三%増の一万五千二百三十二件。全体では三・六%減なのに。(7・22 日経)

目立つ主婦のルール無視

スポーツ・運転・おけいこなどに主婦の進出が目立つがエゴイストも多い。過渡的現象か、さらに増えるか……。

(7・23 日経)

女性専用ホテルうちそと

女性専用ホテルはどこも満員、親も安心するようだが、デートして深夜帰館も少なくない。夫婦ゲンカで駆け込む人も。

(7・23 日経)

パートに出たい場合は?

道立札幌内職センター内に婦人パート専門の紹介窓口ができた。希望条件を書き登録

すればよく、常時百六、七十人が登録されているが、家事と両立できる時間帯を希望する主婦が圧倒的に多い反面、求人は絶対数が少なく臨時雇いの勤務体制を望むところが多い。(7・25 読売北海道)

女性学講座各大学に

東大・一橋大・お茶大・上智大・和光大・東洋大・東京女子大・埼玉大・東京女子医大・南山短期大学に。

(7・26 読売)

商船大も門戸開放

百年の伝統にピリオド、五十五年度から女人禁制をやめ、高級船員を養成する。

(7・26 読売・日経)

模索つづく「母親ドラマ」

おふくろ礼賛のテレビ番組が、すっかり姿を消した。

(7・30 中日)

キセルの大半は若い女性

国鉄の特別検札で発見した九割は若年者、その七割が女。(7・30 読売)

か弱い男と強い女の歌

さだまさしのヒット曲「閑白宣言」は、型どおりの強さにこだわった歌で、今の男の弱さそのものの現れである。これに対する井上真由美の「悪女のすすめ」は、新しい強い女の歌。時代を変える歌。(8・2 中日)

女性の保険料安くなります

簡易保険の料率が九月一日から男女別。平均寿命の長い女性は男より安くなる。

(8・3 朝日)

夫選びは学歴より趣味重視

一流大学卒は無趣味で出世競争型、夫は趣味豊かな高卒

がいいと、最近の社内結婚では高卒が断然リード。

(8・3日経)

断然多い母からの悩み

札幌の子ども相談センターが開設されて一か月。全体の八割が母親からの電話で相談員の一人は「子どもものしつけの問題など母親が一人で迷っているようです。オヤジたちは子どもや妻への対応をもっと密にする必要がある」と語る。(8・4読売北海道)

活躍する企業内家政学士

HEB(ホーム・エコノミスト・イン・ビジネス)はアメリカでは六十年の歴史、三千百人が活躍しているが日本では昭和四十年代後半から二十代で経験三年未満が過半数だが成長株になりそう。

(8・7読売)

お盆帰省ラッシュの裏で

時には友人まで連れてきて二十人にふくれ上がることもある。迎える嫁は献立でと帰りに持たせる土産が何よりの悩み。八月の家計費は倍になるのが常。「いなかへの土産はお金のほうが助かる」「セルフサービスを」などの声も。「跡とりの權威が絶対的だった頃は兄弟が客としてふんぞりかえることなどなかった、核家族になれば他人の家にずかずか入り込むこともない、過渡期の悲劇」と評論家。(8・7信毎)

女ひとりの向老期

親を養ない独身が続けてきた女たちは、男より若いうちに定年を迎えるが、再就職はほとんど不可で大きな問題。

(8・8—10信毎)

“母原病”が増えている

カゼをひく子、ゼンソク児、自閉症などの六〇％は母が子に密着しすぎているからと、医師も指摘。

(8・10—17読売)

「離婚講座」東京に登場

作家帯正子さん、弁護士金住典子さんらを講師に開講。

(8・15読売)

主婦の「地図の旅」グループ

時刻表や地図で「想像の旅」を楽しむ主婦グループが大阪に。企画力や多面的に物を見る目ができると人気。

(8・20読売)

たこ揚げで女性世界新記録

東京の電話交換手(二九)が連ダコ三百四十七枚の世界新を樹立。(8・20朝日)

遠泳世界最長記録を樹立

ニューヨークの女性(三〇)が百四十三キロを二十七時間三十八分で泳破。

(8・21読売)

赤ちゃん一〇番福岡にも

広島に次いでスタート。

(8・21読売)

姿消した「花の車掌」

紺の制服と高給で女性のあこがれの職業だった車掌が激減、昭和四十年には全国で六万人だったが二千三百九十九人に。(8・21朝日)

女仏師志願

京都・山科の九条山の京仏師・松久宗琳さんの工房、京都仏像彫刻研究所は女性弟子九人。宗琳さんは「男とは違うやさしさが出ます。出産・育児で中断しても、必ず戻っ

てこられます」と。

(8・22読売)

共働きオヤジの演劇ヒット

『看護婦のオヤジがんばる』が関西でヒット。来春には映画にもなる。(8・22朝日)

海上保安学校に女性十一人

十九—二十四歳、OL六人、家事手伝い四人、短大生一人。七十九人の志願者から、七・二倍の率で合格(男は四・五倍)。

(8・24毎日)

「関白宣言」に賛成圧倒的

さだまさしの歌に「女性侮辱」の投書が出たところ三百通も「男らしい」と反論が殺到。

(8・24読売)

男と女の馬拉ソン

男女ベアの条件つき馬拉ソン大会が十月に多摩湖畔で。

(8・25読売)

ふえる家庭崩壊

五十三年三月現在で乳児院は全国に百二十五か所、三千四百十六人、養護施設は五百三十か所、三万二千八百八十四人が入所している。家庭不和による離別・蒸発が主因だ。父子家庭も全国で十万世帯。

(8・27毎日)

女の出版ブーム

女ひとりの出版社が日本にできたが、カナダでも著者、編集者すべて女の読み物シリーズが大ヒット。男のものとされてきた出版界へも進出中。

(8・27読売)

ふえた「離婚を考える本」

『離婚は怖くない』『離婚します』『ひとりでも生きられる』など、考える本が続出。

(8・30信毎)

強盗を背負い投げた奥さん

奈良のガソリンスタンドで留守番中の主婦(四七)が強盗を投げ飛ばし二百五十万円を奪い返し、ゴルフクラブでなぐりつけ追い払った。主婦は体重八十キロの女丈夫。

(8・30読売)

教育・保育

「保育のあり方」答申

公費負担では追いつかないため、保育所の人件費は親の負担に。企業にも受益者として費用負担さす方向も考えうると神奈川県児童福祉審議会。

(4・25日経)

ベビーホテルの規制検討

一泊平均一万円のベビーホ

テルが急増しているが、厚生省は「母子保健制度基本問題検討委員会」を六月中旬発足させ、経営主体・人員・保育

室の状況・看護婦の有無などを調査する。(6・2日経)

幼稚園の時間延長

幼保一元化をうたう厚生省に文部省は猛反対しているが東京・千代田区では試験的に三園で二時間時間延長する。商工業地域で帰園後も遊び場がないため。(6・9読売)

幼保一元化教育

就学前のすべての子供が、同じ施設で全面的な発達をとげるように「幼稚園と保育所の一元化」を目指して、京都府下、八木町幼児学園が今春スタート。(7・4京都)

養護施設は飽和状態

四月一日現在、大阪市内養

護施設に収容されている子どもは千四百七十二人。乳児院も百七十六人。同じ人口規模をもつ横浜に比べ三倍近い。やむを得ず他府県の施設に収容される子ども。

(7・18朝日)

町の子は皆一緒

一元化保育を推進する秋田県飯田川町立若竹幼児教育センターは、かつては親の対立もあった幼稚園と保育園を統合。町の子全員が同じカリキュラムで、町民の評判もよい。

(7・24読売)

幼稚園も全入に

文部省は来年度以降の重点施策として「幼児期教育」の充実を掲げ、当面、情緒不安定・知恵遅れ・乱暴癖などの問題児の就園を促進、特殊学級のものを設ける考えを明らかにした。(8・19読売)

母子の対話は乳児から

赤ちゃんにとって最も大事なものは親子関係だが、親の語りかけに生後三日で体動(エントレインメント)反応を示すことが明らかになった。

(8・20朝日)

幼稚園にとって問題児とは

五歳児の就園率は六四%、保育所児を加えると九〇%の時代だが、文部省の今回の方針は一種の「困り込み」。親や先生の言いなりになる子こそむしろ問題児では。

(8・21読売・社説)

健康

誤った先入観

近代医学も余り科学的な検

討をせずに、女性はあまり激しい運動をせぬほうが良いという常識がスポーツ界を支配していたようだ、と東大教授の黒田善雄氏(スポーツ医学)。

(3・3読売)

危ないコンタクトレンズ

安易な使用、誤用は、角膜障害や視力低下のもと、利用者教育を、と厚生省通達。

(3・4読売)

シミ、黒皮症の苦情殺到

日本消費者連盟が「化粧品一一九番」を三日間特設。全国から三百十八件の訴え。黒皮症四十六人の他、「皮がむけた」「毛が抜けた」というひどい例も。ほとんどのメーカーの製品に苦情、売り上げにはば比例という。

(3・4読売)

性差

差は本来にあるのか。科学的究明はまだだ。東大教授肥田野直氏によれば「①男子の方が女子に比べ、上下のばらつきが大きく女子は平均している②女子のほうが早熟だが、最終的にはいずれが上かはわからない」の二つだけが定説になっているに過ぎない」とのこと。

(3・6中日)

子宮完全摘出後に出産

ニュージーランドの婦人が女兒を出産。世界初の例。

(5・17読売)

出産に夫の立ち合いを

互いの感動が育児にプラスすると英国学士院小児科部門会長ジョーリー博士は強調。

(6・19信毎)

東南アジアでの感染が激増

大阪府と同医師会がまとめ

た性病実態調査によると、昨年の十、十一月の調査期間中の患者報告数は二千四十六人。男性の感染源を見ると、その八割強が「かりそめの人」(コールガール等)。その中で、外国での感染が四百五十六人と約二割。韓国、台湾、次いでフィリピン、タイの順。(6・23朝日)

意外と多い「ニセ梅毒」

若い頃に梅毒にかかり、とくに治療すみの人だけではなく、先天性梅毒の場合も陽性となる。だが、他に「陽性」と出た人の二〇%近くが、慢性リ्यूマチや肝炎、そして覚せい剤(ヒロポン)常用から出る反応。とにかく陽性と出たら皮膚科の専門医で詳しい検査を。(6・28朝日)

母乳安全宣言

大阪府公害健康調査専門委員会PCB小委員会は、府下の母子を対象に四十七年以來PCB汚染調査を続けているが、「母乳と血液中のPCB濃度は横ばいで、子どもの健康にも特に異常がないので母乳育児をしても差し支えない」と発表。全面禁止から十七年。いったん体内に入ったPCBが体外に出にくいことを示している。(7・26京都)

厚生省試験管ベビー研究へ

人工受精児の追跡と試験管ベビーの基礎研究を三年計画で実施する。(7・30日経)

注射一本で男性避妊

中国は「輸精管注射方式」二万人の実験で不妊率九〇%と発表。(8・20朝日)

本

『子どもの文化人類学』

ヘアー・インディアンを通じて子育て論。原ひろ子著、晶文社刊。(3・26読売)

『女が職場を去る日』

働く妻のうめき綴る。沖藤典子著、新潮社刊。(4・16読売)

『女性解放思想史』

水田珠枝著、筑摩書房刊。(4・16読売)

『女性と福祉』パンフ

大阪市の国際婦人年北区の会発行。(4・20朝日)

『上を向いて』

園児を抱えながら働く母親の悩みや苦勞話。向上社保育園(京都)の父母の会発刊。(4・21京都)

『主婦の天気図』

木村治美の主婦論的エッセイ集。文芸春秋社刊。(3・26朝日)

『女の自由と愛』

主婦の職場進出に反対。松田道雄著、岩波書店刊。(3・19毎日)

『女のなかのアフリカ』

日本企業の進出を告発。北沢洋子著、朝日新聞社刊。(3・5読売)

『夜のティー・パーティー』

エッセー集。津島佑子著、人文書院刊。(3・5毎日)

『子どもは未来である』

は乳動物としての人間の育
児理論書。小林登著、医学情
報サービス社刊。

(4・28朝日)

『知覧特攻基地』

基地で働いた勤労動員学生
の思い出。赤羽礼子他著、文
和書房刊。(4・30朝日)

『日本人の名前』

由来を通じた女性史。寿岳
章子著、大修館書店刊。

(5・14読売)

『ハロー・ベビー』

出産育児の体験集。ジ
ン・マゾーロ編、桐島洋子
訳、CBSソニー出版刊。

(5・15朝日)

『つい昨日の女たち』

農村女性をルポ。川田文子

著、冬樹社刊。

(5・23朝日)

『老年痴呆症とのたたかい』

こうこつの舅をみとった主
婦石川裕子さん(五三)が自
費出版した詩集。

(5・23朝日)

『最後の植民地』

女性差別も男たちの植民地
主義、その終焉を告げる書。
ブノワット・グル著、有吉佐
和子他訳、新潮社刊。

(5・28読売)

『愛が裁かれるとき』

離婚についてのケーススタ
ディ。澤地久枝著、文芸春秋
社刊。(5・28読売)

『回想の森』

松田解子の回想録。新日本
出版社刊。(5・28毎日)

『女の才能が育つ条件』

女性十四人へのインタビュ
ー。俵萌子著、鎌倉書房刊。

(6・10読売)

『おてんば歳時記』

明治の山ノ手風俗の聞き書
き。酒巻寿著、草思社刊。

(6・13朝日)

『わが道——こころの出会い』

藤田たき著、ドメス出版
刊。(6・20読売)

『だいこんの花』

随想集。市川房枝著、新宿
書房刊。(6・20読売)

『山川菊栄の航跡』

外崎光広・岡部雅子編、ド
メス出版刊。(6・20読売)

『妻のこころ——私の歩んだ道』

羽仁説子著、岩波新書。

(6・20読売)

『現代ヤングレディ考』

若い女性のデータ集。菅原
真理子著、中央法規出版刊。

(6・11日経)

『たのしい老年を——』

主婦たちの話しあい』
「老年を考える会」が自費出
版。(6・22毎日)

『被抑圧者の教育学』

自己解放の政治行動論。パ
ウロ・フレイレ著、亜紀書房
刊。(6・25読売)

『女性の自己実現』

自己の内面的成熟を説く。
玉谷直美著、女子パウロ会
刊。(7・8読売)

『宇多野小史』

「手づくりの地域史」。小野
恵美子著(入手の間合せは小

野さん宅・電話075・461・0631へ。

(7・8京都、7・17朝日)

『中年女性学』

袖井孝子・直井道子編、垣内出版刊。(7・15日経)

『閻魔と女神』

佐藤欣子著、PHP研究所刊。(7・15日経)

『婦人白書』

四回目を迎える民間白書。七九年版は「親子関係——家庭と地域」を特集。日本婦人団体連合会編。草土文化社刊。(7・17毎日)

『現代の家庭論』

奈良林祥著、日本基督教団出版局刊。(7・22読売)

『離婚は怖くない』

俵萌子編、「国際婦人年を

きっかけとして行動を起こす女たちの会」離婚問題分科会のしごと。読売新聞社刊。

(7・29読売)

『離婚した女の目』

広島市の「児童扶養手当を十八歳に引上げる会」がアンケート調査をもとにまとめたもの。

(8・9朝日)

『おんなの男性解剖学』

作家・女優など十数氏のご高説を集めたもの。吉田和子編、講談社刊。

(8・12読売)

『近代日本婦人教育史』

戦前の体制的婦人運動史。千野陽一著、ドメス出版刊。

(8・13毎日)

『もと居た所』アルゴノオト——あおいの日記』

とびおり自殺をした十七歳

の少女の作品集と手記。井亀あおい著、ともに葦書房刊。

(8・15京都)

『ロンドンからのレポート』

BBCで放送した「イギリスの女性たち」を本に。秋島百合子著、サイマル出版会刊。

(8・20読売)

人

女の意地十年

高松港の沖四キロ、女木島に身障児とその家族が実費で泊れる「憩いの家」(六月オーブン)を建てた内山林子さん(四七)はタクシーの運転手。生まれながらに指のない女兒を出産、十年前の夢を完成。

(3・3読売)

陽気で分別ある女性紹介

ビデオ・プロデューサーの渡辺晴子さん(四一)。HKW(陽気で分別ある女性の略)ビデオ研修所を主宰しながら、日本のタフでチャームな女性たちを撮り、海外へも紹介する。

(3・4読売)

住民運動の結実見たい

都内住民運動の「草分け」「多摩川の自然を守る会」を支える主婦、横山理子さん(五一)。河川敷の自然をグラウンドや芝地にしたがる行政に反対。水害で家を流されてもなお止まぬ運動への熱意。

(3・5朝日)

フラメンコ・ダンサー

スペインに渡り実力一本で食えるまでの十七年間の生活記録『女ひとりスペインに生

きる』を出版した岡田まさみさん。「外人への風当たり強いけどクヨクヨしないタチだから」と。(3・5読売)

「アジアの女たちの会」

会の連絡役を務める五島昌子さん(四〇)。母は社会党婦人局長の渡辺道子さん。幼いころから虐げられた女性をまのあたりにして育った。「日本女性も、戦争の加害者だったことを、認識しなきゃ」。(3・9朝日)

三十四年ぶりの卒業証書

二十年三月、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校を卒業した人や、当時の在校生らで組織した想恩樹会会長の仲吉きよ子さん。「やっと卒業証書を手にしたこの感激は、言葉では言い表せません」と。(3・11読売)

オペラ「葵上」で受賞

舞台芸術創作奨励特別賞をオペラの部で受賞した脚本家鈴木松子さん(七七)。この道三十年で、現役では最長老の一人。(3・11朝日)

他人の子に母の愛

久里浜少年院と横須賀刑務所の篤志面接委員として奉仕し、四十一年から自宅に私立逗子児童相談所を開設した地主愛さん。(3・11読売)

銀座で靴磨き三十年

焼け跡で戦災孤児を二十人も育てた福井妙子さん(六四)。病床に伏す彼女を、かつての息子たちや、昔を知る警察官たちが励ましている。三十余年書き続けた日記を、一冊の本にまとめるつもりだ。(3・13朝日)

「アパート」で木村伊兵衛賞

石内都さん(三一)。写真歴四年の新人ながら、「男性には撮れないドキュメント」と好評。(3・17朝日)

岩波ホールの支配人

埋もれた名画の上映に人生をかける高野悦子さん。五年前に川喜多かしこさんと共に「エキブ・ド・シネマ」を組織、好成績をおさめている。(3・17経)

「被爆者相談所」を開設

自身も被爆者の花山典子さん(五一)。福岡県飯塚市に相談所を一人で開設。以後ボランティアとして八年。(3・21西日本)

婦長さん、晴れの卒業

長浜房子さん(四二)。夜勤の合間をぬって、和光大学

人間学科を卒業。大学三年に編入以来二年間、一日おきに夜間の看護婦と学生を繰り返す日々。「患者の心を学びたくて」。(3・25朝日)

現代俳句女流賞受賞

宮崎市の神尾久美子さん(五六)は三十年の句歴をもつ主婦。(3・26西日本)

脳性まひ闘病体験を生かす

福岡市の池辺絢子さん(三三)は脳性まひにより八年間訓練をうけた経験を生かし心理リハビリテーショントレーナーの資格を取得して自立。(4・4西日本)

人間国宝

芸能部門で地唄の菊原初子さん(八〇)が認定。(4・4読売)

第二のキュリー夫人

七七年度ノーベル医学・生理学賞を受けたR・S・ヤールウさん(五七)。七日、東京で開催される日本医学会総会で特別講演を。一日二回出勤し主婦(二児の母)と研究を両立。(4・5読売)

菊田演劇賞

大賞に秋元松代さん(「近松心中物語」の脚本)、演劇賞に淀かおるさん(「屋根の上のヴァイオリン弾き」「王様と私」の演技)が受賞。(4・6読売)

新しいものへの挑戦

二十年勤務した日本交通公社を退社し、旅行アドバイザーとして活躍する久保田弘子さん(四三)。「女性が不幸な社会は男性も必ず不幸」と。

(4・8読売)

新人教育

福岡県水巻町の清水良子さん(四六)は北九州の企業の総務課長として八年前から後輩女子社員の指導を。「仕事を男性と同等にしたいうえで女性らしさを発揮するように」と。(4・11西日本)

礼服会社の社長

東京ソワール社長児島絹子さん。小さな洋装店から黒のフォーマルウェアの最大手にな。(4・15日経)

夫婦そろって県立高校長

四月の愛知県人事異動で高浜高の校長になった青山瑞枝さん(五五)。赤ん坊を背負って買い物に行ったこともある夫も校長。「田舎のこと、そこまでして働かなくても、ずい分いわれました」。(4・13中日)

国際社会の看護婦

神奈川県相模野病院産科看護婦の中井礼子さん(四一)。手がけてきた赤ちゃんは何千人。七六年から二年間国際協力事業団の青年海外協力隊員としてカトマンズの病院で指導活動。(4・15読売)

東京都婦人青少年部長

東京都行動計画に基づく施策実現第一号の婦人情報センタ―(日比谷図書館内)をつくった金平輝子さん。「女性自分が精いっぱい出し切って生きていける条件づくりが、私の仕事」。(4・15朝日)

S・ソング女史来日

作家・批評家・映画監督・一昔前の反戦知識人、コロンビア大学で哲学を教えたこともある。「フェミニスト運動は新しいことではないが、新

しいエネルギーを持っている。一進一退はあるが、前進」。(4・21毎日)

アザや傷あとの相談

カバーマークオリリー社で、悩む人たちの相談に当たる川崎佳子さん(四一)。「アザを持って生まれたからこそ、こんなに大勢の人たちと知り合って豊かな人生が送れる」と。(4・22読売)

映画『スモンの証言』公開

「薬害防止のための京都国際会議」の初日、予定外の映画が上映された。「スモン患者の姿さえ見たことのない世界的権威たちに映像で訴えたかった」と夫と二人で製作したビヤネール・多美子さん(四四)。(4・22毎日)

技能五輪「配管」女子一位

岩間美千代さん(二〇)。

母親に「女のダンブ運転手だっている時代よ」と勧められ家業を継いだ。「技術を身につけておけば、結婚相手に配管の人を押しつけられる心配なく好きな人を選べます」。

(4・25毎日)

心身障害児の家を作った

心身障害児とその親たちで構成する「歩みの会」は四年前、宇佐市に『みんなの家』を作った。発起人の寄村仁子さん(三六)は、六年前までは、中津市児童相談所勤務。「行政の中にある限界を痛感して、将来は専門の訓練や、義務教育卒業者の生活指導もやりたい」。

(4・25西日本)

実力派女性重役

取締役昇格する石原一子
高島屋東京支店次長は「消費者の声を代表してメーカーに

どんどん注文つけたい。女だけの百貨店を経営するのが夢」と。
(4・28日経)

春の叙動

老人たちの世話を一手に
榎本フサさん(五七)。

ろう教育に半生ささげる
氏家シズさん(七七)。

(4・29朝日)

フェミニズムの信奉者

アメリカン・センターの
アートディレクターの道下匡子
さん(三七)は、ライター、
フィルム作家としても活躍。

「自分に正直に生きるのが好き。男に期待される性ではなく、主体性を持つ性にならなくては」と。
(5・6読売)

老年を考える会を提唱

岡上マチ子さん(四八)。
宮崎市で「老人の家庭看護教室」初の開催に五年がかりで

努力。「老後を個人的な問題に閉じこめず、上からの福祉行政でなく、地域に開かれた人間関係として市民レベルのボランティア活動を」。

(5・9西日本)

日本児童文学者協会賞受賞

『いないいないばあ』で受賞した神沢利子さん(五五)。二年前には文芸家協会賞も。結核の病床で見失ったものを取り戻そうと原稿用紙に向かった。
(5・11読売)

女子教育にかける

大分県立工業高校教諭で全国高校女子教育問題研究会会長、大分県労評婦人協議会議長の仁木ふみ子さん(五四)。「女生徒を自立した人間になるよう教育するためには労働教育が必要」と。

(5・13読売)

無名でない

岩波映画社で記録映画監督を続ける時枝俊江さん。無名に徹して、庶民の同伴者としてカメラを回す。敗戦直後の東女大で初のストライキを指導したこともある。今春、映画個展を開いた。

(5・14朝日)

国東の石仏保護に取り組む

大分の国東町歴史資料館学芸員の金田信子さん(三三)。石仏や伝統行事の保護の意義を広めるため、町民全員に百円募金を呼びかけ。

(5・16西日本)

愛知県警に女性機動小隊長

加藤伊久子さん(三二)。警視庁に次いで全国二番目の発足。

(5・17朝日)

ナイチンゲール記章

飯塚スズさん(七二)と小林清子さん(六五)が受賞。日本人受賞者は六十五人に。

(5・18日経)

並行輸入業界の最前線で

総合貿易商社輸出入サービ
スセンター専務で営業部門の
総括責任者である金子瑛さ
ん。並行輸入業界で、達者な
英語とカンのおかげで男性を
しのぐ仕事ぶり。「若い女性に
とんとん続いてもらいたい」
と。

(5・19日経)

年金相談のベテラン

東京厚生年金会館厚生年金
相談担当支配人の武田満佐子
さん(六〇)は、来年十月、
三十八年に及ぶサラリーウー
マンの生活を終える。

(5・20読売)

日本でただ一人の女ウ匠

赤星澄子さん(四〇)。福

岡県原鶴温泉で、夫のこぐウ
舟に乗り、ウ飼いの手綱を握
っている。(5・26西日本)

古文書生かし洗たく液

海草・ゴマなどを使い、ミ
シクや絹も色つや落とさず洗
い上げる古館富子さん(七
六・淡路島在住)。土蔵の古
文書を基につくりあげた「富
有液」で今は洗たくのプロ。

(6・3読売)

力仕事でもまけぬ

ファッションカメラマン久
留幸子さん。「ナツコの夏」
でおなじみの売れっこだ。
「男が百やるなら私は二百と
ファイトを燃やした。肉体だ
って男と大差ないと思う」
と。

(6・5毎日)

財団事業の世話一手に

トヨタ財団のプログラム・
オフィサー(助成主査) 国際

部門を担当する岩本一恵さ
ん。各国からの研究費助成申
請の審査の事前調査を一手
に。

(6・9日経)

婦人相談員第一号

二十二年のキャリアを持つ
兼松左知子さん(五二)。「シ
ョー会場で出産した高校生
親に連絡しても本気にしな
かった。行き倒れた三十女、調
べてみると中学時代の集団暴
行がきっかけでアル中、売春
へ。女性の苦しみはすべて女
の性にかかわっている」と新
宿区の相談員として活躍中。

(6・10読売)

青鳥会「ヘレン・ケラー賞」

ろう教育三十六年の楡井千
鶴子さん(五五)が受賞。

(6・13朝日)

病院ボランティア

岡千恵子さん(四〇)。名

古屋第一赤十字病院で活躍す
るグループの代表。指導者不
足、病院職員に理解されぬ悩
みも。

(6・14朝日)

現代青緒の旗手

女性史研究家のもろさわよ
うこさん(五四)は「文字社
会になると男の頭が、女の感
性に勝ってしまった。男が作
り上げてきた社会が、何と冷
たくゆがんできてしまったこ
とか。感性豊かな女の復権が
必要」と訴える。

(6・14読売)

テレビ・図鑑すれ

東京の私立白金幼稚園の園
長海卓子さん(七〇)。知識
先行で感動の少ない現代っ子
を憂う。「労働という『栄養』
も足りていませんね」と。

(6・17読売)

産業老年学研究の先頭

岡千恵子さん(四〇)。名

『産業ジェントロジー（老年学）』（五十一年）の著者、松山美保子さん（元余暇開発センター主任研究員）。『老人と職業』という、福祉にお金がかかるからという次元の話になるが、生きがいの観点から見なくては」と。

（6・23日経）

欧米なみの秘書

日本秘書協会から、ベストセクレタリーに選ばれた野口芳江さん。上司が他社に転身した際、給与大幅ダウンにもかかわらず進んでついて行ったプロ意識が評価された。

（6・23毎日）

教育ママから闘士へ

岩瀬房子さん（五七）が住民運動を始めたキッカケは長女の大学紛争。四十六年、付近（北区）のボウリング場建

設反対運動の中心となって活躍、五十一年「日中友好婦人の翼」で訪中、現在三里塚農村の無農薬野菜購入の「いも会」会員。「主婦こそが、地域を変えてゆける」と。

（6・24読売）

マイクで拾う庶民の声

ラジオ・ディレクター、辻和子さん（五二）。書くことはできなくても、しゃべるのなら、という庶民の声を拾い続けている。「放送を通じて女の歴史の手渡しをした」と。

（6・27西日本）

古信楽の美を追う

十八歳から滋賀県で陶器絵付け工として働き、乾山・染め付けを学び、日本クラフトデザイン展などに数多く入賞している陶芸家の神山清子さん（四三）。夫の裏切りを乗り越え、古信楽に現代の造

形を追求する。

（7・1読売）

翔んでる十六歳

長崎の女高生、久米薫さん（一六）。来年八月のバイロットの国家試験めざし訓練中。バスすれば我が国航空史上最年少の女性パイロット。周囲は「絶対大丈夫」と太鼓判。

（7・2西日本）

女性花火師

佐賀市の木塚恵子さん（四五）。この道二十五年、嫁いだ先が百年続く花火師の家だった。「夫にできることなら私にも」。数少ない女性花火師の第一人者だ。

（7・3読売）

言語治療のバイオニア

横浜国大教授兼東京都老人総合研究所言語聴覚研究室勤務、日本聴能言語士協会会長

の笹沼澄子さん（五〇）。『失語症とその治療』『失語症と言語治療』などを出版、「日本は治療専門家の教育がひどく遅れている」と。

（7・8読売）

“女性学”の確立を訴える

「福岡・女性と職業研究会」世話人であり、福岡教育大助教授、高木葉子さん（四六）。「男性主体に作られた文化・学問を女性の視点で問い直す“女性学”を確立し、広めたい」。（7・11西日本）

デパート渉外の先兵に

女性には不向きな分野とされるデパートの出店計画にゼロから携わり、開店後も地元とのかけ橋をつとめる高島屋津田沼店渉外担当部長の小熊操さん。「相手が話を切りあげない限り、決して引き揚げない」と。（7・14日経）

初の女性きゅう務員誕生

伊藤淑さん（一八）は先月、きゅう務員資格試験に見事合格、中央競馬会初の女性きゅう務員に。将来は、調教師になるのが夢。

（7・15京都）

職失った交流の家の女主人

奈良市郊外にある、ハンセン病回復者の宿泊施設「交流（むすび）の家」の女主人・飯河梨貴（りき）さん（六四）は、六月二十六日付朝日新聞に「交流の家」が紹介されたことから、奈良のホテルをクビになった。

（7・19朝日）

エジプトの実力派

カイロ放送からNHK国際局のアナウンサーとして出向中のサーデイーカ・ハヤティさん（三五）。「日本女性を意

け者とは言わないが、幸せずるのではないかと。」

（7・21毎日）

フィリピン現代小説を翻訳

タガログ語で書かれたフィリピン現代小説「フィリピン短編小説珠玉選」を日本で初めて出版した寺見さん（マニラ在住、主婦）。インテリ層の生活とは異なった、現実のフィリピン民衆の姿を表現。

（7・21経）

欧州映画紹介に情熱

川喜多和子さん（三九）。「家族の肖像」「歌う女歌わないう女」を日本に紹介し注目を浴びている。一連の大島渚作品を海外に出して話題を呼んだ。伊丹十三氏との結婚を解消して、現在、戸籍上他人の夫と共同で仕事に取り組む。

（7・22読売）

『性の深層』を翻訳

ドイツのアリス・シュヴァルツァーの著書を留学中に現地で見、ぜひ日本女性にもと翻訳した寺崎あきこさん（三六）。「抑圧を抑圧と感じる意識を育て合うために、届けるべきところにとどけ、多くの人たちに読んで欲しい。」

（7・25信毎）

戦後女性史の証人

五人の子を育てながら、日雇いの肉体労働に従事して来た菅原絹枝さん（六五）は、第一回日本母親大会から欠かさず出席。スイスの世界母親大会にも参加した。「私にできることがある間は、続けていきたい」と。

（7・30読売）

燃え尽きた「青鞥」の情熱

『青鞥』創刊メンバー五人の

うちの一人、藤浪（旧姓物集）和子さんが老人ホームで静かに九十歳の生涯を閉じた。発禁問題で警官が家を訪れ、青鞥への参加が父（東大教授、国文学者）に知れ、激しい叱責を受け退会したというが、らいてうとの連絡は取り続けていたようだ。

（8・1中日）

モヤモヤ病解消に主婦講座

モヤモヤ病解消のためにと呼びかけた主婦講座に四百人もの主婦が集まってきたのは二年前。主催者側の一人、菅原弘子さん（三五）は「主婦同士で話し合いながら自分の道をみつけない」と話す。九月から三期の講座を開く。

（8・1朝日）

「占領の落とし子」と呼ばれ

七海メリー（三二）。TVドキュメント「子どもたちは

七つの海を越えた」に登場。その忍苦の半生に人々は涙した。「日本はひどい。カゲでコソコソ言いながら、そつと差別する」。エリザベス・サンダース・ホームで同級だった黒人系の混血児は女子全員が渡米。国籍はアメリカ。

(8・7毎日)

第九回モービル音楽賞受賞

幼児から東京で薩摩琵琶を学び、十一歳ごろから演奏活動を続けている鶴田錦史さん(六七)。

(8・12朝日)

従軍看護婦が手記を本に

著者は元比島派遣日赤看護婦の石引ミチさん(五九)。赤紙一枚で召集された「戦争と人間の記録」。

(8・14読売)

『日中不戦』文集

九年前、日中友好協会福岡

支部が文集『日中不戦』の第一集を発刊いらい毎夏発行。前田ひささん(六八)は第一集から編集担当、「女性が戦争体験をつづることの意味の重大さを、文集を通じて多くの女の人に伝えていきたい」。

(8・15西日本)

農村の混住社会を学際研究

農村生活総合研究センター専務理事矢口光子さん。

「主婦が八キロのモモかご片手に一日百八十二回脚立を登り降りなど至るところで超過重労働」と顔を曇らす。

(8・15毎日)

書きためた原稿千枚に

「満蒙開拓団―その生と死」をテーマに十数年開拓団の記録づくりを進めている名古屋女性史研究会会員の主婦・中村雪子さん(五六)。

(8・15朝日)

パントマイムで障害児教育

知恵おくれの人たちとの会話をボランテアで続ける和田蓉子さん(三三)。

(8・19読売)

漢方薬メーカーの会長さん

建林静枝さん(六四)。全国のメーカーを大同団結させ全漢方生薬製剤協会の会長に。

(8・21読売)

「手話通訳」に打ち込む

宮川貴久子さん(四八)。本職の洋裁は夜間だけ。昼間は福岡の職安で「手話協力員」として活躍。「聴覚障害者の職種をもっと広げてほしい」。

(8・22西日本)

児童劇団「杉の子」支える

山田智子さん(六三)。十五年間私財をそいで育成、松葉ツエ片手に指導に打ち込

む。(8・24中日)

女性アナの草分け

日本の女性アナの正規採用第一号の松沢知恵さんが、先月NHKを引退。初任給は男性と同じだったが、四十七年前の紅一点。苦勞は並大抵ではなかった、と。

一方、テレビ放送開始第一期女性アナの後藤美代子さんは現役。「この仕事には男と違った視点ってないと思いますから」と。(8・26読売)

戦禍生き抜いた女のあかし

笠原政江さん(六七)京都屈指の旅館を女手一つで築き上げた女社長。一昨年暮れ「戦中派の女の体験を埋れさせないために」と新聞広告で原稿を募り、『戦中戦後・母子の記録第一巻・怒濤の母』を刊行。近く全十巻が完結する。(8・27朝日)

十一歳の少女棋士

五月の第十一回女流アマ名人戦で優勝した林葉直子ちゃん（六年生）。米長邦雄九段の内弟子としてトップ・プロの道を目指している。

（8・27読売）

ダイエー本部長級に女性

消費者サービス室長になった馬場楨子さん。女子社員六千七百人の頂点に立って三つの部を統括する。

（8・30毎日）

〔計報〕

長田シゲさん、十六日、脳血せんで。七十八歳。光の園病院、愛国女塾を経営、戦後白菊寮を設立し四百人近い孤児を養育した。

（4・17朝日）

吉村証子さん、二十三日、胃がんで。五十三歳。津田塾

大で科学史を教えるかたわら、科学読物研究会を主宰、子ども向けの科学の本の普及に貢献した。（4・24朝日）

巖本真理さん、十一日、乳がんのため五十三歳で。パイオリニスト。度重なる手術の合間にも演奏活動。死去当日も定期演奏会が予定されていた。（5・11各紙）

小野アンナさん、巖本真理さんに先立つこと三日前の八日、恩師アンナさんがソ連で老衰のため亡くなっていたことがわかった。日本での教え子は二千人を超す。

（5・12日経）

鷺尾よし子さん、二十八日、慢性スライ臓炎で。八十四歳。昭和八年、県人誌の月刊『秋田』創刊。婦人解放運動にも参加。（5・29読売）

藤浪和子さん、二十七日、心不全で。九十歳。「青鞥社」設立メンバーの一人だった。

（7・30読売）

園田育子さん、十日、肝臓がんで。五十七歳。福岡教育大学教授、食物学専攻。

（8・10読売）

意見

性差の差

たとえば歯の大きさは男女でちがうが、日本人では性差が弱く、白人や黒人は強い。性差は進化や生活環境と何らかの関連がありそうだ。

（植原和郎・自然人類学）
（3・1朝日）

ニッポン女性はナゾだらけ

「オフィスに女性はいるが話の席につくのは男だけ」「花見酒に酔うのはなぜ男だけ」「声は聞こえど姿は見えず」

と外人たちはふしぎがる。

（砂田登志子）

（3・3朝日）

主婦が病氣になった時

体験談募集に多くの声。頼る人ない核家族にとっては、非常事態とあって、「子供の幼い間だけでも、夫の早退や休暇が気がねなくとれる社会環境になって欲しい」の声。

（3・7毎日）

保育事業とタテ割り行政

労働省は責任のなすり合いをやめよ。福祉事業はそれが必要とする人々のために柔軟に対応して行かねばならない。行政区画を超えた保育所の認可や入所児童への補助も、そうした検討課題の一つである。

（3・7読売・社説）

女性の心身症と二重人格

女性は男性に比べて一般に頭の切りかえがへた。その場その場にのぞんで、お化粧で顔を変えるように、心の変身をはかれない。仕事を持つ女性に多いストレスは、このために解消困難。心身症のあぐく精神科の門をたたく女性にかぎって、表面を派手に装っているのは皮肉だ。

(宮本忠雄・自治医大教授)

(3・10読売)

もっと女性候補を

P.T.A.の役員にも、市町村議にももっと女性を。女は視野が狭いと言われるが、その機会を広めよう。女性がみんなその気になれば立候補した女性を当選させられるはず。

(金原良子・六一)

(3・14信毎)

「女性は家庭」は時代遅れ

日産自動車の定年差別裁判

で東京高裁は男女平等化に明快な判断を示した。企業社会では男子は基幹労働力として重要視するが女性は補助労働力としかみない。「男女平等法」のような立法が行なわれれば裁判にまつこともない。

(3・14毎日・社説)

納得出来ぬ都立高男女差別

一部優秀校とされている都立高校の募集人員は、女子の方が少ない。男女差別があつてはならない公立校において、女子に門を狭くしているという事実を納得し難いものを感じる。(児童文学作家・手島悠介・四四)

(3・15読売)

定年差別は違法判決を良薬に

多くの婦人が生きがいと経済的自立を求めている。婦人は、会社が責任のある仕事を要求すれば、それにこたえる

だけの意欲をもっている。(地方公務員・沢野良子・三三)

数々の悪条件を克服し、職業をまっとうする道を選んだ婦人たちの労働意欲に、会社がワクをはめるのは本当におかしい。会社は現在とつている利益至上主義から、充実した人生を提供する職場への発想転換が急務である。(自由業・松村英史・三八)

(3・17読売)

日本婦人論

「男尊女卑を徹底してなくするのには、働く女は男本位の労働組合から脱退して、女だけの組合をつくるべき」と本で書いた私は、男の人だけでなく女の人からも、歴史に無知であるといわれた。

(松田道雄)

(3・20毎日)

よかったNHKテレビ

二十一日の「奥さんごいっしょに」"外国映画にみる女たち"は翔んでる女の紹介。日常生活でモヤモヤを感じる既婚女性に共感を提供した。

(3・23中日(破調))

母子家庭での父親役は

「両親いなければ欠損家庭、問題児は欠損家庭から」などと言われると怒髪天を立つ。母親は二役も三役も可能、自信をもって育てつつ周囲の人に心を開こう。必ず協力者があらわれる。(樋口恵子)

(3・26朝日)

日本女性の遺産に火種を

明治以来の日本の女性解放の思想と運動は、欧米に思想的な火種を仰いできたが、今こそ私たちは、厳しい冬の時代を生きてきた日本の女性た

ちの生き方と思想的遺産に注目すべき。

(山崎朋子)

(3・30毎日)

「待望の男児」の育て方

わが家は女系家族。やっと生まれた男孫に家庭科男女共修の早教育をと腕をさする。

(4・1信毎(女の机))

妻が寝込んだら？

母が腰痛で自分の用もたせなくなっても、健康な父は高いびきでまるで関係のない人のよう。男性の場合は、当然、妻に世話させるでしょう。でもこの逆は当たり前ではないのかしら。

(匿名)

(4・3朝日)

選挙事務所を拝見

どこでも、女の人は申し合わせたようにかっぱう着姿でお勝手仕事に専念。選挙は男のものという意識は薄れてき

たが、難しいことは女ではダメという感がまだ強い。

(佐藤圭子・三九)

(4・4信毎)

女性記者不在のおかしさ

ある家庭記事に「フキンはずっと洗って」とあった。デスクが女なら、煮沸してとすぐ直すはずだ。戦後初登院の婦人代議士の「振り袖姿」の報道もあったが、いくらなんでも振り袖は着ませんよ。

(4・6信毎(女の机))

男性の協力必要な婦人週間

シカゴに女市長、仏・加・スウェーデンでは女性関係が三人ずつだが日本は三。高校への女子進学率は九四・四％で男子を上回るが社会の受け入れ体制がない。婦人週間に「男性教育」に力を入れるべき。女性が各界の上層部を占めるようになったら、「元

号」や「有事」の立法化にばかり熱をあげる政治も変わってくるだろう。

(4・9朝日・社説)

二人分の食事代を払う人

アメリカでは男がレストランで二人分の食事代を払うと女が激怒するという。リブ運動は日常の伝統的作法まで変えようとしている。が、どっちが払ったってかまわないのが本当の平等ではないか。

(4・10信毎)

婦人研究者は狭き門

大学院修士課程での女性は一〇％、博士過程では五％と横ばい。最大の原因は就職難だ。日本ぐらゐ婦人研究者の地位の低い国はない。

(水田珠枝)

(4・11毎日)

婦人週間に思う

「女の問題は男の問題」といわれるように、男の固定観念と偏見が改まらない限り平等はむずかしい。女性が実績を示せば評価は改まるだろう。審議会委員中、女性は一割に満たないがワクを拡大すべき。政府関係機関も配慮を。

(4・11毎日・社説)

婦人労働、保護か平等か

諏訪地方のある精密関係の工場で流れ作業に就いているOさん(三三)は、「一人欠けても次の仕事ができない流れ作業。現状の母性保護を無視した平等実現は、男の人の労働条件をも下げることになる」と。農村工場の責任者Fさん(七一)は、「最低限の労働条件で働いている人を中心に考えて欲しい」と。

(4・10、12信毎)

国と民間の落差

国が男女平等の理念を、民

間がその本音の部分を代表している形である。この落差が埋められない限り、真の意味での女性の地位の向上はない。遅れた民間の啓発こそ、婦人週間に与えられた大きな役割。(4・11読売・社説)

一歩前進した寝たきり貯金

一昨年提案した「寝たきり貯金」に多くの賛同を得、意を強くした。先ごろ、私も入っている「中野老人問題研究会」から区議会に出した「現行家庭奉仕員制度とは別わくで、新たにパートタイムの家庭奉仕員制度を設ける」という請願が採択されたが、これが高齢者事業団の仕事となれば、「寝たきり貯金」の変形とも言え、一歩前進。(武田満佐子・団体職員・五八)

(4・14読売)

“女の時代”ブームだが

“女の時代”のTV映画を作る人に話を聞いたら“女の購買力の時代”ということだが、つかりした。デパートに女重役出現で大騒ぎするほど女のゆく道は処女地だらけだ。が権力と無縁だったばかりに女が汚職劇の主人公となることもないのだ。

(4・15信毎(女の机))

女性票

『あごらミニ』26号の都知事三候補のインタビューはそれぞれの本音が出ていて思わず吹き出し、同時に心が寒くなった。候補者たちは婦人年以來の女性の要求や運動を受け止めていなかった。意識的女性の票は保守よりも革新にきびしい判断をくだした。

(水田珠枝)

(4・18毎日)

共かせぎ家庭の悩み

親が寝込んで頭をかかえる共かせぎ家庭。男性も女性に看護を任せきりにしないで、積極的に手助けしないと、奥さんが倒れてしまう。共かせぎを続けるにしろ、辞めるにしろ、今のところ夫婦で協力して解決策を見いだす以外に手はない。

(袖井孝子・お茶大助教授)

(4・18日経)

パートで見た情けない女性

仕事ち中ちよつと暇があればベチャクチャ。少しむずかしい仕事になると「イヤ」「イヤはないでしょう」と言うとかとふくれ、あげくの果てに泣いて帰る始末。これでは「男女同賃金、女性の地位向上」などおかしな話。

(安井寿美子・主婦・三〇)

(4・18朝日)

反論

「パートで見た情けない女性」拝見しました。私もパートで働いている人に会う機会も多いのですが、彼女たちは、パートでしかやれない家庭事情の中で、黙々と、実績こそがあらゆる向上につながる、そんな思いに支えられてがんばっている。そんなパートの仲間思いやりを。

(伊藤幸枝・主婦・三八)

(4・22朝日)

働く女性

働く女性というと家の外で働く女性のみを対象とし、家の中で働く主婦は除外されているような感じがある。家事ほど複雑で得意即妙の対応が必要とされる職業はない。同じことの繰り返しや単純作業では決してない。米国では、家事に使う時間が週最低六十

七時間。うち五十六時間を主婦が、残りの十一時間を夫がする。日本の夫も、手ごたえのある話し相手になってあげて下さい。

(深沢道子)

(4・21日経)

おなごと学問

「おなごは学問せんでもいい、かわいい女になって早く嫁に行け」とは、太平首相が娘に言った言葉。しかし、結婚を夢みてかわいく育ったゆえ、結婚につまずいたとき、どんなに惨めな目に遭うことが多いか。離婚の急増や女の人生も八十年になった今日、首相の言葉は、子を思う親の心情としてもあまりに時代遅れ。(犀川千代子・弁護士)

(4・23京都)

太平天国における女性解放

一夫一婦制や男女平等の土地割当がいわれ、てん足・著

妾・売買婚・娼妓が廃止され、女軍が組織されたが、革命遂行のための家族共同体的平等で女たちの主体的解放ではなかった。

(中山義弘・中国近代史)

(4・25朝日)

女性になぜ男の丹前を

旅館の女性客はふえているのになぜ男ものの丹前と浴衣しかないのか。

(山本文子・六〇)

(4・26朝日)

少ない婦人議員にガツカリ

女性の地位向上が叫ばれていたわりには、婦人議員の少ない統一地方選結果。知名度も金もない女性でも立候補できるような選挙体制がほしい。

(水野明世・主婦・二九)

(5・2中目)

強まる家ぐるみ志向

当世「親離れ子離れ」の論も、どこか甘い。それどころか、親子が離れずにもつと同一利害と立場を頑ち合おうとする方向へこそ動いてはいないか。日本の危険を孕んだ天下太平を反映して、死んだふりをしていた「家柄」という名の怪物が甦ってきている。

(秦恒平・作家)

(5・4朝日)

米人学生の見た日本家庭

「幼児には甘く、小学生にはすごく厳しい。しつけの一貫性のなさに驚いた」「気持ちを通じていないみたいで本当に夫婦か疑問に思う」「共働きなのに妻ばかりこまねずみのように働く」——ホームステイの学生七人の感想。

(5・7日経)

時には群れから離れて……

旅先で、あるいは劇場で、展覧会場で中年女性のグループをよく目にする。「暇とゆとりのできた」といわれる中年女性が、ことあるごとに群れをなして歩くことしかできないのは、おかしい。もつと自分に帰り、他人の力を借りずに、自分を解き放してみたい。

(高見沢たか子・生活研究家)

(5・14京都)

母は先輩

高校二年の休みに、保健婦である母の勤める役場へアルバイトに行き、初めて働く母を見た。上司の信頼、仲間への母の態度など、母の姿は家にいる時より数倍美しかった。その時ほど、この母を誇りに感じたことはない。——障害児施設の保母となった娘

の投書

(松川好美・保母・二三)

(5・16中日)

女子生涯教育

女性が人生平ばからの出発をするために、性別や年齢よりも能力で勝負できる生涯教育が大切。女性の生活と学習要求に応じて、学習施設を充実させ、学ぶ場をふやす必要がある。

(富士谷あつ子・評論家)

(5・22日経)

夫中心の電話帳

電話帳はほとんど夫の名。女性の友人の番号を探すのに苦労する。わが家では私の名も出してもらったが三年ではずされた。「五百円の掲載料が借しいのではない」と夫。「それなら何なの」と聞いても返事はなかった。

(高田あや・五五)

(5・23信毎)

まだまだ弱い家内労働者

家内労働法が制定され今年で十年。保護するための法があるのだから、もう少し弱い立場の者の力になり得ないか。

(江口裕子)

(5・23読売)

家内労働法が存在を知っている主婦はまだ三分の一、工賃は時間あたり二百六十四円。「自宅でする」がミソだがもっと権利の主張を。

(館富美子)

(6・1中日)

子が障壁になった入学試験

「看護学校を受験したが不合格になった」との投書に反響続々。「保育所を充実し、女同志職場を譲り合おう」「夫の壁を越えてほしい」「あなたは自分のことばかり考えている。子どもと共に栄養をと

る時ですよ」(5・30読売)

母親学級の保育所に拍手

鳥羽市の母親学級で臨時保育所が開かれることになったが、他の市も見習ってほしい。子どもが小さいからこそ、あらゆる場へ積極的に参加し、知識見聞を広げたいのは、母親共通の願いではないか。

(原田久代・主婦・三一)

(5・30中日)

お産の亭主立ち会い昔から

夫の参加が流行になっていく。日本の文化にはないことと商業女性誌にあったが、昔は立ち会うべきもべからずもなく男が大活躍したもの。

(6・6信毎(女の机))

女の最低の仁義

働きに出ようとする妻が、夫が背広をハンガーにかける

よう徐々に訓練しなくてはと話し合い、「子どもが幼稚園に入る前みたいね」と大笑いになった。お尻におむつでもついているような男が多すぎる。最低自分の身の回りのことができるように息子を育てるのが母親の責任。女に迷惑をかけるような男に育てては、同じ女として申しわけない。

(伊藤雅子)

労基法改正を

現実の規定は必ずしも母性保護になっていない。法制定に男性でなく、女性自身の実情や意見を反映させるべき。(林弘子・熊本商大助教授)

(6・6西日本)

父親も幼稚園にコミットを

保育所や幼稚園は「母の会」が多いが父親も園のあり方を点検し批判すべきだ。先

生がいくらよい保育をして
も、施設の中で自己完結する
システムであってはならな
い。(毛利子来・小児科医)

(6・9 毎日)

生きている『女人禁制』

企業社会の分野は、いまだ
におくれており、女性が管理
職に昇進する例は珍しい。こ
れは女性の能力が劣っている
からではなく、男性と同等に
扱えないから同じ給料を払う
なら男性の方がよいという、
日本特有のおくれた考え方に
よる。(6・9 中日・社説)

新・知的女房の条件

戦後は高学歴だが戦前の方
が知的主婦が多かった。もっ
と心を見がく努力を(グスタ
フ・フォス)。生活におぼれ
ぬ強い意志が大切(高橋展
子)。心身ともに健康でバイ
タリテイあふれる人、夫の共

感を得られなくては無理(投
書から)。(6・11—26 日経)

孤立する父親たち

一年に一回ある「父の日」
の授業参観。父親たちは終始
おし黙っている。そのいいよ
うもなく寂しい後姿は、父親
の多くが地域社会の中で孤立
している現実をよく物語って
いる。いや、家庭の中でも
—。(砂田弘・児童文学者)

(6・16 京都)

結婚と売春

「売春はなぜ悪か」と女子学
生に質問したが約半数はわか
らなかった。性を生活の手段
にするのは人格を売ることだ
と説明したら「では結婚はな
ぜ非難されないのでか」と逆襲
された。

(水田珠枝)
(6・16 毎日)

安直ではない仕事

「社会とのかかわりを持ちた
い、働きたい」という若
い女性の声が多いが、私は三
十余年間のOL生活を送って
来たが、本当の仕事というも
のは、子育てを片手に、家事
を片手に、そして仕事もした
いというような単純で安直な
ものではない。

(太田今朝子・五四)

(6・17 信毎)

父親よ娘の可能性に目を

女の幸福は結婚にあり、と
信じているのは中年男性に最
も多い。女性の個性の發揮を
喜び、能力の伸長を奨励する
ような、父親の自覚が望まれ
る。

(菅原真理子・経済企画庁)

(6・18 日経)

女の生き方を選ぶ自由

「専任教員より非常勤講師が
よい」に対し「プロ意識の欠

如、専任希望者の道をふさ
ぐ」という声。「管理職にな
って女性の地位向上を」には
「男社会にとりこまれる」と
の反論。が、他人の生き方と
無関係に自分の生き方を選ぶ
わけにはいかない。選ぶ自由
があるとすればその中身は何
か。男がそれを要求しないとい
う問題もふくめて考えてみ
たい。

(水田珠枝)
(6・20 毎日)

「家庭の日」新設案に物申す

「家族全員がそれぞれの役割
を自覚し、主婦の家事労働、
育児等を見直す」というな
ら、女は内、男は外という固
定的な役割観や家事育児を主
婦ひとりが負っている家庭の
在り方をこそ見直すべき。家
庭へ、家庭へとすべてを流し
こんでいる施策がうかがわれ
る。(伊藤雅子・国立市公民
館職員)

(6・20 信毎)

女性のためのクルマ

これまでの車社会は男性社会の考え方を改めて、女性の視点に立った考え方を車の構造に反映してほしい。げた箱やハンドバッグのしまえる場所、計器類を見やすく。

(江口泰広・日本総合研究所)

(6・25日経)

もう女は採用しない

カワイコちゃんだけ……と強硬発言相つぐ座談会が『11月7月号に。拍手を送る男性も多いだろう。

(6・27読売・編集手帳)

少ない女性の登用

長野婦人問題研究会の総会で、政策決定の場、その他公的機関への婦人の登用が少ないという論議が。もっと当事者の私たち女性が考えを深くもっていかねば、とつくづく

思った。

(佐々木都)

(7・1信毎)

してあげる文化

子どものしつけについて、いくら口やかましく論議しようとして、「子どもにしてあげる」という日本語が、堂々とまかり通っているかぎり、まず子どもへのしつけは絶望だと覚悟すべし。

(7・6毎日(ぶりずむ))

パートの健保適用簡単に

パートの健保適用が劣悪なのは、企業だけでなく労働省や厚生省にも責任がある。パートの場合、適用の条件がうるさく、面倒。お役所の方で法律をきめて欲しい。

(糸公義・会社員・四九)

(7・8朝日)

新・知的亭主の条件

傷つくことを覚悟しつつ女

房を深く信頼する夫(夏堀正元)。妻の話したい欲求を受けとめる人(森南海子)。妻の自立心を育てる人、広い視野を持つ人(投書)。

(7・11-31日経)

男ももっと子育てを

革新運動に熱中、夜遅く帰る私は「一番身近な女と子どもを切り捨てて何の革新か」と妻にグサリと刺された。保母四年目の彼女が職業病で倒れた日、自分の生きざまのツケがまわってきたと思った。仕事一途の男の生き方が子育てを女に押しつけ保母を打ちのめした。男たちももっと生活の中身や子どもの生きていく環境を見つめ直そう。

(ますのきよし)

(7・12-16信毎)

「家計を握る妻」の法的地位

妻の相続に関する民法改正

がすすめられようとしているが、働く婦人がふえれば共有制への一本化は新しい弊害も生じる。法改正は慎重に。

(7・17読売・社説)

水には水の味がする

嫁姑、まま母まま子などという言葉の響きには、血縁以外の人間関係の意味や価値を認めようとしなない差別的な偏見がある。私たちは〈血〉のつながりを至上のものとしてとらわれてきたのではないだろうか。「血は水よりも濃い」と言うが、水を血と比べたりに血に擬すことはないのだ。

(伊藤雅子)

(7・18毎日)

妻の民法改正早急に

杓子定規に相続分を決めていた現行法に比べれば、弱者救済につながる大きな前進。一つ一つの項目に異論があっ

たとしても、法改正をこれ以上遅らせる必要はない。早急に成立を。

石黒堯記者
(7・18読売)

新聞の見出しに失望

シモース・ベイユの横顔を伝えた記事の見出しが「サッチャーさんに負けないわ」とは何事か！

(寿岳章子)
(7・23毎日)

女には「今」が一番大切

幼児をかかえて仕事や自分の世界を持ち続けようとする女には「今は早すぎる、もう少し待て」という声が外からも内からも聞こえてくる。しかし待っている間に状況が変わり自分が変わることもある。

(伊藤雅子)
(8・1毎日)

育児は男女共通の責任

国際大学婦人連盟太平洋地

域セミナーに出席したニュージランド・オークランド大学教授(社会人類学)イバニカ・ボダノビッチさんは、「社会参加と育児の二律背反を克服するためには、育児が女性だけではなく男女に共通の人間の責任であるということに気づくことが肝心」と講演。

労基法の緩和を

(8・7日経)

せっかく高い能力と意欲を持ちながら残業、深夜勤務の制限のために、男子と共同の仕事や、互角の競争ができないうことは、彼女たちにとって残念なことであるばかりでなく、社会のために、はなはだもったいない。労基法のわくを部分的に緩和すれば、女性の能力を発揮する機会が更に開ける。

(椎名武雄・日本IBM社長)

(8・2朝日)

「共に生きる」学習を

老人とつきあう機会のない核家族、職場は青壮年、地域は女と子どもばかり、どこも偏っている。生涯教育とよく叫ばれるが、人と共に生きる力をわが身に育てなおすことをおいて大人が学ぶ意味は乏しいと思っている。

(伊藤雅子)

(8・15毎日)

内職一日二百五十円だが

四時間かかって二百五十円の内職だが、パートは子どもの病氣などで休みがち、辞めざるを得なかった。情けないがいまはこれしかない。

(横浜・主婦・三三)

(8・19読売)

夫の育児が必要な時代に

近年、核家族は増加の一途にあり、そうした家族では、

従来のような家庭における夫婦の役割分担という考え方はすまされない。分べん、育児などに関しても夫の参加が必要になってきている。

(尾原シサ・助産婦・六九)

(8・22読売)

相談

夫と十九年、忍耐の限界

「お前はオレの牛馬だ」とのしる夫、一言でも言えば髪を持って引きずられる。(主婦・四四歳)

〔答〕弱さをみせると一層暴君になります。離婚を決意されたのなら、胸をはって前向きに。

(沢地久枝)

(3・5読売)

夫の借金人生に苦労

出産直前、夫が女と蒸発

頼まれるとイヤと言えず人の借金を引き受ける夫に二十余年大苦勞。(主婦・五五歳)

三人の幼児をかかえ生きる意思もなくなった(主婦)。

〔答〕家裁に夫の準禁治産宣告か離婚の調停を申し立てる以外ない。自分の気持ちを整理し、その形で夫にも迫ること。

(鍛冶千鶴子)

(4・3読売)

祖母の世話は父の妻?

六十六歳の実母、夫の死後も九十の姑と同居、姑は当然めんどろをみてもらう気だが。(主婦・四二歳)

〔答〕法律上の扶養義務の第一の順位は亡き父上の弟。母上は姻族で扶養義務がない。姻族関係終了届を出せば親族ですらなくなる。このことを叔父たちにはつきり伝え、月々二万でも三万でも払ってもらうか引き取ってもらうこと。

(鍛冶千鶴子)

(4・11読売)

重婚的內縁の妻の相続権

十三年暮らした夫が交通事故で死亡したが慰謝料は本妻に支払われた。内縁とはいえ、本妻同様だったのに。

(内縁の妻)

〔答〕法律上の夫妻が長い間離婚状態で、内縁の共同生活も長い場合は加害者に損害賠償を求められる。が、法律上の夫婦関係が冷えた原因が愛人の情交関係にあった場合は無理。内縁の妻に相続権はない。

(大脇雅子)

(5・20中日)

精神分裂(?)の夫と別れを

三十八歳、会社員の夫、異常行動が目立つ。別れたいが……。(主婦・三〇歳)

〔答〕その程度なら離婚理由としてはちょっと弱い。口実を作ってまず専門医に診てもらうこと。

(佐藤典子)

事件

女銀行強盗

十九日、栃木県小山市で、二十歳の女性が果物ナイフで銀行を襲ったが、非力でかなわず降参した。「同居の男が働かず金が欲しかった」と。

(4・20読売)

無職女性、孤独の衰弱死

二十一日、大阪市で無職の女性(三八)が自室で衰弱死。死後約一か月。水道・電気も止められ、現金は一円玉ばかりで二百数十円。

(4・22朝日)

女性を襲う

昨年十月二十七日、池田市でおきたOL殺しを箕面市職員が自供。他に女子大生も襲ったと。(4・23朝日)

塾経営の主婦が入試詐欺

二十八日、東京で自宅の学習塾に通う子の母親から、「大学や高校入試に便宜を図る」と計二千万円をだましとった主婦が逮捕された。(4・29朝日・毎日・読売)

ワラビ採りの主婦二人殺害

京都の山道で消息を絶っていた主婦二人が、死体となって二日ぶりに発見された。胸刺され乱暴の跡。(5・25毎日)

サラ金苦老女の放火

三月十九日のアパート火事で女店員が焼死した事件で、当時アパートの住人だった病院配せん婦(六十四)が放火

の疑いで逮捕された。「火災保険目当てに放火した」と自供。(7・7読売・日経)

セールス女性バラバラ殺人

七月二十八日広島市で化粧品セールの主婦(二八)、バラバラ死体で発見。(7・28京都・朝日)

また女性襲われる

六日、東京田無市で帰宅途中の女性が、三十歳ぐらいの男に乱暴された。武蔵野地区では昨年十月から、同じ手口の事件がこれで十件。(8・7毎日)

父の盲愛

二十四日富山市で、男手ひとつで育てあげた一人娘の結婚話に耐え切れなかった父が娘を殺す。(8・24朝日)

孤老の死

二十三日、東京で一人暮らしの老女(七〇)が死後一週間たって発見された。タンスには五百万円の通帳が。(8・24読売)

り。(4・28毎日)
二十八日北海道の中学校内で、親友の悪口をめぐる口論の末、女生徒(一四)が級友を刺殺。

(4・29朝日・読売)

二十九日福岡市で、長期休学の高校生男女が、治療中の病院でそろって投身。

(5・1朝日)

十五日千葉市で、ネコの死を悲観した小学六年少女が自殺。(5・16朝日)

〔少女の事件〕

八日、徳島市で塾をさぼり母にしかられた十歳の少女が自殺。(3・9毎日)

十一日、岐阜県下で姉妹げんかの末、十歳が首つり。(3・12毎日)

二十八日貝塚市で、知恵遅れの十五歳の少女が自殺。(3・29朝日)

〔女の殺人〕

十二日摂津市で高三の女の子が自殺。(4・13朝日)

二十八日東京で、うつ病自宅治療中の女高生が飛び降

浦和市で、寝たきり老女(八十三)の世話がイヤになつた家政婦(四二)が放火殺人。(3・25朝日・読売)
千葉市で主婦(三五)が酒

乱の夫から逃れようと家出計画したがかなわず、思いあまつて夫を絞殺。

(4・16朝日)

二十四日、東京で別れた妻(三八)が前夫を勤め先で刺し、その妻も殺す。

(5・24読売)

四月下旬大阪で寝たぎりの老人(七〇)が変死した事件は、妻(五九)が青酸ソーダを飲ませ殺した疑い。六日逮捕。

(6・7京都)

二十日大阪市でスナックママ(三六)が、別れ話を持ち出され逆上して警察官(二六)を刺したと自首。

(6・20朝日・京都)

十日、福島県で、酒グセの悪い夫に愛想を尽かした妻(三四)が古井戸に。

(7・28読売)

二十八日、逗子市で子連れ妻(三一)が女の部屋にいた夫に除光液かけ火をつけ

る。(7・28読売)

六月二十九日大阪の幼女殺しは同じ棟に住む十八歳の看護婦見習の犯行と判明。「塾に行く子連れ歩き、子の母にしかられる」と。

(8・19読売)

〔子殺し〕

十六日、西宮市で生活に疲れ、子を餓死させた両親を書類送検。

(3・16朝日)

十六日、東京大田区で妻に家出された夫が、幼女せっかん死さす。(3・16読売)

(3・16読売)

十六日、宇都宮市でホステスの妻に家出された夫が、一歳の子をふとんむしに。

(3・16読売)

十七日、堺市で里帰り中の母が生後三週間の長男を。

(3・18朝日)

十八日、京都駅のコインロッカーにえい児死体。

(3・19朝日)

十八日、大阪で生れた直後の赤ん坊が民家の軒下で使用中の冷蔵庫に捨てられ、死の寸前。(3・19毎日)

二十日、相生市で父が三歳児をせっかん死さす。

(4・20朝日)

二十日、沼津市で継母がなつかぬ長男憎み、小六の弟に殺人命令。首絞られた兄危うく助かる。(4・21読売)

(4・21読売)

二十八日、石川県で交通事故の後遺症苦にした母が二児を。

(4・29京都)

四日、弟をいじめる一歳の長男を母がせっかん。

(5・5朝日)

七日、姫路市で育児疲れの母が九か月児をフロで殺す。

(5・8朝日・読売)

十日、埼玉県下で十七歳から七人も子を産み続けた母親(二五)が、「これ以上育てられぬ」とドラムかんで子を焼く。(5・10朝日・日経)

十六日、栃木県下で四歳の子を殺した母行方不明。

(5・16朝日)

三十一日、札幌市で子の自閉症の疑い苦にした母、二児絞殺。(5・31朝日)

十九日、京都府下で産後の肥立悪い母が三か月の子を。

(6・19京都)

二十三日、平塚市で育児ノイローゼの母、二児刺す。

(6・23読売)

二十九日、東京国立がんセンターで、三歳児のがん転移告げられた母、子を殺して、自殺はかる。(6・29毎日)

東京で蒸発した娘から引き取った一歳半の孫を、四十八歳の祖母放置して餓死させる。(7・13読売)

二十八日大東市で五歳児をせっかん死させた二十一歳の未婚の母を逮捕。

(7・29京都、朝日)

二十四日、横浜で五歳の愛

児を殺した母が熱海で自殺。

(8・25読売)

〔心中〕

五日、東京で病苦の母、長

女(六)道連れ。

(3・6読売)

六日、神戸市で母子三人

夫の帰宅遅く言い争い。

(3・7朝日)

七日、徳島市で失職から一

家四人心中。夫助かる。

(3・8朝日)

十日、鹿児島県で岸和田市

の一家四人の死体発見。サラ

金苦で死出の旅。

(3・12朝日)

十一日、川口市で生活苦の

主婦が二児(一と〇)と。

(3・12朝日)

十八日、枚方市で、産後の肥

立ちの悪い母が乳児抱き飛び

降り。

(3・19朝日)

十八日、徳島市で生活苦の

一家四人が郷里に戻って排方

ス心中。(3・19朝日)

十九日、横浜市で難病の孫

の前途を悲観した祖母が自

殺。かねて一家心中を相談し

ていた祖父と子の母親が二人

の子を道連れに後追い。

(3・20毎日・朝日)

二十四日、神奈川県で夫婦

げんかの末に夫が放火心中。

(3・25朝日)

二十六日、明石市で母子三

人。家庭不和が原因？

(3・26朝日)

二十七日、琵琶湖岸で堺市の

男女。

(3・27朝日)

二十六日、神戸市で妻が病

気の夫と無理心中。

(3・27朝日)

三十日、寝屋川市で妻が夫

子と無理心中。夫がギャンブル

好きで生活が苦しかったのを

悩み。

(3・31朝日)

三十日、鹿児島県で借金と

離婚話を苦に母が娘(九)道

連れに。(3・31西日本)

一日、東京の病院でがんこ

苦しむ娘にせがまれた母(六

七)が心中。(4・2朝日)

五日、埼玉県入間市で近所

付きあいに疲れた母が幼い子

三人と。

(4・6毎日・読売)

十日、草加市で病弱の乳児

と母。

(4・10朝日)

二十日、静岡県でノイロー

ゼの母が三つの子道連れに。

(4・20読売)

二十日、東京でノイローゼ

の母、二人の子を道連れに火

だるま心中。(4・21各紙)

二十五日、逗子市で八十代

夫婦が心中。寝たきり夫の看

病疲れ。(4・26読売)

二十六日、大津市で子を背

負い母入水。(4・26朝日)

二十九日、横浜で妻の家出

直後に父子心中(子は七

歳)。戻った妻も後追い。

(4・30朝日)

三十日、横浜で夫婦仲悪い

夫婦、高校生含む一家四人

で。(5・1朝日)

七日、明石市で二年前離婚

の母が子を道連れに。

(5・7朝日)

六日、福岡市で夫の病気を

苦にした母(四九)が里帰りの

娘(二四)を道連れに。母

は未遂。(5・7西日本)

八日、八代市で夫(二四)

が妻子(二四、四)と無理心

中。妻子は助かる。妻への不

信から。(5・8西日本)

十五日、福岡県下で父(四

六)が娘(一一)を道連れ

に。母(四七)と長女(一

五)は助かる。(5・15西日本)

十九日、八代市で。娘(二

〇)の結婚話でノイローゼの

母(四〇)が無理心中。

(5・19西日本)

十九日、北海道で病氣と思

い込んだ夫(三二)が一家四

人と。(5・19朝日)

二十一日、神戸市で離婚調停中の夫、妻を刺し自殺。

(5・22京都)

三十一日、札幌市で長男の自閉症に悩む母が二児と。

(5・31読売)

三十一日、愛知県で学童はねた母が乳児道連れに。

(5・31中日)

三日、豊中市で母子三人。母が自分と長女(三)の歯槽膿漏を気にして。

(6・4朝日)

十二日、枚方市で母子三人が。

(6・13朝日)

十八日、仕事に行きづまり父が幼い双子と車ごと海へ。

(6・18読売)

十八日、東京で幼児を抱いて母が高層ビルから飛び降り。病気で入学一月遅れた長男を苦にノイローゼ。長男はしみつき助かる。

(6・19読売)

二十日、明石市の夫婦が。

(6・20朝日)

二十二日、加古川市でアル中気味の夫が妻と無理心中。夫助かる。

(6・23朝日)

二十四日、舞鶴市で夫に家出され疲れ果てた妻が二児と。長女死に二人重体。

(6・25朝日)

二十四日、門真市で同居の女性が別れ話を出したのを悲観、無理心中。

(6・25朝日)

三日、堺市の姉妹(六一、五一)が静岡県の墓地で。

(7・3朝日)

三日、滋賀県で母が二児をバイクに乗せてトラックに突込む。次女助かる。

(7・4朝日)

十日、気仙沼市でマイホーム転居をひかえて疲れと不安から母子三人が。

(7・10読売)

十四日、栃木県で姑と折り合いの悪い妻と夫が子を道連れに。

(7・14読売)

二十七日、阿寒湖で女子大生二人の心中死体発見。恋の悩みに同情して。

(7・28読売)

二十八日、奈良県で、倒産の一家四人が。

(7・29朝日)

四日、新潟市の農家で長男が両親・妻・二児を殺し自分も。遺産めぐる争いか。

(8・4朝日)

十七日、宇部市で精神病の大学生を家族全員が殺して、母と妹が心中。

(8・17朝日)

二十一日、熊本県下で主婦(三〇)が二児(三、一)を道連れに。夫の家族との不仲を苦に。

(8・22西日本)

一日、横浜で女子大生(二〇)が団地屋上から投身。

(3・1朝日)

八日、岐阜県の辺地校で、自信喪失の女教師(二三)が卒業式を前に首つり自殺。

(3・9毎日)

十七日、社宅でボヤを出した主婦、近所付合いに悩み。

(3・18毎日)

十九日京都で、米国帰りの女子大生、飛び降り自殺。

(3・19朝日)

二日大阪府下で、七十歳くらいのお老女、飛び込み。

(4・2朝日)

十二日、名古屋市中で病気を苦に二児の母(三五)が焼身。

(4・13中日)

十四日、横浜で主婦(五六)が病気がちを気にして焼身。

(4・14毎日)

十四日、防衛庁の新入女子職員(二二)、職場で飛び降り。

(4・15毎日)

十六日、東京で独り暮らしのお老女(七三)、退院直後に電車で飛び込む。

(4・15毎日)

(4・16朝日)

一日、別れ話を苦に内妻(二六)がガス自殺。千葉の団地で重軽傷十二人を出す。

(5・2朝日)

二十五日、藤本義一氏の母(七四)が。(6・26日経)

十九日、東京で使い込み夫の自殺の後追い、妻(三二)が。(7・19読売)

二十六日、京都で交通事故で両手・右脚を失った主婦が社会復帰を悲観して。(7・27京都)

二十七日、昨年暮れに守口市内の路上行きずり殺人で夫を失った妻(三九)が、生活に疲れ後追い自殺。(7・28朝日)

二十八日、西宮市で「家が狭い」と母親(三〇)が子の前で焼身。(7・29京都)

二十一日、岩手県で中国から肉親の墓参一時帰国の女性(三八)が井戸に飛び込み。

日本語もしゃべれずノローゼ気味だった。(8・22読売)

「女を売る」

十六日、宇治市で女子中学生五人の売春をあっせんしていた暴力団員ら逮捕。(3・27朝日)

十二日、堺市で結婚相談所をかたっていた売春組織を摘発。会員は男五百人、女三千人ではとんどが主婦。娘の学資かせぎをしていた元小学校教員も。(4・12朝日)

東京渋谷署は、レジャー新聞の広告欄などで会員を募り、主婦やOLに売春させていた男(五四)を摘発。主婦ら十人を任意取り調べ中。(4・24毎日)

二十四日、主婦ら七十人に北九州から三重まで出稼ぎ売春させていた芸者置き屋経営者ら逮捕。(5・24西日本)

豊橋市で、女子中学生四人の売春事件を摘発。「いっそ大人の氏名を公表しては」の声も。違反者の母が自殺した先例もあり強硬策に踏み切れないとか。(6・23朝日)

宇治市で十六歳の少女三人売春。客の少ない時はジャンケンで客の取り合い。(7・25朝日)

十日、福岡市で借金をネタに売春を強要したサラ金業者を逮捕。(8・10西日本)

二十四日、福岡県下で少女八十一人を覚せい剤で薬つけにしトルコやスナックに売りこばしていたトルコ経営者二十五人を逮捕。(8・25西日本)

三十一日、福岡県下の少女売春事件で、あつせん女高生(二六)も逮捕。同級生二人を暴力団に。(8・31西日本)

海外

男のみ負担の扶養費は違憲
米最高裁判所は、離婚で慰謝料、扶養手当を妻にだけ支払うのは違憲との判断を下した。離婚も同権との見解だが、実情からは女性側にプラスとはいいいにくい判決。(3・6朝日)

リブは男を自立させた

アメリカの友人たちと十五年振りに再会したところ、その夫たちの意識の変わりように驚いた、と小西章子さんの報告。家事も手伝いの域を出てプロ並みに。(3・7日経)

国鉄さんも真似したら

英国国鉄に、二十五歳の才媛助役が誕生。

(3・9 毎日)

ソ連の「家事論争」

外の仕事と家事の両立に悩むソ連の女性。「女性が家事を重荷でなく喜びとするために社会主義諸国は共同でこの問題に対する回答をさがし出すべきだ」とする「文学新聞」の記事へ大きな反響。

「料理が好きでない女性なんて女らしくない」と言う女性もいれば、「女性の自由時間は、結局、家族内の問題である」と理解を示す男性もある。共産圏として変わりはない。

(3・10 読売)

チャドル反対のデモ拡大

イランで、ホメイニ師のイスラム化路線に反対する女性デモが日ごとにエスカレート。イスラム教の男が、デモ

中の女性にナイフで切りつける事件も。

(3・10 読売)

爆弾レディー

ニューヨーク市内の銀行に、八日、おしゃれな美人強盗が押し入り、シヨルダバッグからダイナマイトを取り出し行員を脅し、約百四十万円を強奪。すでに三件の銀行強盗を。

(3・10 読売)

新産業革命

米国では就業年齢の女性の半数以上が働いており、その四分の三までがフル・タイム。

女性の進出ぶりは産業革命に匹敵する構造変化だ。

(3・11 毎日)

パリでイラン女性解放支持

イランのイスラム教徒改革の女性抑圧に反対しシモン・ド・ボーボアル女史、

女優のジャンヌ・モロー、カトリクス・ドヌーブ、ジャーナリスト、芸術家などを中心に、イラン女性解放運動支持デモを組織、テヘランに代表団を送る。

(3・17 読売)

女性解放の「武闘派」

イタリアでは、フェミニズム運動など手ぬるいと、テロ化する女性グループが登場。産婦人科医とストリップ小屋の経営者の家に爆弾を仕かけて、声明文を送りつけた。

(3・18 毎日)

男も助産婦に

西独で、助産婦にも男性が進出できる法案を検討中。助産婦協会は原則的には賛成を表明するものの、やはり「女の仕事」と複雑な表情。

(3・20 毎日)

挑戦的職業を好む

カナダの働く女性は、三人に一人は四回以上も、より高く自分を「買ってくれる」職場を求めて転職している、と現地にいる経済企画庁の菅原真理子さんの報告。

(3・26 経経)

最低二〇％は婦人候補を

仏では、ジスカールデスタン大統領のお声がかかりで、次の統一市議会選挙（八三年）には「各政党は最低二〇％の婦人候補者を立てなければならない」との法案を国会提出。

(3・29 毎日)

職を求めて復学

「米国では、多くの主婦が具体的な職業を想定して復学。再就職の際に主婦でいたための空白や年齢は問題にならない」と同国で十三年ぶりに大学復学を果たした日本主婦報告。

(3・30—31 朝日)

シカゴに初の女性市長

ジェーン・バーン女史(四四)対立候補に四対一の大差をつけて圧勝。

(4・5毎日)

・女性国会議員セロ

シンガポール政府は最近、最高学府、シンガポール大学の医学・歯学部への女子学生の入学を三分の一以下に制限すると発表。ストレーツ・タイムズ紙は「この国の議会に女性議員が一人もいないのが残念だ」と。(阿部特派員)

(4・7読売)

韓国で姦通罪存廃論争

男女同罪の姦通罪が生きている韓国。女優のからんだ姦通事件にソウル地裁は「女は金を受け取って身体を貸し与えたに過ぎず、男は同居生活をしたわけではない。金で浮

気をしただけ」と拘留延長請求を棄却、無罪とも受け取れる新解釈を。世間の反応は、

もはや姦通罪そのものを廃止すべきだとの積極的賛成論が出る一方、男性の裏切りを容認する不法な解釈だと判事を攻撃する声も強い。

(3・29 韓国日報)

(4・8読売)

韓国の同一賃金法

同一賃金法が発効して二年、昨年の女性の平均賃金は男性の七三・九%で、前年より九%減。女性は秘書、一般事務などの女の仕事に属している場合が多く、また労働組合への組織率(二八%)も低

く等価値を比較するのが難しい。労働保護規定についても女性運動家たちは「保護を撤廃することは平等への道ではない」と主張。

(清野博子記者)

(4・11読売)

さっそう女艇長

米国沿岸警備隊に女性艇長誕生。女性が軍艦の指揮を執るのは海軍史上初めて。

(4・14毎日)

“全託”幼稚園

広州に寄宿制の“全託”幼稚園、三歳から六歳までの子四百五十人が両親のもとへ帰るのは日曜日だけ。ただし有料なので余裕ある人たち用ということ。長野県婦人代表友好訪中団団長の丸山千代子さんの報告。(4・19信毎)

女性首長は七百人

ニューズウィーク誌によれば、全米の女性市町村長の数は七百人を超える。人口十万以上の都市でも十三人。

(4・21朝日)

中国に猛烈悪女

文化大革命のさ中、燃料会社の実権を握り、七年間で七千万円を横領した女性の不正が明るみに。(4・24朝日)

中絶より避妊を

チェコの流産は年間十二万件で、そのうち人工中絶が九万件。「中絶を減らすためにはもっと避妊を」と政府出版物。(4・28朝日)

サッチャーさん

政権奪還を果たした保守党。英に初の女性首相が誕生した。

(市川房枝さんの談話) 先進国の、しかも民主主義の本国での例で、世界の婦人運動に及ぼす影響は大きい。しかし、日本ではどんなに有能な女性がいってもあの地位は絶対には与えられないと思う。

(5・4朝日)

(紀平梯子さん) 日本と英国では百年の差。副総裁ならまだしも、女性の総裁に今の年寄りが我慢できるわけがないですよ。儒教の影響はまだまだ強いですから…。

(5・14中日)

女性首相は現実路線

サッチャー首相はインタビュール、〈権力の座にある女性〉について「女性は男性に比べて理論的ではないが、はるかに現実的な傾向を持っている。女性は家庭の管理者だから、管理経験を持つ点で男性より女性の方がずっと上だ」と。

(5・10読売)

英国内の反応

有産階級の女性は「サッチャーは英国がいま必要としていることを、すべてやってくれるでしょう」フェミニスト

運動家は「女性の首相を選びたいけれど、保守的な政策には賛成できない」と。(清野博子記者・イギリス滞在中)

(5・10読売)

女性政治家バワール

ヘフランス・シモース・ベイン厚生相(五一)は七四年に妊娠中絶自由化法案を成立、七六年に公共の場での喫煙を禁ずる法律を。他に三人の実力派女性閣僚がいる。ヘ西ドイッ・連邦議会議員五百十八人のうち、女性議員は三十八人。アンネマリ・レンガー連邦議会副議長(五九・社民党)は、与野党伯仲の西独政界で難しい議会運営に八年もかわり続けている。ヘイギリス・労働党内中道右派の輝けるスター、シャリー・ウィリアムズ前教育相(四八)は今度の選挙で落選したが、サッチャー保守党首に名実

ともに対抗でき、労働党党首の声も。労働党では婦人運動家が去り、保守党も目立った存在はいない。

(5・8読売)

レイプ裁判の一部始終

イタリアのフェミニスト・グループ「教育技術映画研究会」の六人の女性は、「婦女暴行裁判」の一部始終を録画。「暴行された女性が、法廷でもはずかしめを受けている。裁判のあり方を考えなおして欲しい」と。国营テレビ(RAI)を説得、夜のゴールデンアワー一時間にわたる放映に成功。(5・18読売)

台風名、仲よく男女平等
米軍が、タイフーンにも男性名を使い始めた。ウーマンリブ団体の抗議で一年前からハリケーンには男性名を付け始めていた。以後、男女名が

交互につけられる予定。

(5・19朝日)

融資もレディーファースト

米国で、女性実業家を優遇する大統領行政命令が十八日出され、カーター大統領が署名。女性が経営する企業に政府資金を融資する「全国婦人の企業政策」がこれで委員長に女性のハーベイ財務次官補代理が就任。(5・19読売)

花の三十四歳大使

米国上院は、サリー・シェルトン女史を駐バルバドスおよび東部カリブ海地域大使に任命。全米で女性大使は十人に達した。(5・19朝日)

西独大統領選に女性候補

与党SPD(社民党)はアンネマリ・レンガー女史を候補に決定。(5・23毎日)

一人っ子社会

モスクワ市では、一人っ子家庭は八〇%にも及ぶ。これの問題視する学者が、婦人の家庭帰帰を論じ始めている。

(5・27毎日)

カナダに女性外相

史上最年少の新首相クラーク氏は、外相にフローラ・マクドナルド女史を任命。同女史はクラーク氏と党首を争ったこともあるベテラン議員。

(6・5毎日)

女性支持党が躍進

カナダでは女性運動支持者たちに人気の新民主党が、先ごろの総選挙で十七議席から二十六議席へと躍進。

(6・5読売)

四十七歳女性が初横断

英国生れの米国人ステラ・

テイラーさんは、フロリダ海峡を泳ぎきった。男性も含めて初の成功者。

(6・13朝日)

アメリカ人の結婚、浮気観

「夫と妻―合衆国における婚姻調査」と、「セックス以外の要因―アメリカの既婚男性の大半が浮気する理由」が出版された。それによると女にとって結婚は夫と一体化し人生を分かちあうこと、男にとつてはきちんとした家庭環境に落ち着きたいから。夫の大半が浮気をしているにかかわらず九〇%は離婚を望まず。

(6・15信毎)

イタリアに女性下院議長

共産党選出のレオニルデ・イオッチ女史(五九)が。

(6・21読売)

保母、保父は半数ずつ

「新設保育園の職員は男女半々に」というストックホルム市の決定で、テストケース発足。男女平等は保育園から、と用務員まで男女半々。

(6・25毎日)

カナダ労働者の半数は女性

外相も女性、差別の時代は終わったが、下院議員は八人だけ、政治はまだ男のもの。

(6・28読売)

驚異の同せい時代

共同生活する男女は百万組に達し、七〇年調査比は一七%。離婚率はこの八年間では倍二倍――米商務省調査。

(7・3読売)

米国「女性刻印硬貨」発行

女権拡大の先駆者スーザン・アントニー女史を刻印した硬貨を発行。初の女性刻印硬貨を求めて、銀行窓口には

行列。(7・3毎日)

労働人口減少

ソ連では労働人口減少。女性たちは外の仕事と家事負担で育児にまでは手がまわらない。亭主も非協力とあって、人口増加は期待薄。

(7・6読売)

欧州議会の初代議長

仏の前首相シモース・ペイユ女史が選ばれる見通し。かつてアウシュビッツに送られ死に瀕した人物が欧州九か国市民を代表することになる。

(7・12、7・18毎日)

ソ連の「終日学校」

モスクワの第七一〇初等中等学校(十年制、生徒数千人、教師六十人)で五年前から新しい実験教育が進行中。四年生以下全員を夕方六時までに残す「終日学校」のシステム

ムでカギっ子対策の一つ。ワ
ジム・シュドフ校長は「子ど
もの心身の発達がほかの学校
よりも早い」と。

(7・15読売)

ポルトガルに女性首相

マリア・デロールデス・ビ
ンタシルゴ女史(四九)が欧
州二人目の女性首相に。

(7・20読売)

女権拡張

米国の日刊誌「アトラス」
が、世界十六か国の新聞・雑
誌にアンケートを。女性の地
位向上運動で成果をおさめた
ものに「法的男女平等」を挙
げる人が一番多く、経済面で
の平等は立ち遅れているとい
う結果が。中絶が合法化され
ている国は半数を占め、三分
の二の国では女性の自由意思
による中絶を認める世論が高
まっている。(7・24日経)

根強く残る持参金制度

持参金が払えなくて死に追
い込まれる花嫁が跡をたない
インドで、また焼死事件。
『ナリ・ラクシャ・サミティ』
(女性を保護するための機関)
は、抗議のデモを行なった。

(7・28読売)

ソ連で「悪妻論争」

「ソ連女性は、女らしさに欠
け家事も満足にできない悪
妻」という一通の投書をめぐ
り大論争。家庭内の「不平
等」を棚にあげたこの言い分
に女性陣は大反発。

(7・29毎日)

パイプカットした人の妻

他の避妊法に比べ、子宮か
んの発生率が四分の一という
研究結果が米国で発表され
た。

(8・8毎日)

西独に「離婚保険」誕生

「離婚法」が生まれて二年
目、別れた妻の老後生活を保
障する金に苦しむ男たちのた
めに民間の離婚保険ができ
た。離婚とともに契約してわ
ずかず支払い続けられれば、別
れた妻の六十歳以後の生活費
は心配ないというもの。

(8・9毎日)

韓国労働争議で女工流血

倒産は経営者の不誠実と工
場にろう城していたソウルの
女子工員二百人が機動隊に強
制解散され一人が自殺、二十
数人が負傷、百七十二人が逮
捕された。

(8・11読売、8・19朝日)

男女平等法を急ぐ中国

婦女連合会副主席の林麗韞
さん、「中国が建国後第一番
に婚姻法を作ったのは、男女

平等の思想を人民の間に普及
し根づかせるため。婦女連合
会は、家事労働の社会化や現
代化の実現と家族内部の矛盾
の克服に強力に取り組んでいる
」と。婦人弁護士友好訪中
代表团団長の鍛冶千鶴子さん
に語る。

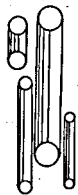
(8・22読売)

地位が高いが教育は別

北朝鮮の最高人民会議員は
二〇・八%が女性。三人以上
子を持つ母は六時間労働で八
時間分の給料を得られるなど
女性の地位は高いが、男女共
学は小学校まで、それも同席
は幼稚園までで、義務教育で
は「特性教育」。

(ルボ・樋口恵子)

(8・27—30中日)



女の力、女の心を信じるあなた プロフェッショナルな仕事なら

———— BOC ^

専門的技術をもつ女性の創造力
の銀行BOC (Bank of Creativity)
は、1964年創設。誠実と創造を
モットーに、信用を得ています。
専門職なら、BOCにご用命を。

<下記の仕事ができます>

- 印刷物の企画から印刷製本まで
- スライド・映画の製作
- 各国語ほん訳・通訳
- 講演・座談会等の速記・リライト
- 建築設計・室内装飾設計
- 印刷物デザイン、コピー、撮影
- 取材記事作成
- カウンセリング
- その他各種専門職

お申込みと登録は下記へ————



〒160 東京都新宿区新宿1-9-6
TEL 東京(03)354-3941(代表)

資料1 児童憲章

(昭和二十六年五月五日制定)

われわれは、日本国憲法の精神にしたがい、児童に対する正しい観念を確立し、すべての児童の幸福をはかるために、この憲章を定める。

児童は、人として尊ばれる。

児童は、社会の一員として重んぜられる。

児童は、よい環境のなかで育てられる。

一、すべての児童は、心身ともに健やかに生まれ、育てられ、その生活を保障される。

二、すべての児童は、家庭で、正しい愛情と知識と技術をもって育てられ、家庭に恵まれない児童には、これにかわる環境が与えられる。

三、すべての児童は、適当な栄養と住居と被服が与えられ、また疾病と災害からまもられる。

四、すべての児童は、個性と能力に応じて教育され、社会の一員としての責任を自主的に果たすように、みちびかれる。

五、すべての児童は、自然を愛し、科学と芸術を尊ぶように、みちびかれ、また、道徳的心情がつつかわれる。

六、すべての児童は、就学のみちを確保され、また、十分に整った教育の施設を用意される。

七、すべての児童は、職業指導を受ける機会が与えられる。

八、すべての児童は、その労働において、心身の発育が阻害されず、教育を受ける機会を失われず、また、児童としての生活がさまたげられないように、十分保護される。

九、すべての児童は、よい遊び場と文化財を用意され、わるい環境からまもられる。

十、すべての児童は、虐待・酷使・放任その他不当な取扱いからまもられる。あやまちをおかした児童は、適切に保護指導される。

十一、すべての児童は、身体が不自由な場合または、精神の機能が不十分な場合に、適切な治療と教育と保護が与えられる。

十二、すべての児童は、愛とまことによって結ばれ、よい国民として人類の平和と文化に貢献するように、みちびかれる。

資料2 国際児童年について

総理府青少年対策本部

一、国連は、一九七六年の第三十一回総会決議において、「児童権利宣言」採択二十周年記念として、一九七九年を国際児童年(International Year of the Child: 略称 IYC)と宣言し、各国各関係機関が児童の福祉向上について関心を高めるような活動及び施策を行うよう要請した。

同時に、ユニセフを国際児童年の事業推進の中心機関として指定し、各国政府が児童の福祉の向上に一層努力をするとともに、国際児童年の準備及び実施のための拠出を行うよう訴え、また、民間団体及び一般国民が国際児童年に積極的に参加し、拠出にも協力するよう要請した。

この総会決議における国際児童年の一般的目的は、次のとおりである。

- (1) 児童を擁護し、児童福祉のニーズに対する各方面の関心を高めること。
 - (2) 児童のための計画が経済社会開発計画にとり不可欠の要素であるという認識を深めること。
- 二、一九七七年六月、国際児童年実施のための事務局がユニセフ本部内に設立され、ユニセフは国際児童年の企画について次の一般原則を決定した。

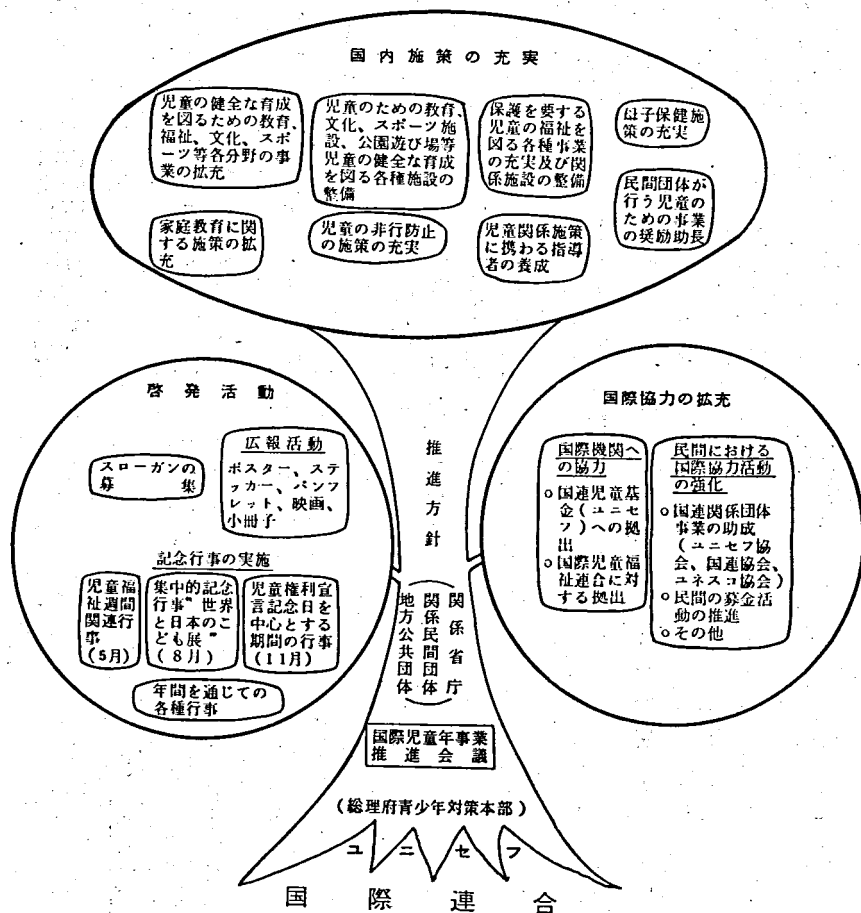
- (1) 開発途上国における児童に基礎的サービスを提供する活動に重点をおくこと。
- (2) 国際会議は開催しないこと。
- (3) 具体的行事の実施については、各国の自主性を尊重し、ユニセフは、全体の調整を図ること。

三、ユニセフは、国際児童年の実施にあたり、各国に対して政府・民間を含めた国際児童年に関する国内委員会の設立を呼びかけ、同委員会が中心となって各国における具体的行事の企画及び実施を進めるよう要請した。

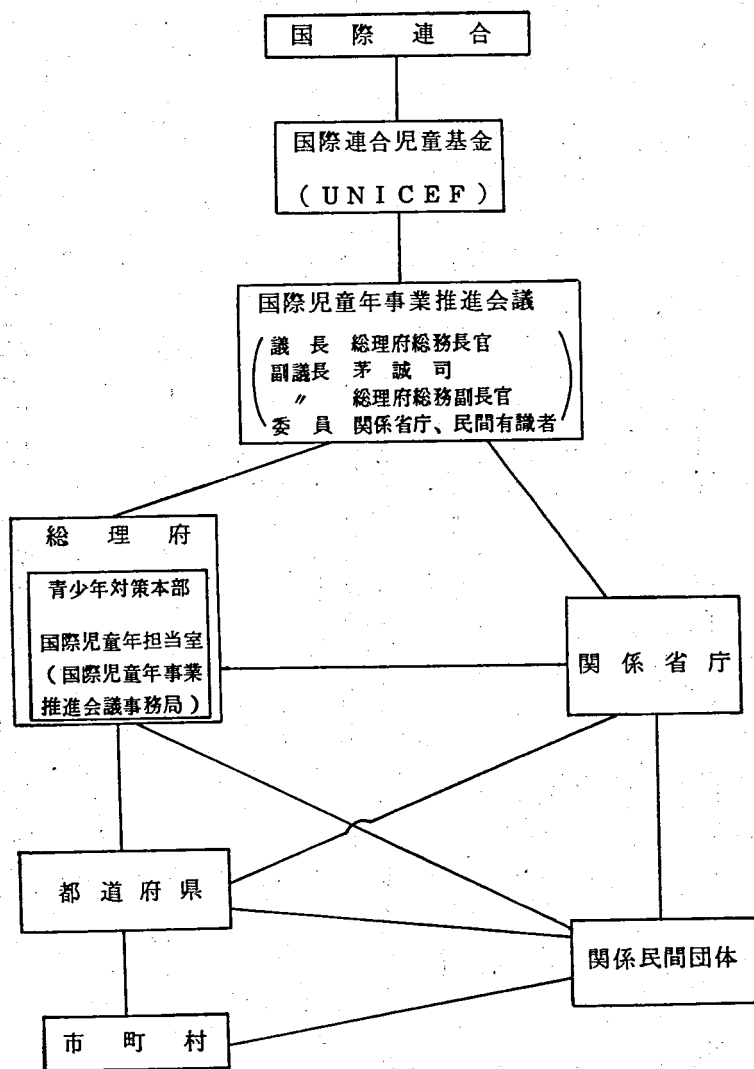
これを受けて、各国とも国内委員会の設立準備を進めており、一九七八年四月一日現在、五十か国が国内委員会の設立を終わり、さらに四十か国で設立準備中と伝えられ、本年末までに百か国を超える見込みである。

四、去る六月十六日、ユニセフの国際児童年に関する国内委員会設立の呼びかけに応じ、総理府に国際児童年事業推進会議をおくことが閣議決定された。

(参考1) 国際児童年事業の推進について



(参考2) 国際児童年事業推進体制



資料3 国際児童年に関する国連決議

(一九七六年十二月二十一日決議)

総会は、

すべての国において、児童のための計画が、児童の福祉向上のみならず経済的社会的進歩を促進するための広範な努力の一環として、基本的に重要であることを認め、

あらゆる努力にもかかわらず、多数の児童、なかんずく、開発途上国の児童が栄養不足であり、十分な保健サービスを受けることができず、また、その将来のための基礎教育を受けることなく、基本的な生活環境が与えられていないことを深く憂慮し、国際児童年が、すべての国において、各国の児童の福祉向上のための計画を再検討すること、及び各国における状況、そのニーズ、及びその重要度に応じ、全国レベル及び地方レベルの行動計画に対する支援を動員するために有益であることを確信し、一九七九年が、「児童の権利に関する宣言」の二十周年にあたること、及び同宣言の実施を更に促進する機会として役立つことに留意し、

国際児童年のための行政費用を最小必要限度にとどめるべきことを確信し、

一、一九七九年を国際児童年と宣言する。

二、国際児童年が下記の一般的な目的をもつことを決定する。

(a) 児童のために主張し、かつ児童の特別のニーズに対する政策決定者及び国民の認識を高めることができるような枠組を提供すること。

(b) 国内レベル及び国際レベルにおいて児童のための活動の継続を確保する見地から、児童のための計画が経済・社会開発計画の不可欠の一部をなすべきであるとの認識を増進すること。

三、各国政府に対し、児童、なかんずく、最も弱く、不遇なグループに属する児童の永続的な福祉向上をめざす努力を国家及び地域社会レベルにおいて促進するように要望する。

四、国連の適当な諸機関に対し、国際児童年の準備及びその目的の実施に寄与するよう求める。

五、ユニセフを、国際児童年の活動の調整を行うための国連の中心機関とし、また、ユニセフ事務局長をその責任者に指名する。

六、非政府機関及び国民が、国際児童年に積極的に参加し、特に全国的レベルにて、その国際児童年のプログラムをできる限り調整するよう勧める。

七、各国政府に対し、国際児童年の準備及び実施のための十分な資金を確保するため、ユニセフを通じてこのための提出或いは提出誓約を行うよう訴える。

八、各国政府、非政府機関及び国民に対し、国際児童年の目的を達成するため快く提出に応ずるよう希望する。

九、ユニセフ事務局長に対し、国際児童年のための資金調達及び提出誓約状況を含む同年の準備の進捗振りに関し、第六十三回経済社会理事会を経て第三十二回国連総会に報告するよう要請する。

資料4 児童権利宣言（仮訳）

（一九五九年十一月二十日）
（国連第十四回総会採択）

前文

国際連合の諸国民は、国際連合憲章において、基本的人権と人間の尊厳および価値とに関する信念をあらためて確認し、かつ、一層大きな自由のなかで社会的進歩と生活水準の向上とを促進することを決意したので、

国際連合は、世界人権宣言において、すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的もしくは社会的出身、財産、門地その他の地位またはこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、同宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有する権利を有すると宣言したので、

児童は、身体的および精神的に未熟であるため、その出生の前後において、適当な法律上の保護を含めて、特別にこれを守り、かつ、世話することが必要であるので、

このような特別の保護が必要であることは、一九二四年のジュネーヴ児童権利宣言に述べられており、また、世界人権宣言ならびに児童の福祉に関する専門機関および国際機関の規約により認められているので、

人類は、児童に対し、最善のものを与える義務を負うものであるので、

よつて、ここに、国際連合総会は、

児童が、幸福な生活を送り、かつ、自己と社会の福利のためにこの宣言に掲げる権利と自由を享有することができるようになるため、この児童権利宣言を公布し、また、両親、個人としての男女、篤志団体、地方行政機関および政府に対し、これらの権利を認め、次の原則に従つて漸進的に執られる立法その他の措置によつてこれらの権利を守るように努力することを要請する。

第一条

児童は、この宣言に掲げるすべての権利を有する。すべての児童は、いかなる例外もなく、自己またはその家族のいづれについても、その人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的もしくは社会的出身、財産、門地その他の地位のため差別を受けることなく、これらの権利を与えられなければならない。

第二条

児童は、特別の保護を受け、また、健全、かつ、正常な方法および自由と尊厳の状態の下で身体的、知能的、道徳的、精神的および社会的に成長することができるとの機会および便益を、法律その他の手段によつて与えられなければならない。この目的のために法律を制定するに当たっては、児童の最善の利益について、最高の考慮が払われなければならない。

第三条

児童は、その出生の時から姓名および国籍をもつ権利を有する。

第四条

児童は、社会保障の恩恵を受ける権利を有する。児童は、健康に発育し、かつ、成長する権利を有する。この目的のため、児童とその母は、出産前後の適当な世話を含む特別の世話および保護を与えられなければならない。児童は、適当な栄養、住居、レクリエーションおよび医療を与えられる権利を有する。

第五条

身体的、精神的または社会的に障害のある児童は、その特殊な事情により必要とされる特別の治療、教育および保護を与えられなければならない。

第六条

児童は、その人格の完全な、かつ、調和した発展のため、愛情と理解とを必要とする。児童は、できるかぎり、その両親の責任の下にある保護のなかで、また、いかなる場合においても、愛情と道徳的および物質的保障とのある環境の下で育てられなければならない。幼児は、例外的な場合を除き、その母から引き離されてはならない。社会および公の機関は、家庭のない児童および適

当な生活維持の方法のない児童に対して特別の養護を与える義務を有する。子供の多い家庭に属する児童については、その援助のため、国その他の機関による費用の負担が望ましい。

第七条

児童は、教育を受ける権利を有する。その教育は、少なくとも初等の段階においては、無償、かつ、義務的でなければならない。児童は、その一般的な教養を高め、機会均等の原則に基づいて、その能力、判断力ならびに道徳的および社会的責任感を発達させ、社会の有用な一員となりうるような教育を与えられなければならない。

児童の教育および指導について責任を有する者は、児童の最善の利益をその指導の原則としなければならない。その責任は、まず第一に児童の両親にある。

児童は、遊戯およびレクリエーションのための十分な機会を与えられる権利を有する。その遊戯およびレクリエーションは、教育と同じような目的に向けられなければならない。社会および公の機関は、この権利の享有を促進するために努力しなければならない。

第八条

児童は、あらゆる状況にあつて、最初に保護および救済を受けるべき者のなかに含まれなければならない。

第九条

児童は、あらゆる形態の放任、虐待および搾取から保護されなければならない。児童は、いかなる形態においても売買の対象にされてはならない。

児童は、適当な最低年齢に達する前に雇用されてはならない。児童は、いかなる場合にも、その健康および教育に有害であり、またはその身体的、精神的もしくは道徳的発達を妨げる職業もしくは雇用に、従事させられまたは従事することを許されてはならない。

第十条

児童は、人種的、宗教的その他の形態による差別を助長するおそれのある慣行から保護されなければならない。児童は、理解、寛容、諸国民間の友愛、平和および四海同胞の精神の下に、また、その力と才能が、人類のために捧げられるべきであるという十分な意識のなかで、育てられなければならない。

資料5 ユニセフ(UNICEF)について

ユニセフ(国際連合児童基金)は、一九四六年第一回国連総会決議により戦争の被害を受けた児童の救済のための緊急措置として設置された機関であるが、一九五三年第八回総会決議により、経済社会理事会の常設の下部機構となり、その目的も長期的な児童厚生福祉計画、特に開発途上地域の諸国の児童のための援助を行うこととしている。

このユニセフは、執行委員会、国連本部内の事務局及び各地域事務所とによって運営されている。わが国も昭和二十四年から三十七年までユニセフから脱脂粉乳、毛布、医療器具等の援助を受けたことがある。

(総理府青少年対策本部「国際児童年のしおり」より)

資料6 国内行動計画前期重点目標の進捗状況

〔婦人の政策決定参加を促進する特別活動の進捗状況〕

(一九七九年六月 労働省
婦人少年局発行資料より)

一九七七年策定された国内行動計画に基づき、婦人の政策決定参加を促進する特別活動が推進されているが、その進捗状況は下記のとおりである。

表1 国会及び地方議会における婦人の状況

(54年4月)

区 分	議 員 総 数	婦 人 議 員 数	総数に対する 婦人の割合
国 会 議 員	人	人	%
衆 議 院	511	7	1.4
参 議 院	252	15	6.0
地 方 議 会 議 員			
都道府県議会	2,646	29	1.1
市 議 会	12,951	311	2.4
町 村 議 会	23,267	120	0.5
特 別 区 議 会	1,087	73	6.7

(衆院・参院各事務局、自治省選挙部調べ)

注(1) 衆・参議員総数は定数である。

注(2) 地方議会議員は統一地方選挙結果である。

表2 中央官庁の各種審議会等の委員における婦人の参加状況

区 分	審 議 会 総 数	婦人を含む 審議会 数	総数に対する 婦人を含む 審議会の割合	委員総数	婦 人 委 員 数	総数に対 する婦人 の 割 合
50年1月1日	237	73	30.8%	5,436	133	2.4%
51年6月30日	236	73	30.9	5,555	146	2.6
52年4月1日	231	77	33.3	5,468	151	2.8
53年6月1日	208	87	41.8	4,826	171	3.5
54年1月20日	214	87	40.7	4,946	175	3.5

(総理府調べ)

表3 婦人委員が増加した審議会と婦人委員名

(53.6.1 以降 54.4.23 現在)

省 庁 名	審 議 会 名	婦 人 委 員 名
総 理 府	雇用審議会	川原千寿子
	売春対策審議会	田村 喜代 井上 繁子
	動物保護審議会	小山 敦
	沖縄振興開発審議会	大濱 秀子
法 務 省	民事行政審議会	岩崎須賀子 五代利矢子
		東浦 めい 渡辺 道子
大 蔵 省	専売事業審議会	高原須美子
厚 生 省	身体障害者福祉審議会	小島 蓉子
農 水 省	農業機械化審議会	矢口 光子
	農林水産統計観測審議会	矢口 光子
通 産 省	輸出検査及びデザイン奨励審議会	金森 房子
運 輸 省	海上安全船員教育審議会	木元 教子
文 部 省	教育職員養成審議会	福島 好江
建 設 省	建築審議会	木下 雪江

表4 法律に基づく審議会等委員への婦人の参加状況
(都道府県段階)

名 称	女子の比率
都道府県環境衛生適正化審議会	14.7%
都道府県児童福祉審議会	19.4
都道府県優生保護審査会	11.1
地方家内労働審議会	18.7
民生委員審査会	17.8
保健所運営協議会	11.2

(昭和54年4月1日現在)

(注) 労働省婦人少年局で調べたもののうち、
婦人が全国計で委員総数の10%以上を占
めているもの

表5 地方自治法180条に基づく委員会委員への婦人の参加状況

名 称	女子の比率
教 育 委 員 会	10.5%
選 挙 管 理 委 員 会	7.4
人 事 委 員 会	1.2
監 査 委 員 会	0.8

(昭和54年4月1日現在)

(注) 労働省婦人少年局で調べたもの
のうち全国で婦人が一人でも参
加しているもの

表6 法律に基づいて配置されている委員、相談員への婦人の登用状況

名 称	女子の比率	備 考
民 事 調 停 委 員	12.3%	昭和53年10月1日現在 最高裁調
家 事 調 停 委 員	38.8	" "
参 与 員	34.2	昭和54年2月1日現在 "
人 権 擁 護 委 員	11.5	昭和54年2月28日現在 法務省調
保 護 司	18.5	昭和54年1月1日現在 "
社 会 教 育 委 員※	13.1	昭和54年4月1日現在 労働省婦人少年局調
婦 人 相 談 員	90.6	" "
民生委員(兼児童委員)	36.7	" "
母 子 相 談 員	97.6	" "

- (注) 1. ※は都道府県段階に配置されているもの
 2. 婦人が委員総数の10%以上を占めているもの

表7 国・公立学校、幼稚園の教員数及び校長、教頭への婦人の登用状況

		小 学 校	中 学 校	高 校	幼 稚 園
教員総数	計	443,147人	240,816人	181,681人	26,464人
	男 子	193,507	165,794	153,711	429
	女 子	249,640	75,022	27,970	26,035
	女子の比率	56.3%	31.2%	15.4%	98.4%
校 長	計	22,965人	9,493人	3,556人	1,389人
	男 子	22,556	9,482	3,549	310
	女 子	409	11	7	1,079
	女子の比率	1.8%	0.1%	0.2%	77.7%
教 頭	計	23,545人	10,386人	5,067人	656人
	男 子	22,811	10,344	5,052	12
	女 子	734	42	15	644
	女子の比率	3.1%	0.4%	0.3%	98.2%
教 諭	計	365,882人	209,519人	166,896人	22,817人
	男 子	144,124	144,640	143,613	103
	女 子	221,763	64,879	22,283	22,714
	女子の比率	60.6%	31.0%	13.4%	99.5%

(昭和53年5月1日現在)

昭和53年度文部省「学校基本調査」

表 8 国公立大学、短大の教員数及び学長、副学長への婦人の登用状況

		大 学	短 大
学 校 数		120	83
教 員 総 数	計	51,106人	2,437人
	男 子	48,246	1,736
	女 子	2,860	701
	女 子 の 比 率	5.6%	28.8%
学 長	計	120人	43人
	男 子	120	42
	女 子	0	0
	女 子 の 比 率	0%	0%
副 学 長	計	27人	1人
	男 子	27	1
	女 子	0	0
	女 子 の 比 率	0%	0%
教 員	計	50,959人	2,393人
	男 子	48,099	1,694
	女 子	2,860	701
	女 子 の 比 率	5.9%	29.3%

(昭和53年5月1日現在)

昭和53年度文部省「学校基本調査」

表 9 国家公務員試験区分別採用等の状況

試験実施年度		昭和50年度				昭和52年度				昭和53年度			
	計	男	子	女	計	男	子	女	計	男	子	女	子
上級(甲)	申込者	37,825	36,000	1,825(4.8)	48,514	46,012	2,502(5.2)	55,972	53,210	2,762(4.9)			
	合格者	1,206	1,172	34(2.8)	1,206	1,166	40(3.3)	1,311	1,268	43(3.3)			
	採用者	580	567	13(2.2)	590	570	20(3.6)	649	625	24(3.7)			
上級(乙)	申込者	3,389	3,027	362(10.7)	5,088	4,693	365(7.8)	4,976	4,586	390(7.8)			
	合格者	101	94	7(6.9)	78	76	2(2.6)	90	79	11(12.2)			
	採用者	53	50	3(5.7)	44	43	1(2.3)	49	44	5(10.2)			
中級	申込者	47,016	37,538	9,478(20.1)	85,480	68,933	16,547(19.4)	98,594	80,711	17,883(18.1)			
	合格者	1,622	1,410	212(13.1)	1,939	1,673	266(13.7)	2,783	2,434	349(12.5)			
	採用者	869	776	93(10.7)	917	796	121(13.2)	(集計)		(中)			
初級	申込者	147,493	83,798	63,695(43.1)	157,694	95,554	62,140(39.4)	175,383	109,429	65,954(37.6)			
	合格者	17,872	12,297	5,562(31.1)	16,583	12,085	4,498(27.1)	17,267	12,312	4,955(28.7)			
	採用者	6,675	4,956	1,719(25.8)	8,799	6,980	1,819(20.7)	(集計)		(中)			

(注) 1. () の数字は計に対する女子の百分比

2. 採用者については上級(甲、乙)は翌年度の4月1日現在、中級は、50年度—52年10月31日現在、52年度—53年10月31日現在、初級は50年度—51年10月31日現在、52年度—53年12月23日現在の状況である。

3. 外務上級職女子の採用者数 52年度2、53年度3

4. 昭和53年度上級職(甲)女子採用者数(省庁別)

人事院1、行政管理庁1、環境庁1、法務省4、文部省3、厚生省2、農林水産省3、通産省1、特許庁2、労働省4、建設省1、工業技術院1

表10 国家公務員採用試用試験区分中女子の受験を制限している職種
(一般職)

職 種	程 度	省 庁	備 考
国 税 専 門 官	上 級 乙	国 税 庁	55年度より 解 除
国 家 公 務 員 初 級 税 務	"	国 税 庁	
国 家 公 務 員 初 級 郵 政 事 務 B	初 級	郵 政 省	
皇 宮 護 衛 官	"	警 察 庁 (皇宮警 察本部)	
入 国 警 備 官	"	法 務 省	
刑 務 官	"	"	

(特別職)

職 種	省 庁	備 考
防 衛 大 学 校 学 生	防 衛 庁	2 年
防 衛 医 科 大 学 校 学 生	"	6 年

(注) 54年度より女子の受験が認められた職種

職 種	程 度	省 庁	備 考
航 空 官 制 官	中 級	運 輸 省	2 年
航 空 保 安 大 学 校 学 生	初 級	"	
海 上 保 安 大 学 校 学 生	"	" (海 上 保 安 庁)	4 年
海 上 保 安 学 校 学 生	"	" (")	1 年
気 象 大 学 校 学 生	"	" (気 象 庁)	4 年

(総理府調べ)

◎女子公務員の採用、登用及び職域
拡大等の事例

(一) 佐藤欣子氏総理府参事官に

法務省、法務総合研究所の研究官で検事の佐藤欣子氏は、五十三年十一月一日付で総理府青少年対策本部参事官に任命された。

(二) 国連開発計画 (UNDP) 情報担当官、国連人口基金 (UNFPA) 駐在代表に女性登用

五十三年十一月一日付で国連本部に勤務していた真島明子さん(二十八歳)が、国連開発計画バンングラデシュ地域事務所プログラム・オフィサーとして派遣され開発計画に取り組んでいる。日本女性が同計画関係のオフィサーとして同地に派遣されたのは初めてである。

また、鹿野和子さん(三十九歳)は、五十四年三月一日、国連人口基金のマレーシア駐在代表に就任し、アジア人女性としては初めて、人口増加の激しいアジアの国マレーシアで、人口問題に取り組んでいる。

(三) 厚生省統計情報部に女性課長誕生

五十三年十二月一日付で、厚生省統計情報部情報企画課長に横尾和子さん(三十七歳)が任命された。

厚生省では、これまで看護課長など技官の課長には女性も登用されていたが、行政職(上級)では長尾年金課長に次ぎ二人目である。

(四) 産業医学総合研究所と気象研究所に女性部長誕生

五十三年十二月十六日付で、産業医学総合研究所、職業病研究部長に與貴美子氏(五十一歳)が任命された。與さんは、同部主任研究官として活躍していた。

また、気象研究所では、五十四年四月一日付で、同研究所第二研究室長猿橋勝子氏(五十九歳)が地球化学研究部長に任命された。

これらの研究所において、女性が部長になったのは初めてである。

(五) 航空管制官、海上保安官など女子の受験制限を解除

国家公務員採用試験で女子の受験を制限していた十一職種のうち、運輸省関係の五職種(航空保安大学校

学生、海上保安大学校学生、海上保安学校学生、気象大学校学生、航空管制官採用試験)について、五十四年度から男子と同等に女子の受験が認められることとなった。

航空管制官や海上保安官などは、深夜就業が避けられないため、女子の深夜就業を禁止している人事院規則に抵触し、これまでは男子に限定されていたが、「女子の公務員の採用、登用及び職域の拡大並びに研修・訓練の機会の積極的活用による能力開発」の見地から見直しが行われたものである。

また、これに伴い人事規則の改正が行われ、これらの職種については深夜業の禁止が除外された。

残る六職種についても関係各省庁で検討がなされており、警察庁は、皇宮護衛官採用試験を五十五年度から女子にも開放することとしている。

(六) 防衛庁、女性歯科医官三人を初採用

防衛庁は六月五日付で女性歯科医

三人を制服自衛官として初採用した。三人は江田島の海上自衛隊幹部候補生学校に配属、一か月間幹部自衛官の基礎課程教育を受けたあと、

山口県の海上自衛隊小月航空隊で歯科医官として正式にスタートする。「医師不足」は同庁にとって長年の悩みのタネ。このため現在陸、海、空三自衛隊に配属されている婦人自衛官とは別枠で、これまで男性ばかりで固めてきた医官、歯科医官のなかに女性を進出させることになった。

◎ 婦人の方針決定参加状況調査結果の概要

総理府婦人問題担当室では、国内行動計画前半期の重点目標の二つである政府行政への婦人の参画の拡大、公共・民間部門の運営方針決定の場合の婦人の参加を促進する特別活動の推進の一環として、昭和五十四年一月一日現在、上場会社及び特殊法人において、運営方針等の決定の場に参画していると思われる課長職相当以上の役職についている婦人の実情を調査した。その概要

は次のとおりである。
結果の概要

【総括】

上場会社及び特殊法人の婦人の方針決定参加者数は九九六人であり、全方針決定参加者数三六一、六二二人の〇・三％である。

女子の従業者数は一一五九、一三二人で全従業者数四、九七一、三三三人の二・三・三％を占めているにもかかわらず、方針決定者数は一％にも満たない。また、婦人の方針決定参加者が一人もいない上場会社は一、二五七（九〇・〇％）もあり、特殊法人は八三（八二・二％）もある。

婦人の方針決定参加者は課長職相当が六六二人で最も多く、次いでその他（主任研究員、総務長等）二四六六人、部長職相当七二人、役員が一六人となっている。婦人の課長職相当は年齢的には、五十〜五十四歳が三九二人で最も多く、勤続年数では三十五〜三十九年が二四七人で最も多い。

【上場会社】

(一) 上場会社数

東京、大阪、名古屋の各証券取引所に上場する資本金五億円以上の全会社（一、六五三）のうち調査票を回収した上場会社（一、三九六）を産業大分類別にみると、建設業一一五、製造業八九七、卸売・小売業一二二、金融・保険業九三、運輸・通信業八〇、その他の産業五一、サービス業三八である。

(二) 従業者数

上場会社の全従業者数は四、〇七七、六二四人、うち婦人は一、〇四二、九〇八人であり、その比率は二五・六％である。これを産業大分類別でみると、最も比率の高いのはサービス業の八七・八％であり、次いで卸売・小売業が四五・九％、金融・保険業が四三・七％で、この三産業が他の産業を大きく引きはなして婦人の多くいる職場となっている。

(三) 婦人方針決定参加者数

上場会社の全方針決定参加者数は三〇八、五七七人で、うち婦人は三八〇人でその比率は〇・一％である。

① 産業大分類別では、サービス業が〇・五%で最も高く、次いで卸売・小売業〇・三%、金融・保険業は〇・二%であり、他の産業はいずれも〇・〇%である。

また、婦人の方針決定参加者数を婦人従業者数との関係でみると、婦人従業者の多い産業には婦人の方針決定参加者もみられるが、いずれも一%にも満たない数である。

② 役職名別では課長職相当が二九四人で最も多く七七・四%を占め、次いでその他（主任研究員、総婦長等）四九人で二・九%、部長職相当二二人で五・五%、役員一六人で四・二%となっている。

③ 所属部門別では、本社で一九八人（五二・一%）、支社が一〇九人（二八・七%）と多く、研究所一九、工場一八、その他一六、事業所一五、営業所五となっている。

〔特殊法人〕

（一）特殊法人数

全特殊法人（一一）のうち調査票を回収した特殊法人（一〇）を産業大分類別にみると、サービス業が四九、金融・保険業が二二、その他の産業一一、運輸・通信業九、製造業五、建設業四、卸売・小売業が一である。

（二）従業者数

特殊法人の全従業者数は八九三、六九九人で、うち婦人は一一六、二四人であり、その比率は一三・〇%である。これを産業大分類でみると、最も高いのが金融・保険業の三七・二%であり、次いで卸売・小売業、サービス業が各々二六・一%、建設業が一・三%、運輸・通信業が一・五%、製造業が九・一%、その他産業が八・六%となっている。

（三）婦人の方針決定参加者数

特殊法人の全方針決定参加者数は五三、〇三五人、うち婦人は六一六人でその比率は一・二%であり、上場会社の〇・一%よりは多い。

④ 産業大分類別では、運輸・通信

業が一・四%で最も高く、次いでサービス業の一・〇%、製造業、金融・保険業が各々〇・二%で、他の産業には婦人の方針決定参加者はいない。

⑤ 役職名別では、課長職相当が三六八人で最も多く五九・七%を占め、次いでその他（主任研究員、総婦長等）一九七人で三二・〇%、部長職相当が五一人で八・三%になっている。

⑥ 所属部門別では、事業所が三四人（五五・八%）、その他が一三四人（二一・八%）、支社が八二人（二・三・八%）、本社五一人（八・三%）、研究所五人（〇・八%）となっている。

※ 方針決定参加者とは、運営方針等の決定の場に参加することのできる課長職相当以上の役職についている者をいう。

リブ・ラブ・ライフ

小室加代子著 リブに愛と生命を！ 人間解放の本質に迫るリブを希求する白熱の評論集。七〇年代婦人雑誌史の概要も兼ねた異色のスタイル。

■B6判 980円

お産讃歌

私たちが創ったラマーズ法

これは単なる無痛分娩の本ではない。出産という生命の創造へのかかわりを、父と母とでいかに迎えるかという感動の記録である。人間のいのちと女のあり方を見つめ直す本でもある。

■B6判 980円

自分を変える本

リン・ブルームほか著 さわやかに生き直せる！ 自己変革の実用書。数百の事例を基に女流心理学者が懇切に解説。各自主グループ、婦人学級等で好評のロングセラー。

■B6判 1300円

企画から営業まで女だけで運営BOOK出版部

M・ヘッグ、B・ヴェルクメステル共著 柳沢由実子訳
スウェーデン

女性解放の手引

B6判二三二頁 価一、二〇〇円

これは本当にスウェーデンのことを言っているのか。女が自由で平等な国は世界中に一つもないと言ってもいい。それでも女たちは、差別に耐え、嘲笑に耐え、抑圧に耐えている。著者たちは、このような現実を見事に分析してみせる。そしてこの現実を変えるために、どのような一歩を踏み出したらいいか、というヒントを与えてくれる。

E・E・マツコビイ編

青木やよひ・河野貴代美・山口良枝訳
池上千寿子・深尾 凱子

性差——その起源と役割

四六判三五〇頁 価一、八〇〇円

動物学、生物学、児童心理学、行動心理学、発達心理学、文化人類学、社会学の各分野の専門家七人が、性差について三年間、研究し討議したものが基礎になっている。性の様々な要因が複雑にからみ合ったものを対象にする場合、このような協同研究の成果は非常に貴重なものである。女性問題に関心のある人に理論的根拠を提供する。

A・ゲゼル著 狼にそだてられた子 価八〇〇円

ドロリーエ著 自閉症児の治療教育 価五〇〇円

辻村輝雄著 戦後信州女性史 価六〇〇円

半田たつ子著 書くこと生きること(家庭科と私) 価八〇〇円

東京都文京区目白台三二二一四 家政教育社
電話九四五千六二五 振替東京七七三三八二

事実に基づいて女の問題を考える 総合情報誌〈あごら〉

〈あごら〉=AGORAはひろば。さくのないひろばです。

女の生き方、人間の解放について考えあうひろばです。

経歴も性別も年齢も関係なく、心ひらいて話しあう場です。

みんなが同じ平場で話そう、ちがう価値観にも耳を傾けよう、そして、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、と願っています。女性解放にはいろいろな方法がありますが、私たちは、当面、情報の収集と伝達を中心に、息の長い運動を静かに、確実に、続けていきたいと話合っています。ご参加をお待ちします。

〈あごら〉は、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係です。

運営は、会員の拠出による基金と、会費、雑誌売上代でまかなわれています。

会費 年額4500円。『あごら』(年2回刊)と『あごらミニ』(月刊)の誌代を含む。

基金 1口1000円。多少にかかわらず大歓迎!

申込 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6〈あごら〉事務局 TEL(03)354-9014

各地のあごら連絡先

- あごら旭川
 - ・旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子
 - ・☎0166-656237 〒078-111
- あごら札幌
 - ・札幌市中央区南25西12ニユ1藻岩503 高橋芳恵
 - ・☎011-563-6917 〒064
- あごら北東京
 - ・川口市芝北町3413 宗久知恵子
 - ・☎0482-650241 〒332
- あごら武蔵野
 - ・小平市小川町1-763-186 丹羽雅代
 - ・☎0423-436749 〒187
- あごら京王
 - ・府中市晴見町3-21 関和子
 - ・☎0423-624705 〒183
- あごら神奈川
 - ・川崎市多摩区生田4634 沼田千恵子
 - ・☎044-9339079 〒214
- あごら東海
 - ・愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-19 伊藤汎美
 - ・☎0561-3392386 〒470-0101
- あごら京都
 - ・京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子
 - ・☎075-7914623 〒606
- あごら阪神
 - ・尼崎市武庫之荘3-6-6 木沢みずす
 - ・☎06-4431-5376 〒661
- あごら九州
 - ・福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子
 - ・☎092-5217624 〒810

【編集後記】 ◆この号の編集長は漆田和代さん。初めて編集長制度を確立し、BOCからの自立を目指してみんなで心を合わせてつくりました。多少でも新風が吹き込まれているとすれば、そのせいです。どの部門にも〈長〉を設けないのは、〈あごろ〉の一つの姿勢でもありましたが、〈長〉がいて、かつすべての人が伸びやかであるのは、〈あごろ〉ならではのことかと、新しい試みにふみきました。これをターニングポイントとして、組織論も洗い直したいと考えています。より広く深いご参加をお待ちしています。(干)

◆初参加なのについて深入り。盲蛇におじずとはよく言ったものだ。一足早く那須のいで湯に遊び、友人と祝杯をあげてきた。あいにくの秋雨、濡れねずみで見る紅葉も風情がある。思い思いに燃焼を遂げ、散りゆく木の葉と、今開花まっ際のりんどうとの対比が面白い。一見無秩序な配置の中に調和が保たれ、冒しがたい美が生まれる。“美は乱調にあり”が、フツとかんだ。(統)

◆「Kちゃんのお母さんていいんだよ。どろんこに服を汚して帰ってもちっとも怒らないし、『もっと汚してきなさい』っていうんだよ」「うちなんてさー、『どうしてきれいに遊べないの?』なんだもんね。やんなっちゃうよ」最近こんな姉弟の会話が耳に入り、考えさせられた。大人の都合で子どもに接していることがいかに多いことか。日常生活の中であれこれ思い当たる節がある。

◆今年に国際児童年。立派な児童憲章があっても空念仏ではどうしようもない。子どもをとりまく環境がますます悪くなっていくわが国の現実を思うと、いたたまれない気持ちがかみあげてくる。

◆9月から共同生活を始め、今、やっと落ち着くことができた。深まりゆく秋、虫の音が秋の夜長をしんみりさせる。(京)

◆幼いころから“母”のイメージするものは“自分”であった。つまり母子関係の対象は自分と未だ生まれぬ子であった。私の夢はそこで遊び、実の母子関係から目をそむけ続け、決して血は流れず……

だが、いつかメスを入れねばならないとは思っていた。今回の雑誌の編集は、その契機になるような気がほのかにしている。(綱)

◆本格的に編集にかかわったのは今回が初めてだが、他の仕事とかち合ってしまい、我ながら滑稽なほどの悪戦苦闘を演じた。他の雑誌に雑文を書きつけるよりも、『あごろ』に名もなく参加するほうが心おどる。けれども、『あごろ』ばかりでは生計が立たないこのシレンマ。我等の雑誌にもっと力を/(真)

◆朝から汗ばんで、今日は真夏の暑さだと思いながらも、合服に着がえて出勤。“10月だから”という常識に屈服したのかしら、いや心もちだでも色づいてきた樹々の色を大切に思ってこちらを選んだのだと一人であらずいて、大汗ふきふき一日を過ごした。後で聞くところ31度あったとか。いちいち正当化しなければいられない自分をおかしく思いながら、また汗をふいたのだった。(見)

◆『あごろ』の編集に初めて、ほぼ最後までかかわってみて驚いたのは、とても真摯な討論が重ねられていることだった。ただ黙然と座って、皆の話に耳をかたむけている私だったが、やっと私も〈あごろ〉の一員になれる、と、自覚めいた感情がわいてきたこの頃です。

BOCからの自立を試みた21号——さまざまな問題を含みながらも、バラエティに豊んだいい内容になったのはうれしい。(慶)

◆BOCからの独立を試みての編集委員会は、すっかりとまではいかなかったが、かなり自立に近い線で、けっこう気を張りつめたものだった。苦多ければ楽もまたあって、“お手伝い”ではなく、どっぴりつかって真剣そのものの編集委員たちとの仕事は楽しかった。21号にしてはじめてのこの試みの成果を、今後の『あごろ』にぜひ生かしてきたいものだ。

『あごろ』発刊して、深まりゆく秋に乾杯! (朋)

◆会員は誰でも編集に参加することができる。はからずも21号はBOC職員でない会員(漆田)が編集長をつとめた。集団である編集作業もかなりスムーズに進んでホッとしているが、たえず私たちの頭をかすめたことが一つある。BOCと『あごろ』の関係——いや『あごろ』編集会議は誰によってどのような権限を委託されているのか、ということ。〈あごろ〉のルールをそろそろ会員自らが作りだして行くべきときに来ているのでは、と。(和)

＜21号編集委員＞石川光子 漆田和代 川野慶子 小網愛子 小金京子 後藤多見 斎藤千代 佐藤統子 谷内真理子 長谷川知子 宗久智恵子 山田朋子

＜あごろ＞ 21号 1979年10月31日発行 本文白牡丹カラー-A36,5kg 表紙 アートポスト 菊判125kg

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●振替 東京0-5264 (あごろ編集部)

●発行人 斎藤千代 ●印刷所 新生舎 東京シェービー



〈あごら〉 1号	●女が働くこと	品切
〈あごら〉 2号	●女性の進出のために	¥200
〈あごら〉 3号	●主婦の解放をめぐつて	¥200
〈あごら〉 4／5号	●何かしたい主婦のために	¥300
〈あごら〉 6／7号	●運動を進めよう	¥350
〈あごら〉 8号	●子殺しを考える	¥380
〈あごら〉 9号	●働く女と主婦の接点を求めて	品切
〈あごら〉 10号	●女と法	品切
〈あごら〉 11号	●女と教育	¥750
〈あごら〉 12号	●国際婦人年世界会議	¥750
〈あごら〉 13号	●国際婦人年国内集会	¥750
〈あごら〉 14号	●女の記録	¥750
〈あごら〉 15号	●職場の中の女性差別	品切
〈あごら〉 16号	●女と結婚	¥750
〈あごら〉 17号	●女と生涯教育・生涯学習	¥780
〈あごら〉 18号	●いま女性解放は	¥1300
〈あごら〉 19号	●女にとって子どもとは	¥800
〈あごら〉 20号	●女性解放と男女雇用平等法	¥1300